
理外れの流され者

明日の亡霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理外れの流され者

【Nコード】

N2262P

【作者名】

明日の亡霊

【あらすじ】

人を含めた多種族と、魔物に魔獣が住む。剣と魔法の世界に来てしまった、異世界の青年が建国するまでの冒険物語。

怪力でした

俺の目の前には、一頭の巨大なイノシシみたいな奴が腹を上に乗がっている。……って言うか、バイクのハンドルが首の付け根、頸椎辺りが突き刺さっている感じです。何故こんな事になったかと言おうと。

俺の名前は橘裕輔、男・年齢十九歳。職業、工場の生産ラインの派遣作業員。でっ、今いる此処はどこかは分からない。分かっている状況は、何故か俺はイノシシの様な巨大生物と対面している。んゝ・ゝ怒っているんだよな、俺何かやらかしたっけ。

2

身長百七十二センチ、体重六十七キロ、視力左右1.5。健康状態普通・精神状態普通・頭脳普通、性格普通・顔も普通・特技なし。一寸だけゲームが好き、本当に普通な男です。

あゝ・・思い出せば、バイクに乗って夜勤帰りの帰宅中。俺は眠気に負けて、ボーッとした状態でガードレールの無い所から田圃に落ちて行く所までは覚えている。……でっ、気が付けばお怒りの巨大なイノシシの様な生物が目の前に居たと言う、有り得ない状況なんだよね。うん。繰り返しますけど、大きさは牛よりでかいのさ、このイノシシ見たいな奴は、有り得ねえし。でもってその距離ほんの三メートル位、逃げられねえよマジで。

奴は、牙を地面に擦り付けるように向かって来た、ほんと・・・たった一步で。それで俺は何気なく、その牙に手を伸ばし、ふんぬと掴みエイッヤツと投げ飛ばしました・・・マジです。

でっ、冒頭に戻ると言う事なんですよ。俺は何時の間に怪力男になったんでしょうか・・・誰か教えてください。

ケイリス小隊の災難

死んだ（殺したとも言う）巨大イノシシモドキの上で俺は寝てしまった、眠い頭で考えても仕方がない寝ただけなのだけどね。どの位寝たのかは分からないけど、ガヤガヤと五月蠅い人の声で目が覚めた。むっくり起き上がった俺に、兜の様な物を被り、鎧の様な物を着て剣を持った男が近づいてきた。（変なおっさんじゃん、剣なんか持って、本物か）・・・？。等と思って居ると、おっさんが話しかけてきた。

「?????▽??」

「ん・・・? 分からん、折角話しかけられたんだけど何を言っているのかな」

「????????」

「おい、最初の言葉と違うだろ」

「????????」

「おっさん、又違う言葉を使っただろ」

俺はイラーテス国国境警備隊の小隊長、ケイリス・テストデだ（訳有りで少し名前を変えている）。歳は二十四歳で一寸老け顔が悩み

の男だが、これは関係ない。

警備隊屯所の近くの農場から、死んでいるらしいイッガールの腹の上に。男が乗って寝ていると言う、訳の分からない知らせが来たのは昼前だった。今の所隣国とはいざこざもなく、俺の小隊は待機小隊として屯所の裏で剣の訓練をしていたが。警備総隊長からの命令で、その場所に行くよう命ぜられた。

小隊を率いて現場に着けば、確かに男が寝ている。堂々とイッガールの腹の上にだ、見た感じ武器も持って居ないようだし、別に防具を着けている様子もない。

イッガルとは、凶暴な性質で雑食性の猛獣だ、通常群れで行動する厄介な奴だが。目の前の奴は、どうやら自分の群れを作る為に、今までいた群れから離れた若いイッガルの様だ。

俺は一応用心の為、剣を抜き近づいた。突然男は起き上がり、一寸寝ぼけた状態で俺を見つめている。どう見ても、こいつが倒したとは思えないが聞いてみる事にした。

「これはお前が倒したのか」

「%&dF?」

あゝ・・・なんだこいつ、言葉が通じないのか。よく見れば、細身のかんりの優男だ、何か虫唾が走る。兎も角、俺が知っている異国の言葉で話しかけてみる。

「お前は何処から来たんだ」

「N>O\$#e」

駄目だ、後これ一個しか知らない異国の言葉で話しかけた。

「お前の名前は」

「ed5%?」

あー・・無駄だったか。

俺は小隊の連中を、こいつを屯所に連れて行くため呼び寄せた。怪しい奴と言えば物凄く怪しい、そんな奴に下手に暴れられたら面倒と言う事なのだ。

俺は男に降りて此処に来いと手で合図を試みる、分かったらしく男は降りてきた。

剣を抜いて近づく男達、最初に一人で近づいてきた男が、降りて来いと言う様なしぐさをしたので降りて近づいた。どうやらこの男が指揮官らしい、下手に逆らって斬り付けられるのも嫌なので大人しくしていると。男達が俺を取り囲む、どこかに連れて行く様だが、このイノシシモドキはどうするのだろうか。指揮官らしい男の顔とイノシシモドキを交互に見やると、かれは肩をすくめて顔をしかめた。

此奴、俺の顔とイッガールを交互に見てくる。どうやら、獲物をどうすればいいのかと聞きたいらしい。今の所運搬手段が無いので、諦めろと肩をすくめて顔をしかめて見せる。そうしたら此奴は、自分の指で自分を指さし、イッガールを指さし担ぐ仕草をして来た。馬鹿かこいつはと思ったが、試しに肩をすくめて顔を道路の方に振ってみた。

どうやら、運搬手段が無いから諦めろと言いたいらしい。俺はぶん投げる事が出来たのだから、引きずって行けそうな気がするので。肩に担ぐ仕草をしたら、指揮官らしい男はやれる物ならやってみろな感じの仕草をした。俺はイノシシモドキの足二本に手をかけて、グツと握り振ってみたら持ち上り浮いたので手を放した。イノシシモドキは、綺麗な放物線を描いて飛んでゆき、道路らしい所に落ちた・・・バイク付きで・・・人外超怪力男決定っす。

イッガールをあそこまで投げ飛ばしただと、目の前で起きた事を認めたくない俺の脳が暴れている。こいつに不用心に近づいた己と、部下を不用心に近づけた隊長としての責任感が・・・俺はなんて馬鹿なんだ。

・・・そつと目を部下達の方に流せば、真っ青になっている奴に真っ白になっている奴に。顎が外れたかの様に大口を開けて、涎が流れ出そうな奴に目をむいて倒れそうな奴に・・・あゝ・・・どうしろと言うんだよ俺に。

イノシシモドキをぶん投げた俺に、全員固まってしまった。まあ当然と言えば当然だろう、本人の俺だって信じたくねえし。固まって、今にも倒れそうな男達を観察する事にした。えっ、なんでそんなに落ち着いているのかって。落ち着いてなんて全然していませんって、なんで言葉が通じない、それも剣を持って居る連中が居るのだ。要するに、パニクル事を脳が拒否したって言う所です・・・多分。

全員、兜も鎧も同じ作りの様だ、と、言う事は兵隊なんだろうな。剣が八人と槍が八人と弓が四人、一人が長い柄のハンマーを持って居る。指揮官らしい男は剣で兜に赤い毛の様な物を一個着けている、人数的に一個小隊と言う所だろう。指揮官らしい男が、目だけ俺の方に向けてきた。

俺はこのままでは埒が明かれないと思った、仕方なく意識をこちらに向け様と手を三回叩いた。彼らは、ハッとした様にこちらを向く。俺はイノシシモドキの方を指さし、顔を振ったら全員ガクガクと頷く。

突然男が手を叩いた、そこで全員意識を取り戻し顔を男の方を見た。男はイッガルーを指さし、顎をしゃくる様にイッガルーの方に目を向けた。多分あっちに行こうと言うのだろう、俺を含めた全員がガクガクと頷いた。イッガルーを軽々と振り回した正体不明の怪力男、逆らうなん事はしたくないのが正直な所だ。

観察してみる、顔が結構いい男以外普通なこの男。やっと大人になったかの様な年頃だ、骨格も筋肉もそんなに有る様には絶対見えない。極めてごく普通の体の線で・・・いや少し華奢と言えるだろう。左手につるりとした兜の様な物を持ち、後は何も持って居ない。高価そうな柔らかい茶の皮の上着に、色が落ちて少し着崩れた黒いズボン。足元は黒革の編み上げ靴、俺達の履いている軍の支給品の靴より数段上等な物の様だ。いったい何者なのだろうか、そうこうしているうちに道路に出た。男はイッガルーを見つめて何か考えている、ふっと男は林の方を見てスタスタと林の方に入っていた。あわてて俺が付いてゆくとにやりと笑った、その笑顔には逃げる気はありませんよと言う意思がある。

イノシシモドキが転がっている道路に出た俺は、こいつをどうしても運びたいと思った。どう言う状況になろうとも、彼らにこれで取り入る事が出来るかとの保身を考えての事。まあ、効果はあるかどうかは分からないけど。それと売る事が出来れば、お金になると単純に考えたんだけど。

運ぶ方法、これをしている間は俺に警戒心を向けられない様にするにはと……。林の方を見ると、結構太そうな蔓植物が見えた。俺はそれを取りに林の方に向かい歩き出すと、慌てて付いてきた。逃げるとでも思ったのだろうか、俺はそんな気はないと言う様に笑って見せる。

そして右手親指を自分自身に向けて、ユースケと言うと、隊長らしい男はユースケと俺を指さす。俺が頷きながらユースケと言うと、男はケイリスと言って自分自身の胸に掌を当てた。男の名前なのだろう、男にケイリスと言って指さすと頷いた。

蔦にたどり着いた俺は、ケイリスに蔦の根本を伐る様に仕草で頼むと分かったらしく。ケイリスは剣を抜いて一太刀で蔦を切断した、なかなかの力だ。蔦を握り、ケイリスに下がる様に手を振るとスルスルと下がって行く。うーやっぱりこの動作は、下がれとかあっちに行けとかの意味になるんだなと思った。掌を下にして振ると言う、日本人しかない動作だけだ。

男は突然自分自身に右手親指を向け、ユースケと言った、名前なのだろう。俺も男を指さしユースケと言うと頷いた。俺は自分の胸に手を当てて自分の名前を言う、ケイリスと、男は俺に指さしケイリスと言った、俺は頷く。

蔦の前に立ったユースケは、蔦の根本を伐ってくれと言う仕草をしたので剣を抜き伐ってやる。蔦の根本を握ったユースケが、下がれの合図をするので下がると蔦を握ったまま走り出して来た。木の枝が折れる音とすれる音が響き渡る、一気に抜けてきた蔦は一寸した

林のようになっていた、主に巻き込まれた木の枝のおかげだが。で、ユースケはこれをどうする積りなのだろうか。

一気に引き抜いたのは良いけど、蔦に絡まり折れた枝が林の様になっている。扱くしか無いだろうと安直に考えた俺は、蔦を左手で握り右手で引っ張る。見た事も無い木の实や、見た事も無い動物に鳥の巢らしいものまで付いてきていた。動物は突然の事に気絶している、当然捕まえるに決まっている、ペットとして売れるかもなんだけど。

いつの間にか俺達の周りに、小隊の部下達が集まってきた。飛び散る木の実や気絶している小動物を捕まえている。そんな部下達に俺は「お前ら、此奴の名前はユースケと言う様だ。ちゃんと名前呼んでやれ、それから一応木の实も動物もユースケの物だ、無断でどうにかなんてするなよ」と。

部下の一人が「勝手にどうにかして、怒らせたらやばい事になりかねないですよ。恐ろしくてそんな事出来ません」そう言って首をすくめた。そいつは同感だと思いながら、チラッとユースケの方に目をやると、もう殆ど作業は終わりにかけていた。

ケイリスの部下達が木の実や小動物を捕まえている、ケイリスが部下達に声をかけている。俺の名前を言っているの、部下達に俺の名前を教えたのだろう。一人の部下が首をすくめながら何か言っている、恐らく恐ろしい奴だとも言っているのだろう。

蔦を纏める作業が終わったので、真っ直ぐな木を二本探した。すぐに針葉樹の木が見つかり、試しに回し蹴りを入れてみた、あっさり折れました・・木がです。二本倒し、左右に抱えて引きずって行くと、何故か隊員達はうなだれていますね。隊員達に枝を払う様ケイリスに仕草で伝えると分かったらしく、ケイリスの言葉で隊員達はノロノロと動き出した。何か、市場に売られる牛の様な感じですよ。

ユースケは化け物だ、一抱えもある木を回し蹴り一発でへし折りました。あゝ俺達にはきつともう未来は無いのだろうと思う、部下達は完全にユースケにのまれているし。逃げよう等とは考えもしないだろう、逃げられそうも無いけど。

枝を払った木をイッガールの前に置き、ユースケは俺に剣を貸せと言う仕草をする。もう勝手にして下さいと剣を差し出す、木は二十モイルの長さだろうか。ユースケは野菜でも切る様にスパスパと伐って行く、何か作るようだ。今度は太い木の方を殴りつけて、拳から肘の前位までの穴を四か所開けている。あの拳で頭を殴られたら、絶対形は残らないだろうと思う。ユースケは剣で穴の形を整えて、イッガールの幅に合わせた殴り穴に木をズコズコと刺し行く。うー

ん、どうやらユースケは、イッガールを乗せる台車を作って居る様だと気が付いた。しかし、イッガールの首に刺さっている物体はなんだろうか、元の形では無いようだが。

ケイリスに剣を借りて木を輪切りにしたのを二個ほど作る、剣を見ると木に刺せば折れそう。ケイリスの部下が、イノシシモドキを指さしイッガールと言った。どうやらこの動物の正式名らしい、イッガールの体長と幅に合わせて木を伐る。剣では穴を開けられそうもない、ならばと俺は殴ってみた。

おー、拳から肘の手前位までの陥没穴が出来た。四ヶ所に陥没穴を作り、剣で穴の形を整えて木を刺してゆく。やっと台車の形が出来たので車輪を作る、自分の顔幅位に輪切りにした木の中央辺りを殴り穴を開けた。今度は台車となる木の太い方を、思いっきり殴って貫通させ、剣で側木の太い方に縦の切込みを二か所ずつ入れて行く。後は殴ったり剣で刺したり作業、車輪の木が地面に着くよう形を整えて車輪を取り付けた。後は車体に蔦を巻き付けて完成、イッガールを乗せてみた、大丈夫の様だ。

どうやら台車は完成したらしい、満足そうにユースケがほほ笑んだ。
・怖い。

まさか、俺達にこの台車を引けと言うのではないのだろうかなんて見ていたら。どうやら自分で引くようだ、それにしても・・・イッガールをひょいと台車に乗せるなんて、~~~~こええ~~~~と心の中で叫んだ。剣の刃を見れば完全につぶれているし、なんと言う最悪の日なんだろう。部下達は、ゾンビの様に歩いている・・・気

持ちは同じなのだろうと思った。最悪の日と記憶するだろうな、生きていられればの話だが。

ケイリス小隊の災難（後書き）

批評も評価もありません、これも暇つぶしに書いているだけですから。

ギルドへ売りに、バイクは武器工房で売れました。大剣入手。

ゾンビの様に歩く部下達、部下達は俺をどんな風に見ているんだろうか。絶対頼りない上司と思って居るだろうな、ユースケはそんな俺や部下達の気持ちになんて一つも気付いていないらしく、のほほんとした顔で歩いているし。まあ、そりゃそうだろうな、なんか無敵といって良いくらいの怪力だし。

あゝ困ったな、言葉が通じないなんて最悪だぜ。それよりも、この人達は俺を物凄く怪しい奴と決定付けているんだろうし。様子から見ると拷問なんて物も有る見たいたぜ、なんとかそれは避けたいけど、牢にでも入れられたらこっそり逃げよう。あゝ・・それよりどうしてバイクの事を聞かないのかな、これだって絶対不審物には違いないのにな、変だよ君達。しかしなんか元気がないけどどうしたのかな、あゝ腹減った。ああなんだ、そうかこの人達もお腹が空いて元気が出ないんだ。

あゝ腹減ったな、ユースケの事なんかどうでも良いや。考えたって仕方がないしなあゝ、どっちかって言うとな勝手に逃げてくれと言いたいよ。そうだ？、逃がせば良いんだ。イッガールをギルドに売り払って金にして持たせて、追い払えばいいだけだ。別に悪い事をした訳ではないし、単に害獣を退治しただけだしな、そうだ部下達にもそう言おう。

「なあお前達、ユースケは何も悪い事をして居ないよな」

「そうですねえ、どっちかと言うと害獣を退治しただけですよね」
小隊付曹長のソイドイが話を合わせてくる、どうやら同じ事を考えていたらしいが。どこまで考えて居るのやら、基本此奴は面倒くさがり屋だし。

「言葉が分からないのは流れの冒険者だろうし、イッガールと小動物をギルドで金にして渡せばいいんじゃないか。木の実には食べられる物ばかりだしな」

「小隊長殿、木の実には八百屋か果物屋にでも守って行けばいい値が付きますよ。珍しいのが有りますから」

お調子者の一般兵。ブリュートが、小隊幹部が解決策を見つけたぞと言う気配に食いついてきた。

「そう言えば小隊長、このまま歩けば食品ギルドに工房ギルドが隣合わせで有りますよ」

「そうだったな、都合が良いぜ。その前にソイドイは屯所に走れ、流れの冒険者が、運よくイッガールを倒したただけでたと報告して来い。増援なんかが来たらやばい事になるからな、俺は此奴と戦うなんて御免だ」

「了解、戦いたくないのは俺も同じですよ。やっと気に入った女と付き合える様になったんだ、怪我や死体になんてなりたくないですよ、全力で誤魔化してきます」

走り出すソイドイの姿を見送る部下達、どこかホッとした気配が漂

う。ゾンビが生きた人間に戻ったと言う所だ、後は此奴を追い払うだけだな。

ケイリスが部下達に何か言っている、って言うか、相談している見たいだ。一人の兵士が走り出した、どうやら伝令の様、まじに俺はどうなるんだ？。しばらくしたら店の前まで来た、ケイリスがとうせんぼの様に俺の前に立つ。ケイリスが店をクイクイと指さす、どうやら店に用事が有るらしい。まあ良いけど、俺はイッガールに突き刺さったままのバイクを下すため上って行く。

小隊は食品ギルドに着いた、俺は部下達を外で待たせギルドに入った。俺は受付の女の子に「流れの冒険者らしいのがイッガールを仕留めた。どうやら金にしたいらしいので見てくれ」そう言った。

「分かりました、一寸待ってください」との返事で奥に走りこんでいった。

「お待たせしました、物は外ですね」

そう言いながら担当者がでて来た。

「おー、これは凄いですね、流れの冒険者って彼ですか」

「ああそうだ。言葉が通じないので困っているんだ、変に値切らないでくれないか。他所に出て行くまでに、金が無くなって盗賊にでもなられたら困るからな。それにランクは関係ないだろう、これだ

けの獲物を倒す冒険者だしな」

俺は食品ギルドの野生動物肉担当、セイライ・アッター。国境警備隊の小隊長がイッガールを倒した冒険者と来ていると、受付の女の子が言ってきた。流れの冒険者、まあ居ないことはないが。一人ででかいイッガールを倒せる奴はまず居ない、だが何かの為に屯所の奴には恩を売って置くのも悪くはない。

「おー、これは凄いですね、流れの冒険者って彼ですか」

「ああそうだ、言葉が通じないので困っているんだ。それと変に値切らないでくれないか、他所に出て行くまで金が無くなって盗賊にでもなられたら困るからな。それにランクは関係ないだろう、これだけの獲物を倒す冒険者だしな」

「ええ冒険者でなくても大丈夫です、おっとあの小動物も私の所で引き受けますよ。ペットとして売れますから、木の実も大丈夫ですよ、食品ギルドですからねえ。そうですね、全部で金貨四枚と銀貨七十二枚でどうでしょうね。あゝそうでした、言葉が分からないのでしたね、お金を見せて領けば良いでしょう」

建物の中からケイリスと男が一人出て来た、ケイリスと何か話している。そして男が近づいてきて、硬貨を四角いお盆の様な物に乗せて差し出してきた。色から見ると金貨と銀貨の様だ、売れと言う事なのだろう。ここで逆らっても良いことは無いと判断し頷く、男は笑顔になって硬貨を小袋に入れて差し出してくる。ケイリスもうん

うんと頷き笑った、どうやら正当な取引だったらしい。

俺はバイクを指さし、これもと言う仕草をした。ケイリスはぐったりした顔をしてどこかを指さした、指さされた方向を見ると、ハンマーが書かれた看板が見えた。俺はひしゃげたバイクを担ぎ、ケイオスを引きずって行く。

ユースケは、何だか知らないが金属がぐしゃぐしゃになった物を指さした。これも売りたいと言うのだろう、俺ははす向かいにある鍛冶屋を指さす。その世話までかよとがっくりしていると、ユースケはそれを担ぎ俺を引きずって歩き出した。どうやら信頼されたようだ、早く解放されたいぞ。

鍛冶屋に入り、親父にこれを買って欲しいと言っているが買って呉れるかと聞くと。

「おー、これが何かは分からないが、良い金属を使っている。買うぞ」

金貨一枚を差し出してきた鍛冶屋の親父、それにユースケは顔を振り店先にある剣を指さした。

「親父、金より剣が欲しいらしいぞ、見繕ってやれば」

「そうか、見て気に入った物を持って来ればいいぞ」

俺は剣の方を指さし、ユースケの背中を押した。

店に入ると交渉は成立したらしい、親父が一枚の金貨を差し出してきた。俺は店にある剣を見て欲しくなったので、首を振り剣を指さした。そうするとケイオスが剣を指さしながら、俺の背中を押してきた。

俺は剣をいろいろ見て歩いた、まさにゲームの中の剣だよな。奥に入ると、重厚な大剣が並べて置いてあった。俺はその中で、肉厚と幅もある二メートル程の大剣を持ってみた。持ってみて、バランスがいいのに驚いた。重さはそれ程感じないのは、それは怪力に成ったと言う事で問題は無いのだろう。その大剣を振り回しながら行くと、店の親父が顎が外れそうな程口を開けて驚いていた。

もう驚かねえぞ、ユースケの怪力は散々見たじゃないか。と、自分に言い聞かせるが、心臓に悪いのは確かだ。店の親父は顎が外れそうな程口を開けて驚いている。

「隊長さん、彼は何者だ、今まであれを片手で振り回した奴は初めてだ」

「それよりあれの値段は幾らなんだ、さっきので足りるのか」

「いや、金是要らん、どうせ置いておいても彼にしか扱えんだろう。それよりも、もう一本ロンクソードでも隊長さんが見繕ってやった方がいいだろう、ナイフもな。それで金貨一枚だ」

俺は良さげなロングソードと、大型のナイフをユースケに渡し。大

剣の鞘とロングソードを下げるベルトは親父さんが渡してくれた。

俺は大剣を背中に背負い、長めの剣を左腰に下げ、ナイフは右腰に下げた。持ち物が殆どなかった俺に、剣と言う持ち物が出来たが、なにか殺伐とした感じがするのは気のせいだろうか。

俺はユースケを見ていて、正式に冒険者ギルドに登録させようと思った。言葉の方は若いからすぐに覚えるだろう、登録には俺が立ち会えば問題ないだろうし。このまま放りだすのは可哀想と言うより、それはやっては駄目だろうと思ったからだ。

俺は、ユースケを連れ、冒険者ギルドの扉を開けた。

「あゝ君、此奴を冒険者ギルドに登録させたいのだが。言葉も文字も駄目みたいなのだ、代筆では駄目かな」

「かまいませんよ、読み書き出来ない人は当たり前前に居ますから」

俺はそれを聞いてホッとした、とりあえず登録して。言葉と文字を教える教師を探せば良いだけだ、剣は時間を見て俺が教えれば良いだろう。俺はユースケと書き、呼び寄せ、ユースケその後を促す。

今度はケイオスが俺を引っ張る、そして又建物の中に入って行く。受付らしい所でケイオスが何か話している、そして何かを持って俺

を呼び。持って居るものにユースケと言いながら文字を書き、その後を促すように俺を見つめた。多分ゲームで言う家名の事だろう。

「ユースケ・タチバナ」

そう言うとは勝手に書いている、なんと書いているのか気になる。

家名はタチバナか、珍しい家名だなと思った。後は適当に書いた、出生地は数年前併合した国にした。誕生日は適当に、年齢は併合年に合わせて十六と書いた。使える魔法は分からないので、単に剣士と書いて出した。

「それでは登録します」何か要望がありますかと聞いてきたので、読み書きと言葉を教える教師を着けてくれる様に頼んだ。

周りを見渡すと、ここはどうやら傭兵か冒険者のギルドなのだった。剣や槍や弓を肩にした男女が出入りしているからだが、魔法使いも居るのかなーと思ってキョロキョロ見回すと。居たよ、黒いローブを着た人がそうなんだろう。あっちゃあ、あゝファンタジーな世界に来ちゃったのかい、薄々は気が付いては居たけどさ。

確信となれば落ち込むよ、元の世界には帰れないのだろうなあ。はあゝ、魔法かあゝ。俺も使えるのかなあ、魔王なんて居るのかな・。

「ギルドの宿は使えるのか」

「はい、使えます。一日三食と風呂付きで赤銅貨五十枚です、一月銀貨十五枚になります。それと前払いになりますますがよろしいですか、それと家庭教師は読み書きと会話ですので一回五時間銀貨一枚です。それは家庭教師に直接渡してください、以上ですがご質問は」

「俺の事では無いから質問と言われてもな、だが教師に渡す金はギルドに頼みたい。言葉が分からないのだからな、それと此奴が何かやらかしたら屯所に知らせてくれ。俺はケイリスと言う、同じ名前の奴は居ないから大丈夫だ」

「分かりました、ではとりあえず一月分の銀貨三十枚を渡してください」

俺はユースケに金を出す様に促すと袋ごとよこした、とりあえず一月分の宿代と教師に渡す金を預けた。しかし、言葉が分からないからトラぶったら困るな。

「じゃあ此奴をとりあえず部屋にやってくれるか、後は身振り手振りでやってくれ。感の良い奴だからなんとかなると思うから」

「承知しました、ご苦勞様でした」

ケイオスは俺に金を出させると、何十枚かの銀貨をだし女の子に渡した。それから俺の肩を叩き手を振っている。ここで別れるのか、不安だけど仕方がない。ケイオスにも仕事があるのだし、此処まで

面倒を見てもらったんだ、感謝しないとな。

女の子が俺の手を取り引っ張る、付いて行くと部屋だった。彼女はここで寝る仕草をする、あゝここは俺の部屋か。彼女はそれぞれの扉を開けて行く、風呂とトイレ付だ。元世界の俺の部屋より立派じゃないか、俺は彼女の方を見て頷き笑った。彼女は部屋から出るとき、食べる仕草と運ぶ仕草をしてきた。食事を運んでくれると言う事なのだろう、俺はそれにも頷いた」

新規登録のユースケ・タチバナ、珍しい名前と家名。背中に身の丈を超える大剣を背負い、腰に剣とナイフを下けている。見た目優しい顔立ちの少年だが、大剣を苦にして居ない所を見ると。結構な力が有るのだと思う、不思議な感じの少年だと思った。

「はあゝ、やっと解放されたぜって」・・・あゝ忘れていた。俺は慌てて部下達が居る場所に走った、残された部下達は・・・酷く黄昏ている。総隊長騙されていてくれるかな、そっちが今度気になった。

幕間 首になったケイリス

黄昏ていた部下達を連れ屯所に戻った俺に、先に報告に戻ったソイドイが。物凄く暗い表情で立っていた「うまい事誤魔化せなかったのか」と、聞くと。

「イツガールを単独で倒した冒険者と話したらよ、そんな戦闘力のある奴をなんで連れて来なかったとご立腹でな。去年リスタリア皇国と戦ったビースタス平原戦でよ、強い奴殆ど戦死しただろ、だからそう言うの欲しい訳よ。一般兵なら総隊長の権限で隊に入れられるしよ、まして戦力として認められれば総隊長の株も上に上がるって訳さ。うまく要ったらよ、ここより良い所の中隊長位までは行けるって事なんだよな。俺も下手売ったぜ、言葉も分からない奴でしたと言ったらな、それこそ誤魔化し放題じゃないか、って・・ますますご立腹なんだよ。小隊長のお前、一般兵に格下げもありかもよ」

「かぁ、怒鳴られる位なら我慢するけど、この歳で一般兵に格下げはないぜえ。それだったら総隊長ぶん殴って首になった方がましだ、よし部屋に行ったら殴ってやろう。どうせ不正のネタは掴んでいるんだ、それに言っちゃあなんだが、お前達全員が逮捕に向かって来ようが負ける事もないしな」

「ハイハイ実力百人隊長並の小隊長どの、俺達だって怪我なんかしたくねえし。そうになったら適当に金物でも叩いて？やられました逃げられました？とも言うっておくさ。でもよ、案外簡単に首って言うかもな」

「なんでだ」

「そりゃあゝね、頭も実力も自分の上に行く小隊長なんて目障りっしょ。来年辺り自分の上に、ケイリス小隊長が実質百人隊隊長として昇進して来たら、有る事有る事突き付けられて捕縛って言う事も有りですからね。でね、あっしがさ・・・証拠書類や品物をな、先程王都に送ってやったのさ、あゝ・・首になる前に敵討ちって言うのは有りなんでしょうかね」

「それでお前はどうするんだ、ここに残るんだろう」

「冗談は小隊長の顔だけにしてくれ、そうなら見ていて飽きない小隊長の顔が見れなくなるんですよ、退屈で死んじゃいますよ。幸い俺の彼女がな、二人で店を持ちましようて言ってくれてよ。ギルドで店の株を買ったんだよ、でっ、近々除隊する段取りだったんだよな。まあ、あれだ・・一寸早くなったって言うだけさ」

「お前どさくさに紛れて俺の悪口を言ったよな、冗談は俺だけの顔にしろとはどう言う意味だ。覚えていろよ、お前の女にお前の有る事有る事みんなバラしてやるからな。お前の人生設計ぶっ壊してやる」

「まあまあ些細な事はその位にしてさ、総隊長殿の面でもぶっ壊してきなって」

「何が些細な事だ、お前の給金は俺のへ送別金として貰っておく」

「あっ、鬼、ありんこのしょんべんみたいな俺の給金貰って行くって、人でなしいゝゝ」

「ふん、言ってる。てめえもご相伴に与っただろうが、知らねえとでも思ってるのか？」

「あー、今の撤回。貰って行ってくれ、その代りな」

「まあ、良いだろう、さっつと消えな」

「総隊長殿、ケイリスです、入ります」

「おー、ケイリス、随分とごゆっくりだったな。お前の隊付きが、面白い奴を見つけたと言っていたがそいつは何処に居る、あっ」

「総隊長、惚けないくださいよ。奴からちゃんと報告が来ているんでしょ、隣国の商人からの付け届けの前にさ」

「ほはおー、異な事を言うじゃないかケイリス。俺は商人からなんぞ貰ってもだ、何も手心を加えた覚えはないぞ。むしろそんな奴からは積極的に商品を没収しているがな、それは当然お前も知っているはずだぞ」

「あー、そうでしたね。収蔵品庫のカギがゴミと一緒に捨てられ居ましたが、何時もこのゴミ箱から当然の様？に？でしたが。ありやなんででしょうかね？」

「ケイリス貴様へ首だ、即刻出て行け」

「ハイハイくそつたれタンビル、てめえーの不正は王都に届けたぜ。まー、逃げても草の根探しても捕まえに来るだろうさ。最低でも公

開ギロチン、悪ければ公開串刺し人型人形箱だな、せいぜい逃げまくるんだな。あつ、チクったのは俺じゃないぜ、あんたの忠実な部下だってよ」

「あ、あの野郎ゝ裏切ったなあゝ」

ケイリスは総隊長室の扉を、タンビルから目を離さず出て行つた。

隊舎の自室に戻り、荷物を纏めて出てきたケイリスの前に、副総隊長が立っている。

「ケイリス小隊長も人が悪いですね、ソイドイは所詮ゴミ、彼奴の動きを見て情報集めでしたか」

「俺は発つ鳥なんでな、まっ、土壇場で俺の代わりに証拠を送ったと言っていたし。あんたが笑って言うなら本当でしょう、でっ、俺は後ろ足で泥を掻きまくって発つだけさ」

「それでっ、これからどこへ」

「俺がした約束は此処まで、後は自由にしてよいとの契約だからな。それと俺が出来る事は剣を振る事だけだ、冒険者になる心算だぜ」

「おう、話で聞いたその男。ユースケだっけ、そいつと一緒にやる心算か」

「まあな、なんとなく放って置くのが出来ないって思ってたな」

「そうか、元気でやんな、死ぬんじゃねえぜ」

「ああ、お前も元気でな、出世しろよ」

「あははっ、せいぜい頑張るよ」

さって、今日はもう宿に行こう、ユースケの所には明日でいいな。
なんか滅茶苦茶疲れたぜ、濃い一日だったなあ。

ケイリスは知らない、ユースケに仲間が出来た事を。そして自分が
ユースケの片腕として、建国の一翼を担い、歴史に名を残そうとは。

売られた喧嘩と、入団。

ユースケは寝ている、何故こうなった等と今更考えても意味は無い、責めて腐女子が考える世界に落ちなかっただけましと。怪力で驚愕はされたが嫌がられはしなかったと思う、そうでなければあの指揮官がこれ程親切にはしなかっただろう。しかも金と武器も手に入れる事が出来た、ギルドにも登録できた、明日誰か来るらしいがそれはその時対応すればよい事。じたばたしても何も始まらない、親はどうに死んでいないし、兄弟も居ない。親しくしていた友人も居なかった、行方不明になっても探すのは警察ぐらいだろう。それだっておおざりな物、すぐに忘れられると思う。ただ、この世界がどんな世界なのか分からないので不安ではあるが。

ドアをノックする音が聞こえた、ユースケはベッドから立ち上がりドアを開けると。部屋に案内をした女性が立っている、仕草で食事だと言っている。ユースケは頷き、立てかけてある大剣を担いだ。背負わずに担いだのは、降りる時背負うと階段にぶつかりコケルと思ったからだ。

外はもう暗くなっていた、ユースケはそう言えば、いつの間にか部屋に明かりが点いていたなど思い出した。案内された所は当然食堂らしい、すでに赤い顔をした男や女達が居た。ユースケは大剣を立てかけられるよう、食堂の隅の角に座った。周りからなにかひそひそと話す声がする、言葉が分からないから無視する。

ウェイターらしい女の子が注文を取りに来たが分からない、メニューの文字も分からないので。すでに食べている人達の物を指さし頼んだ、分かっただけしくテーブルから離れて行く。

運の悪い奴とか、人を見る目が無い奴とか、酔って誰彼無に喧嘩を売る馬鹿は何処にでも居るもので。当然ここにも居た、少々処に至極酒癖の悪い奴が。この場合は運が悪いのかただの馬鹿なのかはどうでも良い、言葉が分からない奴だとは気が付かない。五人組の冒険者、赤い風団だ。仲間がユースケに、酔って絡み団を解散する羽目になるとは思って居ないが。

「おい、ハーズ。あの小僧御大層な大剣を持ってきたが。本当に振れるのかよ、どう思うお前ら」

「あー、若いからな、なめられねえ様ハツタリでもっているんだらうぜ」

「ガーディ、可愛いじゃないか、放って置きな」

「まったくだ、飲むと誰彼構わず絡むのは止めろ」

「へっ、ちよいとした運動だ、かまわねえだろうが」

「ちっ、ハーズ、てめえも煽るんじゃないよ。物が壊れたら最悪俺達持ちなんだぞ」

「団長、良いじゃねえですか、やられて負けた奴が払えばよ」

「何時までも勝てるなんて思うな、何処にてめえより強い奴が居る

かも知れないんだぞ」

「はっ、団長さんよ、あの小僧が俺より強いかも知れないってか。だったら試して見様じゃねえか」

「ネイル、明日に成ったらあいつ等二人は首だ、もう面倒はみられねえ」

「しかた無いわね、一緒に居ても疲れるだけの奴なんて要らないわ」

「賛成です、気に入らないとすぐ仲間にも暴力振るうし」

「カイトが一番の被害者だしね、ギルドにも睨まれているし丁度いいかも」

「奴らから、あんまりひどくやられる前にあの小僧を助けるぞ」

「了解よ」「分かった」

食事をしているユースケの前に、男が二人立った酒に酔った赤い顔で。ユースケは絡みに来たなとすぐに分かった、何処にでもこんなのが居るんだなと感心したが別に恐れては居ない。やられたらやり返す、正当防衛だ。二人の男が何か喚いている、何を言っているのかは分からないが、すばらしい悪口雑言を言っているのだろう。ユースケは知らん振りをして食事を続けている、正面に立った悪人面の大男が飲みかけのスープの皿を持ちユースケの頭に掛けようとした。ユースケは席をずらしそれを避けたが、もう一人の男が殴りかかってきた。

「小僧、御大層な大剣を持って居るじゃねえか、そんなガタイで振れるのか。ああ、オイ」

「小僧、怖いから知らんふりか。それとも小便ちびりそうで声も出ないか」

「小僧、なんとか言ったらどうだ。それとももう腰が抜けたか、お楽しみはこれからだぜオイ？」

「ガーディ、どうやら俺達はなめられている様だぜ」

「ふん、スープでもぶっかければいいさ、お前がその間にぶん殴ってやれ」

「へへっ、いいぜ、行くぞ」

ユースケは殴って来た奴の拳を握り、一寸力を入れた。

「ギアー、手が手がある」

「この野郎、喰らえ」

大男がスープ皿を捨て正面から殴って来た。ユースケがテーブルを蹴り飛ばすと、大男はテーブル毎吹っ飛び壁にめり込んでしまった。拳を潰されたもう一人の男がナイフを抜き刺し込んできたが、ユースケは足を引きかわすとナイフを持った腕に手刀を落し、引いた足でそのまま男の足を蹴った。ユースケはそんなに力を入れた訳ではないが、大男は壁にぶち当たり頭部陥没・背骨骨折・両足両手の骨折。いわゆる全身骨折と言う恐ろしい事になった。拳を潰されナイ

フで刺しに来た男は、ナイフを持った手が手刀で切飛ばされ床に転がっている。そして両足があらぬ方向へ向いて折れている、二人とも当然気絶していた。

その場で見ていた者達は、驚愕の余り声もです立ち尽くしていた。ギルドの職員が飛んできたが、一人の男が職員に近づき何かを言っている。そして周りの人達も、男のその言葉にうなずいていた。

「すまん、又あいつ等が喧嘩を売ったんだ。彼は正当防衛だから、あと壊れた者は俺が弁償するよ」

「団長さんそれは当然ねってか、あゝあ、あいつ等馬鹿だね。あの子イッガールを一人で倒した冒険者なんだよ、見た目で喧嘩を売ったんだあゝ」

「もしかして、そのイッガールって討伐の対象になっていたB級の奴か」

「そうよ、あゝそれとあの子。言葉が解らないんですよ、どこからか流れて来たらしいわ。それで屯所の小隊長が連れて来たんだけどね、そりゃもう低姿勢でしたよ。何が有ったのかしらゝ？、飲みに来たら聞きたいわ」

二人の男は、ギルドで治癒の魔法を使える職員に手当され死ぬ事は無かったが。これからの人生は悲惨なものになるだろうと言うか後には無い、いかに魔法でも切飛ばされた腕は着いても元の様には動かせない。握りつぶされた拳は骨は細かく砕け、筋肉の組織は壊死したも同じで形としての手としてでしか無かった。蹴られた足は、骨は元に戻ったが、筋肉が潰され形だけの足で歩く事は出来ないだろう。大男は頭部を脳に損傷を負い、言語と記憶障害を負った。そし

て全身の骨は繋がったが、脊髄損傷で歩く事も這う事も、手足を動かす事も出来なくなった。喧嘩を売った二人は、もはや野たれ死にが決定していた。

ユースケにはなんの咎めは無かった、喧嘩を売られ刃物まで出されたのだから当然である。ユースケは、あー・一寸やり過ぎだったかなとは思ったが、未だ力加減が出来ないので仕方がないと思った。どちらにしろ、ユースケ自身には責任等無いのだから。大剣を担いで部屋に戻ろうとした時、ユースケの腕を引く女性が居た。担いだ大剣を指さして何か言っている、持ってみたいと言っているようだ。

「ねえ、君その剣私も持てる」

そう聞いたのはネイルだ、言葉が分からないのなら仕草で伝えた。どうやら通じたらしく、ニコツと笑って大剣を背から降ろし垂直に立てた。少年とも言える年頃の男が軽々と持つので、それ程重いとは思えなかった、大男のガーディを蹴り飛ばしたとしてもだ。大間違いと勘違いを起こした女が一人、この後盛大に泣く羽目になる。

「よし、どれどれ、……え……ええ、つ、潰れる」

ずるずると圧してくる重量に、ネイルは悲鳴を上げる。団長と呼ばれた男が慌てて助けに入るが。その重量に腰砕けになって二人とも床に沈んだ。

「重い重い潰れる、助けて……みんな助けてえ」

床に大剣を抱えて泣く女、なんだかユースケはきもいと思った。だから一寸そのままにして置こうと思ったが、涙声まで出されては仕方がない。柄を片手で握り、大剣に抱き着いて泣いている女とも

に持ち上げた。ドサツと言う音とともに女が落ち、潰されそうになった恐怖と、床に落ちた痛みで盛大に泣きだしてしまった。見ていた全員、ユースケの怪力に固まってしまった。

「ネイル、お前も未だ可愛い所が残っていたんだな、安心したぜ」

「馬鹿団長、マジで潰れて死ぬかと思ったのよ、それよかあの子を勧誘しなって」

「おっ、おう。だが言葉が通じないのじゃなあ」

「そんなのどうにか成るって、他の団から出し抜かれたら大変な事になるわよ」

そんな二人を無視したようなもう一人の団員が、ユースケに話しかけている。

「俺はカイト、君の名前は」

カイトは自分を指さしカイトと連呼、そしてユースケを指さす。名前を聞かれたと理解したらしく「ユースケ」そう短く少年は答えた。ユースケと言う少年の前で、仲間のカイトが必死に仕草をしている、彼なりに勧誘しようとしているようだ。そんなカイトを見ながら、ユースケは困った様に頬を指で搔いている。そしてカイトは床に腰を下ろし、自分達三人の名前とユースケと言いながら名前を丸い線で囲み一緒一緒と叫んでいる。周りの連中はゲラゲラ笑い「お前らあの二人の片割れじゃないか、仲間になんかなるものか、諦めろ」と騒いでいる。

うーん、此奴俺に仲間になれって言っているようだけど。あの二人

の仲間だろ、どうしよう、なんかやだなあ。そうしていると、男と女が近づいて来て拜む様な仕草をする。まあ、確かに二人も戦力が居なくなったんだし、困るのは分かるけどなあ。

「団長、兎に角拝み倒しましょ、こんな事件を起こしたんだから当然団員の補充は出来ないかもよ」

「だな。よし、恥もへったくれもねえ、おまんまの食い上げなんかに成ってたまるか」

あれれ、土下座までして来たよ、これって異世界でも使うんだ。しかたねえなあ、ここまで遣られたらさ。ユースケは三人の肩をそっと叩き頷いた、三人は大喜び。周りの連中は不満そうにブーイングしていた。

「良かった、良かったよ。言葉と字の読み書きはあたし達が教えればいいわ、何時も一緒なら場所も時間も関係ないし」

「それじゃあ、ギルドの受付に言って来よう」

あれえ、あの子押し切られた見たい。まあねえ、幾ら言葉が解らないからと、あそこまでされたらねえ」

「ねえねえ、この子私達の団に入ってくれるって」

「それではギルドカードを出してください、ユースケ・・・これ、これよ」

ギルドカードを出せって言うのかな「はい」そう言って出したら、
なんかニコっと笑ってきた。

「分かった見たい、察しの良い子なのよねえ」

「ああ、案外早く言葉も文字も読み書き出来る様になるかもな」

「利発そうな目をしているし、とんでもない拾いものかもよ」

「はあ、拾われたのは俺達かもしれないぞ、イツガールを単独で倒したんだからさ」

「あーそれよ、どうやって倒したのかしら謎だわ」

「明日屯所に聞きに行けばいいさ、どうやら小隊長クラスの奴と面識が有るようだしな」

「ユースケさん、それじゃあ言葉を教えてくれる人は要らないわね」

そう言ってギルドの職員がお金を返してきた、受け取りながらユースケは三人に部屋に戻ると仕草で伝えた。三人は頷き、自分達も部屋に戻る土草をした。どうやら今日はおしまいの様だ、ユースケは寝る事にした。

散歩と買い物とケイリスと

腹がへって目が覚めたユースケ、あゝ・あいつらのせいかな、メシ半端になったもんな。売られた喧嘩を反射的に買ってしまったっけ、元の世界なら過剰防衛で面倒な事になっただろう。まあ、異世界だし、結果は本人が責任を持つべきだと気にしない事にした。顔を洗いい、大剣を肩に担いで階段を下りると。ケイリスが立っていた、左の腰に昨日のではない剣を下げ、荷物を背負っていた・だが？何か話しかけてくる。ユースケは頭を傾げ、ケイリスを見る。

「あゝ、ユースケ早いな、もう目が覚めたのか」

ユースケが、キョトンとした表情で、なんでお前が居る？そんな感じだ。

「あははっ、兵隊辞めたんだよ、お前と居た方が面白そうだな」

ケイリスが敬礼の仕草して、そのあと両手をブンブン振っている「んゝ、兵隊を辞めたと言う事か。俺のせいじゃ無いといいが、でも子供ではないから何かの勢いでとはないだろう」。

「ユースケ、どこかへ行くのか」

散歩の序でに生活小物を買に行きたいが、んゝそうだな、ケイリスを引っ張って歩けば迷子にはならせないだろう。便利なおっさんて言う事で、にやっとならな嫌そうな表情をした。

ユースケは俺の問いに、指で街をなぞる様に動かして笑った。散歩の序でに買い物でもしたいと言うのだろう、此奴と一緒にだ、なんかに巻き込まれる恐れが大なので顔を顰めると。むっとした顔をし強引に腕を引っ張られた、・・・そらを飛んだぜえ〜。

嫌そうな顔をしたケイリスの腕を、強引に引っ張ったら宙に浮いた。
・・飛んで居るし。

飛んだぜ俺は、距離的に三十モイル程。人の背丈位の高さで飛んだのと、受け身を取れたのでたいした怪我はないが。ユースケめ、怪力超人の意識は無いのか。ユースケは擦り傷だらけの俺を見て、地面に座りペコペコと頭を下げている。何か不思議だ、最近怪力に成ったとか・・・有り得んぞ。言葉が話せる様になったら聞いてみよう、しかし、こいつの不思議が増えたぜ。

飛んで行ったケイリスは、三十メートル程飛んで地面に落ちた。慌てて近づくと、擦り傷であちこちから血が滲んてきた。怒られる前に、昨夜の三人の様に正座してペコペコと・・・土下座です。

俺は自分で治癒の魔法をかけ、擦り傷を治療して、序でに水魔法と風魔法で衣服の汚れを落とした。俺自身の攻撃魔法はそんなに威力は無い、今やった程度の物なので魔剣士にも成れない。せいぜい斬られたら水魔法で治癒しながら切り込む、それだって状況によって違うが七、八回が限度だ。視線を感じユースケをみると。目を輝か

せ俺を見ている、魔法を知らない・・・そんな馬鹿な？。

おお、ケイリスが魔法らしいのを使って治療している、それに血で汚れた所が綺麗になって行くぜ。俺も魔法を使えるのかなあ、使えたらいいなあ。

朝早い時間とはいえ、道を歩く人もいれば、開店準備をしている人もいるし。当然俺達二人の様子を見て笑っている人も居れば、驚いて目をむいて居る人も居る。慌てておれはユースケに行くぞと来いと手で合図する。ユースケは頷き、立ち上がり俺の傍に来る。本当に察しの良い奴、言葉なんぞ要らないのではないかと思う。

そう言えば、ユースケは旅道具も何も、剣以外持って居なかった事に気が付いた。冒険者になったからには、依頼を受けて外に出る訳だし。ん・・・簡単な道具と、寝袋代わりのマントは必要だな。

旅道具雑貨を売る店に入る、店主とは顔見知りだ。

「あれっ、小隊長さん。今日は私服ですね、何処かへ行くんですか」

「あー、色々あって兵隊は辞めたんだよ、暫く此奴と冒険者で食う事にした」

「えー、屯所の方大丈夫ですか、残された連中早死にしますよ、マジで」

「あゝ、知らん。俺は鍛えたからな、それなりに遣れるだろう」

「ははっ、冷たいなあゝ、噂じゃあんたが総隊長になって事で喜んでいたんだけどねえ」

「ふん、それで尻拭いをさせられるのは御免だ」

「はあゝ、まあそれを考えたら仕方が無いですねえ」

「それより旅道具のCセットを一つ呉れ、後齒磨き道具が欲しいとさ」

「へえゝ、この人余り見ない髪の色と目の色ですね」

「ああ、流れの冒険者らしい、言葉も分からないのさ、だから当分面倒を見る心算だ」

「なんか凄い子ですね、あんな大剣を背負って平気な顔をしているし」

差し出された旅道具を受け取り、店を出ると。ユースケは衣類を売る店を見つけ、店に入る。衣類店とはいっても、マントや手袋や靴、ベルトに帽子等をも売る店だ。ユースケは店内をうろつき、普通に触るぶんには只の帽子だが、外から高速で叩かれたり斬られるような刺激を受けると硬化する帽子と。衣類を二着買っていた、未だ欲しいものがあるらしく店内を歩き回る。結局薄手の皮手袋と、今履いている靴よりも頑丈そうな革の長靴と、厚く幅広のベルトを買い。その上皮の袋とマントを買った、銀貨五十枚の買物。帽子が一番高く、銀貨十五枚、マントが銀貨十二枚。ユースケは買物に満足したらしくニコニコと笑顔だ、離れて暮らす弟を思い出す。

ギルドに戻ると、焦った顔色の男女が三人が居た。恐らく冒険者のグループだろう、俺の顔を見て怒りの表情だ。その中の背の高い、年かきの男、恐らく団長だろうが話しかけてきた。

「あゝ、あんたはこの子と知り合いなのか。言っておくが、昨夜からこの子は俺達の団の一員になったんだ。勝手に連れ回さないでくれないか」

「ああそうなのか、俺は昨日まで屯所で小隊長をしていたケイリスと言う者だ。ユースケとは昨日一寸した事で出会ったのさ、良かったら俺もあんた達の団に入れてくれないか」

「えっ、昨日まで屯所の小隊長・それは願ってもない人材だ。一寸待ってくれないか、一応仲間と話し合わないとな」

「良いぞ、俺はユースケの部屋に居る、返事はそこで貰いたい」

「分かった、暫く待っていてくれ」

朝になり、ユースケの部屋に行ったが居ない。散歩に行ったにしては大剣もない、言葉が解らないから俺達の団に入った等思っても居なかったのだろうか。焦った俺達がギルドの前に出ると、上機嫌らしいユースケが一人の男と親しげにギルドに来た。俺は男に声をかけた。

「あゝ、あんたはこの子と知り合いなのか。言っておくが、昨夜からこの子は俺達の団の一員になったんだ。勝手に連れ回さないでく

れないか」

そう言ったら、男はユースケと昨日知り合った。昨日までは屯所の小隊長だった言う。その上俺達の団に入れてくれと言う、屯所の小隊長だったと言うのだから人材としては文句の無い所だが。そこは団として行動をするのだから、すでにいる仲間を無視して入れる訳には行かない。

「なあ、聞いただろう、人材としては文句の付け様がない。それにユースケが懐いているようだしな」

「俺は姐さんが良いのなら構わないよ」

「あゝ・ユースケが懐いている、には気に入らないけど。良いよ、どうしたってあの子の面倒を見るのには人手が居るし。依頼を受けるのにしたって、望めないくらいの人材だしね」

「では決まりだな、早速団に登録してもらおうか」

団長の俺がユースケの部屋に行き、団員の同意を得た事を伝え、団に登録をした。驚いた事に、すでにB+のレベルだった。そんな人間が屯所の小隊長、普通なら大きな町に駐屯する国軍の大隊長クラスだぜ。不審な目を向けると、屯所の総隊長の不正を暴くまでの一時的なものだったのさと躲された。

「んで、ケイリスは副団長な、団長命令で拒否権は無い」

「なっ、入ったばかりの俺が副団・・、有り得ねえだろ」

「あははっ、ここに有るんだからよろしく頼むわよ、副団長様」

「俺、カイトです、副団長殿よろしくであります」

ユースケは首を傾げていたが雰囲気で悟ったらしく、うんうんと頷き大剣をどんと床に突き刺した。本人は一寸床をつついただけなのだろうが、建物が揺れて床に穴が開いた。

団長が「これの始末よろしく副団長」

早くも厄介事を・・・チラリとユースケを見るともう階段の方に逃げている。ギルドの職員が俺を睨んでいた。ユースケは・・・俺にとっては疫病神・・・なんだろうか。

散歩と買い物とケイリスと（後書き）

一モイル・・・一メートルって言う事でよろしく。

ケイリスの叫び、疫病神だぁ。

冒険者、赤い風団の五人が朝食のテーブルに着いた。団長のギャリクが、メンバーが変わったから互いに自己紹介しよう、そう言っユースケの顔を見てこの子は言葉が解らないからいいか。

団長のギャリク・カンダー、27歳

前衛・武器はロングソード両手剣・火の魔法

カイト・ブルーム、21歳

前衛・中衛・後衛・武器は槍・ショートソード・火の魔法

ネイル・ギルバツハ、25歳 女性（カイトは姐さんと呼ぶ）

中衛・後衛・武器は弓・風魔法・ダガー・（レイピアを持つ時もある）

副団長ケイリス・ラ・ポケット、24歳

前衛・武器・槍・ロングソード・風・水・治癒魔法

ユースケ・タチバナ、19歳（16歳位にしか見えていない）

前衛・武器・大剣・ショートソード・ナイフ・魔法不明・超怪力

「ねえケイリス副団長、ユースケと最初に会ったのはどこなの」

「ネイルさん、ケイリスで良いですよ。ユースケと出会ったのは、イッガールの腹の上で寝ている男が居るって言う牧場からの知らせでな。俺の隊が丁度待機組だったから見に行ったのさ、でっ、着いたらユースケが目覚まして俺が話しかけたのが最初」

「ケイリスは、そのイッガールがAランク討伐対象だって知っていたのか」

「団長、兵隊は基本人間が相手だ。出来るなら、あんな化け物みたいなイッガールには出会いたくないですね。ってか、だから討伐対象か」

「でもユースケは倒したんでしょ」

「ケイト、俺と部下が見たのは腹の上に寝ていたユースケだけだ」

「そのイッガールってどの位大きかったの」

「ああ、普通のイッガールの五倍は有ったんじゃないか。食品ギルドが金貨三枚以上ギルドがよこしたからな、まあ、その他も有ったけど」

「なになにその何処か嫌そうな話ぶり、知りたいわあ」

「ネイルさん、聞いたら嫌になりますよ」

「ケイリス、そう言われたらなんか絶対聞きたくなったぜ、なあネイル」

「そうよ、今日はユースケの武勇伝聞きたいわ」

「俺も聞きたいですよ、なんか凄そうですから」

「はぁ、好奇心は猫をも殺すって言いますよ。んゝゝまあ良いか」

七モイル程の高さと三十モイル程の距離の道路に、その化け物イッガールを一人で投げ上げた事。一抱えもある木を蹴り倒した事、蔦を一気に引っ張って小動物を気絶させた事。生木に拳骨で穴を開けまくって台車を作った事、その台車を一人で引いてきた事。ケイリスは、話をしていて気持ちが悪くなってきた。

話を聞いた三人と、周りで聞いて居た他の人達も顔色を失くした。当のユースケは、パクパクと機嫌よく朝ごはんを食べている・・・手の付けられていない仲間の食事・・・をだ。

「はっはははっ、なんてこった。化け物を殺す化け物が居たって言う事か、はぁゝゝそれが今は仲間の団員。・・・俺達の未来は明るいぜ」

「団長は、随分と前向きな性格ですね、ネイルさん」

「違うわよ、一種の錯乱状態なの。まったく、虫の金玉なんだから」

ユースケは、話している中に自分の名前が出てくるのを聞いて居て。

自分の話をしているのだろうと思っていた、話しているから皆の食事が進まない。代わりに全部食べてしまったのに、なんの反応が無いのは面白くない。仕方が無いのでキルドの訓練場に来た、仕事にあぶれた連中だろうか、剣や槍を振り回している。

「おい、あいつだろう、ガーディとハーズをぶっ壊したっていうのは」

「ああそう、こうやって見ると只の小僧なんだけどな」

ユースケは大剣を片手に振り回し始めた、退屈だったから。右手で左手で扇風機のように「あ~~~~っ」の気合で両手で真下に剣の腹で振り降ろした。

ドンと言う音と「ボコッ」なんとも間抜けな音が地面から聞こえた。

「ごああ~~~~。あの小僧剣圧で地面に穴を開けたぞ、化け物以上だぜ、逆らったらやべえぞ」

ユースケが又居なくなった、残された四人が席から立ち上がった時、建物が揺れた。

「まさか、ユースケか」

「多分ね、行ってみる」

「訓練場の方向ですよ姐御」

「あ~~~~、又何をやったんだよ」

「頼むからギルドの物は壊さないでくれ〜」

慌てて訓練場に飛び出した四人、人が集まっている場所に大剣がユラユラと揺れている。覗き込んだ場所には、大剣の形で穴が開いている。

「ねえねえ、これってこの子が剣でも落した穴」

「飛んでもねえよお前んとこの小僧は、剣の腹でこうブンと振り降ろしたらな、剣の形で穴が開いたんだよ。もっとも、持ち上げた所までしか見えなかったけどな。あれを見たらそうだと分かるだろう」

「あゝ・・もう大抵の事では驚かない事に仕様、肝っ玉減るぜ」

「あゝい、カイト。団長にそんなの有ったっけ」

「さあ、知らないですよ姐御」

ユースケは大剣を壁に立てかけて左腰の剣を抜いた、元の世界では剣など持った事も無い。もちろん剣道等の経験もない、こちらに来てから初めて剣を持つ。右肩上に剣を担ぐように左下に振り降ろし、剣を跳ね上げて真正面に振り降ろし、左肩に跳ね上げるように引き寄せて身体を左にひねりそのまま右下に振り降ろす。と言う素人さばきでそのまま右構えで剣を突き出す、素人・・見ていたメンバーはそう確信した。トコトコとユースケは案山子が並んだ場所に行く、剣を鞘に納めたままの形で構え。案山子に向かって走り出した、斬る動作は見えるが、剣が見えない。

「ど素人だけど、とんでもない剣速ね、実戦で覚えるタイプだわ」

「あっちゃあ、案山子全部ぶった斬ったぜ」

「あゝあ、副団長後始末よろしくね」

ケイリスは確信した、やっぱりユースケは俺にとって疫病神と。

初クエスト、二つの討伐依頼

ケイリスは、ギルドの掲示板を見ながら唸っていた。新しいメンバーとして加わった団のレベルはCだが。張られている依頼書のレベルはAとDとEしかない、Aを受けるのには団のレベルが引っかけを受けするのは難しいだろう。DとEは受けられるが金額が低すぎる、五人で受けて満足な報酬金が受け取れないのであれば骨折り損だ。隣にいるネイルに。

「なあ、これはユースケのレベルを上げる依頼を受けてからの方が効率いいのかな」

「そうね、幾らあの怪力と言っても。実績はあの一件じゃあね、未だしばらくは金銭的に余裕が有るから。ユースケには経験と実績を積み上げさせてレベルアップね、あの怪力でレベルFはどうよって思うわ」

「力だけではな、それでもイツガール討伐が認められてのレベルだ。一番下からだったら腹を空かせて何をしていたか。うーん、だとすると是だな」

採集依頼書 依頼元 食品ギルド

レイバラージャ 五体採集 採集場所 レグレムサ平原

条件 最低でも頭部の毒牙は無傷の事。

採集レベル 団体レベルE 個人レベルF～Dまで。

採集品の提出先 冒険者ギルド採集品受付 期日 本日から三日以内。

報奨金 銀貨50枚

注意事項 ジャスラーガの集団が居る模様、当食品ギルドでは依頼対象とはなりません。

補足事項 ジャスラーガの討伐も同時に受ける事をお勧めします。

「あー、このジャスラーガ討伐ってこれね」

討伐依頼書 依頼元 運送ギルド

ジャスラーガ 十体以上の集団 全体個体数不明 討伐場所 レムサ平原

討伐レベル 団体Gまで 個人レベルF以上C以内 一団体 一人 冒険者対象

証明部位提出先 部位 尻尾 冒険者ギルド討伐部位受付

注意事項 団体 個人 レベル上げ対象ですので、工芸ギルドへの証明部位以外の部位を持ち込むのは冒険者ギルドでの証明後にする事。＊ギルド協定 条件J規定

補足事項 レベル上げは個人での討伐の場合ランクFの冒険者のみ十体以上でEランクへ。それ以外のランクの冒険者の場合は十か一

の補助レベルが付くだけです。なお団体は百体以上で団体レベル1上がります、団体証明の場合工芸ギルドも冒険者ギルドにて立ち合います。

危険情報 レイバラーじゃ出沒地域 対毒薬を持参する事をお勧めします。

「じゃあこの二枚ユースケに受けさせる、でも言葉が解らないのですよ、どうします」

「ここの受付で聞いてみよう、俺達の誰かか、ギルドの立会人か。どちらかが付いて行く事にはなるだろうな」

「ギルドの立会ってお金取られるんでしょ、それに立会人を守らないとならないし面倒ね」

「いや、立会人はレベルAの奴が付くからな。守ってやる必要等ないのさ、だけど獲物は減るよ」

「マジレベル上げには邪魔な奴、あたしらもそれで苦労したもの、あいつ等最低」

「ははっ、ギルドもそう簡単にレベルを上げられては金にならないしな」

「ユースケ連れてくるね、退屈で暴れられると困るし」

「今は団長が物の名前とそれの字を教えているだろう」

「さっき計算を教えていたわ、そしたらね、ユースケが見た事もない字で何やら書いたの。団長ったらそれを見て、古代使用数字だって騒いでいたわよ。ひよっとしたら、古代文字が読めるんじゃないかってさ」

「あはははっ、それだって。今しっかり字と言葉を覚えて貰えないと意味は無いだろう」

「そうなのよ、要らぬ脱線は辞めて欲しいわ。だいたい文字より計算でどうなのよ」

「ユースケはさ、ひよっとしたら俺達なんぞの手の届かない位の教育を受けているんじゃないか」

「おっとりしているし、それでいて一寸悪戯好き」

「だが危険を察知して、即座に対応する戦闘能力を備えている、不思議な奴だぜ」

「色々な面が出て来て面白い子よね、早く言葉を覚えて欲しいわ。色々聞きたい事もあるし」

そう言いながらネイルはユースケの部屋へ向かい、ケイリスは討伐に関する確認しに受付に向かった。

結局の所、討伐依頼を二つを受けると言う事で。ギルドの立会は無料で一人同行させるも、仲間も同行して構わないと言う事に成った。有料の立会と、立会人が依頼の討伐に強制参加する事で。不満を募らせた冒険者と、同行者、立会人の間で戦闘に成り双方に死傷者が出ると言う不祥事が発生した為にとられた処置でもある。

ギルドが譲歩した結果だが、それは要するに、冒険者の団体が傭兵ギルドに移籍する事態を防ぎたい意向も有ったの事。冒険者ギルドと傭兵ギルドの仕事の内容が、重なる部分が出て来たので冒険者ギルドも譲歩せざるを得ないと言う事なのだ。もつと言え、働き手が居なくなればギルドが困るだけ、が本音だろう。

ユースケにレイバラージャの絵を見せて、指を五本折り握る仕草をするとユースケは頷いた。続いてジャスラーガの絵を見せて掌を二度握って斬る動作と指を上にあげる仕草をするとこれにも頷いた。

「あの、姐御、ユースケ本当に分かったのかな」

そんなカイトの発言を聞いて、ユースケは机の上にコップの水に指を入れて何か書いた。

「おう、古代数字で五の単位だ。それは袋だな、五を書いてこつちを消したと言う事は。五匹捕まえると言う事をきっちり理解したつて言う事だ」

「本当に聡い子で助かるわく、カイトがもし立場が違って居たら何か月かかる事やら」

「姐御、そりゃないですよ、そこまで俺も馬鹿じゃないですよ」

「オイオイ見ろよ、これはジャスラーガの絵だよな」

「おっ、これは古代数字で二十だ。矢印は共通なのか、上を向いて居るって言う事はそれ以上・・・おっ、剣だなこれは。フンフン、半分ずつのジャスラーガの絵は斬るって言う事は解ったと言う事だな」

「ユースケが、これからの事を理解したって言う事は、俺達も理解したな」

「なんですか団長、その妙な言い回しは、団長も勉強したら」

「五月蠅五月蠅い、解毒薬買ったらすぐ出発だ」

「一寸待った」

「なんですか副団長」

「あのさ、これを全部ユースケ自身が一人でやる事だ、と言う事を理解したと思うか」

「あゝ・・・どうなんだろう、一寸待ってね」

ネイルは書いた絵を丸で囲み、絵とユースケを指で指した。ユースケはドンと胸を叩いて頷いた。

「あーお、完璧に理解しているわ。あつたまいゝわあゝ」

肝心のユースケは。

「んー、五匹の蛇を捕まえて。それから二十体以上のオオカミ見たいな奴を殺しす、と言う事だよな。それを俺に頼むって言う事は、自分達には無理だって言う事なんだな。頼られるって嬉しいなゝ、良し頑張るぞ」

完璧に、お互いに誤解した様だ。レグレサム平原まで三日程の日程、

何事も無ければ歩いてその位で到着するが。森あり岩場有りの道筋、ただでは行かないだろう、疫病神が居るのだから。

初クエスト、二つの討伐依頼（後書き）

ユースケ疫病神設定。

さあ出立だぜ

ギルドの売店で、人数分の解毒薬を買った団長のギャリクは立会人の要請に討伐受付の前に居た。

「そろそろ俺達の出発するが、そちらの立会人は用意出来ているのか」

「はい、今回の立会人はムース・ビュージョさんでレベルAの方です。今お呼びしますからお待ちください」

そう言うのと、ギルドの職員が奥に走って行った。やがて職員と一緒に出てきたのは、初老の域に入った男性で、二モイルは有るかと言う大男だ。両腰にはロングソード、二剣流の様だ、身長と長い腕を生かしての流儀だろう。

「ビュージョさん、往復約一週間よろしく、徒歩なんですが大丈夫ですよ」

「ふっ、赤い風のギャリクか、相変わらず貧乏よの」

「言ってくれますねビュージョさん、ですが上向きの風が懐に入ってきましたよ」

「あの小僧か、面白いのを入れたな、だが育て方を間違えるなよ」

「でっ、今回の条件は承知していますよね」

「ああ、俺に向かってくる奴以外には手は出さん」

「所でおねえさんよ、このジャスラーガの報奨金の金額が無いのはなんでだ」

「はい、基本一体銀貨一枚はご存知ですよね、ですから二十体以上ですので出来高払いなんですよ。要するに討伐頭数が何頭か、なんて分からないでしょ、なので書いてないのですよ」

「成る程な、了解した。ではビュージョさん、行きましようか」

ギャリクは、ギルドの入り口に屯している四人に出立の声をかけた。

「よし出発だ、今回の立会人はビュージョさんだ、経験豊富な方だから知りたい事が有れば聞け」

「ムース・ビュージョだ。知っている事なら何でも答える、往復一週間の旅、よろしくな」

「「「おおゝす」」」・・・。

「小僧、ほんに化け物の様な奴よの、それ程の大剣を背負って歩き音も立てないとはな」

ビュージョはユースケにそう声を掛けたが、ユースケはキョトンとしている。

「ビュージョさん、ユースケは言葉が解らないのよ、今物の名前を憶えている最中よ」

「そうか、この黒い髪と黒い目は東方で見た事が有るが、肌の色合いを見ると混血かも知れん」

そんな話をしながら歩いていると、もう外に出る門が見えてきた。

「よしここで最終確認だ、持ち物に不足が無いか確認しろ」

「ネイルはユースケの持ち物を点検してくれ、特に食料をな」

「団長、朝食をユースケに食われちゃったのを未だ根に持って居るんですか」

「んな訳ねえだろカイト、そこまで俺は小さく無いぞ」

「きやはははっ、ユースケったらパンと塩しか持って居ないわよ。お肉は狩りでもして食べる心算かしら、そんなに都合よく獲物は居ないってば」

「そんなこったろうと思ってな、俺が多めに買っておいた」

「俺も」「自分も」「あたしもよ」

「なんてこったい、思う事は同じってか」

「ほほお、面倒見がいいな、中々こうはゆかんぞ、良い事だ」

「よし、では出立だ、無事に帰って来るぞ」

「」「」「おー」「」

こうしてユースケのレベル上げの為の短い旅が始まった、目的地のレグレスサム平原まで三日、討伐と採集に一日の往復一週間の旅だ。途中にはカントウンの石柱平地、コモノスの森が有る。ケイリス曰く、疫病神ユースケが居る限り、無事に往復は無理だろうと思って居ると皆に伝える。鬼が出るか蛇がでるか、少しうんざりなケイリスだった。

あの苦しみと痛みはなんだったんだよ

門をでた冒険者赤い風の団メンバーと、キルド立会人と六人。ケイリスの肩をチョンチョンと突つつくユースケ、何事かとユースケをケイリスが見ると何やら指さす。指さされた方向に、ユースケが作った大きな荷車があった。食品ギルドでは扱いきれずに外に出したのだろう、ユースケは嬉々として荷車を曳いてくる。全員を指さしなぞり、乗れと言う仕草をした。

「おい、ユースケがこれに乗れてよ、頑丈そうだから壊れる心配はなさそうだけど」

「ケイリス、乗るのはいいが余り乗り心地は良さそうじゃ無いぞ」

「いいじゃない、楽が出来るんだからさ」

「ほほ、これを小僧が一人で曳こうと言うのか、いくら怪力でも途中で力尽きないか」

「団長どうします」

「カイト、ユースケの体力がどの位有るのか知る機会だ、乗ろうぜ」

「俺は物凄く嫌な感じがするんだけど、気のせいかな」

「ケイリス、今に成ってそれは無いだろう、兎に角乗ろうぜ」

不安そうなケイリスと、嬉々として乗り込むメンバーとビュージョ。これから地獄が始まるとも知らないで、ユースケに出発の合図をす

るギャリクだった。

五人が乗り込むを確認し、合図とともに歩き出したユースケ。軽いなあゝ、走って見ようかな。俺もどの位体力あるのか知りたいし、よし走って見よう。段々と速度があがる荷車、乗っている五人は少しづつ気が気でなくなってきた。

「おい、ユースケの奴走り出したぞ、振り落とされないようにしろ」

「舌を噛むからしゃべらない方が良いわよ」

「うお」「キャゝ」「なあゝ」「ぐええゝ」「いだだ」

余りのスピードに、振り落とされたら死ぬかも知れないの危機感で、必死に荷車にしがみついている五人は、気持ちが悪いと言う体調不良も湧いてきた。必死にこらえていて、もう駄目だと思った時に突然荷車が止まった。

「腹減ったあゝ」

そんなユースケの声にする、当然意味など五人には分からない。

「いだだだっ、ぐえゝ」「い、痛い痛い気持ち悪い、ゲエへゝ」「死ぐうゝゝ、おええゝ」「ゲホゲホッ、げえゝ」「い、生きてるゝ、ゲヘヘッ」

「あゝ、やりすぎちゃったかなあゝ。んゝ、でも腹減ったなあゝ」

全然反省もしていないユースケ、恨めしそうに全員が見ているのに、お腹を押さえて口に手をやりパクパクと口を動かした。

「腹が減って止まったのかよ、なんてえ奴だ」と団長。

「ここって石柱平原の入り口だぜ、なんて奴だ、ここまで化け物とは知らなかったぞい」とビュージョが言った。

「やっぱり不安が的中したぜ、味方を壊す心算かこの馬鹿は」とケイリス。

「振り落とされて死ぬかと思った、車輪が浮いて居たぜ」とケイト。

「馬鹿あゝ、怖かったんだからね、おしっこちびりそうになったんだからね」泣きながらそう言ってユースケに石を投げるネイルだった。

そんな騒ぎにもケロリとした表情で、パンをパクパク、干し肉ガツガツ、水をゴキュゴキュのむユースケに。全員がつくりと肩を落とすのだった、言葉が解らないって言うのは。ある意味最強だよな、との全員の感想だ。その上、鬼だつてば此奴は、とも思ったのは当然だろう。

「しかしここまで来るのに、軽く一日はかかるのによ、ほんの三時間そこらで着いた事に成るぜ」

「振り落とされずに要られたのは奇跡だわよ、マジ死ぬかと思ったもの」

「人生最大の災難でしたよね、姐御」

「やっぱり疫病神たぜ此奴は」

「わしもこれ程ひどい目にあつたは久しぶりだの」

「兎に角体調が元道理になるまで休憩だ、あちこち体が居たくてたまらんぞ」

「」「」「賛成」」「」「」

「ふうー、振り落とされない様にこれだけの時間しがみ付いて居られた。僥倖じゃったの」

ユースケは、彼らが当分動く意思が無いと理解した。回復薬を飲んだり、ケイリスから治癒の魔法をかけて貰っているのだから。昼前にもう昼ごはんも食べたし、やる事が無い、暇だ。言葉や文字をも教える意思も無いらしく、なにやらぐったりしているし・・・暇だ。

「そう言えば、俺って肉を持って居なかったよな。一寸狩りでもしてくるか」

ぼそつと呟き立ち上がったユースケ、ケイリスに剣を振の真似と。掌をグツと握る動作をして、林の方を指さす。

「団長、ユースケの奴狩りをしたいらしいぞ、いいのか」

「あゝ、大抵の奴には負けないだろう、構わないぞ」

ケイリスは、林の方を指さし頷いた。

「おっ、狩りにいってもいいのか。良し、何か好いもの狩ってこよう」

そうユースケはひとり言を言い、林の中に飛び込んで行った。途中、何かを殴る様な音が聞こえる。

「おいおい、あんな派手な音を立てて狩りに成るのかよ」

「多分、邪魔な木をぶっ叩いてへし折って居るんだろうさ」

「団長、俺達今後どう成るんでしょうかあ」

「カイト、諦めな。反対をしなかったし率先して勧誘していただろう」

「なんか物凄く不安ですよ、飛んでも無い奴に係わったすねえ」

ユースケはドンドン奥に入って行った、迷子にならない様に木をへし折って目印にして。そうして歩いてゆくと、運の悪い奴は必ず居るもので。先日投げ殺したイツガールの群れに出会った、巨大なイツガールを見てしまったユースケの感想、ちっちゃいだ。

「んー、向かってきた奴だけでいいか」

群れは成獣が五頭、子供らしいのが十二頭ほどいる。全頭戦う気満々の様子だが、全部狩り取ってもなあ〜と考えて居ると。群れはユースケを取り囲んだ、ユースケは背後に木を置く様に移動した。群

れのリーダーらしいのが正面から突っかかって来た、ユースケは正拳突きで答えた。ゴボツの音と共にパタリと倒れるリーダー、左から来た奴をステップで躲し。むんずと両手で捕まえて、右側から攻撃し様としている奴に叩きつけた。その隙に後ろ斜めから突っかかって来た奴に回し蹴り、吹っ飛んで木に背骨を叩きつけ動かなくなった。先に叩きつけた二頭も動かない、仲間を殺されて激怒した残りのイッガールの群れ。ユースケは、リーダーが死ねば逃げ散る物と思ったのにいゝ。の、思惑が外れて乱戦となった。

「あゝあ、結局全部殺す羽目になったぜ」少しは考えて逃げれば良いのにとぼやいたがもう遅い。

ユースケは鳶を引き抜き、ロープ代わりにイッガールの群れを繋ぎ引きずり始めた。

「おいおい、ユースケの奴何かと出会った見たいだぞ」

「あの悲鳴はイッガールの子供だな」

「あっちゃゝ、子連れの群れに出会ったか、大丈夫かよ」

「群れだからなあ、どうだろう」

「あれっ、音がしなくなったよ、まさかもう全部倒したとか」

「うゝん、有り得るかもな、あの怪力だし」

「ただどここまで全部運んで来るのは大変かもよ」

「それだったら何か言いに来るだろうさ」

「いや、案外自分で全部引きずって来るかものう」

「あゝ・・嫌だ、またユースケの出鱈目っぷりを見るのかよ」

全員ユースケの出鱈目ぶりに、驚いちゃ駄目だ、驚いちゃ駄目だと暗示をかけているが。ズサザツの音が近づいて来る、間段なく聞こえる何かを引きずる音に。そんなに沢山狩ってきてどうするよ、の思いがいっぱいだ。

ユースケが姿を現し、引きずっているのがイッガールの群れ。姿を現したその数に、腰から力が抜ける思いの皆だった。成獣五頭に子供のイッガール十二頭、全員頭を振り下を向くしかない。

「仕方が無い、魔伝でギルドを呼ぶしかないな」

「そうですね、ビュージョさん頼みます」

「まっ、これでユースケのレベルが一つ上がるのは確かだろうな」

「そうですねえ、別に依頼を受けなくても、狩りをさせればよかったのかしら」

「それは勘弁してくれ、冒険者ギルドが困る」

「結局ここで野営だな、あの苦しみと痛みはなんだったんだ」

あの苦しみと痛みはなんだったんだよ（後書き）

なんか変だけど、まっいつかあゝ。

言葉を覚えさせよう

ユースケが狩ったイッガールの血抜きをし終わると、あたしはユースケに、身の回りの品物の名前を教えていた。ユースケは記憶力が良い、しばらく間を開けてから聞き直しても、間違えなく答える。そして悪口を覚えるのも早かったし、悪い言葉をも覚えるのがとても早かった、何故なんだと思うのはあたしだけだろうか。

あたしは初日の夕食当番、ユースケにも言葉を教えながら夕食の支度をしていると。暇なカイトが、ユースケを引っ張って行く、地面に数字を書いて何やら計算を教えている様子。だがドンドンとカイトの顔色が悪くなる、初めは面白そうに見ていたケイリスも、驚愕の顔色に成る。

「ネイル驚いたぜ、確かカイトは高等院の学園を出ていたよな。カイトの奴、ユースケに足し算や引き算を教えていたら、あつと言う間に数字や数学記号を覚えてよ。逆に問題を出して解かせ始めたんだよな、いったいどう言う高等教育を受けたんだか」

「姐御おー、教える心算が教えられましたよおー、教育レベルが違い過ぎですう」

「カイト、アーマ、クテパイタ」

「ハイ、・・・あー、カイトの頭にはくそが沢山詰まっている」

ユースケは、心配そうにカイトの顔を見ている。真剣な顔で。

「ぎゃはははっ、俺達のうちで一番の教育を受けているのにそれか

い、カイトプライドずたずただな」

ギャリクが馬鹿笑いをすると、ユースケはギャリクに向かって。

「ギャリク、フェークテ」

「なんだ、スッゴイ悪口を言われた感じだが」

「うーん、きつと顔がくそみたいって言ったのかもよ」

「うーん、きつと顔がくそみたいって言ったのかもよ」

ユースケが、あたしの言った通りギャリクを指さして言った、そしてケラケラ笑っている。

「なんだと、ユースケ俺を馬鹿にするのかぁー」

「なんだと、ギャリク、カイト馬鹿すーのかぁー」

「へっ、おいおいユースケカイトをかばったぜ、それに会話になったな」

「順応力早いわー、ケイリスさんこっち来てえー、会話の練習を手伝ってよ」

「出会って三日だぜ、そんなに早く言葉に反応するかね、ビュージョさん何か知ってますか」

「あー、昔船乗りに聞いたんだがな。言葉って言うのは、悪口の方が覚えやすいと言って居たぞ」

「あはははっ、ユースケもその口ですかね、ユースケに問題を出されて卒検を思い出しましたよ。それよりユースケは、俺達の知らないと言うか、この世界の事以外の事をも知っている見たいですよ」

「それって、流され〜って言う事か」

「う〜ん、断言するのは未だ早いですけどね、なんとなあ〜くそんな感じ？」

「ビュージョさん、何か知っている事は有りませんか」

「わしが知っているのは殆ど化け物だな、飛んでもない災厄を運んで来る、そんな奴ばかりだ。だか、ユースケは違うだろうの、どう見たって人間だし。まあ怪力だけを見るだけなら、一寸近いかとは思うがの」

「あつ、ギルドの荷馬車が来たわ。その話題は今度にしましょうよ、ビュージョさんもしばらくは黙っていて下さいませんか」

「ふむ、確証の無い事を言い触らす程愚かでは無いぞ。それに、まったく悪気の無い子じゃしの。わしに子供が居れば、この位かと思うと悪気では見れんよ」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「ほっほっほっ、意味が解って言っているのかはどうかじゃが。段々と、正確な発音には成って来ているのう。帰りまでに、どの位使

える様になるか楽しみじゃ」

ギルドの荷馬車がやってきた、なんと四頭立てと言う代物、獲物の数を聞いてギルドの対処だろう。道理で到着が早い訳だとギャリクは思った、同時に、ギルドも四頭立ての荷馬車は初めての事だろうとも思った。

「やあギャリクさん、怪力坊やが又やらかしたって」

「ああ、コットー親方か。イツガールの群れを一人で殺っちまっとな、あの通りさ」

「かあゝ、又街の連中やギルドの連中に話題提供だな。知ってるか、もうあの坊やは超有名人だぜ。それにな、此处に来る時ベツツを拾ったぜ」

「そいつはきつと、荷車に俺達を乗せて、ユースケが引っ張って走って居る時にでもぶつかっただろう。手間賃だ、あんたにやるよ」

「おう、そいつは有りがたいね、ガキに土産を買えるぜ。しかしよ、気が付かなかったのか」

「それ所じゃ無かったとしか言えんよ、あいつの出鱈目っぷりは想像付くだろう」

「あはははっ、多分飛ぶ様に走ったとか、それで死ぬ程のの目にあったとか」

「その通りと言うのが悔しいぜ」

「コットー親方、あの子すっげえくすよ、一人でポンポンイッガールを乗せてしまいましたよ」

「おめーもあの子の十分の一位の力が有ればな、使える奴って言うてやれるんだがな」

「ぶあー、それでも充分怪物っすよ。でもよ、そんなくらい力が有れば嫁さんの来手が有るかもな」

「クトル、無理無理、それ以前に顔とスタイル悪いし」

「あううう、なんで此処まで来て止め刺されなきゃなんねえのよ」

「クトルぶあいくう」

ユースケがクトルを指さしてケラケラ笑う、本人に悪気ないのだから始末が悪い。黄昏てしまったクトルを、コットー親方が笑いながら引きずって行った。明日の市場が開く時間には、どうしても間に合わせたいから帰ると言う。夜通しとまでは行かないが、深夜には街に到着できるだろう。

言葉を覚えさせよう（後書き）

ベツツー・・・頭に二本の角のあるウサギの様な生き物の設定です。
ベツキーじゃ無いですよ、マジで。

言葉を覚えさせると言う、そんな設定で書こうと思ったんだけどね、
あゝ・・・なんだろうこれとは思っています。

幕間

ユースケの、疑問と小さな不安

夜になり、焚き火を囲んでの夕食は終わった。時々感じる小さな視線は、小動物の物だろうか。悪意や殺意などの視線は無いが、うろんな物との認識の視線は時々感じる。

ユースケは、薄い毛布の上にマントに包まり寝ながら考えている。異世界だと言う事は既に認識しているが、いったい誰かが何の為に呼び寄せたのだろうか。それとも只の事故なのか、気が付いたらあそこにて。後から知ったがイツガルと言う、化け物じみた猛獣を偶然に投げ殺していた。

知らぬうちに身に付いて居た超怪力のスペック、体の中には他に何かが有る様にも感じている。これ以上の物が必要な世界なのか、それともそれが無ければ、呼び寄せた誰かの役には立たないと言う事なのだろうか。すでに元の世界には肉親は居ない、だから然程数日前まで居た元の世界には未練はない。

ただその遺失感の無さと、生き物を簡単に殺して、然程罪悪感も湧かないと言うのはどう言う事なのだろうか。こちらに来てもう三日、呼び寄せた誰かが居ると言うのなら、もう何かしらの接触が有ってしかるべきだとは思うのだが。夢の中にさえも呼び掛けの声は無い、単なる奇跡的な事故なのだろうか。

街の中の様子は、確かに堀に囲まれた城塞の様な感じがしないでもないが。決して中世ヨーロッパ的な建物ではない、一口では言い表せられない一種独特な感じがする。文化レベルはそうだと言えばそうなのだろうとは思うのだが、高々三日で分かるはずもない事だ。街の中に居る犬や猫、馬や牛は元の居た世界とは変わりが無いし。

食べ物の野菜や果物は、名前が違っただけで後は何も変わらないのだから。

物の名前、会話の為の単語も少しずつ頭の中に入ってくる。言葉が解らないと言う事は、命に係わる重大な事。用が有って呼び寄せたのなら、読み書き会話の疎通は絶対条件で身に着けさせるはずとは思うし、そうで有るべきだと思うが。

最悪の性格か狂人か、捻じれまくった傲慢な奴が呼び寄せたのなら、それも有り得るかもと。何やら納得が出来ない思いが込み上げてくる、この世界での自分の未来とか居場所言うものが、約束されているのだろうかとの事を。

「はぁ、余り嫌われない程度に、楽しく俺様王様で行こうかな」

ユースケは、眠気が来た頭の、ぼんやりとした意識の中で呟いた。

幕間

ユースケの、疑問と小さな不安（後書き）

やっぱり少しくらいは俺様王様って言うのが良いかも、嫌われない程度に。

奴隸狩り部隊との戦闘と、獣族との邂逅

普通の人は、早く寝れば目覚めるのも比較的早い。だが、稀にその範疇からはみ出ている奴も居るのも事実だ。ユースケがそうだと言う訳ではない、やはり精神的に負荷が有ったのだろうか、朝霧も消えたのにまだ寝ている。ここはカントウン石柱平地の入り口、平地とは言ってもそう広い訳ではない。急げば歩きでも十時間程で渡り切れる、長さ百二十ロマ「キロ」幅六十三ロマ。

「ユースケ起きろ、もう時間だぞ」

起きないユースケに、痺れを切らしたカイトが乱暴にユースケ揺さぶる。

「カイト、そんなに乱暴にするとユースケに酷い目に合わされるぞ」

「団長、じゃあどうしろと、日の有る内に走破しないとヤバイですよ」

「獣族の連中が襲ってくるんでも言うのか、大丈夫さ、奴隸狩りの奴らかそうでないかは彼らも分かるだろうさ」

カントウン石柱平地とコモノスの森は、獣族系の種族が生活圏として居る地域だ。ここには、奴隸商人の狩り部隊が出没する地帯でも有る。鉱山や、大規模農場用労働力に奴隸として売る為だ。今ユースケ達が居る王国は、ベリーサイノウス王国と言う国だが、奴隸は認めていない。しかし、何処にも抜け穴は有る訳で、奴隸として働かせられている者達は居る。国として、獣族を保護している訳ではないと言う事でもあるが。石柱平地はイラーテス王国とベリーサイ

ノウス王国との協定で、獣族の自治居住区域として放置されている地域だ。

「団長、それは奴隷狩りの連中が来ていなければの話ですよ」

「カイト、俺達は獣族には借りがある。奴隷狩りの奴らを発見したら潰す、そうだったよな」

「ああ、分かっていますって。ただ彼らが、俺達を味方だと分かってくれたらの話ですが」

二人の話声でユースケがやっと目を覚ました、カイトの歩きながら食事をしろとの仕草に、分かったようでフラフラと歩きながら歯を磨き始めた。

「食事の前に歯磨きか」

「あら、食べた後も歯磨きはしていたわよ」

「神経質なのかね、そうとは見えないが」

「育ちがいいのかもよ、団長のあんたとちがってね」

「へいへい、どうせ俺は小作農民の余され者だよ」

「ぷっ、その歳で僻んだって可愛くないわよ」

「ギャリク、これを見ろ」

ギルドの立会人、ビュージョが地面を指さした。地面には未だ新し

い車輪の轍が見える。

「ビュージョさん、馬車は三台以上ですね。かなり大きな奴隷狩りの部隊が侵入しているって言う事でしょうか」

「だろうな、それに轍の形から他国者だろうな、それも悪名高い隣国のだ」

「隣国のイツラーヒイ皇国ですか、まったくあの国の連中は、王族貴族平民までも選民意識が強いですからね。奴隷を持つのが当たり前、他国の人族の俺達をも差別する奴らだし。他国の法等平気で踏みこむし、逆に俺達から見れば手のかかる害獣ですよ」

「知ってるか、此奴らは侵略者として対処せよって言う勅令が出ているって事」

「陛下は相当怒っているんですね、戦争も辞さずですか」

「陛下が、どの程度の意識で発したのかはわしにも分からないが。悪く言っても獣族と言えど、王国の少し変わった住民くらいには思ってた発したのかもな。国の住民を攫われるは王国の恥辱、その上属国に対する様な事を度々言ってくるらしいから、陛下も相当頭にきたって言う事かもな」

「さてね、俺達はビュージョさんを入れて六人だ、戦闘に成ったらユースケの怪力をどう生かすかがカギになりますかね」

「団長、そうなんだが問題が有る」

「ああケイリス、ユースケが人を殺す事を拒絶するかも・・・か、そ

うなったら俺達の負け、全力で逃げるしかない」

「そういう事になるな、未だ子供だ、無理を押し付けて壊れられてもの」

「そういう事だ、お前達、ユースケの様子を見て対処をしてくれ」

ユースケ以外、全員黙って頷く、出来れば自分達も人は殺したくないのが本音だが。出会えば問答無用で戦闘に成るだろう、と言う事は解っている。まして、キョトンとして干し肉をムグムグと無邪気にかじっているユースケを見れば、その手を人の血で汚させたくは無いと思うのだ。

ユースケは石柱群を見ながら「すっげえ、これって氷河が削った後なのかな」そんな観光気分で歩いている。石柱の高さも石の大きさもそれ程でもないが、自然の力で出来た物と思えばやはり凄いといしか言い様がない。高さ十モイル位で幅二モイル位の石柱がずらりと有る。

誰にとって、運が良いのか悪いのかどうなのかは解らないが。キョロキョロと石柱群を見ているユースケの目の端に、子供が走る姿と大人が追いかけて居る様な姿が映った。ユースケがとっさに掴んだのは人の頭より少し大きい岩、ユースケは思いっきりぶん投げた。ドガンと言う音と共に、石柱の一本がはじけ物凄い音を立てて崩れた。前を歩いていた皆は驚いてユースケを見る、と、同時に男達の悲鳴が聞こえた。

「あっちゃ、ユースケってば手が早い、先手を打った見たいだよ団長」

「ネイル、ユースケを頼む」

の、声を見殺すようにユースケはネイルを担ぐと走り出した。走り込んで行った場所は、子供が走って行った方向。ネイルは悲鳴も上げられない、ぶわっぶわっぶわっぶと飛んでいる様な感覚。そしてユースケはその子供を捕まえる事に成功して、ネイルに抱かせた。子供は恐怖よりも、その一瞬の出来事に気持ちが追い付けず目を大きく開いている。

ん、此奴ら人攫いなのか。そんな風に思い見渡すと、三人ほど崩れた石の周りに倒れている。どうやら怪我をしたらしく、呻く声だけがして立ち上がって来る気配は無い。

「なんだてめえー、俺らの仕事の邪魔をするのかぁー」

子供を抱きしめたネイルが見渡すと、ゾロゾロと男達が出てきた。奴隷狩りの男達の様だ、ネイルはユースケに男達を指さし、手刀で斬る動作をした。ユースケは分かったらしいが、眉毛を端を下げるという器用な事をして嫌がる表情をした。だがネイルは自分と子供を指さし斬る仕草をした、ユースケは一瞬戸惑った表情をしたが。くると背を向けて大剣を背からおろし、一足で怒鳴った男の前に立ち大剣を振った。動く事三歩、男達は悲鳴も上げる事なく斬り飛ばされて転がった。

ネイル、俺が此奴らを斬らないと俺達が斬られるのか・・・大人数の男達が子供を追いかけるなんてろくでも無い奴らだろうし、仕方が無いな。人殺しに成っちゃうのか・・・これも運命なのかもな。異世界に来てしまった自分に、諦めの溜息を吐いて、一気に飛び斬撃を振ったユースケ。目から熱いものが流れてきた、元の世界への決別の涙、もう帰れないとの思いの涙。遠くから剣戟の音が聞こ

え、悲鳴が飛んでくる、やがて何も聞こえなくなった。

立ち尽くすユースケの傍に子供が一人、小さな手でユースケの腕に縋った。なんの気もなく子供を抱き上げたユースケ、子供の顔を見てキョトンとし固まっている。

戦いが終わって、団長達がユースケのもとに来た。ユースケに抱き上げられた子供、そしてユースケが顔を見合わせて共に目を見開き固まっている。

「うあゝ、マジですか、耳の斑点は豹じゃん。マジ可愛いゝ」

「どうしたんだネイル」

「いやあゝ、はははっ、ユースケは獣族は初めての様だよ？」

「えゝ、結構あちこちに居るからそんなはずは無いと思うけどな」

「うゝん、様子から見ると、本当に見た事が無いようだぜカイト」

「あゝ、それではあれだな、昨日の話は確實って言う事かの」

「ビュージョさん、どうします、ギルドを通して王室に報告しますか。異世界人が居ますって？」

「ふっ、そんな事しても、わしにもギルドにも利益にはならんよ。王室だってどうしたら良いか分からんだろう、下手に扱えば敵視されて暴れられたら事だ。特に貴族と言う馬鹿も居るからな、そうなる確率が高い。今の儘おぬしらの仲間として、可愛がってやればいいと思うがの」

「分かった、此の儘ユースケを冒険者赤い風の団の一員として護るぞ」

「おうっす」

「カイト、あんたはユースケに守られそうね？」

「ブツ、そりゃないですよ姐さん」

「おっ、団長。今度は俺達が囲まれた見たいだぜ」

「子供を取り返しに来たんだろう、ネイル、子供をユースケから受け取って彼らに返せ」

そう言っている傍から、ユースケに抱き上げられている子供が叫んだ。

「この人族達を攻撃しちゃ駄目、勇者様の仲間よ？」

「ハイ、なんですかそれは」思わずネイルは突っ込みを入れた。

「わしは族長のリンドルーガだ、一先ずその子をこちらに渡して欲しい」

「俺は冒険者赤い風の団団長のギャリク・カンダーだ、子供は当然無条件で渡す、ネイル」

ネイルを促し、ユースケから子供を引き取ろうとしたが。

「嫌、わたし勇者様と居る」

「ポ波尔、話をしなければならぬ、我が儘を言う出ない。済まぬな、この子は我が一族の巫女姫候補の一人だ。人族には渡せぬ」

「いやいや、俺達も子供を攫おう等とは思ってはいない。ここに転がっている馬鹿者どもは隣国の不法侵入者だ、あんた達に被害が無かったらよいがな」

「けが人は何人かいるが、死んだ者はいない。この者達が乗ってきた箱馬車が六台ある、この子を助けてくれた札に一台やろう。四頭立てだから結構な大きさだ、役に立つと思う。残りの馬車は怪我人の治療費に貰う」

「それはありがたい、此奴らのお蔭で余計な時間を取られたしな。此奴らの懐にも幾許かの金は有ると思う、それも活用すればいいさ。それから勇者云々は聞かなかった事にする、俺達はギルドの依頼の仕事で平原に向かってるのでな。面倒事は出来るだけ避けたいのだよ、それに俺達は只の冒険者の団なのだから」

「ああ、勇者云々はただの古い伝説だ、気にしないでくれ。お前達の事は森の仲間にも連絡を入れておく、それと後始末は我らに任せてくれればよい」

「それはありがたい。よし、思わぬ事で馬車が手に入った、全員乗ってくれ。カイト、御者を頼む」

「はぁ、今日のうちコモノスの森には入りたいですね」

「あゝ疲れた、ユースケのお蔭で今日も一騒動だったな。まあ子供が無事だったのは良かったが」

「ケイリス、ユースケを疫病神って思ってる」

「ネイルさん、本気でそんな事を思って居るならここにはいませんよ」

「森の中が静かだと良いのだがな」

一斉にユースケを見つめる団員達、だがユースケはそれ所では無い、人を殺してしまったとの思いで一杯一杯なのだから。

沈む心のままに、馬車の揺れに身体を預けるユースケ。それを見つめる六つの目、ビュージョはその様子をみて、この団に居る限りユースケは大丈夫と感じた。

文化レベルと、ユースケ馬車に酔うの事。

「なあ団長」

「なんだケイリス」

「このレイバラー ज्याを捕まえる期日は三日ですよ、受けるのを間違えた、としかないですか」

「いや、いいんだよ。レグレムサ平原にはな、ギルドの出張所があるのさ ジャスラーガ専門のな」

「えっ、そうなんですか」

「言わば酒蔵専属みたいなものさ、あそこには新鮮なレイバラー ज्याの毒と、血を使った酒を造る酒造所があるのでな」

「へえー、知らなかったよ。でもさ、それならレイバラー ज्याを捕まえる専門の連中が居ても不思議ではないですよ」

「いやいや、乱獲になって困るのは酒造所だ、何事もやり過ぎは自分の首を絞める元って言う事らしいぞ」

「じゃあ酒造所の連中が捕まえれば良いだけでしょう」

「ケイリス、世の中は持ちつ持たれつって言う事も有る。酒は好きでも、あれは嫌いだと言う我が儘な奴らが結構居るのさ。実の所俺だって、仕事でなければ近寄りたくは無いです」

「所でケイリスは、レグレサム平原のその向こうの事は知らないのですか」

「カイト、俺は南部で生まれたからな、東部には行った事は無いよ」

「そうなんだ、まあそれが普通だよな。俺は中央州の王都近くで生まれながら、話くらいにしか聞いた事は無いな。でも、一度でいいから海を見たいよ」

「一寸一寸、ねえユースケの顔色悪くない、やっぱり堪えて居るのかな」

「ビュージョさん、どう見ます」

「そうだのう、目線が彷徨っていて顔色が悪い、時々口元に手をやる」

「あゝ、馬車酔いですか、この子馬車に乗った事が無いのかしら」

「んゝ、あの仮説が正しければ、乗り物として馬車など無かったと考えるのが妥当だろうな」

「えゝ、文化的に遅れてるとか」

「わっはっはっは、逆じゃ、わし等の世界が遅れていると思うぞ」

「はああ、どうしてそう言えるんですか、馬車に酔うだけでそう判断するって変ですよ」

「そうかの、ユースケ」

そう呼びかけたビュージョは、何かを書く仕草をしてユースケに向かって手を出した。ユースケは、小袋から何かを出してビュージョに差し出した。

「ビュージョさん、それはなんですか」

「気が付かなかったのか、ユースケはこれでこれに何かを懸命に書いて居たぞ」

普通日本の会社に勤めている者は、立場は兎も角。ボールペンと手帳は必需品だ、ユースケも当然持って居る。

「これって紙、あたし一度見た事が有る、でもこんなに真っ白では無かったわよ」

「ああ、紙は超高級品だ、王室の祭祀にしか使われないぞ、それにこんなに小さくは無い」

「それとこの裁断面を見なさい、これ程綺麗にきっちりそろって切断されて纏められている。それに見ろ、これは印刷だろう、これ程細かく精密にはわしらの世界では無理だ」

「あれっ、この絵は。あっ、ユースケだ、後ろの方のは乗り物かしら。なんか沢山人が乗っているわ、えっ、えっ・・馬が付いて居ないし道路が真っ平だ、す、凄いわあ」

「カイト、ユースケはやはり異世界人だったな。何かがあって流れて来たか、流されたかだろうな」

「ねえ、これってユースケの世界の飛竜なのかしら」

ネイルが差し出したのは、すでに絶滅しただろうテレホンカードだった、それにはジャンボジェットの写真が印刷されている。

「それはユースケが自由に会話出来る様になったら聞いてみれば良い、それよりもこのペンだな、何もつけずに書けるぞ。それも三色だ、国の宝物庫に入っているとしてもそんな色はないな」

「はあ、ユースケってどんな生活をして来たのかしらね」

「ユースケの様子を見ると、王侯貴族とまでは行かないだろうが、かなり良い生活をしていたんだろうなとは思える。職業は武人ではないな、官僚の家か商人の家の出だろう、憶測だがな」

ボタンと音がして、見るとユースケが走っている馬車から飛び降りて行った。そのまま道に蹲り嘔吐している」

なんだよ、馬車って拷問道具かよ。尻は痛いし無茶苦茶揺れるし、スプリングって付いて居ないのかよ。ユースケは生まれて初めて乗った馬車に酔い、生まれてこの方これ程の酷い目に合ったと言う記憶は無いと言う目に合った。これを切っ掛けに、スプリングと言う物を作り広め様と決意したのだが。乗馬でも、又酷い目に合うなどとはこの時点で知る由もない

文化レベルと、ユースケ馬車に酔うの事。(後書き)

乗り物を作るのはもっと後に成る。

夜中の森の不寝番・・・五月蠅いので石を投げた。(前書き)

夜勤慣れしたユースケ、カイトと寝ずの番だけど。夜の森って五月蠅いのな、でっ、五月蠅い奴を、退治してくれ様俺様が・・・石で。

夜中の森の不寝番・・・五月蠅いので石を投げた。

「二時間毎の寝ずの番、の、はずがカイトは寝ちゃっているし」ぼそつと呟くユースケは、馬車酔いをして結局野营地まで走り通した。そのお蔭で体長は戻った、夕食もしっかり食べた。暗くなつて行く過程の中で、会話と物の名前を繰り返して勉強をする。それが終わってから寝た、交代の為に起こされて。今不寝番としてカイトと居る訳だが、カイトは気持ちよさそうに寝て居る。今度からカイトが寝ずの番に着いたら用心し様と思う、命が幾らあっても足りないと思うからだ。夜の森、結構五月蠅いのだなこれが、何か獣が近寄ってくる感じとか、禍々しい気を飛ばし近づくものが居るし。

そこでユースケは、握り具合の良さそうな小石を集め始めた。もちろん、皆が起きない様に気を配りだが。焚き火の明かりが届く範囲内で小石を集めると、結構な量になった、馬車が揺れるはずだよと納得なユースケ。野球の投球ホームを真似て耳を澄ませ、脳内でピッチャー振りかぶりしました、投げましたストライクバッターアウト。等と遊び半分で気配のする方に石に力を込めて投げる、投げる、投げる。怪力ユースケ、小石が何かに当たって音がする等は無い。何か生き物に当たったからと言って、悲鳴を上げさせる等と言う事はさせない、夜中に徘徊する奴にはそんな災難な事をした。静かになったので、又暇になってしまった。

ユースケは困った、相棒のカイトは寝ているし、だから時間が解らない。夜勤慣れしたユースケには、それは別に良いかと思った、どうせ叱られるのはカイトだし・・・チラッとカイトを見る。冒険者は向いては居ないよなあ、こう言う無責任な事が重なれば信頼は失くすだろうし。起こすべきだろうかとも思うが、こう言うのって一度しっかり怒って貰わないとなとも思うしな。連帯責任・・・そ

れは絶対嫌だ、なのでカイトの頭に水をドハドバとかけてやった。

「うああゝゝ、何をするんだユースケ……」

ユースケはカイトの口を塞いだ、ついでに鼻も、カイトが幾ら暴れてもビクともしないユースケ。やがてカイトは静かになった、ユースケは静かになったカイトを持ち上げて慌てた、気絶している。カイトの背と胸に手を当ててパコパコ、人口呼吸の真似事をした。

カイトは背中と胸の痛みで気が付いた「ぎゃあゝゝゝ」ユースケ俺を殺すきかあゝゝ「ゲホゲホッ」

外の騒ぎで皆が起き出して来た、全員物凄く不機嫌そうにだ。

「いったいこの騒ぎはなんだ、何か出たのか」

「ちがぁゝゝ、ユースケに殺されそうになったんだよ」

全員ユースケを見たが、別にユースケは困った風でなく。カイトを指さし、寝ている仕草、水を掛ける仕草、カイトが驚いて大声を上げようとしている仕草、自分がカイトの口を塞ぐ仕草、カイトが気絶したと言う仕草、背と胸に手を当てて呼吸をさせようとした仕草。そして両手を広げて頭を傾げた。

「ああ、大体分かった。要するにカイト、お前は不寝番なのに寝てしまった。それでユースケがお前の頭に水を掛けたら、お前が大声を出しそうになったので。口を塞いだらお前が呼吸困難になって気絶した、慌てたユースケは呼吸をさせようとしたら。お前は背中と胸の痛みで気が付いて騒いだと言う事だよな」

「成る程、団長、これはユースケに責任は無いですね」

「ああケイリス、全部不寝番と言う全員の安全を守ると言う任務と責任を放棄したカイトが悪い」

「おまけにユースケに殺されそうになったですって、飛んでもない思考の奴よね」

「ああそうだな、今までの信頼が無くなったと言う事だの」

「そんなあゝゝ・・・うつく」

「泣いてもその信頼は取り戻せないわよ、そうねえ、この罰はどうします」

「兎も角、今の仕事が終わるまでは保留にする、覚悟するんだなカイト」

ふと、ユースケの足元に小石が積み上げられているのを見つけたネイルが聞いた。

「ユースケ、その小石はどうしたの」

ユースケは森の方を指さし。

「なに・いる・石」そして投げる仕草をした。

「あゝ嫌、もうあたしって馬鹿だ、聞かなきゃよかった、絶対魔物か獣が転がって居るわよ」

「あれれっ、ユースケの奴嬉しそうだぜ、任務を全うしたと言う表

情だな」

「しかし、木に石が当たったら普通凄い音がするだろうにの」

「ビュージョさん、ユースケを普通の人に当て嵌められないわよ、周りの木程度の太さなんか音もさせないで貫通させているかもよ」

「はははっ、有り得て笑えんと言う事か、しかし賑やかな団だよ」

「そうだカイト、あんた明るくなったら見回って、良さげなの拾ってきな」

「ハイ、と返事をしたが、恨めしそうにユースケを見る」

ユースケはそんなカイトの視線を受けて、コリコリと頬を指で掻いている。

「あゝ、今から寝なおしたら起きられなくなるわ、一寸早いけど食事をして早めに出発しましょ」

「そうだな、ユースケは半分のおって半分走ると言う事に成りそうだし」

「所でケイリス、今って何時ころかな」

「ああ、もう四つは回っているぞ、もうじき明るくなってくる」

「まあ、今日中には平原にはたどり着けるな、さっさと片付けてベツドで寝たいよ」

「団長、そのギルドの支店に宿泊出来るの」

「ああ、十人位は泊まれるはずだ、話ではな」

「話かあー、余り当てにしない方が無難ね」

「俺は当てにしているぞ、奴隷狩りの連中の血が付いた服を洗いたいしな。魔法だけではどうにもならんよ、風呂にも入りてえーと言う気持ちもあるし」

「風呂かあー、里心がつくセリフねー」

早朝の騒動で早起きになった団は、朝食が終わってから森を散策した、ユースケの投げた石に当たって倒されたであろう物を拾いのだが。

結局、グーゴと言う、森林に住むトラに似た生き物の二つの死体と、グラーゼと言うクマに似た魔物の死体が一体。ビッセと言う夜行性の大型のサルに似た獣の死体六体を回収した、金額にすれば金貨十枚にはなるだろうと話している。どれも毛皮が珍しい物で高価で取引されるし、肉や骨、牙なども全て高額なのだと、良い取引材料だよとビュージョが話した。

「これってユースケのレベル上げの材料になるのかしら」

「ああもちろんだよ、悪くてもDにまで行けるな、ジャスラーガの頭数如何ではCも有り得るぞ。それにな、奴隷狩りの事もあるしの。団のレベルも上がって居るかもだ、獣族からもギルドには報告が行っているはずだしな」

「受けられる仕事のレベルが上がると、それに浮かれて無理をする事がある、団長として一番気を付けないとな」

「ご忠告ありがとうございます」

「うん、まあ頑張れ、良い人材も居るのだからな」

幕間

ユースケ、森の中で木づちを作る

未だ馬車の中の一行、貧乏冒険者の団の事なので。そろそろ全員尻が痛くなって来ている、だが森の中の事、中々休憩のタイミング取れない。

「所で団長、レイバラー ज्याの採集に何か良い作戦でも有るのですか。俺達には余り時間は無いですよね」

「それなんだよな、行けば必ず居るのだろうかとき、ここに来て言う科白じゃあ無い事は解って居るんだけどな」

「はい、今更それですか。俺としては団長の貴方がそう言う事は詳しいと思っ居たのですけどね」

「副団、ギャリクって見た目より馬鹿で頼りないのよ、だから貴方が頼りなの」

「はあ、ネイルさん、無駄に色気は振り撒かないでください。今はレイバラー ज्याの捕獲に付いて、団長を責めて居る最中ですから」

「ケイリスさん、文中可笑しいです」

あゝ、此奴らって。良くまあこれで、依頼をこなして来たよなとガツクリするケイリスだった。

「ビュージョさん、何か弱点とか、どんな所に居る確率が高いとか知りませんか」

「音と振動に弱いとは聞いた事が有るな、後は地面の穴の中で生活するとか。一番日の高い時間帯が、エサ取りの行動が活発だとかだな。レイバラージャは平均三モイル程体長がある、捕獲して入れる筒はギルドに有るはずだ。後はおぬしらの運しだいだの、まあ、わしはこやつの捕獲には立ち会う義務は無いからの、頑張れば」

「さいですか、ビュージョさんも嫌いだと言う事で了解しました。それで、何か事故で匹数余計に捕ってしまった場合はどうなるんですか。依頼を受けてからこんなこな事を言うのはなんなんですか」

「生きているのならば、酒造所で飼育するそうだ。死んでいるとか、怪我で死にそうとか言うのはそのまま買い取るが。乱獲だと嫌味の十は言われるだろうな」

ネイルがユースケに、レイバラージャに付いて身振り手振りで伝えているが、分かるのかなあ。

ん、此奴の弱点は・音・と、揺れる・ああ振動か。ユースケは馬車の窓から森の方に視線をやる「振動に弱いのなら何かで地面をぶっ叩くとか」・・・。

「あー駄目、ユースケ解らないみたいよ、そっぽ向かれたもの」

「ユースケは見た目通りに利口だ、何か考えて居るのかもな」

「え、プイッ・ですよプイ」

ユースケは動いている馬車から又飛び降りた、森の中に幹回り七モイルは有りそうな樹を見つけたからだ。

「おいカイト、馬車を止めろ、ユースケが森に入った」

「何をしに入ったんですかね」

「大剣を担いで行ったから樹でも切り倒すとか？」

「なんの為にですか」

「カイト、そう聞かれたからって、あの子の頭の中をなんて見れないのよ、質問多すぎ・・・うざいよ」

「へーい、ネイル姐御冷たいです」

「ふん、馬鹿いつてん・・・」

ドドーン、バリバリバの大音響を森の中に響かせて、一本の大本が倒れて行くのが見えた。

「ユースケったら一体全体何をする気なのかしら、運ぶにしたって大きすぎて無理よね」

「ネイル、そう気をもまずに待とう、ユースケが出てくるまで休憩だ」

「こんかいもユースケは分かった見たいだな、自分で解決策考えたみたいだぞ」

ユースケは、自分の身長の倍くらいの所から。樹を大剣で切断し始めた、切断面をほぼ平らにし。真ん中に穴を開けている、生木なので切断された物もかなりの重量だ。ユースケはそれを道路まで転が

してゆく、又森の中に入って行く、今度は先程の物より細く長いものを担いで森から出て来た。

「俺、なんとなく何を作ろうとしているのか分かったよ」

「人外だな」

「まじにそうですね」

「あれを担いで歩くユースケを見るって言う訳、気が変になりそう」

「言えるな」

「しかし考えたな、あれで地面を叩いて音と振動でレイバラー ज्याをおびき出そうと言うのか」

「えー、弱点でしょ。気絶するか逃げるでしょうが」

「ふむ、気絶したのが見つければ簡単に捕まえられる、振動で穴から飛び出てくるかも知れないぞカイト」

「ケイリスさん、前向きっすね」

「あれを見てから引っ込んで、しょうがないよ？」

「おう、完成したようじゃな」

「あれって全部生木だよなあー、あれを担いで振り回すってか、ネイルじゃないがこっちか錯覚おこしそうだぜ」

「自分も振り回せそうだとか？」

「勘弁してくれ、間違ってもそんな錯覚は起こしたくないぜ」

「団長、誰だってそう思うよ」

「よし休憩終わり、出るぞく・・」

「団長、元気ないです」

「あれを見て元気が出るか、」
「ひよい」
だぞ、そこいらの棒つきれ
でも担ぐみたい「ひよい」
だぞ」

レグレサム平原、巨大木づちの謎

「あっはっはっはっ、ユースケは器用だのう」

「まあ、笑えるっちゃ笑えますけどね、そこまでするかですよね
ケイリス副団長」

「ネイルさん、ケイリスでどうか。まあ俺達以外誰も見ていないから良いけど、誰かが見て居たらと思うと頭が痛いですよ」

「異常さしか目に映らんだろうからな、だが俺は少し慣れたぞ」

「そう言えるのは団長以外居ないでしょうよ、ねっ、ビュージョさん」

「なんだカイト、俺が異常だとも言いたいのか」

「違うくないでしょう、あんなのに慣れるなんて、あれを担げるだけで異常でしょうが」

「シジュールなものが見れる、遊戯団の見世物がただで見れると思えばいいと思うがの」

「成る程、それを言えるのは歳の功ですかね」

ユースケは、巨大な木づちを怪力で投げてはピョンと飛んで木づちと一緒に飛んで行くと言う。実にシジュールな事を繰り返している、そのたびに道路がドスンと揺れる、なんとも言えない光景だ。初めは四頭の馬も怯えていたが、慣れたらしく大人しく馬車を曳いてい

る。カイトは、団長って、獣並の感性なんだなと感心した、悪い意味で。

漸く森が途切れて平原が見えてきた、急いでレイバラージャを捕獲しないとならない。団長のギャリクは馬車の上からユースケに声をかけ、地面を叩く仕草をする。ユースケは大きく頷き、巨大な木づちを持ち上げて。ドン・たた・たた・ドンと叩いて様子をうかがい、又、ドン・たた・ドンと叩いては周りの様子を窺うと言う動作を繰り返している。ビュージョは腹を抱えて笑っているし、団長は天を仰ぎ見、ケイリスは項垂れ、カイトは大きな石に寄りかかって頭をイヤイヤと振っている。ネイルは草原に腹ばい、頭を抱えている。

団長のギャリクは、俺はギルドに行って入れ物を借りてくると逃げる様に馬車を走らせて行った。

「団長、俺は慣れたって言っていたのに、一番に逃げたよ」

「流石にねえ、あれを平常心では見れないわ」

「おっ、一匹捕まえた様だぞ、どうするのかなユースケは」

「え、嘘お、レイバラージャの口に石を入れ始めたよ」

ユースケは、振動に驚いて穴から這い出てきたレイバラージャを一匹捕まえた。だが入れ物が無いのに気が付いて、しばし思案。

「えーと、入れ物が無いな。んー・・・どうしようか、・・・ああそ

うだ、口から石を詰め込めばいいんだ。沢山詰め込めば石の重さで動けないし、牙の所にはでっかいのを噛ませて置けばかみつかれな
いだろうしな」

「成る程な、石の重みで動きを奪い、牙の所には大き目の石を噛ませて噛まれない様にしたって言う所だな」

「ビュージョさん、今まであんな事をして捕まえた冒険者って居ましたか」

「いやあ、初めて見たな、中々頭が良いぞユースケは」

「おっ、又捕まえましたよ」

「ネイルさん、案外早く終わりそうだな」

「ネイルで良いわよケイリス。それより、あの穴はどうするのか。あのままじゃ、この後来た誰かが落ちるわよ」

「レイバラージャの待ち伏せ穴に成ったりとか、ヤバくないですかね」

「カイト、それって有り得るかもよ、どうやって穴を埋めるかよね」

「おっ、三匹目だぞ、早い早い」

「ビュージョさん、どうでしょうねえ」

「おっ、二匹同時に捕まえたぞ、これで届けば依頼は終わりだ。あの穴の事もユースケの仕事だ、彼がなんとかするのが筋じゃから」

な、なんとかするだろうよ」

「そうね、後はジャスラーガの討伐だけよね」

「これには俺達も参加だ、馬車があるから群れを見つけるのは簡単だろう」

「そうであってくれるといいけどね、あの音で警戒されたらやりにくいかもよ」

「オーイ、未だやっているのか」ガラガラと馬車に乗ったギャリクが戻ってきた。

二匹を引き摺りながらと言うより、巻きつかれながら歩いて来るユースケ。筒を見て、レイバラージャ同士の頭をぶつけて気絶させて入れて行く。

「でかいなあ、五モイル、いや六モイルは有るかもだな」

「もう三匹はこれからか」

「いや、向こうに転がしてあるわよ。回収して筒に入れるだけ」

「姐さんあれを見て、レイバラージャの大群だぜ」

カイトが指さす方向には、レイバラージャが数十匹が鎌首を立ち上げてこちらを見ている。

「あの中に突入して回収するの、無理、無理無理」

「ユースケはどうする心算かの、ユースケの仕事だが」

ユースケは大群を見て、一寸首をかしげ、馬車の方に歩いてゆく。馬車から馬用の鞭を取り、パシッ、パシッと鳴らしながらレイブラー ज्याの大群に向かって走って行く。

「ほー、鞭で蹴散らす心算の様だの、ユースケは此处で力の加減を身に着けられれば良いが」

「そうよねえ、鞭で斬り飛ばすなんて真似はしないでほしいわ」

「そんな事をされたら嫌味だけでは済まんど、団の解散と追放なんて御免だ」

「神様に祈りましょう、それしか有りません団長」

「ケイリス、神様なんて信じているのか」

「これっぽっちも」

「でしょうね、俺だって神殿関係の家に生まれたけど信仰心なんてこれっぽっちも無いし」

レイブラー ज्याの大群に走って行ったユースケ、頭上でピュンピュン鞭を回し木づちに向かう。木づちの周りに居た数匹のレイブラー ज्याを、殺すことなく追い払うユースケ。

「確かに此奴ら音に弱かったよな」

そう呟いたユースケは、木づちを地面の石に打ちつけ回る、それ程高い音ではないが。音と振動で気絶してゆくレイバラージャ、ユースケは捕まえた奴だけが目的、生きたまま持って行けば金に成る等は知らない。まあ、大群を持ってこられても酒造所も困っただろうが。三匹を回収すると、今度は地面に転がる岩を持ち上げ穴を塞いでゆくと言う。力と体力を見せつけられたメンバーは、ぐったりとユースケの仕事が終わるのを待つのだった。馬車は「もう嫌」の、声を残しネイルが乗ってギルドに走らせて行った。

「ビュージョさん、生きているからと言って、流石にあれだけの数を持っていったら嫌がられますよねえ」

「それ以前に飼育は無理ですな、エサを確保するだけで大変な目に合うさ」

「しかしレイバラージャって、音と振動に弱いですね、これ程とは思わなかったですよ」

「何を言いますか、ユースケだから出来た事ですぞ。普通ならば、もう必死になって走り回らなければ捕らえる事等無理な話さ。ほれ、未だ気絶しておるわい、ジャスラーガ共が居なくて良かったわい」

「あら、レイバラージャってジャスラーガの餌になっているのですか」

「天敵じゃよ、群れで囲んでズタボロにし食い散らかすのだよ。だからジャスラーガの討伐が依頼されるのだがの、どちらも増えすぎでは困る奴らさ」

漸く気絶から目覚めたレイバラージャの大群、ヨロヨロと、本当にヨロヨロと散って行った。ユースケは、使える様になった言葉、風呂、メシーと吠えている。

巨大な木づちは、レグサレム平原の不思議として残された。巨人の忘れ物、魔人の落とし物とか言われ、一寸した名物となったのだが、冒険者赤い風の団の知る所ではない。

レグレムサ平原 ジャスラーガ討伐で猪突猛進 そして土下座

レイバラージャを規定数を捕まえたユースケに、銀貨五十枚と言うお金が入った。だがユースケは、その金額がこの世界ではどの程度なのか解らない。それ以前に、貨幣の種類が何種あるのかも知らないのだ。ユースケ自身、余りその事に拘っては居ないが、早く知る事はよい事だろう。

そう思っ居たケイリスは、ギルドの食堂に来て驚いた。食堂のメニューのありったけ？そんな感じでテーブルに並ぶ料理を見た。銀貨十枚は飛んだなど、・・・ユースケは既に酔っていて。自分達の知らないメロディーと知らない言葉で歌っている、中々元気の出そうなメロディーと良い声で歌っている。吟遊詩人でも食べて行けそうだなと思ったが、それを伝える手段はない。

「ユースケの奴出来上がって居るな、レベルはどうなったんだ」

「目出度く＋Dよ、それと明日の討伐次第ではあかし達の団も＋Cだっ。仕方ないわね、森の獲物はユースケ一人の仕事なもの」

「ケイリス、奴隷狩りの連中の討伐に報奨金が付いたぞ、金貨一枚としよぼいが、獣族と折半だからなく、仕方ないし。これは団の運営費に入れとけや、それからユースケが森で取った獲物にな、偉い金額が付いたぞお、金貨二十枚だ。それなんでユースケの奴、メニューの端から端まで注文してこの通りだ。折角だからごちに成って居るぜ」

「わしもごちになっているぞ、歳をとると遠慮がなくなっとう。所で、ジャスラーガの討伐が終わってからでよいのだが、ちよいと

皆に相談が有る。良いかな」

「ユースケが面白い、ですか」

「わっはっはっはっ、その通りだ、まあ今夜は楽しもう」

ユースケは、なにかすつきりと目が覚めた。確かに奴隷狩りの人間を殺した事実は消えないが、元居た世界とは倫理観も価値観も違う世界。元の世界のそう行つた物を引き摺れば、自己崩壊する事は確実。自分自身が身体も心も強くなければ、自分の思う事を正義と振り回すのは単なるピエロ。それに、正直そんな事が有ったからと言って、余り気にもしていない自分に気が付いた。

「うー・・・どう言うのかなあ、俺自身が心理的に、この世界の倫理観や価値観を理として受け入れたって言う事なのかな。まあいいや、辛くないって言う事が今は一番大切だし」

割とあっけらかんと受け入れる、そんな強さか柔軟さか、今はそれで良いのだろう。

「ユースケ、酔いは残っていないか」

言葉は解らずとも、氣遣う人達が居る、声を掛けて来る人がいる。

「ようユースケ、昨夜はごちになったな、今日は行けるか」

「おはようユースケ、歯を磨いた、昨夜は磨かないで寝たでしょ、駄目よ」

「ユースケおはよ、昨夜は食い過ぎて未だ腹がパンパンだぞ」

「ユースケ、ごちになったな、ありがとよ」

「おお、ユースケすっかりした顔だじゃな、今日も頑張れよ」

さて、今日も馬車を狩場に引いてゆく、そこで馬車の警護をビュージョさんに頼んだ。ネイルは弓をビュージョさんに迎撃用に置いて行ってくれ、ケイリスは槍を頼む。カイトはユースケを連れて、ギルドから天板付きの防御柵を借りて来い、馬を失いたくないからな。ユースケは、ネイルの装備がダガー一本に成ったのを見て。自分の左腰からショートソードを外し、ネイルに手渡した。

「あらー、こんな良い剣借りていいのかしら、あたしは風魔法があるから大丈夫よ」

「ネイル、金貨一枚分の剣だ、俺達冒険者が持つ剣では中々のものだぞ」

「魔法は接近戦に弱いからな、用心に借りて置け」

「ケイリスさん、金貨一枚分とはなんですか」

「イッガールの首根っこに突き刺さっていた、何か解らない金属の塊をユースケが剣と交換したんだ、その金属の塊に武器屋のおやじが付けた値段だ」

「へえ、それって異世界の金属だったりして？」

「うーん、その時は気が付かなかったが、そうだったのかもな」

「知らぬはアイーリアの女神様ってか」

半日かけて平原を走ったが、一頭のジャスラーガも見つからない。

「なあ、ケイリス。今夜はここで野宿でもするか」

「未だ少し時間が有ります、地図によると近くに泉が有るはずですからそこへ行きましょう」

「泉で待ち伏せか、余計な大物も寄って来そうだがな」

「ある意味仕方が無いでしょう、カイトも懲りて居るでしょうからね」

「じゃあお前と組ませるぞ」

「その心算で言いましたから」

「分かった、では頼むぞ、一度の失敗で仲間を失いたくないからな」

突然ジャスラーガ、ジャスラーガと、目に何かを当てて馬車の屋根上でユースケが騒いている。ユースケが指さすに方向に、ビュージョさんが馬車を走らせた。

姿が肉眼で見える頃、ユースケ以外に緊張が走った、数百は居るかと思えるジャスラーガの大群だった。突然ユースケが背中から大剣を降ろし、飛ぶ様にジャスラーガの大群に突撃して行った。

「おいおいユースケにはイッガールの呪いでも付いたのかよ、兎に角ユースケの援護だ、行くぞ」

すでにビュージョさんは、防護柵を馬の周りに張り、天板を乗せて弓を持ち立っている。

カイトがユースケに、ジャスラーガを百倒せば団のレベルが上がる
と数字と身振り手振りで教えた。ユースケは思った、言葉も文字も
解らず、この世界で彼らに出会わなければ俺は死んで居たかも。そ
の死んで居たかも知れない命、拾われた命だから無駄にはしないが、
拾ってくれた仲間の為にすべてを掛けて戦う。

走りながら剣先で石を砕き、ジャスラーガに向かって飛ばし、数を
減らしながら大群の中に飛び込んで行った。ユースケの周りで火の
魔法がはじける、風の魔法がジャスラーガを巻き上げて身体を刻ん
でゆく。気が付けばケイリスがユースケの背後近くに立ち、後方か
らの襲撃を防いでいる。それでも何時の間にか群れの圧力に押され、
馬車の近くまで押し下げられていた。だが群れの圧力もそれまで、
暫くにらみ合いが続いたが。

睨み合いも長続きはしなかった、ビュージョの放つ弓矢に群れが削
られてゆくと、徐々にジャスラーガの群れは下がって、やがて姿を
消していった。

「この馬鹿野郎」

群れの姿が完全に見えなくなった時、ユースケはギャリクに思いきり殴られた。ケイリスにも殴られた、カイトには尻を蹴飛ばされた。ネイルには剣の鞘で腹を叩かれた、そしてイツガールと指刺されてしまった。ビュージョさんは、強い目で睨んできた。

「あゝいてえゝ、きっと猪突猛進って言う事だったんだ。余計に心配掛けちゃったなゝ、そうだよなあゝ。言葉も解らないから、団の作戦も伝えられないし、かえってあんな風に飛び込んだら皆を危険に晒すよなあゝ。どうやって謝ろうか、やっぱりあの土下座かなあゝ」

「ギャリク団長、ユースケは聡い子じゃの、どうやらなんで殴られたか理解した様だぞ」

「まあ入団はこちらから願ったが、突撃馬鹿では俺達の命が幾らあっても足りないし」

「あゝあ、団長一寸強く殴り過ぎてない、泣きそうよユースケ」

「そう言うネイルは剣の鞘で思いっきり腹を抉って居たよな」

「あら、あたしはなんで怒っているかちゃんと伝えたわよ」

「それがイツガールですか、物凄く理解して落ち込んだじゃいましたよ」

「あゝ、困ったな。フォロー出来ないぞ、未だ言葉が解らないからな」

「大丈夫じゃ、そのうち地下手に座り込んで頭を下げるだろう、そ

の時笑ってやればよい」

「そうですね、何時までも怒っている態度で居たらどこかに消えてしまいうだい」

「今のうちジャスラーガの死体を回収しましょうか、皮を剥ぐのは明日にしましょう」

「罰にカワハギはユースケに・・・」

「あんたも一緒にだよカイト、それで許してあげるわ」

「ああそあだったな、うむ、それで許そう」

「ユースケに皮の剥ぎ方を教えてやれよ」

「さぼるんじゃねえぞカイト」

「はあ、ありがとうございます」

その夜、ユースケは皆の前で土下座をして謝った、何故かカイトも一緒に。

皮を剥ぐ

「ケイリス、どうだジャスラーガの死体の損傷具合は、大抵ズタボロでも買い取られるがな」

「風魔法で遣られたのは売れるでしょうけどね、焼かれちゃったのは尻尾の部分を斬るだけですな」

「焼けちゃったのはどの位有る、俺とカイトの仕事だけだな」

「全体の二三割かな、まあ、緊急避難の意味合いもあるから仕方が無いですよ」

「頭数は把握出来たのか」

「全部で千二百六十三頭だ、広範囲に探せばもっとだろうけどもう無理ですよ」

「ユースケが倒したものと思われるのが七百十二頭、矢で射られていたのが五十頭、残りが俺達の仕事です」

「なんでユースケがって判るんだ」

「石で遣られているのと、撲殺で遣られているのがユースケの仕事でしょう」

「そう言や剣を振り回して石を飛ばしていたからな、だが撲殺ってどう言うこった」

「剣の腹でボタンボタン叩きまくったんでしょよ」

「あの乱戦で器用な事を」

「ですね」

「それから団長、これっておかしくは無いですか。どうしてこれだけのジャスラーガが集まっていたのか、ですが」

「それは俺も気に成っていた、ビュージョさんを含んだギルド連中と、一寸会議をする必要があるな」

「そうですね、俺達の憶測で済む話ではないでしょうから」

「でっ、その憶測では俺達の団はレベルどんだけ上がってると思う」

「百頭以上で1レベルが上がると書いてありましたけど、まあ良くて＋B位でしょうよ。色々な奴を倒してとは違いますから」

「だろうな、ネイルの奴が言いそうだな」

「あんなにしんどい思いをしたのに、そんだけかよぉって、ですか」

「あはははっ、随分読める様になったな」

「ネイルさん」

「あ、あの。ビュージョさん、あたしの父親位のお歳ですよ。そんな方からさん付けは？」

「そうか？、ではネイル、ユースケが素直な子で良かったの。言葉が通じない同士だから、もう一悶着は有ると思って居たが肩透かしじゃった」

「んー、あたしは言葉が通じない同士だから、ある意味緊張感があるってうまく行っているかもって思ってます。まあ、素直な子とは思いますが、それ以上に気配りが過ぎる子・・・とね」

「ふむ、気配りが過ぎて暴走したか。頼れるのは仲間にしてくれた人達、だから何が何でも守る。恩義を返せる機会が有るならば、何時だって全力で・・・かの」

「そんな風に思ってるのかしら、過ぎた思われ方ね。あたしらは単に戦力になる、そう考えただけなのにさ」

「あの異世界からののが本当として、こちらには寄る辺も無い身だからな、ケイリス殿にの懐き様はそれを現しているだろう」

「本当ねー、あの目は雛が親鳥の動きを追っている感じだもの」

「わしはの、初めて会った時、あの子から王の気脈を感じた。それまでは、ただの怪力小僧としか聞いて居なかつたがな」

「はー、そうなんですかあー。まあ妙に安心感とか頼れるとか、偶に怖いとも思うけど」

「ふむ、その怖さが何で何処からくるのか。それが分かれば納得出

来る、か、じゃの」

「はあゝ、なんて言う数だ。やっと全部集めたと思えば皮剥ぎの仕事、当分筋肉痛だよなあゝ」

隣からは変な音が「ムリ、ジュポ、ムリ、ジュポ」ユースケが力に任せて、ジャスラーガを裸にひん剥くと言う作業をしている。カイトが一頭皮を剥いでいるうち、ユースケは十頭もと言うシニールな光景だ。

「やだやだ、って、いい加減慣れろよ俺」

カイトはぼやく事しきり、それはそうだろう。ユースケは、首の所へ指を突き刺し手を入れて一気に皮を剥ぐと言う、丸抜きしているのだから。刃物の傷は無いけど、それがかえって妙に生々しく、慣れているはずのカイトを精神的にいたぶっている感が無いでもない。

「どうだカイト、後どの位だ」

「ユースケが頑張って居るからね、思ったより早く終わりそうだよ。だけどあれは見たくないし聞きたくないって言う気持ちですよ」

ムリ、ジュポン、ムリ、ジュポン・・・「成る程な」

ケイリスも苦笑する、それにしても器用だよとも思う。皮は皮、中身は中身ときちんと分けて投げている。双方とも相当な量の山を作って居る、要らない有りは燃やすだけ、皮は引き渡すだけだが。全部を一台の馬車では無理がある。どうした物かと考えてはいるが。

「又ユースケに荷車作らせるか」ケイリスはボソツと呟いた。

「ビュージョさん、王都から誰かが来ますかね」

「只事ではないからの、誰かは来るだろうが、王都からとは言えんの」

「やっぱりなんでしょうが、例の屯所からじゃあ碌な報告書は上がらないでしょうに」

「王都には直接緊急でギルドから報告を上げている、あとは受け取った役人の度量だろうの」

「真面だったらどの辺りから来ますかね」

「んー、普通に真面だったら軍監部から参謀の二三人は来るだろうの」

「超真面だったら」

「戦略・戦術・諜報・魔術師団から副長クラスを誰かが引き連れて来るな」

「最低でも」

「諜報部の幹部が二三人だな」

「今隣国とはどうなんです」

「先日の奴隷狩りの連中を見れば一目両全だろう」

「出来れば超真面であって欲しいですよ、冒険者がいかに国に縛られない存在だからと言って。国が平和でなければ出来ない仕事ですから、俺はこの国が好きだし、出来れば他国へなんぞ流れたくは無いですよ」

「陛下は隣国の傲慢さに耐えて来ている、だが度を越した事が繰り返されればプツンだな。限界は来ているとの噂だ、そうなればわしも軍に戻らねばなるまいの」

「えっ、軍に未だ席が有るんですか、思っていたより若いんですね」

「ふふっ、軍に呼び戻されれば師団を率いる事に成るが、持たされるのは予備役の師団だろうの。現役師団とぶつかれば一発で崩壊じやよ」

「んふふふっ、そうは言っていますが、俺は中々腹黒い方と読んできますがね」

「買い被りじゃよ、ギルド勤めが長い、それだけ平和じゃったからの」

「団長、カイトが潰れました。ユースケは自分の分の仕事は終えましたので休ませています、後は俺達で片付けましょう」

「片付くのか」

「ええ、後二百は無いですから」

「そうか、ではさっさと片付けて一杯やりますか、ビュージョさん頼みます」

「ユースケには休憩後に馬車で皮を運ばせます」

「ケイリス、ユースケは馬車を扱えんだろう」

「ぷはははっ、馬はあいつですよ」

「成程、馬四頭より力が有るからな、適任じゃい、はっはははっ」

「皮を何処で保管するんだ、余計な倉庫は無かったはずだが」

「ギルドに戻れば分かりますよ」

「又ユースケ絡みか」

「ふふふっ」

「気味の悪い笑い方だな」

ギルドの周りには、ジャスラーガの皮がはためいている。地面に太い木が突き刺さり、蔦が木を繋いで皮が旗の様に風に揺れているのだ。ギルドの職員がげんなりした顔をしている、無理もない、生臭さが辺り一面漂っているのだから。

幕間 **ビュージョの入団顧問に就任めでたいな・・・ホントかよ**

「ビュージョさん、ギルドの本部からと王都から、早馬郵便で書状が届いてます」

「ああ、ありがとう」

ギルドからの書状は、ギルド退任の了承の書付だった。王都からの書状は、王室軍人管理官からの物だった。

軍籍一時離脱許可証及び最終階級認定書

ビュージョ・シ・ムース中将無領地子爵の軍籍一時離脱を承認する、但し退役は不許可

軍離脱最終軍籍階級は大将とし、国王軍務召集の際は指定軍団の指揮官として復帰の事

王室軍人管理官 公爵 ブ

ローバン・レト・ブンコンガ

「くそおー、ブンガブングアの癖に偉そうに」

「どうしたんですかビュージョさん、なんか面白そうな怒り方をしていますね」

「ケイリス殿か、王室軍人管理官の奴を罵倒していたんじゃないよ」

「王室軍人管理官、えゝゝビュージョさんは將軍だったんですか」

ビュージョは頭を抱えた、怒りで要らぬへまをしたと。

「あゝゝ貴族」

「ケイリス殿も貴族じゃろう」

「確かに生まれはそうですが、無領地の軍務男爵の五男坊です、そこらのガキより貧乏でしたよ」

「そうか、わしは一度も結婚をしなかったからな、子供はおらんよ」

「所でそれを見せて下さいませんか、將軍閣下」

「はあゝ、そう言う嫌味は言わんで良からうが」

「はい、見せて下さいゝまゝすゝよゝね」

洩々と書状を差し出すビュージョ、顔を顰めて天を仰ぐ。

「はあ、子爵で大将で軍団指揮官、なんでここに居るんですか、閣下」

「止めてくれ、書付一枚の事だ、それ以上は言うな。言ったら権限

振り回すぞ、君は悪くても大尉以上か中佐位だろう、参謀部に引張るからな、わし付の軍務秘書官でこき使ってやる」

「それは物凄く嫌ですよ、折角面白い奴らと出会ったんですから」

「わしとて同じだ、まあ、ユースケが面白い・・なのじゃが。それで頼みたい」

「冒険者、赤い風の団に入団したいとか・・ですか」

「察しが良くて助かるわい、まあ、この歳だから積極的に戦闘には加わらんが。自分の身は自分で守れる、食わせて飲ませてが有れば報奨金もいらん。相談役か顧問の待遇で同行をさせて欲しいのだが」

「ばれた時の言い訳は自分でして下さいね、ねっ、閣下。私を道連れ等とは思わないでください、よ」

「なんじゃ、その？よ？わ。分かった、ばれても君を秘書官に等とは考えん」

「本当ですよね・・・あー・・今一安心出来ませんね、一つ念書を頂けませんか」

「結構疑り深いのだな」

「ええ、お・か・げ・さまで、今まで碌でもない上官にしか出・会・い・ませんでしたから」

「わしは未だ君の上官には成っていないぞ、それと皆は君の軍籍の事は知っているのかね」

「まあ、退役したとは思って居るでしょうね、警備隊の総隊長から首って言われましたし」

「ふふふっ、それは弱みを掴んで言わせたのだろう、それが本当の君の仕事とは思っても寄らなかっただろうな。その馬鹿たれ総隊長は王都の地下監獄か」

「まあ、警備隊の機密も流していたようなので、今頃手足が有るかどうか」

「それは過ぎた事だ、わしの頼みはよいかね」

「ええ、偶に出る偉そうな科白には注意してくださいよ、閣下」

「と、言う訳で。ビュージョさんの顧問・相談役・知恵袋・呼び名はどうでも良いので、団長の俺としては団に居て欲しいと思う。反対意見があればドンドン言え、言ったからと報奨金の額をへらす等と言う暴挙は・・・せんでも無いので・・・ドンドン言え」

「馬鹿団長、それは何か言ったら？そうするぞ？って脅してんじやん」

「そうだ、ギャリクの団長降格の人事を提案します」

「えー、カイト、無理難題押し付けるのに便利な奴なのにですよ」

「なんだとネイル、それだけで俺を団長に据えたのか」

「あつたり前じゃん、団長なんて団員の為のパシリよ、ねカイト」

「姐さん、俺を巻き込まないでくれ」

「今更何よカイト、裏切る心算」

「あゝ分かった、なんでも良いから仲間割れは辞めろ。パシリで結構、お前ら二人からは、報奨金を団長権限で二割カットだ、パシリの俺がもう」

「「えゝゝ嘘おゝ」」

そこに突然ユースケが、二人を指さし。

「はかだしゝ」と、にっこりわらって叫んだ。

「あゝゝ馬鹿だしゝよねえ」

「えゝ、俺にもそう聞こえたあゝ」

「はっ、ははっ、違う事を言いたかったとかわゝゝゝないわあゝゝ超笑顔だしゝ」

「違うない嘘ないよ馬鹿もん」と、笑顔満開で又叫んだ。

タイミングの良いその言葉に「「わっはっはっはっはっ」「」ビュージョ、ケイリス、ギャリクの笑いが響く。

ユースケはただ暇だっただけ、そして言葉を拾って適当にくっつけ

て言っただけ。笑顔はおまけなのだが。

ネイルとカイトはがつくりと、Wパンチを味わっていた。

ユースケは、落ち込んだ二人を見て「んゝ、俺ってまずい言葉を拾ったのかなゝ」と思ったが。俺様王様えっへんなのだ、と、言う事で、三人と一緒に笑うのだった。

ビュージョの入団は決まった、ユースケはビュージョから軍事を学ぶ事に成るが。さて、この先どんな人物と出会うのか。

面倒くな、尻に帆かけて逃げようぜ

漸く全ての事が終わり、寛いだ日々を少し楽しもうと話していたが。

「さて諸君」

と、言う。ビュージョさんの声が響いた、ここはギルドの一室・・物置部屋とも言う。ギルドに会議をと言ったら、ここしかないと言われた。ならば寝室でも構わないだろうと思うかもしれないが、狭いのだよ。狭いベッドが二つ、互いになんか邪魔だよなと言いたくなる部屋の狭さなのだ。それで仕方なくなのだが、外は・・・今日は雨。

「聞いて欲しい事が有る」そうビュージョさん。

「あれ程のジャスラーガの大群が何故居たのか、の調査が多分王都から来るだろう。その大群の大半を殲滅した我々を、今きな臭い話が立ち上がっている王国の軍部が見逃す訳がない。確かに我々は冒険者で、国や地域の紛争には取り込まれないと言う不文律が保障されている。が、国はそれがどうしたと言うのは目に見えている。わしとしても、折角入団できたのにだ、そんな無作法な国の意向で諸君と離れ離れになるのは忍びないし残念だ。だが、愛国心の溢れる者も居るだろうと言う事で、そうになったら軍に加わり参戦したいと望む者は申し出て欲しい。あー、わしは歳なので安全な国外に退避させてもらうから。以上」

「あたしはパス、知らない奴に命令されるなんて絶対嫌よ。それに、ユースケを今更一人になんか出来ないわ」

「おれも嫌です、神への祈りの旗を持たせられて即戦死ですよ、剣も振らずにです」

「おれも御免だ、折角軍を退役出来て自由になったのにです。上官の良し悪しには関わらず、命令されるのは嫌ですね。俺もユースケの事は気懸りですし」

「あゝ・・・俺は一寸軍には戻れんな」

「はい、団長軍に居たの」

「あつ、あはははっ。まあなっ」

「あゝ分かった、上官のかみさんか娘にちよっかい出したんでしょ、で、指名手配」

「うわっ、俺どんだけよ。そんな事をしなくても結構俺は持てるぞ」

「「「知らん知らん」」」

「きりきり吐けい」

「あゝもう、分かったよ。実はな、くそ馬鹿少将を半殺しにして逃げたんだよ」

「「「あゝ、あれの犯人は団長だったのか」」とビュージョとケイリスは思い出した。」

「でっ、一応俺は脱走兵な」

「嘘つけ中佐だろ」とビュージョとケイリス。

「冒険者に成ったから追手が来なかった訳よ」

「嘘だよ、不正の証拠を山ほど置いてただろうが、その為伯爵家は取り潰しになったぞ、面白いから教えないけど」そう心の中で二人は呟いた。

「あつ、そう言えば大佐に昇任してそのまま退役の扱いになったよな・・・間抜けだ」

「では全員さっさとここから撤退だな、団長どこがいいかの」

「ビュージョさん、海の有る方へ行こうか、カイトは海を見たことが無いそうだし」

「賛成ー、おさかな美味しいし」

「団長ありがとう」

「団長あいがとう」

「はい、ははははっ。ユースケも海がいーらしいぞ」

「よし、善は急げと言う科白も有る、今すぐ発とう」

「あゝ、おれの場合は・・・」

「尻に帆かけてでしよ」

「ダンチョードロボー」

「ぶっ、誰だユースケにそんな事を教えたのは」

「そんなの姐御に決まってるし」

「カイト余計な事を言うんじゃないわよ」

「ほほお、ネイルはあれを根に持って居る訳か。反省が足りん、もう一割減額だ」

「ネイル、ヒンボー」

「ぶあっはっはっはっ、タイミングの良い子じゃよ」

「あゝもう、ユースケってばうまく話せないけど殆ど解って居る見たいよ」

「おいおいマジかよ、未だ十日目だろう」

「それだけ必死と言う事だろうの」

そんなこんなで、夜逃げの様に立出た冒険者赤い風の団だった。

「公爵、ビュージョに逃げられたな。それだけではない、少佐一人、大佐一人にもだ」

「殿下、逃げ足の速い連中で」

「笑うな、良き人材に見捨てられたように辛いぞ」

「四日位は大人しくしていると思ったのですが、甘かったと言う事ですな」

「実に危機を察するのが早い」

「公爵、褒めてどうする」

「殿下、追わせましょうか」

「無駄だ、追いついても素直に従う骨なしではない」

「それより、奴隷狩りの奴らとジャスラーガとの関連は目星が付いたか」

そこに一人の男が跪いて、何かを殿下と呼ばれていた人物に差し出した。

「ふむ、直答を許す。これはなんだ」

「はっ、ジャスラーガを操る笛にございます、人には聞こえぬ音を発すると」

「どこで手に入れた」

「獣族の集落でございます、姫巫女候補の少女が持っていた物です。奴隷狩りの者共に追われていた時に、助けてくれた冒険者の一人に斬られた者が持って居たとの事です」

「どう思う」

「殿下、これ一つとは考えられませんな、未だあちらこちらからジヤスラーガを集めているやも知れませんぞ」

「ふむ、その方、何人動かせる」

「はっ、三百は確実に」

「ではこれを持って居る者共の始末は任せる、良いな」

「御意に」

「馬鹿王が、小細工をすればするほど戦の準備は整う、待ち伏せて狩り倒し一気に攻めて倒す」

「陛下を煽って戦をこちらから仕掛けさせたい様ですが、見え見え過ぎて反吐か出そうだ」

「脱走兵の団長を追う追手は居ないみたいね」

「いやいや、逃げるタイミングが早かったからの、諦めたのじゃろうよ」

「ユースケって泳げるのかな、俺は泳げないんだよな、泳げるなら教えて欲しい」

「ああ大丈夫泳げるみたい、それに泳ぐのにも泳ぐ型が何種類かある見たいよ」

「へー、楽しみだなあ」

とつと逃げ出した、冒険者赤い風の団は、のんびりと海に思いを向けていた。

幕間 殿下と木づちと一般兵昇進す

今日のレグレサム平原の空は青空だった、等と作者の自分は書いて
いるけれど。殿下と呼ばれる男はそれ所では無い、馬に乗ったまま
ある物の前で困惑の表情だ。これはなんだ、形の同じ物を見た事は
有るが、この巨大なこれが同じ物のはずはない。その巨大な物の陰
から、一般兵が一人ヒョコツと顔を出した。

殿下と言う男と目が合った一般兵は、ギョツとした表情をして又陰
に隠れた。無礼な兵だ、一寸苛めてやろうか。そう思った殿下は、
陰に隠れた兵に声を掛けた。

「その大きな物の陰に居る兵よ、私の前に出る」

「はっ」そう応答をして殿下に敬礼をした「王太子殿下警護大隊、
第一中隊第三抜剣小隊十五番兵で有ります」そう申告をした。

「その方、名前は無いのか」

「申し上げます、兵には名前など要らぬとの大隊長命令で、名乗り
を厳禁とされております」

「なに。公爵、大隊長は誰だ」

「はい、確か、レーノード伯爵の弟でゾリロ中佐ではなかったかと」

「伝令、大隊長のゾリロ中佐をここに」

「はっ」

殿下は十五番と名乗った「？」兵に声をかけ聞いてみた。

「十五番兵、この巨大な物はなんだと思うか」

「はっ、間違いなく木づちであります」

「ほう、このような物を振れる者がこの世に居ると」

「はっ、魔法か怪力の者が居りますれば」

「魔法は兎も角、怪力とはなんだ、そんな者が居ると」

「はっ、自分の弟は、エーダリ国との国警備隊に勤務しております。その弟からの手紙に、怪力少年の事が有りました。その少年は、通常の五倍は有るイッガールを、三十モイルの距離を一人で投げたとありました。弟は兄の自分には決して嘘は言いません」

「公爵、エーダリ国との国境はそう遠くは無いな。視察を兼ねて話を聞きに行こうか」

「その前に殿下、その者にどうして疑いもなくそう答えたかもう一度聞きましょう」

「ふむ。十五番兵よ、その証拠は有るか」

「はっ、ございます。平原の中央に向かって、大きな石が規則正しく並んでおりますが。石の下を見れば、この木づち程の穴が開いております。石は、穴を塞ぐ為に置かれた物であり。穴は木づちを打ち付けて出来た穴、故にこれは木づちと申し上げました」

「成る程。所で話は変わるが、名前でなく、常日頃から番号で呼ばれる事をどう思っている」

そう訊ねられた十五番兵は、じつと殿下の目を見つめて答えた。「命を捨ててまで殿下をお守りしとうはございませぬ」

「分かった、下がって良いぞ」

「はっ、王太子殿下警護大隊、第一中隊第三抜剣小隊十五番兵は王太子殿下の前から下がります」

「中々気骨のある兵よの、だが大隊長は屑だな、名前も言いたくは無いわ」

「然様ですな。ふむ、殿下、あの十五番兵の身上書をご覧いたしますか。中々の兵ですな、剣は士官を含む大隊総隊で一番、馬術も三番と、槍は師団優勝者、魔術は風に火に土。これが兵とはのう」

殿下は引っ手繰る様に公爵の手から身上書を取ると、唸った、あの馬鹿者が。平民故のあの扱いか、王国危急の事態に有るをなんと心得るか。ギリギリと湧き上がる怒気を脹れあがらせる王太子に、公爵は言った。

「殿下、私を含め貴族共の大半は大隊長の様な者共にございます、短気を召されてはなりませんぞ」

「大隊長の首位は良いだろう、んっ、公爵」

「任命権者は殿下で有りますれば」

「申しあげます、王太子警護大隊長子爵　ゾリロ中佐が御前に参りました」

「通せ」

「はっ」

「ゾリロ中佐、王太子の命により参りました」

「ふむ、その方何時から子爵に成ったのか」

「私の実家は伯爵にございます、伯爵家の出の私は軍務に付きます場合、一つ下の爵位を名乗る事を許される慣例が御座りますれば」

「その方、一般兵に剣で負けているそうなの、どういう事だ」

「私は指揮官で有ります、確かにそれ相当の武を持つ必要は御座りますが、最前線で戦う事等有り得ませぬ故、負けても恥じる事では御座りませぬ」

「なる程のう、では一般兵を番号で呼ぶはいかなる事かな」

「命令をするは私一人、兵や下士官、下級将校に名等不必要かと」

「ほう、下級将校まで番号との、ではその方は大隊長の責務をも持ちながら。あちらこちらの中隊に所属する小隊の将校・下士官・兵を一人で動かしているのか、神の如くの様な働きよの」

「王太子、中隊には中隊長が居ります、小隊には小隊長が居ります」

「ふむ、それは可笑しいではないか。指揮権が中隊長小隊長にあるならば、何も番号などつけなくとも良からう。その方は指揮する為に、名前の代わりに番号を付けたのであろうが。おおそうだった、その方の大隊に公爵の愛妾が生んだ子が勤務して居ったな、やはり番号で呼んで居るのか。それは不敬ぞ、その方の言を借りればだがその子は侯爵ぞ、親の公爵は何も言わぬが。私は不快に思う、王家の血筋に不敬なる者ぞ。憲兵は居るか」

「はっ、此処に」

「うむ、この大隊長を王家に対する不敬と、公爵家に対する不敬が有った。故に王家の権利をもって捕縛命ずる、証人は」

「はっ、大隊付き参謀、大尉パリス・キックラー。第一中隊長、大尉シレイリー・アウエ。参謀付き当番下士官兵三十二番、同当番兵百二番以上であります」

「王太子殿下に申し上げます、軍警務隊が大隊長に対し逮捕状を持ち逮捕の許可を求めています」

「その内容をこの者に聞かせよ」

「はっ、一般兵に対する侮辱罪・下士官に対する侮辱罪・将校に対する侮辱罪・軍務に服務する貴族に対する侮辱罪・軍務服務規程違反・指揮権濫用罪・軍令受領違反・賞受賞者に対する侮辱罪・賞略取罪・賞品略取罪・賞金略取罪・兵下士官給与奪取罪・王国軍官給品略取横領罪・贈収賄罪・公文書無断破棄罪で有ります」

「王国の軍警務隊は良い仕事をする、舌など噛まぬよう猿轡でもし

て連れて行け」

「殿下何か都合よく話が進む気がいたしますが」

「どうせ作者が好き勝手に出鱈目書いているのだらうよ、気にするな」

「殿下、してあの木づちの兵はどうしますかな、平民出とは言いながら実にもったいない人材ですが」

「教育歴はどの様か」

「商業学校高等科を卒業と有りますな」

「武があれ程あつて計算が出来るか、公爵はどの様に思うか」

「それはそこに居る参謀に聞けばよろしいかと、本職で有りますかな」

「キックラー大尉、どう思うか」

「出来れば上官に欲しいと思います」

「アウエ大尉、どう思うか」

「私の代わりに中隊を任せたくあります、そして私を副官に任じていただければ幸いです」

「笑えるのう公爵、一般兵から突然中隊長だぞ、勤まると思うか」

「補佐する者が優秀で有れば楽に」

「成る程、大隊副官を大隊長に、キックラー大尉を大隊副官に、アウエ大尉を大隊参謀に。あー、彼の名前を知らないな、十五番兵を第一中隊長に、階級は大尉だ後の中隊人事は彼に任せよう」

突然王太子に呼び出された十五番兵、そして突然告げられて始まった昇進と中隊長任命式に驚く風もなく淡々と受けて行く彼には。実際の所、王太子の方が驚いた。

「申告、王太子警護大隊第一中隊第三抜剣小隊十五番兵は、本日付で第一中隊中隊長大尉オノル・クッシャーとして任に当たる事を報告いたします」

「うむ、頑張ってくれたまえ木づち君」

「はあ、王太子殿下は木づちにでも頭を殴られましたか」

「クッシャー大尉、それは木づちに頭をぶつけたかとか聞くのか正しいのではないか」

「いえいえ、王太子殿下は木づちにでも殴られなければ、一般兵だった自分を突然大尉とか中隊長に等に任命されないでしょう」

「ふふふっ、私は平民と言う、大きな木づちに殴られたな。心地よい痛みで有った、下がって良いぞ」

「「「はっ」」」

幕間 木づち君と呼ばれた男

俺はオノル・フィッシャー大尉、二十六歳で王太子警護大隊第一中隊長である。今、中隊将校用野営幕舎の中に居る、盛大なため息とともに。目の前にはニヤニヤと笑う、元上官の中隊将校達。これから中隊副官と中隊先任曹長を選び、その後小隊長に小隊付き下士官を指名・・・のはずなんだけど。面倒だよ、なのでニヤニヤ笑う此奴らに丸投げ。

「あゝ、突然一般兵から大尉に成ってしかも中隊長。なので新たに中隊の編成をと命じられているが、中隊付き将校は俺が指名する。残りは小隊長と言う事で、小隊付きの下士官は自分で指名して欲しい。面倒臭いので、細かい事は言わないが。己の分と武を知った上で小隊を組むように、終わったら報告の事以上解散」

王太子殿下から、木づちに対する所見を述べよ「多分」と言われて答え、他の事にも一寸だけ答えた。

そして。

王太子殿下の命で突然呼び出され「あゝ殿下も腐って居るなら不敬罪で処刑だあゝ」って、覚悟をして「本当だよ」そこ、疑わないの。殿下の前に立てば、番号で呼ばれる一般兵を突然大尉に昇進と中隊長と言う重責を・・・何を考えて居るんだ殿下は。そう内心思い無理無理って喚いていたが、木づち君って・・・なんだあゝ?。

前大隊長も、貴族って言うだけで、ただ威張るだけの目茶目茶な馬鹿者だったけど殿下も?。当たり前前に、そう思っても不思議じゃな

いよね。中隊を指揮する運用術や戦闘戦術、知らん知らん・それ以前に将校教育すら受けてねえしって言うのに。ああ、王国の未来はマジパネヤバ。でも、貰う物も貰わずに、とんずらすんのも業腹。

昇進に伴う任命式が終わり、中隊に戻った俺に。つい先程まで上官だった者は勿論、同僚達も絶句していたがその後ニヤニヤと。そりゃそうだよなあ、猫の子が虎でしたって言うより驚くさで、なんでニヤニヤする。

王都近郊の商家の男七人女二人の兄弟で、六番目で生まれた。商家と言えど、戦えなければどうにもならないこの世界。商売が成功すればなおさら狙われる、盗賊や野盗に山賊、おまけに獣に魔物。だから俺は、商売の事より先に戦い方から教わった。自分で独立出来る様に商業学校へ、と進んだが、人生そんなに甘くない、卒業と同時に王国軍へ徴兵されちゃったぜ。

半端に強かった剣と槍、魔術は風と土で馬にも乗れると言う事で騎馬兵に。大会に出て良い成績を収めたら王太子警護大隊へ、除隊不許可の特典付きだとか。平民の商家の出だから一般兵のまま八年、嫁ももらえんじやんか。実際大隊長に給与の大半をピンハネされているし、マジ殺してえ。その上、番号でよばれるっちゃなんじゃあ。だし。呑気そうで偉そうな王太子の顔を見たらフツフツと、名前でなく番号で呼ばれる気分はどうだと言いやがるし。でっ、正直に「命を捨ててまで王太子殿下をお守りしたいとは思いませんと答えた」あゝ・マジ俺死んだな、ふう、花輪付きの死亡フラグが追いかけて来るぜえ。

って、呼び出し喰らったよ、王太子殿下に。・・・手打ちじゃあゝ
ってか？、ドナドナ子ヤギの気分で・・・大尉ってどうよ。あゝ・・・
やっと嫁をゝゝって、俺そんな女いねゝゝ。くっそおゝゝ
若さをかえせゝゝ、はあはあはあゝ・落ち着こう。いやいやいやこ
の勢いで自棄になれ、殿下に嫁よこせって交渉しよう、うんそれが
良い。嫁は女の形をしていればいい、贅沢は言わないぜ、マジ謙虚
だってばよゝ。

木づち君が走ってくる、そして突然「嫁を下さい」だと。公爵にな
んの事だと、公爵は肩をすくめてきたな。仕方が無いから木づち君
に聞いた、我ながら良い王太子だな、その答えは。

「自分は王国軍に徴兵され八年、給与はピンハネされ、除隊もまま
ならず。真面に女と付き合えませんでした、これは王太子殿下の責
任でも有ります」

なんだと、なんで木づち君に女が出来ない責任まで派生する？。い
いや八年か、そりゃただの兵隊で八年は長いわゝ。いやいや私の
王太子歴二十八年も長いぞ、代わって欲しいものだな。

「でっ、どうしろと」

「はっ、王太子殿下の元に湧いてくる女を一人下さい。二人はいり
ませんから」

なんかこの木づち君無礼じゃないか、私の周りに湧く女、虫かい。

はあゝ、木づちくんは解って居るのか、私の周りに湧く女は貴族虫の雌だぞ。香水の匂いがプンプンの虫だぞ、臭いぞ・知っているのかい。

「んゝ、分けてやらんでもないな、しかし満足させられるか」

「はっ、自分は体力には自信があります」

「そう言う問題ではないのだよ、木づち君」

「王太子殿下、自分の名前はオノルで有ります、もうお忘れですか・ボケ早くね？」

「そこ、無礼だぞ、一番酷い女をくれてやる」

「はっ、ありがたく頂戴いたします」

「あゝ・二人とも、彼女らは虫ではないですぞ。それより殿下一番酷い女って誰ですか」

「ハンパック侯爵の娘、ムイナーナ嬢だ。化粧は濃い故素顔が想像できんし、香水は反吐がでそうな位きついし、性格悪いし。あああああゝゝゝゝ良い所が全然見えん、木づち君に押し付けよう決定」

「はい、殿下。彼女が良しとしますかな」

「公爵、私の命令だ」

「しかし、彼女は婿取りのはずですが」

「なんで婿取りの娘が私の所に来る」

「はあ、それは謎ですな、女心は解りません」

「よし、木づち君。王都に帰ったら貴様の結婚式だ、入り婿でも嫁にでも好きにしてよいぞ」

「うおおお、よっしやあゝゝゝ。嫁だ嫁だあゝとつたどおおおゝゝ」

「公爵、あれで良いのか、あれが普通なのか」

「殿下、彼と彼女の全てに責任を負いましたな」

「なんでそうなる」

「確かに嫁を呉れと来たのは彼ですが、押し付け決定とは命令です、彼女にも同じ命令をですよ。そうなれば彼に爵位を与えないと、侯爵家が黙ってはおりませんでしょうな。殿下は彼の乗りに乗せられたと言う事でしょうな、それから爵位は子爵以下は有りませんぞ」

「んんんんんゝゝゝゝ、恐るべし木づち君」

ユースケの子分はクマ男、臣下に格上げ・・・？

夜逃げの様に「ヤバイぜえ」と、逃げ出した冒険者赤い風の団。あれから二日経った、今農場脇の道路を馬車に乗り走っている。しかし、その道路上にでっかい麦刈り用の鎌を持った大男が立っている、なんだあゝ彼奴わゝと言う事で警戒態勢を取ったのだが。

「もうゝし、止まってくれえゝ」そう叫んでいる。

近くで見ると、大男のビュージョよりも横にも縦にもさらにでかい熊系獣人の男だった。ユースケは目を真ん丸にして、熊だあゝ、熊が出たあゝと騒いている。ユースケの言葉の進歩は著しく改善し、簡単な日常会話には困らなくなっている。そしてそのユースケは、丸腰で馬車から飛び降り熊系獣人の前に立った。

「熊さん熊さん相撲を取ろう」

なんて呑気な、と、全員思っ居るが。相撲と言う、その格闘技に似た遊びにはまったのは男達。書かれた丸い線から出たら負け、手足や身体が土に付いたら負け。目つぶし急所蹴りと、拳で殴る蹴り飛ばしは禁止の一見単純な決まり事だが、奥が深いと嵌まってしまったのだ。もちろん全勝しているのはユースケ一人、男達は全員片手でひよいひよと投げられている。そしてユースケから、受け身と言う物を教わったのもこの相撲が切っ掛けだった。どう見ても格闘技や武術には縁遠く見えるユースケだが、どうやら小さい子供の頃に教わったのを身体が覚えていたらしい。

ビュージョさんが、苦笑をしながら馬車から降りて。熊系獣人の大男に言った、これから言う決まり事のある遊びに「この子から勝っ

たれば話を聞こうか、ただその話が我々に余りに不利な話では聞けないがな」そう意地悪そうに笑って言う。

俺は農場に雇われている農夫、熊系獣人で名前はムロ・マンナーナと言う。農場が有るここは、もう三日も雨が続き、農場主の旦那は物凄く不機嫌だ。麦の刈り入れが大幅に遅れて居るからだ、雇われ農民の俺にはどうする事も出来ない。相手は天気だし、農場主も分かつては居るのだが、イライラは収まらない。どうにか今日は晴れたが、三日の遅れは取り戻せない。

「ムロ、道路脇の麦を刈りながらだが。冒険者か傭兵が通ったら、麦刈りの手伝いに雇って仕事をさせる。仕事のランクなんて関係ない、緊急事態だからギルドには後で罰金をはらうから構わない。そうでもない」と領主様に税を納められん、背に腹は代えられないと言う事だ。頼んだぞ一日銀貨十枚と、出来高払いと伝えろ」

ハッキリ言って旦那はケチだ、そんな金額じゃあ駆け出しの奴だっ
て嫌だと言うだろうに。それを俺に言わせる理由が有る、熊系の獣
人の俺の体のでかさだ。それでビビらせて仕事をさせ様と言う、な
んともセコイ話なのだが。やっと通りかかった馬車、馬車が有るな
ら都合がいい。顔が見えるのは六人、大体そんな物だろう。そのう
ち丸腰らしい少年が、馬車から飛び降りて駆け寄ってくる。

「熊さん熊さん相撲を取ろう」

まあ、熊系獣人だから間違いはないが、俺を怖くは無いのかこの子
は。それに相撲とはなんだ、聞いた事が無いぞ。馬車から苦笑らし
い笑みを浮かべた初老の男が降りてきた、人族にしては大男と言え

るだろうが、生憎俺は熊族の獣人だ、どうと言う事も無い。その人族の男が言った、これから言う決まり事のある遊びに。

「この子から勝ったならば話を聞こうか、ただその話が我々に余りに不利な話では聞けないがな」

そう麦畑をチラリと見て意地悪そうに笑って言う。さらに子供と侮ったら酷い目に合うぞ、とも。うーん、どうみても力のある獣族にも見えないが。その決まり事を聞いて、かつ他の男達が相撲を見せてくれた。この子供に負けるとは思えない、楽勝だな。子供が言ってきた。

「お前勝つ、俺しことする。お前負ける何する」

あー、俺が勝ったら仕事を手伝うが、俺が負けたら何をするのか、か。負ける懸念は何一つ無いが、負けたらって、うーん。子供が又言ってきた。

「お前負ける、お前俺こふんだ」

はい、なんですかそれは。キョトンとしている俺に、大男の人族が言った、お前が負けたら俺の子分に成れてさ。首を竦めて、馬車が狭くなるなあ、だと、俺が負けると決め付けるのか。突然子供が馬車の方に行った、大きな剣を片手で振り回しながら戻ってくる。きつと玩具なんだろう、と思ったら投げてきた。

ドン、ジャリつと下の石が砕けた音がした。子供が大剣を指さし。

「お前持てるか」

「ああ、お前が持てる位だ軽い物さ」

そう言ったら、子供の仲間達がゲラゲラ笑う、なんでだ。俺は大剣の柄を両手で握り持ち上げようとした、ズンツと来る重量・・嘘だろう。あの子供は片手で振り回していたぞ、俺は全身に力を込め、持ち上げる。大剣を垂直に立てる等無理だ、なんと言う子供だ、俺は恐怖で全身の毛が立ち上がる思いをした。子供は俺の手から大剣を取ると、まるで重量など無いかの様に片手でピュンピュンと振り回して見せた。

「お前みかけたけな」

そう言うのと馬車に大剣を持って行ったが、馬車を曳く馬は嫌そうな表情だった。その気持ち、分かる気がしたのは間違いないだろう。

「良かったな、あの子の力を見れて。あのまま勝負したら、最悪お前は殺されていたな」

人族の大男が行った言葉、真実だろう。良くてもあちこちの骨が折れて、仕事が出来なくなり飢え死にだろうな。だが熊系獣族の誇りが有る、戦わずに敗北を発するのは誇りが許さない。

「兎に角相撲はしよう、何もせずに負けたと言うのは誇りが許さない」

「ユースケ勝負だ」

そう言われた子供はにっこり笑った、構えた、合図で立った。当たったなと思った瞬間、ふわっと身体が浮いて、気が付けば俺はジタバタと飛んでいた。

「うわゝ、何処に投げたんだあゝ」

ズボツ、ムガムガムガと暴れていると、どうやら麦わらの中の様だ。漸く脱出すると、なんと言う事だよ。五十モイルは投げ飛ばされた様だぞ、呆然自失とはこの事だ。あつ、有り得ねえゝと叫んでいる自分が居た。

そして有り得ない事をしている子供が一人、俺の鎌を振り回し麦畑を走り回っている。麦は飛び散る事無く、パタパタと倒れて行くと言うシュールな世界に成っている。

「ねえ君、あの子が下僕の仕事は主の仕事とか言って走り回っているわ。どうやら君は、あの子の認識としては下僕ね。子分から転げ落ちた見たいよ」

そう、子供の仲間の女性が言ってきた。俺は走り出した。

「待ってくれえゝ、下僕は嫌だあゝ、子分で止めてくれえゝ」と。

げんなりした表情で子供の麦刈りを見ていた男達が、俺の叫び声にゲラゲラと爆笑している。麦刈りはこの日で終了した、殆ど全部子供が刈り取ってしまったのだ。夕方様子を見に来た牧場主が驚愕している、後は馬車で運ばばよいだけだが。

「旦那、俺は今日で牧場を辞める。俺に主が出来た、だから付いて行くことにしたんだ」

「なんだと、この麦はどうするんだ」

「明日ギルドで人を集めればいい、それと彼らの賃金を払って呉れ。人数分の賃金と出来高払いだから金貨五枚と銀貨六十七枚だ・・・」
そう言っ居たら、俺の鎌が飛んできた。来い来いと呼んでいる。

「旦那、彼らは冒険者だ、農場の仕事をこれ以上するのを良しとはしていない。さっさと金を支払わないと、どんな目に合わされるかわかりませんよ。あそこからここまで、俺の鎌を飛ばすほどの実力だからな」

「わ、分かった。だがお前に辞められたら俺が困る」

「そうは言いますが、俺もこんな安い賃金で働くのはもう御免だ。俺はこれから、冒険者で働いて自分の農場を持つさ」

さっさとしろ、何時までももたもたしていたら麦を焼いてしまうぞお、の声に。

旦那は慌てて俺への賃金と合わせて、金貨七枚と銀貨八十七枚を渡してきた。

「旦那、余りケチると人は集まりませんよと声をかけ馬車に走って行った。もちろん鎌は俺の武器、持って行くのは当たり前だ」

住んでいた農場の長屋に立ち寄り、最低限の荷物を持ち出し。同じ農場で働いているが、別の仕事をしている隣に声を掛け。俺が去る事を伝え、部屋にあるのこった物は自由にしていよと言う事も伝えた。農場で四年暮らした、何程の良い思い出は無い。

馬車に戻ると改めて自己紹介をした。

ムロ・マンナーナ 年齢 二十七歳

武器・麦刈り用大鎌 魔法 土 水

悩み・乗れる馬が居ない

ユースケとの話し合いで子分から臣下に 臣下と子分のやる事の違
いを聞かれて、気分の問題ですと言ったら皆に爆笑された。あゝ、
なんか・・・間違えたかな？。

ユースケの覚醒

ユースはドンドン言葉を覚えた、とは言えそれほど流暢に会話が出来る訳ではない。ユースケが今興味があるのは魔法だ、ユースケを観察していると、確かに魔力は感じる。だが、俺達では他人の魔力は感じてもどの位有るかまでは解らない。今度行く街は、最初にユースケ達が居た街の十倍は有る。従ってギルドも大きい、そこには魔力とどんな魔法が使えるかを調べる魔具が有るらしい。

火・水・風・雷・土・の中の最低一つ、使えても三つまでが普通に誰でも使える。魔力量には大きく個人差はあるが、戦闘に使えると言うのはある意味恵まれている。たった一つの魔法しか使えなくとも、魔力量が多ければ国へ招かれる事も有る。反面三つも使えても、魔力量が少なければ冒険者や傭兵などにも成れない。

光・黒・白・も有るが、使える者は超珍しいと驚かれるがそれだけである。ある意味それは、発想が貧困なのではとユースケに一蹴される事に成るが。今ユースケはネイルに、風魔法使って見せてとねだっている。ネイルは仕方なしに風魔法を適当に飛ばし、木立の枝を斬り落としている。だが肝心のユースケは斬り飛ばされた木の枝には目もくれず。ネイルの口元に目を集中している、そしてしきりに小首を傾げて不思議そうな表情。そして突然、ユースケが外に向かって何かを言った。

「鎌鼬千発」

突然木立はバサバサと音を立てて消えた、果てしなく見通しが良くなってしまった。

「なっ、ユースケ魔法を使っただの」

馬車を止めて呆氣にられる仲間達、細切れにされた木が散乱する道が一本、ずうっと向こうまで。

「どうしたんだネイル、あれはお前がやったのか」

「団長冗談じゃないよ、あたしにこんな真似できるはず無いじゃない」

「じゃあ誰だ」

「ネイルはユースケを指さした」

「「「「はあっ」「」「」」」

「ねえユースケ、もう一度何かやって」

ユースケは分かったらしく頷く、今度は反対側に向かって。

「雷万弾」

ユースケは手を振り降ろした。

目も眩む様に閃光が走り、すさまじい轟音が鳴り響き地面が激しく揺れる。

「なんじゃこれわああ~~~~~」

ユースケが手を振り降ろした方向は、落雷の為に業火の海だった。

樹が燻ぶる程度ではない、火の魔法でもこれ程の惨状にはならないと全員が思った。

そしてもう一度。

「津波」

ユースケが押し出すように手を向ける、ドォーンと音と共に高さ五十モイル、幅百モイルも有る様な水の壁が目の前に現れ物凄い勢いで流れて行った。

ユースケ以外全員腰が抜けた様に座り込み、馬車の馬達はおしっことうんこを同時にしていた。

「なんだこれは、わしはこれ程の魔法等ほんの二三回戦争の時見ただけだぞ。たった一人で等で出来る魔法ではない、四五百人の魔法使いが一斉に唱和してやっつとだぞ」

「国家間戦争時に使われる、集団戦略展開魔法規模の魔法を個人で使える」

「あまつさえケロッとしている」

「魔王なんて目じゃないよ、魔神か戦神級だあゝ・・・団長腰が抜けたあゝゝ」

「カイト、俺もだ」

「あ、団長どの、ム、ムロも腰が抜けましたゝゝ」

ユースケは事態の重大さをちっとも認識して居ない様だ、満面の笑顔で。

「魔法ー出来だぁー」なのだ。

「これで魔法が全種使えて、こんだけの事をやれたら、カイトの言う魔神か戦神決定だぜ」

「あたしもう嫌、その上に空間魔法にとか転移・移転・縮地・生き返りの魔法なんて使えるよなんて言われたら神様に祭り上げて毎日お祈りするわぁー」

「ユースケ教団設立」

全員、あ~~~~~・・・動けなかった。

ユースケは満面の笑みから、座り込んでいる皆を不思議そうに見ている。

「なんだ、食い物に悪い物でも合ったのかな。あー・・・俺が平気なんだからそれは無いよな」等と。

とんでもない阿呆が一人此処に居る、鎌鼬千発、雷万弾、津波魔法を放ったが。そこに何がるかとか、誰かが居るのでは、等とか。なに考えずに放ったのだから。

ビュージョ顧問が気が付いた「おい、拙いぞ、この向こうに誰かが居たとかは無いのか」さあ~~~~とユースケとムロ以外の顔が青くなる。探查魔法・・・俺らのメンバーに使えるのは・・・居ないよな。

「誰かいましたかあゝなんて今更無理ですよ団長」

「皆さんそれは大丈夫です、ここは魔物や魔獣が多くて野盗も居ません。それこそ掃除になって良かったかも」

「それならいいが、と、素直には喜べんの。わしらの仕事はなんだ、例え依頼でなくともだ、魔物や野獣に出会えば狩る。それで得た物売って、日々の糧としているだの。まあ今回の問題は、それではないがの、ユースケが何故突然魔法が使える様になったかだな」

「ネイル、ユースケがお前に魔法を使う様ねだっていたな、何か気が付かなかったか」

「ムロとカイトは御者台居たから除外して」

「俺はネイルの隣に、ビュージョ顧問はユースケの隣でケイリスはその隣」

「すまん、わしは転寝をして居ったから気が付かなかった」

「ユースケは、ネイルの口元をジッと観察していましたよ」

「そう言えば、あたしをジッと見ていた様になって言うか聞いて居る様な？」

「魔法に使う言葉とかですか」

「ユースケ、ネイルの魔法分かったか」

「分かった、ニホンゴ、あるよ」

「はあ、ニホンゴって何よ」

「あー・・・そう言えば、初めてユースケ会って話しかけた時、ユースケが使った言葉って。魔法発動言語にどこか似ていた、だからどこかで聞いた様な感じがしたのかな」

「あー・・・歌よ、酔っ払っていたから気にしなかったけど、感じが似ていたわあー確かに」

「ユースケはこちらに来たとき以来、自分の生まれた世界の言葉を話してないよな」

「まあ独り言ぐらいなら呟いていたかも知れないけど、聞いて居ないし」

「んー、そうなれば、ここで言葉を話せと言うのも危なくて言えないな」

「歌にもヤバイ言葉が入って居るとか」

「有り得るかもよー・・・怖い」

「所でユースケは何処へ行った、姿が見えんが」

ユースケは一人、焼け野原に成ってしまった、というかしてしまつた場所の入り口から少し入った場所に立っていた。

「うーん、完全には流れて行かなかったか。ここ再生できるのかな、ずうっと此の儘っ言う事はないよな」

あゝ、山火事や火山噴火に焼かれた木も再生していたよな、大丈夫だよな。そんな風景を思い出しながら、ユースケは何故か童謡を歌っていた。

「ねえ、ユースケが歌っている」

「なんか小さい音が聞こえる」

「ああ、何か優しいものに包まれる様じゃ」

「綺麗な光が降って来るぜ」

「物凄く優しい風が吹いてくるぞ」

「身体がなんだが楽になったよ、何かに癒されるようだ」

「見て、ユースケの居る方向」

「なんと、再生魔法じゃと、精霊にしか出来ん魔法だぞ」

「み、みて・・・ユースケの体を何かか包んでいるわ」

「あれは精霊です、ネイルさん見えるんですか」

「精霊・・・ムロにはしっかり見えるの、あたしには薄らと何かがユースケを包んでいる様にしか見えないけど」

「俺達獣人族は精霊魔法しか使えないですから、しかも契約をしないと駄目。主殿は世界に漂うミウを魔力として貯え使う魔法も使える、精霊を契約なしで力を使う魔法も使える、そしてあの強力な再生は神力だ。途轍もない人に出会って臣下にしてもらえたんだ、死んだらご先祖様の前に大威張りで立てるよ」

「俺は、神にも悪魔にも出会ったって驚かないかもな」

「あゝ・・・凄いい、光の大雨だわ」

「これが神力魔法か、いやいや魔法でなくて神力法かな」

「とっちでも良いですよ、気持ちいいですから」

ケイリスは「これをどうやって制御出来る様に教えるんだ」ぜってえゝ無理ゝ。

団長は「ユースケ狩りに連れていけんな」全部ゴミか消し炭だ。

ビュージョは「癒しでピンピンコロリ」が実現でそうなの。

カイトは「ユースケに魔具の開発をさせて店やろう」儲かるぞ。

ネイルは「今のうち唾付けて置こうかしら」・・・毛、生えて居るよね。

ムロは「臣下としては建国ですね」ユースケ王、万歳です。

六人の様子を見て、ユースケは、何時までここに居るのかな・・・野宿は厭きたんだけど、と思って居る」

城塞都市　ハリア

ユースケが魔法に覚醒、それ所か精霊魔法に・神の法力まで。冒険者　赤い風の団のメンバーは、有り得ねえから、だがユースケだしの感で納得した様だ、怪力を見ているから別な意味で耐えられたと言う一面もある。結局その日はそこで野営をし、今は街へと向かっている。

「あー、昨日はユースケには驚かされたが。じゃがもうじき街だ、それでだ、団としてやらなければ成らない事とか。買う物が有るか、必要な物とかを上げてくれ。消耗品はカイトに任せているがの」
ユースケがケイリスに「馬車なうすか」と言っている。

「なうす・・・ああ治すか。ユースケ馬車がどこか壊れて居たか」

「車、壊れた」

「どこが」

「軸」

「ああ、車軸か」

「ん」

「そこはもたねえ場所なんだよなあ、修理費結構かかるぞ」

「俺治す」

「えっ」

「魔法治す」

「ユースケが魔法で治すですってよ、ムロ、土魔法にそんなの有るの」

「有りますが難しいですよ、って、ああ・・・主なら出来るかもです」

「団長、場所を借りて・・・吹っ飛びませんか?」

「あー・・・大丈夫そうな処を借りよう、多少無理をしても、ユースケが何を出来るか知りたいしな」

「それじゃあまずギルド組と買い物組に修理組と分けようかの、ゾロゾロと歩き回るのも効率が悪いからの」

「ギルドにはケイオスと俺が依頼を見てくる、カイトとネイルは消耗品と食糧品の買い出しだ。ビュージョ顧問はユースケとムロの監督を頼みます」

「わしに修理場所を借りて置けって言う事かの」

「ええ、出来れば寝られるような場所が有れば好都合ですな」

「分かった、一度キルドに立ち寄ろうか、ムロにギルドの場所を覚えて貰わないとな。四人は一度ギルドで待ち合わせてくれ、ムロに修理場所を知らせる様にする」

「「「了解」」」

漸く街の入り口に辿り着いた、入り口の門は三十モイル高さの門で、おなじ高さの城壁が続き街を囲んでいる。街と言うより、都市と言う方が適しているだろう。門と城壁の前には、五十モイル程の幅が有る水堀が張ってある。そして五百モイル毎に又門と城壁が有り、内側の二番目からは、その前に三十モイル水堀と幅二十モイル以上は有るかと思える城壁が有る、これが五か所。

ここは王国の重要拠点都市として栄えている、貿易港からの荷揚げされた物と、隣接する国からの交易品が一堂に集まり。王国のそれぞれの内陸都市に運ばれる、五角形の形をした軍事城塞城都市で。門は五つ、五重の城壁に囲まれた都市の名はハリア、王国直轄支配地の街だ。

「おお、立派な建物のギルドじゃの。ムロ、ここを忘れるなよ」

全体を石で組んだ建物、入り口からは建物を支える木組みが見える。街の中の一般家屋には、ガラスはちらほらとしか見えなかったが、ギルドの窓にガラスがはめ込まれている。

「顧問、忘れても口が有る、大丈夫です」

「ほほっ、逃げられない様にの」

「あははっ、獣族に聞きますよ、結構いますから」

この街には人族以外獣族や、亜人や魔族までも居て自由に闊歩し

ている街だ。建物は石と木を使った建物が多く、十階建て位の建物は普通に有る。ユースケは、中世ヨーロッパ以上の文明文化を持ちながらなのに。立ち並ぶ街並みの何かに、バランスの悪さを感じた。ユースケは顔を顰めながら見ている「奴隷も浮浪者もなんか多いよな、それも子供の。夜に成れば、もっと酷い光景が見られるって言う事かな」気に入らねえ、そう思った。

「ムロ、済まんがわしのこれを持って居ろ、不快な奴らがお前に近づくかも知れんからな」

ビュージョは自分の持ち物のマントを渡した、マントにはビュージョの家紋が刺繍されている。

「ああそうだったな、ユースケには全力でお前との関係を伝えて家紋を作らせる、臨時だか借りておいてくれるか」

「そうねえ、ユースケに立派な家紋入りのマントを作らせるわ」

ケイリスもカイトも、ムロに詫びる様に頭を下げた。この世界、獣族や亜人は人族の奴隷とされる確率が高く。ユースケとムロの関係も、下僕でなく臣下と願ったのはムロの精一杯の気持ちだったのだ。あの爆笑の後、皆はムロに散々謝った、ムロに区別や差別等の心は無いと。何かあったら言うて欲しい、口で言うて呉れなければ伝わらない事も有ると。

借家 その一 パック少年との出会い

わしとユースケとムロ三人、冒険者ギルドの前で四人と別れ。城塞都市の初めの門近くにある、不動産ギルドに入って行った。馬車も有るし馬もいる、それに馬車の修理もしなければならない。まあ馬車の修理はユースケがすると言うのと、飛んでもないユースケの能力を隠したいと言う事も有って。一軒家を借りる事にした、ユースケが爆発しても良い様にだが。

「ムロよ、ユースケが爆発したら、この城塞都市も吹っ飛んで跡形もなくなるな」

「顧問、それ言わないでください、怖いです」

「俺は悪くないぞ、ネイルが悪い」

「ネイルさんは悪くないでしょ、主が暴走するからですよ」

「あははっ、あれは凄かったからな」

「鎌鼬千発、雷万弾、津波、超高速植物再生・・神様並みの事をしてケロですよ」

「いいじゃん、こうやって自由に話せる様にもなったし」

そうなのだ、神術を使える様になった途端、ユースケは普通に会話出来る様になった。その開口一番に「あーやっと自由に話せる様になったぜ、でっ、誰が俺をこっちに引っ張ったんだ、ぶん殴ってやる」と「今まで色々と助けてくれてありがとう、俺に出来る事なら

精一杯頑張る、これかもよろしくお願いします」の、両極端な事を言ってきたが、良い子で有る事には変わりはないようで安心した。

わしらは誰が呼んだかそんな事はしらん、と言うと「普通誰かが目的が有って異世界から呼ぶもんだ、例えば魔王と戦えとか、魔神と戦えとか、悪魔を倒して呉れとか」少なくとも、何処からも聞いて無いし。

魔人は居るが魔王等は居ないし、魔神なども居ない、悪魔とはなんだ聞けば。ユースケは「良かったあゝ、基本おれは臆病だし、そんなのと戦えゝなんて誰かが来たらどうしようって思ってたんだよ」等とわしらでは理解に苦しむ事をいい。

「それならこの世界を楽しむぞ、どうせ帰れない見たいだし」

帰れないってどうして解ったのですかとムロが聞くと「精霊が教えてくれたよ」・・・絶句ですな。精霊と話せるのは、元から強い力を持って生まれた獣人の姫巫女位なものだからだ。

ネイルはユースケともっと話したかったらしいが、わしから楽しみは取って置くもだと囁かれて赤くなっていたな。まあ、あの大きな力見せつけられれば皆凡人、夢を見るのは仕方が無い。だが概ね、余りの事を見せられたので無茶な事は言うまいと思う。そんなこんなを考えて居ると、不動産ギルドが見えてきた、良い物件が有れば良いのだが。

「ユースケとムロどうする、此処で待っていても良いし、付いて来ても構わんぞ」

「ビュージョさん、あそこに見えるのは武器屋でしょ。俺、ムロの

武器を探したい」

「主、自分はその鎌で良いのですが」

「ムロ、後でその主と言う事に付いて話し合おう。今はムロの武器の事だ、あの太鎌は見掛けは凄いが、あくまでも相手は麦だ。とても獣相手とかで戦う事は無理だよ、幾ら防具が素晴らしいもので有っても。武器があっさり壊れたら死ぬに決まって居るよ、俺は仲間を失うのは嫌だぞ」

「分かりました、自分も主を置いて死ぬのは本意では有りません」

「よし決まりだ、ビュージョさん、そういう事で一寸覗いて来るよ。ここに居なかったら、武器屋か隣の防具屋に居るから」

「ああ分かった、知らない街だから気を付けてな、何かあったらここに飛び込んできなさい」

「ああそうするよ、じゃあね」

不動産ギルドと、道路を挟んでほぼ向かいあう様に有る武器屋と防具屋。それ程高級感はないが、さすがに武張った感じが此処まで漂ってくる。良い武器が見つかるの良いが。

「なあムロ、今までどんな武器を持った事が有る」

「鎌以外では、こん棒とか槍とか片手湾曲鎌位です」

「盾は持った事は無いの？」

「盾は無いですね」

「盾はね、防ぐだけではないよ。使い様では武器にもなるんだよ、振り回して叩き付けてぶっ倒して踏んづける。ムロに踏ん付けられたら、酷い事の目に合いそうだね」

そんな話をしながら武器屋に入っていったとか、ユースケも結構残酷な事を想像するのう。

「いらっしやいませ、今日は何をお求めでしょうか」

ユースケ位の年齢だろうか、鍛冶見習いらしく頬に少し火傷の跡がある少年が応対に出て来た。

「この人の武器と、後は盾を見せて欲しい」

「それでは自由に店内の武器と盾をご覧ください、手に取って振り回してもよろしいですよ」

「ムロ、自分で選んで、金額は兎も角気にしないで、握ってなじむ様な感じのをね」

「さて、俺も面白そうな武器を探すかな」

ムロの巨体は、結構広い店内を狭く感じさせる。キョロキョロと、のそのそと歩いている、ムロは斧が並ぶ棚の前に来た「主のユースケは盾の事も言っていた、盾との釣り合いも考えないと」。盾は武器より少し軽めがいいな、攻撃の後に隙が出来たらって言う事も考

えないと。そんな事を考えながら斧を見ると、物凄くえぐそうな武器が目の前に。槍の穂先とハンマーと、斧が付いた武器。刺して叩いて斬ると言うよりぶった伐る、そんな感じの事をする武器の様だ。長さの全長はムロの肩位までの物、それ程大きな盾でなければ釣り合いが取れそうだし。楽に振り回せそうだ、振り回し見る、中々いい感じた。

盾を探す、両手で持つ全身盾、円い楯、大型の片手持ちの盾。結局ムロは自分の腕の長さ位で、幅は自分が半身に成って隠れる位の幅のある盾にした。ユースケを探す、ユースケは特殊武器の前で唸っている。

「これってどう見てもブーメランだよな、うーん、ムロ専用の飛び道具にどうかな。俺にはあの大剣が有るから背負えないし、大きさもムロ向きだな」

「主、どうしましたか」

「ああムロ、武器も盾も決まった様だね。兎に角それを精算してもらおうか」

「主は他に武器は持たないのですか、飛び道具とか」

「んー、考えたんだけど、創造具現で何時でも持てるから必要ない見たいだよ俺は」

「はあ・・・はははっ、そうでしたか・・・なんでも有りなんですな主は」

「気持ち悪い」

「いえいえ、そんな事は有りません、後は強さを自在に調節出来れば良いのですから便利です」

「そう言ってくれると嬉しいよ、仲間に気持ち悪がられるなんて最悪なもの」

ああ、それは言える、どんなに強くても。仲間に避けられるなんて、一緒に居る意味が無いから。そう思いながら、主の後姿を見ながら付いて行くムロだった。

「後で強化とか色々防衛魔法とか付けるからね、防具も強さより動き易さを考えて選んで」

ムロは上半身鎧と兜、膝丈の下半身鎧を選んだ。ブーツが膝まである長靴だからだが、これもユースケに新しいブーツを差し出された。

「主、中々えぐいブーツを持ってきましたね」

「うん、ムロにも足癖が悪くなってほしいからね」

「足も武器って言う考えからですか」

「そうだよ、でもムロだって、えぐそうな兜を選んだじゃん」

ムロの兜の頂点に短い槍の穂先、額の辺りはハンマー状、頭突きをされたら只では済まないだろう。

「武器屋で金貨七枚、防具屋で金貨やっぱ七枚、ブーツが武器機能付きで金貨一枚。いい依頼が見つかるの良いな、あゝ・・・安い武

器を仕入れて魔法を込めてやれば高く売れるよな」

「主、手加減しないと売る前に武器が壊れますよ」

「まあね、それも練習のうちさ。あつ、ビュージョさんだ、良い所見つかったかな」

「おお閣下、お久しゅうございます」

出迎えたのは嘗ての部下、戦傷で退役した男だった、しまったと思っただけもう遅い。

「やあゲルバルド、何年ぶりかの。ここが貴様が代表のギルドだとは知らなかったぞ」

「もう五年に成りますな、相変わらずのご壮健の様子、お会い出来てうれしゅうございます」

「堅苦しい事を言われてもな、わしは今ただの冒険者じゃ」

「何を仰せられますか、待機大将の知らせは私にも有りましたぞ」

「あのくそつたれ公爵め、余計な事を」

「はははっ、閣下大好き公爵ですからな」

それで今日は、・・・私に会いに来た訳ではない事は解りましたが。

「うむ、一軒家を借りたいのだ。期間は一週間、人員は七人、馬四頭と馬車が有るから厩と馬車小屋付きの。そう言う条件で借りたい、料金は金貨五枚までだか有るかの」

「閣下、後五枚出せば買えますが」

「いや、今はわしは冒険者の団の顧問だ。彼らがここを拠点と定めるのならばそれも良いだろうが、彼らにはそんなつもりは無いだろう。だからわしには買い取ると言う選択は出来ない」

「それならば私の持って居る物件をお貸ししましょう、暫く人が住んでおりませんでしたから多少荒れてはいますが、馬場も有りますし広さも結構ありますが」

「今言った金額でよろしいかな、それ以上はちときついのだ」

「金貨三枚でよろしいですよ閣下、無料と言えば他を探すと言われそうですから」

「そうか、それは済まんの、後で顔をだしてくれ。久しぶりに飲もうではないか」

「はい閣下、窺わせていただきます」

「あー、それからな、その閣下は皆の前では止めてくれるか、わしの身分を知らぬ者達だからの」

「承知いたしました、案内の者を付けますのでお待ちください」

案内の者が現れるまで、街の情勢や近郊の出来事、魔物や害獣の事

等情報をそれなりに仕入れた。後はギルドでどの様な依頼を彼らが持ってく方が、・・・どうやら案内をする者が来たようだ。

「ゲルバルド様、こちらの方を案内すればよろしいのですね」

外には、すばしっこそうな獣族の少年が立っていた。犬耳をピクピクとさせている、ユースケと同じ位の年齢か。奴隷の印の首輪も耳へのリングもない、ギルドの紋章を、胸と背中に刺繍をされたチョッキを着ているところを見ると、正式なギルドの職員として働いて居る様だ。

「これこれパツク、ギルド長と呼びなさいと言っているのに又元に戻すとはどう言う事だ」

「だって・・・」

「まあ良い、後で話そうか」

「ゲルバルド、この少年は」

「今案内する家の奴隷にされていたのを丸ごと手に入れて、奴隷の印を外したのですが。行く所が無いと言うので、ギルドの雑用係りに雇ったのですよ」

「そうか、その方らしいの」

「奴隷などと、腹の立つ」

「ビュージョさーん、良い所見つかりましたか」

「あの少年は、冒険者の団の一員ですか。おー後ろの大男は熊族ですな、強そうですね」

「はははっ、あの太男よりあの子の方が強いと言ったら信じるかの」

「まさか、あんな子供が彼より強い等と冗談でしょう」

「ゲルバルドよ、人は見掛けによらぬ、世界は広いぞ」

「では少年案内をよろしく頼む、帰りは送るので、冒険者ギルドに用が有るからそのついでじゃ」

「ではパツク、そその無い様にな」

「ユースケ、ムロに良い武器は有ったか」

「見てよ、ムロ、すごくえぐい武器と防具を選んだんだよ」

「主、何を言いますか、面白かったのは一緒でしょう」

「これこれ、主従が路上で言い合いをするなどみっともないぞ」

「はいはい」

「それでは案内をいたします」

「うむ、頼んだ。ムロ御者を頼んだぞ」

借家 その二 ユースケの、不思議と謎に嵌まって行く少年

ユースケは、御者台の少年を見ている、天蓋を開けてだが。御者台のムロの傍にいる、案内役のパック少年はその視線に耳をピクピクと動かしどうした物かと思っ居る。

「あの、ムロさん。後ろの子、なんで僕だけを見るんですか」

「ああ、きっと君の耳に興味があるのかも」

「まさか、特別珍しい獣族でもないのに」

「主のユースケにとってはそうではないのかも、なんたって自分にも熊さん熊さんて来たんだから」

「獣族の少ない所から来たとかでしょうか」

「うーん、自分も主が不思議でならない事が有るんです」

「どんな事ですか」

「それは団の事を色々洩らす事に成りますから言えませんが」

「あっ、ごめんなさい」

「良いんですよ、話さないのは団の決まりですから」

どうやら我慢出来なくなって来たらしく、天蓋から外に出て後ろに座ったユースケは。

「君、名前は。俺、ユースケ・タチバナって言うんだ。ユースケで良いよ」

「僕はパック、家名は有りません」

「ふうん、この街の生まれ」

「そうですね、三号城壁の向こうには行った事が無いのです」

「何か理由が有るのかな、向こうへ行くのには何か特別な許可がいるとか」

「主、向こうには獣族の自分らは入ってはならない決まりが有るんです」

「んー、その理由を聞くのは止めるよ」

そのまま馬車の中に戻ったユースケ、なにか納得の行かない感情が湧き上がってくるのを覚えた。

「ねえビュージョさん、差別がひどいのかな」

「うむ、彼らの事か」

「そっ」

「区別も差別も有るな、獣族は街の中をも自由には歩けん。気を緩

め様物なら、街の中で衆人環視の元で奴隷商に狩られる。人族と言えど、国が違えば奴隷にされる事も有る。ユースケもその力が有るからと言って、気を緩めるでないぞ」

「この国は酷い方なのか」

「この国もこの街が全てではない、ここより酷い所も有れば、仲良く一緒に暮らして居る街も有る。一つの事を見て、それが全てとは言えない。ユースケは、その曇りのない目で見て行けばよい」

「例え世界が違っていても、人ってそう言う生き物なのか」

「ふむ、ユースケの世界にも居たのかな」

「肌の色が違うからと言ってそうされた民族は居たよ、辿れば同じ民族同士でもだよ」

「困った種族だのう、だがそれを良しとしない人も居る事も確かだ」

「そうだね。俺、パックの耳を触りたいなと思ったんだけど、やっぱり気分を悪くさせるかな」

「んー、さっき会ったばかりじゃからな、無理強いは良くないぞ」

「ムロさん、さっきの子を主って言っていたけど、奴隷じゃないよね」

「ああ、自分は勝負に負けて主従の関係に成ったんだよ」

「えっ、どんな勝負で負けたか知らないけど、それって珍しいよね」

「ふふっ、まあね、そこは深く聞かないでくれると助かる」

「そうなの、まあ奴隷でなくて主従なら仕方が無いか、無茶を言い
そうな子には見えなかったし」

「ユースケは、自分が主と呼ぶ事を良しとしない、呼び捨てにしろ
としつつこいのだよ。今夜もしつつこく口説かれるだろうな、自分
は納得しているのにだが」

「へえ、変わっているねえ。所であのでっかい剣はムロさんのか
な」

「いや、主の愛剣だ、自分にも垂直に剣を立てられないのに、主は
片手で振り回すのさ」

「うっそお、そんな人間が居る訳ないですよ」

「馬車の中に居るんだけどね」

「あっ、あの家です。門を開けますから待ってください」

「顧問、主、ここだそうです」

「おおそうか、ユースケ剣は持っていつてくれ、一応敷地の中やら
屋敷の中を調べるからな」

「ムロもだよ、パツクの傍に付いて居て」

「分かりました主」

「一寸待って、探査するから」

風魔法で探査するユースケ、一応異常はない事を告げ、屋敷の敷地に入る四人。門の扉を閉めたパツクとムロが付いてくる」

「しばらく人が住んでいませんでしたから、少し荒れているかもしれませんが。必要なら清掃ギルドに声を掛けて下さい、なんでしたらこちらのギルドから依頼を出しますが」

「んー、その必要は無いかものう、あそこにお掃除大好きっ子が居るからな」

身の丈を越す大剣を、片手で振り回しながら歩いてゆくユースケ。あれが全部木であろうと、片手で振り回す等不可能に違いないと納得したパツク。

「ムロさん、あの子凄いですね。あれが全部木だからと言って、片手であんな風に振り回せませんよ」

ユースケは井戸を覗くため、大剣を井戸の屋根付きの囲いに立てかけたが。囲いはメリメリと言う音共に傾いて行った「あーやっちゃったあー」のユースケの声。

「ユースケ、その大剣がお前にとって。なんでもない重量でもだ、物を簡単に壊す充分な重量が有るって言う事を忘れてはいかんぞ」

「マジですかあゝ、身体強化とか物を軽くする魔法とか使ってませんよね、ユースケさん凄いく超怪力く」

「自分は見えて居ませんが、主の身体以上に太い樹なんかも一蹴りで倒すそうですよ」

「伝説の勇者様より凄いかも」

「ですね、それでも普通に小突かれると痛がるのですから不思議です」

「不思議って言うより謎ですね、特異体質」

「あゝ・・・そう言う言葉が有ったの忘れていたな」

「おゝい、パツク、屋敷の中にも井戸は有るのか」

その声にパツクはユースケの元へ走って行く、ユースケの不思議と謎に嵌まる一人として。

借家 その二 ユースケの、不思議と謎に嵌まって行く少年（後書き）

又うだうだと書いてしまった、それも詰まらない物を。

あゝ、それから感想とレビュー必要ないんで止めました。

あくまでも、暇つぶしのため書いているので必要ないですから。色々と思い入れやその他ある方もおられるでしょうけれど、おれは別にプロとか目指している訳でもないので、突っ込みを入れられるのは不快です。

借家 その三 パック少年ユースケの秘密を見る

ムロさんに、ユースケさんの事を聞いて居ると。本人のユースケさんが、家の中にも井戸は有るのかと聞いてきた。僕は慌ててユースケさんの元へ走って行った、そして謎と不思議満載のユースケさんの傍にいる。

「建物の中には、厨房と風呂場に小さな井戸があります。外には正面玄関の馬車寄せの此処と、厩舎と馬場に一つずつ。裏庭の花畑に一つ、それ以外は有りません」

「そうか、水魔法を使える人間が居なくても、困らない様になっているんだな」

「はあ、そこまでは考えませんでした。そうですね、そう考えれば井戸の数に納得です」

「部屋の配置は探索魔法で見たけど、実際どういう事に成っているのかな、人が住まなくなってからどの位の日数。固定魔法も切れているし、んゝ、泥棒が入った形跡も有るよ」

「えゝ、住まなくなつて半年ほどなのですが、侵入防止の保護魔法が破られているんですか。小物の備品が盗まれているかも知れませんが、高価なものは当然有りませんでしたけど。お客様方が困りますね、すぐに調べて足りない物は補充させていただきます」

「んゝ、俺達の団は七人だし、誰かが来ても二三人だろうからな。予備も容れて十四五人分有れば大丈夫だと思うよ」

ユースケは、建物に向かって何かを言っている。パックは驚いた、小さなリンリンリンリンと言う音共に、屋敷が綺麗に再生されてゆく感じがした。入ろうのユースケの声で、パックも続いて屋敷の中に入った。パックは驚愕した、半年もの間、人の手が入らなかったのに。まるで、新築当時はこの様になっていたのかと思わせる、チリや小さなゴミ一つない状態になっている。お掃除大好きっ子と言うのは、こういう事なのかと思った。さっきのあれは精霊魔法、人間なのに精霊魔法が使えるとは、正に謎と不思議の人間だとパックは実感した。

「ビュージョさん、二階は六部屋とリビング、オープンテラス。全室クローゼットに荷物入れとトイレバス付きだよ、でも水魔法が使えない人には向かないね」

「そうか、一階にもゲストルームが五つある。会議に使える様な小部屋と、厨房に食堂、後は見た通りだ。厩舎と馬車の車庫の裏に馬場がある、大きな物ではないが、ユースケが乗馬の練習をするには適当な広さだろう」

「ビュージョさん、あの大剣を背負っては馬には乗れないよ」

「それでも乗馬が出来ないと困った事に成るな、ユースケが馬に負けない速度と持久力が有っても。他人には大っぴらに出来ない事だ、ユースケはさつき精霊魔法を使っただろう。あれは人間は使えないのがこの世界の決まりだ、自分が出来るから不思議ではないとは言えないのだ。多すぎる謎と不思議は他人に不信感を与えるが、余りにさらけ出すのも考え物だ、うかとしていると利用される事もな。教えられる事だけでは駄目だぞ、ユースケもこの世界の事を知り考

える必要があるぞ。つまり、使う場所と時と場合じゃな。人を引き付けるには多少の不思議と謎は必要だ、が、用心も必要だと言う事だ・・・うゝん、いかな、ユースケに説教爺さん小言爺さんと言われそうじゃ」

ぱつと後ろに居た僕に、振り返ってユースケさんは「内緒だぞ、絶対だぞ・・・あつ、ビュージョさん。パツクに見られちゃったから団に強制入団させようか、そしたら秘密が守れるぞ」と、言いだした。その何処か切れた短絡思考は地の性格ですか、ビュージョさんは微妙な視線を向けてくるし。僕、ヤバくないでしょうか。

「ムロに四人を迎えにやろうと思ったが、今一つこの事が掴めん。用心の為、パツク君を送り届けながらわしが迎えに行く。二人で留守番を頼む、ムロは皆が戻るまで外には出るなよ。ユースケもムロが強いからと言って気を抜くな、知らない土地だから。ああそうだ、ユースケの家には家紋とか紋章は有るかな」

「家代々の家紋なら有るよ」

「ほう、古い家柄なのか」

「結構古いよ、武門の家柄なんだけどね、時代がそうで無くなったから意味は無いよ」

「そうか、まあその話は後でしようか、では行ってくる」

僕とビュージョさんに乗せた馬車が不動産ギルドに着いたのは、夕方だった。先に冒険者ギルドに立ち寄って、四人に乗せたからだけど。ギルドの前で僕が馬車を降りる時、ビュージョさんは明日ギルド長と飲む事に成っている、その時一緒に来なさいと言った。それ

が僕の運命を、大きく変える一言だとは思いつかなかった。

借家 その四 冒険者赤い風の団VSハリアの街の盗賊ギルド 1

夜のハリアの街の裏通り、大剣を背負った少年が一人歩いている。夜の街は闇の中、特にスラムの夜は暗い。弱い者と運の悪い者の吹き溜まりだろうか、落ちる為に落ちた者、嵌められ蹴られ落ちた者。それぞれの道を通った者達が、暗闇と陰に住みそして居る場所。弱者は弱者を食う、そして食われ消えて行く者達。

暗闇のその陰から揺らめき出でる者八人、声も掛けず一人歩く少年を襲ってきた。襲う事に慣れた者達に取っては不運、襲う者を襲う為に少年は暗闇を歩いて来た。僅かに肉を打つ音と、倒れ伏す者の音が静かに響いていた。

「なあ、教えてくれないか」

「ぐはっ、てめえ」

ゴキッ「ギッ、ガガガッ」

「盗賊ギルドってどこよ、この辺りって聞いて来たんだけどな」

「ここを二百モイル先だ、白いドアが有る」クアッ・・・。

少年はユースケ、襲われたので殴り倒した。聞きたい事が有ったので聞いたが、素直には教えてくれなかったので骨を折った。問答無用で襲って来た奴らだ、遠慮なく折ってやっただけ。

「漸く盗賊ギルドか、なんだってこんなに時間が掛かったんだろう」

襲われる事八回までは数えた、後は面倒なので数えて居ない。なんだか図った様に襲われるなどと思って考えた、どうも縄張りがあるらしい。団長に言われた「襲われ損はするなよ、きっちり迷惑料に懐の金は戴け」盗賊の金を奪えってどうよと思ったが。確かに買物で寒い事に成っているのは確かだ「だからってなあゝ」とぼやきながら歩いている。

ハリアの街を中心に、大小含めて十三の街が有り。農水産林業の村々は、その数は千に近い数が有る。栄えて居ようと衰退して居ようと、関係なく色々なギルドが存在する。昼夜関係なく活発に動くギルドも有るし、そこには男も居るし女も居る、子供も居れば死にそうな年寄りもいる。

世の中が平和で有ろうが無かろうが、太古の昔から存在する職業、職業と言うにはふさわしくは無いが存在する。それがかつばらい・置き引き・万引き・すり・野盗に山賊等も所属する盗賊ギルド、盗と付く物に係わる者達が集まる。

ハリアの街を根城にする、盗賊ギルドのギルド長の執務室。何やら剣呑な雰囲気漂っている。

「ギルド長、例の屋敷に冒険者の団が入ったそうですが。あそこはギルド長か、副長名義で買ったのでは無かったんですかね。それともギルド長は、あそこにあるはずのお宝を、俺達に無断で移動させたとか」

「それはサーモナンが担当だ、奴に聞け」

「ほっほー、わたしはサーモナンからギルド長に聞いてくれと言われて此処に居るんですけどね」

「だったらサーモナンをここに呼べ、わしはお前達のお宝なんぞには興味は無い」

「お宝大好きなギルド長にしては異な事を、枯れましたかね、お歳ですか」

「馬鹿あー言うな、わしは今でも夜は元気だぞ、昼間は寝ているがな」

「わたしらも夜は元気で働いてます、それこそあちこちと、ギルドには随分貢献していると自負していますけどね」

「お前達が幾ら頑張ろうと、他の者達がそうでも無かったら意味は無いな」

「それはギルド長のお人柄如何でしょうよ、最近嘗められていまするか、わたしら以外のグループにですが」

ここはハリアの街の盗賊ギルド、ギルド長のセレベステ・モンノイは。ギルドに所属する一つの盗賊団に、穏やかな物言いだが吊るし上げられている。目の前に居る盗賊団のお宝は、副長のサーモナンに任せているが。「サーモナンの野郎食いやがったのか」と疑心暗鬼のセレベステだ。

目の前の盗賊団はおよそ二年前、七ヶ国に信徒が居る神殿の宝物庫の一つを攻略し、莫大なお宝を盗み出すことに成功した。盗賊団が持って居ては身動きが出来ないだろうと、お宝をギルドで預かったが。どうも担当のサーモナンと言うギルド副長が怪しい、この目の前の盗賊団は何割かはギルドに納め潤してくれた。もしサーモナン

がねこばばや、何かをしていれば一大事。報復の為に、ギルドの幹部やその家族にも手を伸ばすだろう。殺すと言う事だけが、報復の手段ではないのだから。

盗賊ギルド副長室、表情の薄い男の前に一人の女と二人の男が座っている。

「ねえ、副長、あたしらは副長の命や幹部の命。その家族の命なんて要らないですよ、必要なあたしらのお宝なのよ。今ギルド長の所にはね、あたしらの頭領がお話をしに行ってるのよね」

盗賊ギルドの副長、サーモナンの目の前に居るのは。盗賊団の副頭領ヤーニヤと幹部の二人、じつとサーモナンの様子を窺っている。盗賊団が付けた見張りが、サーモナンの様子が可笑しいと連絡して来たのは二か月前。お宝をどこかに移動させているとかではなく、異常行動と言語が可笑しいとの事だったので様子を静観していたが。

お宝を隠した建物に冒険者が入った事で、状況は一変した。冒険者の団には探查魔法が得意な者が居る事は常識だ。盗賊団にも居るが、レベル的に冒険者の方が高い。物を盗む事に使うのと、命に直結する冒険者の探索魔法とでは段違いにレベルが違う。

サーモナンの様子を窺っていた幹部の一人が、老人性痴呆症か健忘症と呟いた。そう呟いた幹部が、一度部屋を出て話をしようと言った。

「老人性痴呆症か健忘症、じゃあ何かね、あたしらの事もお宝の事も忘れたって言うのかい」

「全部忘れたと言う訳では無くて、一部あちらこちらと忘れる。まあ、お宝はあの屋敷の中にあるのは間違いないでしょうが。冒険者の誰かの探索魔法で探られる可能性は高いですね」

「冒険者の手に落ちたら厄介です、戦闘は奴らの方が圧倒的に強いですから。今回あの屋敷に入った冒険者の団のレベルは＋B、人数は七人、熊系獣族が一人。冒険者ギルドから冒険者の団に入った者が一人、女が一人と軍隊上りと思われる奴が二人、若いのが二人ですが一人は小僧。十倍の人数を揃えても勝てるかどうか、武器戦闘力・魔法戦闘力の格が違います。それに千二百頭以上のジャスラーガを、一度に狩ったと言う噂の冒険者の団の様です」

「その情報、どこで集めたかは聞かないが。知らなかった方が幸せだったかもね、圧倒的に不利じゃないか。勝てなくても良いからお宝だけでも取り戻したい、なにか手は無いのかね」

「戦わなければよい、眠って貰いましょうか。殺気を纏わないで遣るしかない、問題は何処に隠したかです」

「本人に聞いてもあの様子では無理だし、時間をかける猶予は無い。ギルド長に掛け合って、サーナモン副長の部屋と家に何か記録が無いか探すしかないね」

「頭領と話してくるよ、人数集めについて」

「ユースケ、何しているの」

「あゝ、ネイルさん一寸静かにしてくれるかな。一寸気に成る物が

有るんだよね」

「ふうん、ねえカイト何か隠し有るのかな」

「えー、解らないですよ」

「ああそう言えば、主は盗賊が入った跡が有るって言ってましたが」

「空き家にか」

「ケイリスさん、空き家だから盗るのではなくて隠すと言う事もあるんじゃないですか」

「カイト、詳しいな」

「えへ、団長くなんですかその単語は」

「お前達、ユースケの邪魔はしない方がいいぞ。うまく行けば、盗賊の上前を撥ねる事が出来るだろうの」

「ありゃりゃ、顧問は一寸えげつないですよ、盗賊の上前を撥ねるなんて」

「それより団長、その依頼の仕事、ユースケも連れて行くの」

「仕方が無いだろう、いずれはぶち当たる事だからな」

「選りによって盗賊団の討伐か、教団もそうとう激怒しているし」

「お宝は取り戻せないだろうからって皆殺しですか、とても神様」

って言っている奴らの言う事じゃ無いですよね」

「まあ、教団の宝物庫を一つ開けて全部盗んだって言うのが大きいよな」

「やり過ぎたって言う所よの、手加減出来なかったのかのう」

「あゝ、これってお金かな。後は色んな形の物が見えるよ、その盗賊が盗んだお宝だったりして」

「えゝゝゝどこを覗いて居る訳」

「ネイルさん、厨房の井戸の横に隠し穴が有るんだよ、そこだよ」

「団長、どうしますかな」

「ビュージョさん、そいつはいただきましようか。依頼のあった盗賊団の物ならなら、向こうから来るだろうから探す必要もないしな。お宝は教団に返す必要もないし、教団からの依頼金も入ると、美味しい仕事だぜ」

「団長、どうやって取り出すんですか」

「あゝ・・・厨房の井戸は狭いからな」

「嫌よ、幾らあたしが細いからって・・・何よ、何よその眼は、あたしが太って居る言うの」

「おっほん、まあ・・・細くは無いだろうの。実に健康的じゃ」

「ナイスフォローっす、ビュージョさん」

「何騒いでいるの、そんなの移転させればいいだけじゃないか」

「へっ、……そんなの出来るの」

「ああっ、神術に有るよ、精霊魔法にも有るけど、こっちが確実だね。でっ、団長、俺の取り分は」

「はい、ユースケ、樂をさせてやるから分け前もつと寄越せって言う事か」

「うん、竜車が欲しいから」

「あゝ……そりゃなあ、あれは男のロマンだもんな」

「カイト、話が合うね」

「ユースケを甘やかす訳ではないが、見つけたのもユースケだし。仕方が無いか、みんなどうだ」

「まあねえ、見つけた者の権利だし、黙って居ればユースケが一人占めだって出来たんだから、そうしない所で納得よねえ」

「まあどの位お宝が有るかだな、処分が簡単なものとそうで無い物もある。教団もはつきり所有権を放棄するとは言っていないからの、危なそうなお宝は潰すか王侯貴族の所にでも持ち込もうか」

「王侯貴族にですかビュージョさん、見せびらかしてヤバくないですか」

「ふふふっ、闇商人から買い取って教団に返還する、そんな形を取れば神殿の覚えも目出度い。特に重要なものであればある程の、それに教団も盗まれましたなんぞと公言は出来ん。わしらは王侯貴族その証人に成る、教団も迂闊にはわしらに手は出せんと言うの。此処までは団長の読みよ、じゃが甘いぞ。教団にも影働きの者も居る、彼らを使つて色々と仕掛けて来るじゃろう」

「兎下、盗賊共の討伐依頼を受けた冒険者の団が現れました。幸いな事に、あの宝物庫には王家からの物は有りませんでした、それでも世上に現れるは憚られる物もございます。他の物はどうでも宜しいのですが、返却する様申し付けましょうか」

「出納長、態々それがと教えるのか。放って置けば貴族共が見つくて、陰から取り戻して呉れようぞ。ん〜じゃが、それだけでは腹の虫が収まらぬの。序でぞ、盗賊ギルドに鉄槌を下すがよい、教団の物に手を出せばどんな目に合うかとの。教団の陰の者達を使い、煽って冒険者共と共倒れになれば尚更良からう。冒険者の持った宝物は陰の者共に下げ渡せ、偶に褒美をやるのも良からうぞ」

「顧問、甘かったですか、あ〜くそ〜。依頼金が良かったからなあ」

「団長、まあそれも相手方の出方次第だ、盗賊ギルドの崩壊か殲滅か」

「グジグシ言っても仕方が無い、もう受けちゃったんだから仕方ないでしょ」

「ネイルに同意、でっ、ユースケお宝は」

「ケイリスさん、静かだと思ったらそこで来ましたか」

ユースケは物質移転魔法を使い、お宝をリビングに移動させた。

「ユースケ、先手必勝といかねえか。お宝をここに置いて行った盗賊どもはな、そうとう泡食っているはずだ」

「やだ、盗賊ギルドを襲ってしまえって事」

「団長、それをユースケ一人にやらせるの」

「カイト、お前がやるか」

「あゝ勘弁です、暗闇からグサッなんて嫌ですよ」

「確かに数だけはいからな、二百モイル毎が縄張りだとか」

「ケイリスさん、それを何処で」

「団長が依頼金に目がくらんでこの依頼を受けた時に一寸な」

「んゝ、生身で一番強いのはユースケだからのう。襲って来る者達を迎撃するのは良いが、頭分に逃げられたりしたら長引く」

「それに教団が煽るだろうしね、しかし教団も馬鹿だね、盗人に入られましたって喧伝するんだから」

「依頼の金額がでかすぎる、何程の物が盗まれたのかって言う事が丸わかりだ」

「危ないから何処の団も受けなかったのをさ、金に目が眩んだうちの団長のアホさ加減でどうよ」

「だってよ～～」

「団長が受けたのだ、今更どうこう言っても始まらないのう、少しユースケに乱暴に動いてもらうしかないの」

「ユースケ頼んだぜ、街の裏道を歩いてもらう、大体な場所は目星は付いて居るが物凄く大雑把だ。そこで暗い所を態と歩いてもらう、旅人が迷い込む辺りだがその辺りとしか解って居ない。当然の事だがな、盗人の連中が俺達はここに居ますなんて言わないしな」

「団長、襲って来た連中をぶん殴りながら場所を聞けって言う事、えぐう～～」

「すまん、それからな、襲って来た連中の懐の物は全部奪え。金が無かったら奴らも街から外へ出られんからな、片っ端から警備隊に引き渡す。足止めだ、まっ、ユースケに殴られたら一週間や十日は身動き出来んだろうがな」

借家 その五 冒険者 赤い風団VSハリアの街の盗賊ギルド 2

ユースケはケイリスからの情報を聞き逃していた、二百モイル毎に賊が出る事を。後で軽く叱られるのだが、先輩の団員はそこその情報を持って居る。まして団長は情報を仕入れる事に躍起だ、団員の生死にかかわるからだ。ユースケは後で叱られる等と言う事も知らず、白いドアの前に立った。もちろんドア付近の見張りや警備の者は、一瞬でお掃除完了。ユースケは向い合せて立つ、建物の屋根の上に立った。

「ユースケ、盗賊ギルドが見つかったら、奴らに逃げられない様な何か結界か何かないか。盗賊ギルドの奴らは捕まれば処刑だ、俺達が手を下さなくとも結果は同じだ」

「後は金庫だの、屋敷の敷地内に飛ばして呉れば文句なしだぞ」

「目立っても構わんが、態々俺達の情報を垂れ流す必要もないだろう、特にユースケのはな」

「そうだなケイリスの言う通りだ、当分は俺達の秘密兵器だ・・・あゝ余りあの大剣も振り回すなよ」

「団長、今更でしょうが」

「カイト噂だけならいいんじゃない、馬鹿と遊べるし」

「ネイルさん、今頃から喧嘩好きになってどうするよ」

「所でムロはどうするのだ、未だギルドに登録していないけど」

「当然主に付いて行きます」

「うーん、顧問と留守番を頼もうか、盗賊を倒しに行つて盗まれていましたじゃ笑えんだろう」

「えー・・・主の活躍を見たいのですが」

「ギルドに登録すれば嫌でも一緒だ、今回は我慢してほしい」

「分かりました団長」

「よしそろそろ時間だ、出るぞ、ユースケは屋敷の周りに怪しい奴が居ないか探ってくれ」

「サーモナンが痴呆か健忘症？、奴は俺より少し若いぞ」

「関係ないですな、と、うちのメンバーが言っている」

「それでわたしらは実力行使をする事にした、まあ眠らせてと言う事です」

「馬鹿を言え、奴らが結界も張らずに寝る訳が無いだろう。むしろもうお宝を見つけてとつくにずらかったか、邪魔な俺らの盗賊ギルドを潰しに向かっていると考えるのが妥当だ」

「黙って潰される心算でいるんですか、ギルド長はそれで良いんですか」

「良い訳がねえよ、これまでに育てるのにどの位かかったと思って居るんだ。先代から数えて十五代目だぞ俺は、どの面下げてあの世に行けって言うんだ。グリズ、表に警備を増やせそれからムートイを呼べ」

おい、変だぞ。

外に出られねえ、何かされたぞ。

「何を騒いでいるのよ」

「へい、外に出られねえんで、表の奴らも返事をしねえんで」

「ちっ、やられた」

「ギルド長、頭領やられたよ」

「なに」

「先手を打たれちゃったのよ、表の警備に出ようとした連中が出られないと騒いでいたのさ」

「くそ、地下だ。金庫の中から外に出られる、お宝や金所じゃねえ」

「金庫から」

「ああ、金庫は三重に成っている、一番最初の金庫裏から脱出できるようになっているのだ」

「金はねえのか、幾らかは持ちださねえと逃げるのにも辛い事に成るぜ」

「いくらかは有る、それを引っ担いで行くぜ」

「てめえらさっさとずらかるぞ」

「ふうん、地下道が有るんだ、金庫は三重か」

「どうしたユースケ」

「団長、地下道が有るんだよ、それに金庫は三重、一番最初の扉を開けて後ろから地下道に降りられるんだ、おれ一寸逃げ道塞いでくるよ」

「地下道をか」

「出口をきっちり塞いでさ、ギルドの中が空に成ってから金庫に行こうよ、結構ため込んでるし」

「ほー、んふふふっ、楽しみだな」

「じゃあ一寸行って来るよ」

ユースケは地下道の出口に向かっていて盗賊ギルドの者達を追いかけた、その姿を見て団長のギャリクは頭を振る。

「ユースケが味方で良かったよ」そう呟いた。

多分風魔法だろう、すべる様に滑空しているのだから。これを知ったらケイリスは兎も角、ネイルは教えろと迫るだろうなと思った。

「んー、ここらで良いかなって」

そう言いながら地面に手を置く「上に」「強化」「固定」ゴツと地下から音が聞こえ、長さ二十モイル程、高さ七モイル程がユースケの身体事地面が持ち上がり、ユースケは地下道を塞いだ事を確認した。

「後は金庫の方の入り口を塞げば終わりだな、お宝馬車で運ぶ気かな、馬車が壊れないといいけど」

盗賊ギルドに戻ってくる盗賊達を狩りながら「あゝ眠い」とこぼしているのはカイトだ。それを横目で見ながら団長のギャリクは、金も出来たし、足を洗わせる機会かもなと考える。

「どうも緊張感が長続きしない、大怪我をしないうちにだな」ビュージョ顧問と相談しよう。

盗賊達が閉めて行った金庫の扉をあっさり開けたユースケは、金庫

の中の逃走口を閉めた。お宝は馬車に満杯とは行かなかったがかなりの量、夜中に走らせられた馬達是不機嫌そうに鼻を鳴らしながら走っている。

「団長、騎乗用の竜が買えるね」

「ユースケ、竜は目立つ、お前が剣を軽くする魔術を掛ければ馬でも間に合う。もし買うならムロ用だろう、主とか慕っているんだ、その位はしてやれ」

「あ、それでもいいか、交代で乗ればいいんだし」

「と、言う事は乗用の馬も買って、ユースケは乗馬の練習だな」

「当分尻が痛いのかな」

「何を言う、風魔法を使えば尻など痛くならんだろう、お前も魔法の有効活用を学べ。誰も魔法を使えない訳ではない、聞けばよいし文字も分かるのだから本からでも学べるのだからな」

「団長、あたし今夜はハラハラドキドキだったんだよ、ユースケが強力な魔法で盗賊ギルドをふっとばさないかってね」

「あはははっ、俺も本当の所は冷や汗ものだったぜ」

「さあもうすぐ着くぞ、お宝の配分は明日だ、今夜はもう寝よう」

「団長、もう朝に成りかけだよ、寝ぼけてるね」

「カイト、お前に言われたくねえぞ」

「くっそお、あいつ等の仲間にも飛んでもねえ魔術師が居たって事かよ」

「こんなガチガチの強化と固定魔法なんぞ見たことがねえ」

「かなり広い範囲で強化魔法をかけていきやがった」

「ギルドも終わりか、そう遠くないうちに処刑だな」

「言うな、俺は未だ死にたくねえーんだぜ」

「そいつは俺達だって同じだ、金が有れば警備隊の奴らに、賄賂として出せば見逃してもらえたかも知れねえが。あれはなんだ、一瞬で金の袋が消えちまったぜ」

「移転魔法だか転移魔法だか知らねえがそんなもんだらうよ」

「最初っから勝ち目は無かったと言う事か、くっそお」

「残ったのはサーモナンだけか、今頃何をしているんだかな」

「それを知ってどうするよ、だぜ、今頃てめえの部屋で呑気に寝ているかもよ」

畜生、何がギルド長だあ、こんな時何もできねえ爺じゃねえかあ。

馬鹿・？・止めろー・・・ドンゴォッー・・・ぎゃあああ
ああ~~~~。

ハリアの街の盗賊ギルドは、ギルド長セレステ・モンノイ以下百四十二名は逃走用地下トンネル内にて、手下何名かの魔力暴走により焼死。副長サーモナン・デクセイテは、ギルド内自室にて刺殺体で発見された、又、路上にて多数の盗賊ギルドメンバーと思われる者達が発見され捕縛された。ギルド内内紛にての闘争の結果と思われる、さらにギルド内金庫は空であり。闘争に勝利したメンバーが運び出した物と思われる。 以上

ハリア警備隊 総隊隊長 ネイラー・シ・ゼクセル

「だってよ、殺さないでいたら自爆かよ、あとは教団がどう出るかだな」

「ふむ、団長はこゼクセルと言う男を知って居るか」

「直接は知りません、ハリアに来る前は王都警務取締副長をしていたとは聞いて居ます」

「この男は曲者だぞ、とつととんずらした方が良いかも知れんぞい」

「顧問、ユースケを欲しがるとか？、ですかね」

「まあユースケをどうにか仕様なんて思ったて、あの子自由だし」

「そうは思うけど、王太子の陰の手って言う情報も有るのよね」

「その情報はどこから」

「義妹が王宮で侍女しているのよ、誰のとは聞かないでね」

「ほう、ネイルは随分と良い所のお姫様だった様だな」

「馬鹿ね、直系なら冒険者なんて夢だったわよ」

「この団は面白いの、団長からして面白いから当たり前か」

「顧問、貴方も結構面白い方の様で」

「フォッほほほっ」「んふふふっ」

「きも、爺とおやじが見つめあってきも」

「ブー―？、あははははっ」

ユースケと出会い

ユースケは一人、深夜のハリアの下町、第一城壁にへばりつくように立ち並ぶ家屋のスラムを歩いている。ここは、全ての種族で最下層の者達が住む町だ。そして全ての悪が有ると言っても良いだろう。

ユースケは第二城壁の北門広場に、馬車の中にムロを置いてこちらに来了。目的は奴隷狩りの連中だ、郊外から帰って来る奴隷狩りの者達を狩る為だが。下町の、スラムの闇の中を蠢く者達は、ユースケの存在を知覚し姿を消している。圧倒的な強者であるユースケに、今はもう誰も手を出して来る者等いない。

下町のスラムで良い物件の中に居る者達は、それなりに力の有る集団が居る事は当然だ。奴隷狩りの集団もその一つだ、ユースケは日中の午後はこの近辺を馬車で走り観察している。当然精霊たちをお願いしての探査でだが、魔力探知に引っ掛からないので便利だ。

「旦那、出かけていたリユーベから早馬でさ」

「ほう、何か良い狩りが出来た様だな」

「へい、ホワイトエルフの雌一匹と虎族の雌が二匹手に入ったそうです」

「ほう、怪我はさせて居ないだろうな」

「なあと、ケーミ婆とロンジー爺さん二人の芝居にはコロツと引

っ掛かっての事でした」

「ふっ、死に欲に塗れた二人には騙されるか。まっ、精々頑張ってもらうか」

「旦那、孫を押さえての上ですからね。頑張らざるを得ないでしょうよ」

「ふん。売り物にもならねえガキだが、別な意味で使えるガキだ。痛め付けたりはするなよ」

「旦那、キーキーうるせえガキなんざ見たくもねえですよ。他の連中だって同じでさ」

「ああ、それなら構わんが。俺はこれから出かけるぞ、侯爵にエルフと虎雌が手に入ったと知らせてくる」

「あの侯爵も随分と物好きだぜ、雌虎は兎も角エルフに手を出そうなんてな」

「身分に触るが、それがまた良いのだろうさ。それに殺されるのは侯爵だ、わし等は注文された品物を届けるだけさ。まっ、王家に知られたらやばいがな」

「終わったら例の町へですか」

「ああっ、その準備もして置け」

ユースケの目指した建物の前に、曰くありげな馬車が一台止まっている。

「ふん、買い手でも来ているのかな」そう呟くと一気に馬車を破壊した。

「何者だ、わしはこのハリアの侯爵家の者だぞ。いきなりの攻撃は死罪だぞ」

ユースケはそう喚く男を軽く蹴り飛ばし気絶させた。建物の中から数十人の男達が飛び出してくる。

「あつ、このガキは悪どもを狩っている奴だ」

「へえ、見た目只のガキじゃねえか」

「そんなに強そうじゃねえが、隣国の奴隷軍に捕まえて売り飛ばしてやろうぜ」

「甘く見るなよ、此奴のおかげで街の切り裂き連中が軒並み潰されているんだからな」

「話じゃ盗賊ギルドを潰した連中の中にも居たっていう噂だぞ」

ユースケは、騒ぎ立てる男達に言った。

「お前達は奴隷狩りの使い走りか」

「なんだと、街の木端共と一緒にするなよ。俺らは奴らの何倍も強えんだぜ」

「へっ、それがどうした糞野郎共。これでも喰らいやがれ」

破壊した馬車の残骸を大剣で殴りつけ、男達に向かって飛ばした。飛ばされた残骸の一部は、男達を襲い突き刺さりぶち当たる。一瞬で半数以上倒され呻く者達、立っている者達もそして殴り飛ばされる。

建物の前に飛び出してきた男達、一人として無事な者は居ない。多分、朝までには丸裸にされて転がって居る事だろう。命有って転がって居るかはまでは分からない、して来た事を見やればそれは無理とユースケは思った。

馬車の残った残骸の中から、一人の男が転がり落ちてきた。

怯えきった男、ハリアの侯爵の一人で名はヒーリス・ファ・ロンデイル。

「これ以上わしに手を出すな、手を出したら斬首だぞ」

「奴隷を買いに来た爺が一人死んだって、誰も気にはしないよな。特にここは下町のスラムだ、護衛もなしに居るお前が生きてここを出られるとは思えないよ。まっ、俺の知ったこっちゃないけど」

そう言い捨てて建物の中に飛び込むユースケ、小声で「武器を持った者達に」中を見渡せば武器を突き付けられた奴隷らしい者達が並んでいる。

「小僧、お前の目的は此奴ら奴隷だろう。生憎だったな、お前が武器を捨ててこの奴隷の証しの首輪を嵌めない限り。一匹ずつ此奴らを殺す」

「雷撃」そう言葉を発した瞬間、真っ白な光と共に武器を突き付けて居た男達が倒れた。

「なっ」

旦那と呼ばれていた男は一瞬にして首輪を持った腕を斬り飛ばされ。悲鳴を上げる前にもう片方の腕も斬り飛ばされ、絶叫を上げて崩れた。

ユースケは「探査金目」そうふざけた様な言葉を発して歩き始めた、目の前の奴隷となった者達の首輪に魔力を注ぎ込み破壊して。

「これから此奴らから奪った金をお前達に渡す、安全な場所まで連れて行くから俺に付いてこい。信用出来なければ此処に居てもいいが、その結果は保証しない。渡した金で好きな所へ行くがいいさ、ただしきちんと武装して行けよ。そうしないと又同じ結果に成るかな、ああそうだ、二人以上で組んで行け」

ありがとう、私はホワイトエルフのアルマ・ディーク。貴方の名前を聞いても良いでしょうか。

「うーん、名乗っても良いけど。広めないと約束してくれるかな、そうでないと此奴らを狩るのに支障が出るかも知れないからな」

「皆さん、私達だけの秘密に出来ますか」

「大丈夫だ、だけどその前に俺達を騙したあの二人を捕まえないと」

「それなら奥に居る見たいだぞ、年寄りが二人と子供が一人。たけ

ど捕まえる必要は無いさ、後ろ盾が無くなったのだからな」

「そうですか、そうですね・・・彼らもこのスラムの中では無事に居られないかもね」

「そういう事、理由が何であれ。落とし前は自分でって言う事さ、色々と恨まれて居る様だよ」

金庫を探し出したユースケは、大雑把に捕まって居た者達に配り。

「俺はユースケ、冒険者だ。もう少ししたらこの街を出る、もう会う事も無いだろうが気を付けて行けよ。あゝ・・・そうか、取り敢えず付いて来て」

表に出る前、無駄な事とは解って居るが。顔を隠す様にマフラーで口元を押さえながら建物を出た。遠巻きにしているやじ馬たちに「金目のものは好きにしている、早くしないと役人が来るぞ」そう叫びやじ馬を割く様に飛び出した。ワツと声を出し建物に駆けよるやじ馬、ユースケは握って居た銀貨をばら撒いて道を作った。

捕まって居た者達は、必死になって付いてくる。ムロの待つ北門の広場に走り込んだユースケとアルマ達、「乗れるだけ乗れ、天井にも乗れるぞ」その声に必死に馬車に乗って来る人数は二十人は超えている。

「主殿、後ろから押さないと馬車が動きません」

「俺だぞまかせろ」

馬まで押されて走り出す、その速さに乗った者達は必死で馬車にし

がみついた。

「イリスさんリカルさん、私絶対彼に付いて行く。冒険者ギルドに行けば情報が有る筈よ」

「あたし達もそう思って居たよ、あんなぶっ飛んだ彼に付いて行ったら絶対面白そうだって」

「イリス、その分トンデモナク危ない目にも遭いそうだよ」

「なにその棒読みは、怖いのかリカル」

「怖いけど付いて行きたい、惚れたわ」

「「げっ、ライバル」」

「はい、アルマさん・・・貴女もですか」

「「「うゝ・・・強敵かも」」」

「俺達も行くぜ」「俺ヤツク」俺はクスタ」「「よろしくな」」

「あー、あの大きな彼って熊族よね。ユースケさんの事を主殿って言ってたわよ、彼ってどこかの貴族かしら」

「そうは見えなかったけどなあゝ、でもそれはまず置いてどうしたら彼の下に行けるかだな」

「ギルドに行ってギルド長に相談してみたら」

「えゝ、そんな事出来るのアルマさん」

「私はエルフよ、亜人とは言っても人族の中でも一応貴族扱いだから」

「えゝ、そうなんだ」

「権利権力は使わないとね、うん」

「うわあゝ、俗っぽいエルフゝ」

「「「「「「あははははっ」「」「」「」」」」」

借家

カイトの退団と団長とネイルの結婚

「ゲルバルド、貴様とこうやって飲むのは何時ぶりかの」

「閣下、かれこれ五年以上になります」

「そうか、わしも歳をとったものだ。だがこの様な科白を言えるのも、戦場で散った部下とわしの代わりに傷を負ったその方達のおかげよの」

「そのお言葉で亡くなった者達も浮かばれましょう、そし戦傷を負った我らにも、厚い手当をされて戴きました。閣下がそれ以上我らに思い遣るは過ぎたる物と心得ます、もう過ぎだ事故お気に病みされますな」

「有りがたき言葉ぞ。所で団の子供がパックの耳に興味深々ぞ、又来ないかと心待ちにしておる。あれも同世代の者が傍に居らぬ故、寂しいのだろうと思う、手すきの時が有ったら遊びに來させてくれぬかの。あれも中々面白く興味深い子じゃよ」

「閣下、あの少年は少し処か、わたしでも少し異質に感じますが。どう言った経緯でとお尋ねして宜しいでしょうか」

「うーん・・・、貴様に話してやりたいが。これは団の機密でもある、わしの口からは言えぬ事じゃ。そのうち色々と風評が届くであろう、ハラハラドキドキと聞けば良いと思うぞ。只わしに言える事は、あの子には建国の相と力量があると見ている。ふふふっ、孫までは行かぬが、老いてからの子・・・の様な者よ」

「閣下には、わたしから願いが御座います。パックの事です、あの子はあの屋敷と共に手に入れましたが。彼には外の世界を見せてやりたい、そして出来るなら両親に合わせたい。あの子の二親はあの屋敷の奴隷でした、あの屋敷の持ち主が商売に失敗し、借金の一部としてあの子の両親をあの子が幼い時売ったのです。奴隷の子は奴隷、あの子も売られそうになって居ましたが、わたしがあの屋敷の一部と言ひ張り無理やり買ったのです。その事が有り、いまだわたし事を主人扱いをするのですよ。買われたと言う事実の前には、いかんとも仕様が無い感情があの子の中にあるのやも知れません。閣下同様わたしにも子は有りませぬ、さりとてあの子を跡継ぎには無理が御座います」

「この街の人族の獣人族亜人に対する感情と扱いか、なんとも御し難い者共よの。ふむ、わしは団の顧問の立場、口を聞いてやる事しか出来ぬがの。パック少年が望むならそうし様、だが自分から団に入りたいたか、団から請われる特技が有ればだが」

「ケイリス、ちと話がある、いいかな」

「いいですよ団長」

「では俺の部屋に行こう」

ケイリスは多分カイトの事だろうと思って居る、屋敷に来て四日目、何処か気の抜けた様子を見れば危うさが垣間見える。金も握った、もう命のやり取りをするのは御免だと思い始めているのかも知れないと。

「まあ座ってくれ、話と言うのはカイトの事だ。既に気が付いて居るだろうが、奴をこのまま連れて行けば誰かが傷を負う、傷だけで済めば未だいいがな」

「確かに、だが本人に一応気持ちを聞かないと。金を持たせてポイは拙いでしょう、その金の出所等探られたら困る事に成る。地道な商売が出来る様にするとか、確かなギルドに入れて貰うとかしないと俺達の背後が危うくなる」

「其処でだ、俺は不動産ギルドのパックを引き抜こうかと思って居る。そうすれば入れ違いにカイトを押し込める事が出来ると思うがな、もっともパックが嫌だと言えば無の話だが、俺は脈は有ると思うがな」

「まあ、ムロも居ますしユースケも居る、他の団に入るよりは条件が良いですが。ただ立場をどうしようかと言う問題が有る、ムロはユースケの臣下の立場を取っている。そうは言ってもそれをパックに押し付ける事は出来ないし、俺的にもそういう事はしたくない」

「うーむ、ユースケも未だ子供だ。幾ら魔法と剣が目茶目茶でも、人を引っ張るには若すぎるし経験が無さすぎるしな。やはり勧誘して良しとしたら立場をどうするか聞くしかないか、外の世界も必ずしも獣族や亜人には優しくは無いからな。いよいよになったら顧問に相談し様」

「ネイルさんはどうする事にしたんでしょうか、このまま冒険者を続ける事になっているんですか。団長もいい加減身を固めたらどうです、ネイルさんもやきもきしているんじゃないですか」

「ぶつ、・・・ばれて居たのかよ」

「ユースケでも解って居ますからね「あの二人いい加減にしなよなバーカ」とか言ってますから」

「そ、そうか・・・ははっ、いや・・・まいったな」

「確かにカイトが抜けるとなると団のレベルが下がりますから、受けられる依頼も下がりますがね。まあ、金も有る事ですし慌てる事も有りませんが。その分パックとユースケの個人レベルが上がるよう頑張って貰えば大丈夫でしょう、かえってその方が此方としては幸いかもと思えますし」

「パック、話があるのだからいいかな」

「はい、大丈夫ですゲルバルド様」

わたしは閣下に相談し、早めにパックの気持ちを聞きたいと思い今日呼んだ。

「それではわたしの執務室にゆこうか、暫くはだれも来ない。大事な話なので誰も近寄らない様に、そう言って有ると言った方が良かったかな」

ゲルバルド様は、屋敷と僕が売られそうになった時。僕と屋敷を一緒に買って呉れた、僕が十歳の時だった。その時、ゲルバルド様は言って下さった「君の両親が生きて君に会いに来た時、君が居なければ意味は無い。人生には諦めなければならぬ事が沢山あるが、君は未だ子供だ、諦めるのはもっと後で良いだろう」。そう言って

今まで育てて下さった、読み書きも魔法も剣や槍や弓や体術も。育ての親であり師匠でもあり、ご主人様でもあります。大切な話とはなんだろう。

「単刀直入に言おう、冒険者 赤い風の団が君を欲しいと言ってきた。団のカイトと言う青年が退団する事になった、その代わりに君を欲しいとね。わたしは烏滸がましい事を言うが、君の育ての親であり師匠であると自負している。君は冒険者に成っても大丈夫な位は鍛えたつもりだ、だが君がわたしの元に居たいと言うのなら断ってもいい」

「僕は、そのカイトと言う人の代わりでしょうか」

「それは無いな、わたしが君を鍛えたからと言って。現役の冒険者ランクBの青年に、勝てる程は鍛えられなかったな。君の実力はG程度だよ、わたしの身体がもう少し動かせたらと思ったがね。それからもう一つ、わたしは君をずうっと傍に置きたいが、この街は君達の様な獣族や亜人が住むには辛すぎる街だ。わたしが元氣なうちは良いが、そうで無くなったり死んだりしたら、君は知らない誰かから知らない誰かに売られてしまう可能性もある。それは君ばかりでなく、わたしにも辛すぎる事なのだよ。冒険者として旅をして、君が君として生きて行ける場所を見つけて欲しいと言う願いも有る。それに、君には搜索と探査、地と水の魔法が有る。充分団に貢献できる思う、ムロ君もいる、何よりユースケと言う少年は君にとって生涯の人に成るかもしれない。それを決めるのは君だ、それから両親が見つかるの良いのだがね」

「ああ、団は後三日程しか居ない、出来れば明日の昼までに返事が欲しい。行くのなら、わたしに君の旅の準備をさせて欲しいのだよ」

「わかりました、一生懸命考えます」

「ああ、そうしてくれ。旅にできれば、ここに戻りたくなっても、簡単には戻れないだろうからな」

「団長、話が有るのですが良いですか」

「俺もお前に用が有ったな、まあ、多分同じ話だろう」

「では俺から言います、俺、退団します。三年の間お世話になりました、ありがとうございます」

「そうか、分かった。だが明後日まで待て、代わりを頼んでいるし。俺とネイルの結婚式も有る、それが終わるまでお前の退団は許可しないいな」

「団長、やっとその気になったんですか。姐さん良かったあゝ、ただけ気をもんだかゝ、返事はちゃんともらったんでしょ。ね。姐さんは結構照れ屋で天邪鬼な所がありますからって・・・なんですかその苦虫万匹噛み潰したようなぷっさいくな顔は」

「実はな・・・まだ言っ居ないんだよ」

「なんだって、馬鹿ですか、結婚を申し込む前に俺に言っただんですか。マジパネ馬鹿じゃん」

姐さんあゝゝゝん、団長が喉に馬鹿虫詰まらせて死にそうですうゝゝゝゝ？。

「なんじゃ馬鹿虫って」

ドダダダダダ~~~~~「きゃああ~~~~死ぬなあ~~~~」

ボグッ・・・・・・

「殺す気か・・・ネイル？」

「駄目、死んじゃ駄目～。未だ一寸しか気持ちいい事してくれてないんだよ、沢山してから死んでえ~~~~」

「一寸はしてたんかい、姐さん明後日結婚式だってさ」

「ぬあない~~~~、あたし以外の誰と結婚すんのよこの浮気者、殺してやる~~~~」

「カイト、なんで馬鹿を煽る」

「そのバカカップル、うるせえよ、俺の昼寝を邪魔するなあ~~~~」

「うあ、ユースケ電撃飛ばすな~~~~」

借家 カイトの退団&仕事

わしが所要から帰って見たものは、電撃を喰らったらしい五人の気絶した身体。どうやらユースケを怒らせ様だ、どうせ昼寝の邪魔をしたからだろう。あれ以来ユースケは実戦訓練と称し、夜の街へ一人で繰り出している。怪我をして帰って来た事は一度も無い、当たり前前にユースケに勝てる相手は居ないだろう。

「お帰りのさい顧問」

ムロが顔を顰めて起き上がって来た。

「どうしたんだこれは」

「自分にもわかりません、ただ団長とネイルさんが結婚がどうか……」

「なんだそうか、ギャリクとネイルが結婚をするのか。どうせネイルが勘違いをして、騒いだからユースケに電撃を喰らったんだろう。お前は巻き込まれただけだ、気の毒だったな」

「えー、自分は巻き込まれたんですか」

「あー済まなかったムロ、俺に団長が結婚をするって言ったのに、姐さんに未だ申し込んでないなんて言うから。嘘ついて姐さんと呼んだんだよ。でっ、団長が結婚をするって言ったら浮気者って姐さんが騒いでさ」

「それで主が五月蠅いと言って……」

「思った通りの結果か、度し難い二人だな。たたき起こして結婚式の用意をさせなさい。終わったら街を出るのだからな」

「顧問、俺退団する事にしました。この街に暫くいて、やれそうな商売があればそれで生活して行きたいと思います」

「うむ、そうか。自分で結論を出せたのだからまだ良い、誰かが怪我をしてからの結末では悔いが残る事だからな」

「カイト、団を辞めるの。この街を回って見たんだけど、本屋が極端に少ないのよ。お金も有るんだからさ、あんた本読むの好きだし此処を買い取って本屋でもしたら」

「いやいや姐さん、こんな街外れで本屋は無いですよ、第一広過ぎでしょ」

「ふあ、・・・何騒いでるの」

「主、酷いです」

「あ、ムロも巻き込んだか、さいよに大きな声を立てたのカイトだろ。カイトに文句を言いな」

「え、退団する俺に文句を言えってなんだよ」

「でっ、今何を騒いでいたのさ」

「はい、無視ですか、まあユースケだからなく。いやね、姐さんがここを買い取って本屋でも開けっと言うんだけど広すぎるだろ。そ

れに態々こんな辺鄙な所にさあ」

「んー、辺鄙だから良いんじゃない。それに本だけでなくって、いろんな物を売る場所にすればいいじゃん。こう街を見て回って見ると、街の商売人の所は馬で来たり馬車で出来たりする人には不便じゃないか。自分でそれやったら恨まれるだろうから、場所を提供するのさ。あー場所と店舗貸しね、売上の何パーセントなんて言わないでひと月これだけと決めて貸すのさ。ここなら広いから、其々の店舗を一か所に集めた建物も作るのも出来るしさ。馬止めや馬車止めの場所も作れるよ、一か所で自分の買いたいものが買えるって便利じゃないか。子供連れには託児所なんかも有ったら喜ばれるかもね。それに物を売らない傭兵ギルドにはさ、警備とか馬や馬車の見張りとか誘拐の防止とか、夜間の警備も必要だしね、そんな仕事もって頼めるし。不動産ギルドも忙しくなるかもね、そうなれば近くに家を建てたいとか、土地を買いたいと思う人は居るだろうし。ただ酒場とか、いかがわしい商売は駄目だよ」

「おー、ユースケ凄い事を考えたな、一か所でなんでも売るんだ。それなら人も集まるよな」

「あー、この街には乗合馬車も無いのな、歩くしかない人用にそれも作ったら。街の中をくるくる回り歩く乗合馬車、街の外には有る見たいだけどさ」

「なる程のう、場所を提供するだけだからギルドに入る必要もないし。色々と話を持って行く必要もない、店を持たないがギルドに入ってるならばすぐ商売を始められる。金が余らないなら荷車で売らせる、場所代をとってな。敷地の外でもテント張りの小店を開かせる事も可能だの、警備は敷地の中には傭兵を、外には冒険者達に警備をやらせる」

「なんで外は冒険者なんだ」

「ユースケ、冒険者は建物の警備はしない事に成っている、傭兵との住み分けの縛りなのだよ。カイトには今金がある、すぐにここを買い取り、周りも小店を開ける位の幅で買い取れ。建築ギルドにはゲルバルドを通して話を持って行けば良い、そうだな、ん、顧問にゲルバルドを置け、後ろ盾だな。役人にも顔が利くだろうからな、わしからも頼んでおく」

「顧問、ありがとうございます。今から行って頼んでみます、受けて貰えなかったらその時はよろしくお願いします」

「うむ、最初から人に頼らず自らが動く、良い事だ」

「だけどカイト大変だよ、ここを管理するんだからね」

「あたしもさ、冒険者が出来なくなったらカイトに場所を借りて何かのお店をしようかしら」

「ネイルは旦那の団長に食わせてもらえばいいじゃん」

「子供が出来たらそうは行かないわ、冒険者の亭主からのお金なんて当てに出来ないものね、ね、ギャリク」

「な、なんだよ、明後日結婚式を上げたらすぐに出立だぞ。今から色々しなきゃならん事が沢山あるだろ、呑気な事を言ってんじやないよ」

「きゃあ~~~~、そうだったわ、結婚衣装~~~~。ギャリクボー

ツとしてんじゃないわよ」

「ユースケ、二人の結婚祝いどうする」

「当たり前前に隔離馬車さ、あんなのが傍にいてみろよ、目のやり場に困るだろ」

「所で二人、馬車で行った様だな、馬車の修理出来んだろ」

「ケイリスけち臭い事言うなよ、金が有るんだから馬車と馬と竜を買いに行くぜ」

「馬は後六頭、竜は一頭でいいだろう」

「いや馬は五頭、竜は二頭だ、馬じゃ剣を背負っては走れないよ。」

「あゝ、あそこまで歩くのかよ、面倒臭いよなあゝ」

「やっぱり竜が欲しいか」

「団長は目立つから駄目って言ったけど、一頭いれば二頭居たっておんなじだよ」

借家 パックの入団とパックユースケの家臣になる

コンコン「パックです、今よろしいでしょうか」「構わない、入りなさい」

「結論は出したのかね」

「はい、冒険者になり赤い風の団に入りたいと思います」

「では、わたしに冒険者の支度をさせてくれるね」

「はい、お願いします」

「それでは団に顔を出してからだな、ムロ君と一緒にギルドに登録させたいと言っていたからね」

「皆さんお揃いでしたか」

「ああ、ゲルバルド、パック君は入団するのか」

「はい、よろしくお願いします」

「わしはパックの入団祝いに、装備を買いに武器屋と防具屋と道具屋にパックを連れて行く。ギルドの登録はその後でよろしいかな」

「ああ構わない、馬は居るから買わなくとも良いぞ、登録はムロと一緒にするから一度こちらに戻ってほしいのだが」

「わかりました、では少し時間を頂きます」

「猊下、盗賊ギルドが殲滅したと報告が来しました」

「影の者達の到着は間に合わなかったのだな」

「はい、それから冒険者達の事です。確かに冒険者の方が、戦闘に掛けては盗賊共を凌駕する力があります。しかし、これ程簡単に殲滅されるとは納得が行きません。調べて力が有るようなら、教団に引き入れて猊下の駒にするのも良いかと」

「獣人が居ると言ったな、余は獣人や亜人は好かぬ、それらが居なければ構わぬぞ」

「我らの方に入るのを、拒む様ならなんと致しましょうか」

「許す、その様な不埒者はどの様な手を使っても消せ、見せしめに身の程知らずと曝すが良い」

「はっ、お心の儘に」

「まずはその方が説得せよ、それからで良い」

「うーむ、馬上槍が良いかな、剣は片手用の長剣で小さめの盾を持って……うーん。ええい面倒じゃい、騎兵の使う槍と剣の武器

一式と弓。地べたで戦いやすい盾と片手剣と槍でどうじゃ、剣はこれを一寸振って見なさい」

「ゲルバルド様、幾らなんでも身に過ぎたる物ばかりです、駆け出しの冒険者が持てる物では有りません」

「何を言う、安物など持たせて怪我や死ぬ事に成ったらわたしが悔やむ、わたしの為だと思ってくれ」

「しかし、それでは余りにも・・・」

「良いんじゃない、そう言う心配をして買って呉れる人がいてさ、甘えるのも恩返しの一つだぜ」

「ユースケ様」

「おいおいおい、仲間になろうって言う奴に様は無いだろう」

「ユースケ君良い事を言ってくれる、どんどん言ってくれ、遠慮ばかりで決まらんのじゃ」

「育ての親と師匠には、変な遠慮はしないのが身の為だ」

「分かりました、それでは思いっきり甘えさせていただきます、財布の中を空にする程に」

「あはははっ、ゲルバルドさん、覚悟は出来ましたか」

「改めてそう言われると、怖い気がするのは何故だろう。所で二人は武器屋に何をしにですか、十分に武器はお持ちの様だが」

「うん、この間来た時、ムロに合いそうな飛び道具を見つけてね。それを買うのと、俺用の飛び道具が無いかと探しに来たのさ」

「主、主には飛び道具等必要は無いのでは」

「頭に血が上って、殺さなくても良い物まで殺す事に成ったら嫌だろう。魔法制御が完璧に成るまでの小道具さ」

「殺さない為の武器ですか、そんなのが有るんですか」

「あったら良いなと探しに来たわけだよ」

「防具屋にも用が有る、ムロと俺が身に着けるマントを注文して置いた」

「主の紋章入りのマントですか」

「紋章と言うより家紋だな、ムロは家臣の姿勢を崩さないからその方が良くないかなと思ってさ」

「主、うれしゅうございます」

「マントは二枚ずつ作った、汚れたり切れたりしたら大変だからな」

「大切にいたします」

「あゝ、まあ良いから武器を見て回るぞ」

「あの、ゲルバルド様。僕がユースケ様の家臣に成りたいと言ったら怒りますか」

「何故怒らねばならないのかな、パックが決めた事にだ。パックには不本意だろうが、わたしはお前の身を護る為に、団の誰かにそれを頼むつもりだった。自分であの人のと決めたのなら、何を言うべきなのかね。しかしその理由を知りたいものだな」

「ムロさんに渡すマントは家紋入り、ユースケ様は紋章ではなく、家紋と言われました。紋章は飾りです、家紋は家の印、家族と認める印です」

「そうか、わたしを様と呼ぶは家族ではないからか」

「それは……」

「良いのだ、わたしが少し愚かだっただけの事だからな。しかしあの様子を見ると簡単にはマントを手渡したり作ってくれたりはしない様だぞ」

「ええ、その様ですね。でも頑張ります、家臣に欲しいと思っています」

「旦那、口実は有るでしょう。この子の身を護る為一枚譲ってくれてさ、後は一生懸命勤めて認めて貰えば良いじゃないですか。時には嘘も方便ですって、坊主頑張れよ」

「店主、礼を言う」

「旦那、へへへへっ……良い物買ってくださいって事で」

「成る程、商売人の鏡だな」

「旦那、商売人におだては……へへへへっ」

「なんで武器屋にこれが有る？」

「主、なんですかそれは」

「魚を獲る道具だよ」

「確かにそれは変ですね」

「魚を獲ってこいとかの依頼でも有るのかな？」

「魔物を無傷で獲ってこいとかは聞いた事は有りますが……魚は知りません？」

「依頼に余りなさそうだけど、水棲魔物でも居るのか、半漁人とか」

「半漁人は魔物ではありませんが居ますよ」

「上が人で下が魚とか」

「上も魚で下も魚ですが、腕と脚が有りますから武器を持って襲ってきます」

「うえっ、一度見たらしばらくはうなされそうだよ」

「主が美味しい美味しいとか言って食べて居ましたが？」

「なんだぁどおおおお～～～～～～」

「消化もいい魚ですから」

「半漁人だろ・腕も足って奴も人みたいなんだろ」

「腕と脚を取ってしまえば普通に魚ですから」

「・・・分かった・・・聞かなきゃ良かったぜ」

「それでこれは買うのですか」

「うん、魔法をイメージする訓練には使えそうだからな。ムロはそれの使い方を知っているのか」

「使った事は有りませんが、近くで見た事が有りますから使い方は解ります」

「時間を見て慣れればいいよな」

「はい。所で主、パック君が主にマントをと言って来たらどうしますか」

「保護を求めてくると言う意味でか、それともムロの様に家臣になんてと言う意味でか」

「ゲルバルドさんが最初は保護の為と言っては来るでしょうが、本人に何故言わせないと主が言えばそれは無でしょう。駆け引きめいた事を言わずに、家臣にと言って来たらどうしますか」

「ムロは俺を主とか言っつて自分の自由に枷を架けたよね、それはある意味主と呼ぶ俺にも枷を架ける事とは思わなかったのか」

「思いました、主は臣下を物心両面から保護しなければなりません、行動を共にし命を守る義務も有ります。一蓮托生と言う事を、言わば押し付けたのですから。ネイルさんも悪戯好きです、下僕だなんて言ってきたのですから。言葉が良くわからない主に、臣下とまで格上げの交渉をした自分を褒めたいですね」

「その事で、守られるはずの命を差し出さなければ成らない羽目にもなったよな」

「下僕は最小限の衣食住を、家臣にはその働きを主として評価し、臣下に立場を確立させる必要が有りますが。それには家臣として主に命を預け命を差し出す覚悟が必要です。自分は命を差し出して悔いなし、と感じたからです」

「あうゝ・・・どの目で見てそんな事を言うのかね、重すぎて倒れそうだよ」

「でっ、どうしますか」

「保護は保護、家臣は家臣。姑息は嫌いだな」

「これがマントだ、ムロは魔術が主体では無いからな。俺のはロブに仕様かと思っただけ、変だから止めて俺のもマントにしたよ」

「変わった家紋ですね」

「俺の所は、武を持つ者の家は植物を家紋にするのが多いんだよ」

「主の家は武の家系ですか」

「まあね、時代が変わって余り意味は無くなったけどな、それでも祖先の誇りだからね」

「家紋は花、タチバナの花だ、こっちは有るかな」

「家名が花の名前ですか」

「いって置くけど、由来まで聞くなよ、古いから長いので覚えるのは無理」

「ユースケ君少し良いかな」

「うんもう用は済んだから」

「君に頼みがあってね」

「ゲルバルド様お待ちください、僕から話します」

「そうか、自分の事だからな」

「ユースケ様、僕にも家紋入りのマントを下さい」

「それだけ？」

「はい、それだけです」

「おいムロ、話が違うじゃねえか」

「いやあゝ・・・はははっ、そう来ましたか」

「まあいいや、別に何する何かしろとなんて無いからな。パック、お前の家名はルパルドだ、善いな」

「はい、ありがとうございます。ゲルバルドさまから頂いたのですね」

「お前ゲルバルドさんの子供分だろ、まるっと頂いたら恥を掻いた時迷惑だろうからな」

「わっはははっ、そうか、わしはまるっとでも良かったんだがな。ユースケ君よろしく頼む」

「俺が何かをする訳じゃない、するのはパック自身だからな。俺の国にはこんな言葉が有った、命を惜しむな名を惜しめってね」

「成る程、良い言葉だ。パック、家名も付けて頂言葉も頂いた、これ以上の事は無いの」

「店主、これと同じ物をもう二枚追加だ、明日の昼過ぎまで出来るよな」

「はいお任せ下さい」

「パック、出来るまでこれを身に付けておきな、それでも何かして来たら斬り捨てて構わない」

「はい、頑張ります」

「おっ、中々にあうじゃなか。隣は熊がマントを来ている様だけだな」

「主、自分は熊族獣人です、何かご不満でも」

「パック、真面目はいいけど度を越すのは嫌がられるぞ」

「は、ははっ。はい」

「それでは一度団に戻りましょう、ギルドには歩きで行きますから夕方になっちゃうのかな」

「どうだ、ムロもパックも恰好いいだろ。残念ながらおれはマント掛けだ、残念」

「わっはははっ、ユースケはそんな事を言って本当は一番褒めてもらいたいのだろう。子供だぞ」

「あれえ、ビュージョさんには丸わかりでしたか」

「もう早く行かないと夕食が遅くなるぞ、それとも偶にはギルドの

飯でも食べるか」

「ケイリスそれ良いね、あのバカップルなんて当分嫌だぞ」

「わしも嫌じゃ、さっきまで何か知らんが必ず目の前に居おる、見せつけるのもいい加減にしろと言いたいぞ」

「ユースケ、結婚祝いの隔離用馬車は正解だったな」

「後で色々魔法を掛けて置くよ、そうでないとんでもない迷惑事が有りそうだしね」

「でっ、その馬車の御者はだれがやるんじゃ」

一斉に視線はパツクへ。

「嫌ですよ、僕は・・・あゝ先頭に自分らが乗る馬車が走ればいいんですよ。それに制御綱を結んでしまえばあとは勝手に着いてきますから」

「おっ、危険察知で回避機能が働いたな」

「中々優秀じゃないか、とっさにそれだけの事を思い浮かべるんだからな」

「おっ、ここがギルドか、流石でかい街のギルドは違うな」

「ではケイリス、二人を頼むぞ、わしらは席を取っているからの」

「おい小僧、そんな大剣を背負って何処へ行く、小僧にやもつたいねえな。俺がつかってやるからよこせ、がははははっ」

もうすでに出来上がった男達が大勢いた、その中の一人の酔っ払った大男がユースケの前に立ちふさがった。

「おう、いいぞ持てるのならな」

ひょいと背から大剣を降ろし、立ちふさがった酔っ払いにポイッと剣を投げてやるユースケ。受け取った大男はそのまま撃沈、助けてのたの字も言えぬまま気絶した。

「なんだ、持てるのかと思ったら口だけか」

おい、あの小僧。夜な夜な街のごろつきどもと喧嘩をして、相手をズタボロにしている奴じゃないか。警備隊の奴らが表彰物だなんて笑っていたぞ。

へえ、あの大男もごろつきみたいだな、その延長で遣られた訳か。

しかし凄いな、あんななりであの大剣かよ、野郎潰れちゃったぜ。

ハリアの街の最後の夜、やはり一騒ぎで始まった。ムロとパックは常識はずれのユースケの存在に、なにか頭痛を覚えるのだった。そしてビュージョの一言にげんなりとした。

「祭りが始まった様だのお、何人潰されるか見ものじゃわい」

借家 一年は487日だ&結婚式

バックに、何気に一年は何日と聞いた、487日と明確に返事が来た。何、およそ122日も長いのかよ、んじゃあ俺の歳は。たまるかあ、計算は止めたってか、ガキだぜ知らない顔をしていう。

今更酒は禁止、とか、急に子供扱いされるのは絶対嫌だ。元の世界じゃ、公的に大人と認められる歳にもう直ぐだったんだからな。

ユースケ様は、突然一年は何日と聞いてきた、何を今更聞くのかと思いつながら487日と答えた。一瞬、ユースケ様の顔がびっくりにした顔になった。その後、なんだか挙動不審でした。顔色が変わる、一瞬顔を顰めてウロウロと、何か決意したような。後でケイリス副団長に話してみよう、ユースケ様の秘密に触れた様なひと時でした。

うーむ、憎らしい程に良い天気じゃ。あの鬱陶しい空気が暫く続くだろうが、新婚相手に何をいつても野暮になる。ケイリスの眉間の皺は、又深くなるだろうの。うーん、後方支援が必要だし、あざといかも知れんが、年頃の女性を入れる様提案するかの。

ネイルも、金と力に弱い女であるけれど。やはり相手が子供では、どうにもならないと言う事で。落ち着くところに落ち着いた感じた、だが・・・この急性色ボケバカップルはなんとかしたい。俺の精神

衛生上と、男ケイリス無暗に立つな、マイサン・・・くっそお・・・
・嫁が欲しいぞ俺だって。

気が立っている副団長の傍には近寄れません、気持ちには痛く同情いたします。このムロも、嫁は欲しいのですが。やんちゃな主の後始末が大変で、それどころではございません。昨夜のギルドでの騒ぎは大変でした、ギルドの酒場で喧嘩する事二十六回、全て売られた喧嘩です。主はこの街ではすでに有名人に成って居た様です、主に勝てた相手が居なかったのもそうですが。実戦訓練と称し、夜の夜中に街の暗闇に入り込み、怪しげな街人と戦って全戦全勝と言う誇っているのやら悪いのやら。

うっふふふっ、今日はあたし達の結婚式、そらは青空もう最高。結婚したら、おおっぴらにあんな事やこんな事やそんな事も・・・ぐふふっ、沢山出来るし・・・ダァーリン沢山気持ち良い事してねえっ。もうしているけど・・・ぐふふっ。

今日は俺とネイルとの結婚式、はれ上がった空はまるで俺達の結婚を祝うかの様にはれ上がっている。出席者は仲間とその縁者、肉親は居ないが冒険者同士の結婚式などこんなものさ。ケイリスとユースケが、共同で新婚用馬車だと言って四頭立ての馬車をくれた。これで心置きなく、あんな事やそんな事やこんな事を二人で楽しみたい。ゲヘゲヘゲヘッ。

借家 結婚式と新たな団員って、ユースケ隊結成

青空の下、冒険者ギルド長が立会人になり。ビュージョさんが団長の、不動産ギルド長ギルバルドさんがネイルさんの親代わりとなり。冒険者・赤い風の団団長ギャリク・カンダーと、団員ネイル・ギルバツハの結婚式が行われた。証人として、ケイリス・ラ・ポーケツトが付き添った。この世界でも、神の祝福の元と言う結婚式も有るが。二人とも、信仰心など欠片も無いから無用。

そうあっさり拒否した、奴らに無用な金をやる言われは無いと。そんなに嫌われている宗教って、どんな教義の宗教なんだとその存在意義を疑ってしまう。この宗教教団と、未来の俺が全面戦争をする事に成る等。この時点で知る由もないのは当然だ。

新婦のネイルさんは純白の花嫁ドレスにベールを纏い、新郎の団長は純白の騎士服。俺達で作った剣の屋根の下をくぐり、結婚式は終わった。俺達に贈られた新婚用の馬車に、二人はその意図に気付き爆笑していた。そんなこの二人に、恥じらいを求めるなんて馬鹿げている。夜な夜な、怪しげに揺れる馬車は見たくは無い。

式が終わった後の祝宴の最中、冒険者ギルドの長が。新人を育ててくれないかと、顧問のビュージョさん、団長と副長ケイリスの三人に申し入れをしてきた。人数は六人、多すぎるとケイリスさんが断っていたが。ビュージョさんは面接をして、それなりの力が有るならば入れてはどうかと言った。団長は時間が無い、後方支援も必要だから祝儀の心算で入れろと言った。

誰が鍛えるのだと噛みつくケイリスに、ユースケにやらせろ、ユースケが使えないと判断したら近くの街で下せば良いとあっさりと言う。

「そうじゃな、ユースケ隊を作れば良いのだ。そうすれば団のレベルは下がらないし、後方支援の人手になるしの」

「空き時間にあたし達で鍛えれば問題ないわ、才能が無ければ早めに引導を渡せばいいしね」

「おい、待てよ。それ可笑しいじゃん、俺は入って・・・」

「入った日数なんか関係ないだろうお前は、お前の様な目茶目茶な奴には足枷が必要だ。その二人では枷にはならない、それ処か火に油だろうが、だから丁度いいだろう」

「隊運営は団長の俺が教える、隊の戦闘戦術はケイリスに教われ。後方支援はネイルに教われ、この先必要になるだろうから戦略謀略はビュージョさんに教われ、良いな」

「団長命令では仕方が無いな、隊として得た物は隊の物だ。ま、一部上納してもらわねばならない時も有るけどな。団として動き得た物は団の物、其々見合った配分をする。決して働き損は無い、今団のレベルはAだ。お前の隊はGから始まる、団の仕事に加われるのは今の所お前しかない。隊を鍛えてレベルを上げれば、団の仕事にお前の隊の者も加われる。まあ当分は俺が副長で付いて行ってる、そのうちムロかパックに代わって貰うがな」

「しかしユースケ、お前等々馬車の修理が出来なかったな」

「あの馬車はカイトお前にやるよ、新しいのを買ったから構わないだろ、なっ団長」

「おう、あの竜車を買ったからな、新たに六人が来たって大丈夫だ。しかしユースケ、カイトだって金が有るんだぞ、あんなおんぼろなんか要らないだろう」

「団長、今から金をばら撒く様な真似をしてどうしますか。変に目を付けられたらヤバイでしょ」

「ほー、カイトも一応考えては居るんだな、その調子で頑張れよ。どうせ海の方のギルドにも、話を持って行かないと成らんしな。海はそれまでお預けだなカイト」

「おっ、それだって。俺達今度はどっちに行くんだ、俺も海が見たいぞ、カイトより先に行きたいぞ。でも団長、又変な依頼は止めてくれよな」

「お前の隊用に、農場を荒らすイッガールの一団を狩る仕事を。団の仕事には、これから行く海に繋がる街道に現れた魔獣討伐の仕事を受けた。イッガールはお前の得意だろ、獲物は好きに処分して良いそうだ」

「別に得意と言う訳じゃないけど、その一団ってどの位の個体数なんだ」

「個体数不明だ、農場の収穫は終わっているが。残り物を食いに現れるそうだ、危なくて次の種まきが出来ないと依頼にあったな。多分複数の群れが居るのだろう、お前には探査が有るから効率を考えて狩るんだな」

「ん、運搬用の荷馬車が要るよなく、隊用に買ってもいいかな」

「それはお前の自由だ、まっ、団に必要な時も有るだろうから少しは出しても良いぞ」

「いや、その時は貸し賃を貰うさ。それに使い様で、戦闘用馬車に仕立てられるだろうしね」

冒険者ギルドから、ギルド長に引率されて話が有った六人が来た。猫系ウサギ系・・・嘘だろうと思ったね、獣族が三人、エルフが一人、人族二人の六人。人族の二人が男で後は女と言う、俺としてはこれからどうなるんだと言う心配がある。そしておまけに、俺の前に来て全員。奴隷商人から解放していただきありがとうございました、これからは臣下として働かせていただきます・・・だってよ。ご丁寧に片膝ついて、左手は地面につけて、右腕は胸に心臓は隠さずって言う臣下の礼なんて言うのをやっちゃってくれちゃった訳よ。

「お前何時の間に奴隷商狩りなんかしていたんだ、あんまり無茶はしないでくれよな」

そうケイリスにお小言を頂いた、臣下なんて知らねえよ、要らねえし。

出発前、ユースケ隊編成。

冒険者ギルドに、新人をと言われた団長は。何かテンションが高く、よっしゃよっしゃで入れやがったぜ。その上事も有ろうか俺の臣下になってどうよ、まっ、団長命令だし。臣下は兎も角、編成することになった。

隊長、ユースケ・タチバナ・十九歳。

怪力・神術を含む魔法全般・超重量大剣。

副団長兼ユースケ隊副長、ケイリス・ラ・ポケット・二十四歳。

ロングソード・槍・風魔法・水魔法・治癒魔法。

隊員、ムロ・マンナーナ・二十七歳・男・熊系獣族。

両手剣・槍・ブーメラン・精霊魔法・土魔法・水魔法。

隊員、パツク・ルパルド・十五歳・男・犬系・オオカミ族。

盾装備片手剣・槍・弓・弩・精霊魔法・火魔法・追跡・探索。

隊員、ヤック・ログラム・十八歳・男・人族。

両手斧・短槍・土魔法・火魔法・罌師。

隊員、クスタ・ランブル・十八歳・男・人族。

スピアハンマー・二丁ダガー・雷魔法・罌師。

隊員、アルマ・ディアーク・十七歳・女・ホワイトエルフ族。

長弓・ダガー・精霊魔法ヒーリング・風・火・土・薬師。

隊員、ネリア・バス・十六歳・女・獣族長耳族。

長弓・大型ナイフ・精霊魔法・雷・火・俊足。

隊員、リカル・ワンナード・二十歳・女・虎系獣族。

片手剣二刀流・投げナイフ・精霊魔法・樹魔法・土魔法・狩猟術。

**** 双子の姉妹です

隊員、イリス・ワンナード・二十歳・女・虎系獣族。

両手斧・長鞭・精霊魔法・光魔法・火魔法・狩猟術。

「ムロ、こうやって見るとおじさんだね、良い人に出会えたら良いと思うよ」

「主、物凄くグサツと来ましたが、そうですね頑張ります」

「パック、一応家臣だけど一番年下な、パシリ決定」

「ユースケ様、パシリってなんですか、いじめですか」

「ご主人様、我々にもマントを下さい、お願いします」

「ネリアだっけ、その言い方止めてくんないかな、なんか卑猥な連想をしてしまいそうだよ」

「では主と呼んでも良い訳だな、よし皆、呼び方は主と決定だ」

「「「「「おお」」」」」」

「では主、マントの件を忘れずによりしくお願いします」

「リカルだっけ、押しが強いね、んじゃあ六人の纏め役よろし

くな」

「主、なんでそうなりますか、ムロ殿がおいてでしように」

「無理無理、ムロは俺と同じで暴走特急野郎だから」

「主、些かそれには語弊が有りますが。自分、主と違って心優しき熊さんですよ」

「ムロさん、それ自分で言いますか」

「パック君、何かご不満でも有りますかな」

「うあ、ムロ・・・爺むせえゝ言い方」

「主・・・・自分、未だ三十路には入って居ませんが」

ギヤイギヤイと騒がしいが、なんとなく纏って行きそうな気配だ。

出発前、ユースケ隊編成。(後書き)

超突っ込み処満載でしょうが、もともと出鱈目なんで我慢してください。

隣国

突然だがユースケは、この世界には何か国有なのだろうと思った。今まで気にもしなかったが、これだけの獣族に、エルフまで居るのだから気にならないのは可笑しな事だ。

「ビュージョさん、国はどの位あるのですか」

「うむ、わしが知っているのは四十七ヶ国だな、だがこの国と直接関係が有るのは七ヶ国だ。だが外交関係の有るのは十六ヶ国かの、其々外交官と言う者を置いている。どうしたんじゃ、急にそんな事を聞くとはな」

「その七ヶ国って、今いる国を入れないでと言う事だよね」

「ああそうじゃ、領土を狙い其々の国々は戦争を仕掛けたりけん制したりと忙しいわい」

「殆んどは王政じゃしの、ああ宗教国家も一つあるな。それから国ではないが、獣族の支配地も有るしの」

「エルフの国とか支配地はないの」

「有るには有るが、遠すぎてわしらには良く解らないのだよ。国の形をしているのか、はたまた単なる支配地の形なのかじゃな」

「ユースケ、各国にエルフは居るが、殆どは奴隷商人が隊伍を組んで。エルフの支配地に行き、捕らえた者達の子孫だ。中には人族と強制的に交配されたハーフエルフも居るが、彼らは他のエルフから

も嫌悪されている。望んだ訳でもないのにな、何処の国でも一番下位に置かれているよ」

「ケイリス、奴隷以下って言う事なのか」

「獣族や亜人と同列だよ、彼らで足りないから、奴隷商人は獣族亜人あえて同じ人族まで狩るのさ」

「ふーん、どこの国も奴隷は禁止していないって言う事だね」

「さっき言った様にじゃ、エルフの支配地に奴隷が居るかいないかは知りようがない。だから奴隷を禁止している国は無いと言っているんだろうの」

「同じく知性が有るのに、姿形で区別や差別・・・気に入らないな」

「ほほっ、ならばユースケ。自分で建国をするしかないの、獣や魔物しか住まない土地も有る。志を同じくする者達を集めて、国を作るのも良いかもものう」

「ビュージョさん、兎も角国の名前と、近隣四か国とその特徴があれば教えて欲しいんだけど」

「そうじゃの、今いる国は・・・」

この国はトゥーリユド王国、王都の名はリューベン。

海洋国でもあり、農業畜産も盛んで豊かな国の一つだ。王都の他に七つの大きな都市を持ち、三十三の中規模都市と六百以上の小都市と。ハッキリとは知らないが、万に近い街と集落が有る。人口？・・・知らんな。四か国に囲まれている、ただ鉱山には恵まれては居ないの。

軍は陸軍と海軍、河川の水軍が有る。陸軍は竜騎兵・騎馬兵・魔法兵・魔剣士兵・歩兵・支援兵で編成されているな。海軍は戦艦・揚陸艦・支援艦じゃな、水軍は戦闘船・揚陸船・支援船じゃ。ただし戦奴隷は居ない、じゃが獣族の兵は居るぞ」

「そしてこの国特有の兵が有る、在郷兵と言うのだがな。税の負担を軽くする代わりにな、指定した農漁村に兵役を課しているのじゃよ。何かあれば、砦に駆けつける事に成っている」

北に位置する隣国は、インダスタ王国で王都の名はモント。

同じく海洋国であり農業国でもある、鉄鉱石や他の鉱物に恵まれた国じゃ。若干寒冷地の為と、人口が少なめな国じゃな。数年置きに冷害が発生するのでな、食料をこの国に頼らねばならない。その為友好関係にある、雪は少ないが凍る国じゃよ。

この国の南に位置する国は、リユーベル王国で王都の名はツアイツ。

同じく海洋国では有るが、山脈が西にある鉱山と林業の盛んな国だ、農業と牧畜はそれなりじゃ。人口は少ないが為にさらに南の国に脅

かされている、この国はその南の国と国境を接するのは困るので。
常に支援部隊を送っているのじゃ、王室も貴族の多くは縁戚関係が
有るな。

この国の西に位置する国は、シヨルジード王国で王都の名はツルン
タール。

国のさらに西には砂漠が有る、砂漠には塩湖が有って。内陸国なが
ら塩の国であり、北方に山脈が有ってそこからは燃える石が取れる。
農業と牧畜はそこそこじゃな、人口は少ない。砂漠の有る国じゃが、
雪深い国でもある。南には広い森林地帯が有って、魔物の棲家とも
言われているな。

この国の南西部に位置する国は、ネクロージャ皇国で皇都の名はグ
リンルヘル。

内陸国じゃが、適度に雨の降る広く大きな穀倉地帯と牧畜の国じゃ、
故に人口も多い。地竜は居ないが馬はかなりだそうじゃよ、この国
を攻めるには馬だけでは攻め獲れなかったと言う事かの。

言わばこの国の天敵国じゃ、この国を獲れば海が手に入るし、山脈
を挟んだリューベル国も手に入る。シヨルシード王国に食指を出さ
ないのは、砂漠と雪だな。その上魔物の棲家と言われている、広い
森林帯が横たわっている事も有るしの。

軍勢力もかなりなものでな、この国の倍は有るじゃろうかの。かつ

て五度も攻め込んで来た事が有ってな、その度に海軍の兵も水軍の兵も陸兵に替えてやっと思返したのじゃよ。今も虎視眈々と狙っておる、今もまるで属国にする様な嫌がらせをして来るそうじゃ。どうせ攻め込まれるのならば、今度はこちらから攻め込めと言う話もあるそうじゃよ。

俺達冒険者は行った国が戦争でもしていない限り、何処の国へも行けるが。この国、ジョルジードには行かないな。傭兵も冒険者もごちゃ混ぜにして扱うし、体の良い兵隊にして戦地に無理やり送るからな。まっ、食い物に不自由しないと言うだけの国さ、平民は王族や貴族の奴隷扱いだしな。それもこれも皇王が教国の双子の兄弟って言う事もある、本当に腐った兄弟だよ、人族以外は家畜か獣としか見ないからな。

ふーん、じゃあ明日はその教国とやらの事を教えてくれ。

冒険者赤い風の団VSハリアの奴隷商人狩りの団 その一

街を出てもう半日、そろそろ野営の場所を見つけないと、そう話しているユースケ達を見ている者が居た。街道の傍にある、小高い丘の上に馬に乗った二人の男。

「ザブル、あれは冒険者か傭兵かどっちだと思う」

「四頭立ての天蓋馬車が一台と、同じく天蓋付きの竜車か。んー、一番後ろのは無蓋の荷物用竜車か」

「なあ、どっちかって聞いてんだよ」

「知らんな、どっちにしるもうじき野営の時間だ。ここいらが適当な場所だ、奴らが此処に決めたら降りてくるだろうぜ。あいつ等の人数を確認して大旦那に知らせるぜ」

「俺達が勝てそうなら、帰りの駄賃に捕まえるって言う事か」

「当たり前だ、五十人の俺達に捕まえたのはたったの七十人だ。大旦那も大赤字だってぷりぷりしてんだぜ、下手あするとおめえよ。誰かが一緒に売られちまうかも知れねえぜ、もちろんその中には俺もお前も入ってしまうかもな」

「冗談じゃねえ、あんな業突く張りの大旦那になんか売られて堪るかよ」

「しっ、下がるぜ」

「よし、ここらで野営だ。全員降りて食事の支度をしろ、ケイリス、夜の見張りの人員を決めて配置しろ」

「了解団長」

「ユースケ、探査でここいらの近辺を探れ。何か居たら何か確認して知らせる事、良いな」

「分かった」

「ムロ・ヤック・アルマ・リカル、協力して馬車と竜車の周りを土魔法を使って土塀を作れ。クスタは土塀の上と外と内側に罾を仕掛けろ、俺は固定魔法を土塀に掛ける」

「了解しました、ユースケ隊長」

「イリス、暗くなったら小さいので良いから光の球を作ってくれ。野営地の外を照らせる位のをな」

「はい、解りました？。何個作りますか」

「六個も有ればいいだろう、お前何に使うのかと思って居るだろ」

「はい」

「外から来る敵浮かび上がらせるのさ、打ち上げても良いが、俺達の姿まで敵に見えたらまずいだろ」

「成る程、良くわかりました」

「ザブル、人数は十三人若い連中が多いな。それに獣族にエルフが一人と若い人族が三人だ」

「ああ、これなら実戦慣れはしていないな。魔法も俺達の方が上だろう、例え奴らが上でも夜襲を掛ければ一網打尽だぜ」

「よし、大旦那に知らせて捕まえようぜ、人数もこっちが多いしな」

ユースケ達が居る所より三千モイル（三キロ）離れた場所で野営の準備をしていた一団。ハリアに戻る奴隷商人の狩りの一団だ、団の者達には大旦那と呼ばれる男、名はルガ・レパント。

「大旦那、良いもの見つけてきましたぜ」

「エドーガ、何を見付けたって」

「若い奴八人を含んだ団です、傭兵か冒険者か分からないが物持ちですぜ」

「天蓋付きの竜車が一台、無蓋竜車が一台と四頭立ての天蓋馬車が一台の団でさ」

「ザブル、まさか貴族の一団じゃあ無いだろうな」

「大旦那、獣族六人も連れて歩く貴族なんておりやせんぜ」

「ふん、良しお前達、話は聞いたな、無傷で捕まえられたら報奨金を出すぞ」

「ガキが多かったから、冒険者か傭兵かは分からないが。獣族が居るとは言え駆け出しだろう、若い者以外は殺しても構わん。竜車で釣りがくる、馬車はこれと取り換えるさ」

さう言ったエドーガは、大旦那を含めた全員のこの世は。今夜が最後に成ると思っても居なかった、良い金に成るとだけしか思っ居ない。奴隷運搬の馬車に乗せられて、魔封じの枷を嵌められた男女七十人は。歓喜の朝を迎えようとは知る由も無く、絶望の中を彷徨っていた。

冒険者赤い風の団VSハリアの奴隷商人狩りの団 その二

「団長、ここから三千モイル程の距離に部隊か何かの集団が居るよ。偵察をさせようか」

「ユースケ、誰かいるか」

「パックと双子姉妹なら」

「んっ、パックは探査が出来るんだったな。姉妹を付けるのは」

「パックが撤退する時の後方支援さ、付けてきた奴を始末する役目だよ。待ち伏せが得意らしいから」

「そうか、良いただろう。まっ、どう言う連中か分かなければ話にならないな」

「しかし、たった半日しか経っていないのにこの辺鄙さはどうよ、だな」

「ユースケ、結局人も獣族も関係なく、群れなければ身は守れないって言う事だ」

「隊長仕事は終わりました」

「パック、ワンナード姉妹を呼んでくれ」

「はい」

「ユースケ、あの三人は初陣だろう、大丈夫か」

「ああ団長、大丈夫ですよ。俺が一応見張ってますから」

「ユースケ隊長、ワンナード姉妹は隊長の用事でまいりました」

「あゝ、そんなガチガチの軍隊でもあるまいし。緊張すんなよ、これからパックを長とし帯同して、ここから三千モイル先に居る連中をパックに色々と確認してもらう。お前達二人はパックが撤退した後、そこで誰か後方から来ないか確認し尾行者が居る様なら始末しろ。ただし大人数なら撤退してくれ、良いな、無理は禁物だ。あつ、二人の時の長は今回はイリスだ、いいよな」

「はい」

「じゃあパック、ごちゃっと固まっているのが七十ほど。これが何か探つてれ、後五十がウロウロと歩き回っている。軍ならば構わないが、傭兵なら戦力の評価を付けて報告。まっ、冒険者ではない見たいだが」

「ユースケ、奴隷狩りの連中かも知れんぞ。無理をすれば街に入れない訳でも無いが、獲物が少なければ色々と探すだろうな」

「ふゝ、それじゃああの二人は偵察か。片付ければ良かったかな」

「いや、奴隷を解放する良い機会を貰ったと考えれば良いさ」

「ケイリス副長、あゝ、奴隷を解放したらお届けするって言う事」

「いや、武装させて勝手に帰らすさ。もっとも途中までは一緒に行

く事に成るだろうけどな」

「そういう事で、パックは程よい距離で探索帰還報告の事。よろしくな、では出っ発」

「「はい」」

「ねえ、パックさん。ユースケ隊長って妙にこういう事慣れているわね」

「ケイリス副長に色々教育されているからね、本人も努力しているし」

奴隷商人の狩りの団は、夜襲の為に仮眠をとっている。見張りは居るが、襲撃を警戒している訳ではなく。狩った者達が騒がない様に見張っているだけ、七十人に騒がれたらユースケ達に警戒されるからだが。

「ふー、やっぱり奴隷商人の狩りの団だ。あの七十人は狩られた者達。他は五十一人、多分一人は奴隷商人で後は狩りが専門の奴らだ。強い魔術師も居ない見たいだよ、飛び道具も弩が五丁と少ないな」

「捕縛道具は、どの位ですか」

「うん、二股の身体を抑える道具が十個。衣服を絡ませて引き倒す道具が十個、後は網が十個だ。魔法封じの枷が沢山あるな、三十以上は有るよ。君達に言って置くけど、この程度の連中ならユースケ隊長一人でも片付けられる事なんだよ。これは俺達に実戦を積ませようと言う配慮だ、顧問やユースケ隊長や団長、副長が俺達をどう評価するかだな。言われた小さな事をも疎かには聞くな、俺達は頼られる家臣に成る、今はそれが目標だよ」

「「はい」」

「よし、撤退するから後を頼むよ、百数えたら君達も撤退な」

「でっ、ユースケはあいつ等をどう迎え撃つ気だ」

「団長、その前に二人を一組にする。魔法と武器の事を考えないとね」

「今此処に居るお前達を二人一組に編成する」

「ムロ・ネリア」

「ヤック・アルマ」

「イリス・パック」

「クスタ・リカル」

「パックと姉妹は未だ戻って居ないが、当面この組み合わせで行く。何か問題が有ったら言ってくれ、互いに背中を任せられる相手と慣れる様に」

「皆、誰と組んでも背中を預けられる様になって貰いたい。相性とか、戦闘スタイルが合わないとかも有るからな。努力はしてほしいが、無理をして怪我や戦死は御免だぜ。顧問や団長も見えてはいてくれるだろうが、それに甘えるな、答えを出すのは二人だと思って呉れ」

「ユースケ隊長、体長は誰とも組まないのですか」

「アルマ、必要なら俺から指名する。そして必要なら俺かケイリスが、どの組みかの二人を指揮する」

「後、質問は無いか、なんでも良いぞ」

「はい、クスタです。これからも仲間が増えると言う事は有りますか」

「うーん、それは稼ぎ如何だよ。増えすぎてさ、依頼の金額の配分が少なくなったら困るよ。配分の金はそれぞれ皆の装備や武器、お小遣いの事だしな」

「はい、ネリアです。後方支援の隊は作らないのですか」

「良い質問だ。今は後方支援が居ないけど、本当は物凄く必要なんだ。食料医薬品、武器や防具の調達に、治療看護の人員もね。早く言えば腹が減っては戦は出来ぬ、でも今は欲しいけど身の丈には届

かないって言う事だ。良い仕事を受けられる、そして安心して戦いに出られるよう頑張ろうぜ」

「はい、ヤックです。戦闘系の依頼を中心に仕事をするって言う事ですか」

「あゝ・・・？ まっ、戦うだけが仕事では無いけどな。それこそ草むしりや子守なんかのさ、そう言った街仕事もしないといけない事も有るぞ、ばらけて違う依頼をこなすのも有りさ」

「はい、パックです。何でも屋って言う事ですか」

「おう戻ったか、まあそうだな、レベルの事も有るから仕事は選べないって言う事だよ」

「よし、パックも戻った事だし。ユースケはパックから報告を受けて、自分なりの作戦を立てろ。その後顧問と団長を交えて話し合おう、皆は自分の武器防具の装備点検をしておけ」

「ユースケ、作戦は決まったかの」

「ビュージョさん何とか」

「よし、ではこれから作戦会議だ」

「問題は捕まっている彼らをどうするかです、余り彼らに近い場所で戦闘は避けたい所です、盾にでもされたら最悪ですからね。それと、出鼻をくじいくと言う意味で。奴らが集団で居る所を魔法で攻

撃して、大きく人員を削りたいですね。とつ、言う事で迎え撃つのではなく、此方から行こうと思います。

それで、待ち伏せの指揮はケイリスに頼みます。中央に火魔法を放って、両サイドに風魔法を。前面に土魔法で壁を作らせて下さい、その後にネリアとクスタに雷魔法を放たせて下さい。その後はイリスに光魔法で照明球を上げさせて各個撃破で願います、うまく行けば奴らは火魔法を喰らった段階でかなり戦闘員は減っているはずです。止めに風魔法ですから。雷魔法は止めの止めです。その間に俺は奴らに捕まっている人達の為に、残っている連中を片付けますから。ビュージョさん・団長・ネイルさんは、撃ち漏らしが無いよう後方警護をしていたければ幸いです」

「ふむ、迎え撃つのではなく先制攻撃をすると言う事か」

「奇襲をかけるはずが待ち伏せ先制攻撃、敵の心理に大打撃だな」

「生かしておく必要はあるのかしら」

「無理に殺す必要もあるまい、身動きできぬ程に痛めつければ勝手に死ぬじやろうの」

「運が良ければ助かる者も居るだろうがな、それとて長くは無いさ。誰かを奴隷になんてな、報いはたっぷり払わせるさ」

冒険者赤い風の団VSハリアの奴隷商人狩りの団 その三

ひそひそと、奴隷狩りの団員の一部が暗闇の中で話している。

「大胆那とあいつ等、相手を甘く見ては居ないか。俺は物凄く嫌な予感がするんだが」

「ああ、なめきっているとは思うぜ。良く知りもしない相手だって言うのによ、若造が多いからってのは意味は無いぜ」

「傭兵か冒険者かも解らずに攻撃してみろ、下手あ打つと俺達がヤバイぜ」

「冒険者は一人軍隊の意味合いもある、駆け出しでも傭兵より手ごわいぞ」

「傭兵は魔法を使えなくてもやれるがよ、冒険者は魔法が使えないと苦しい。だから最低でも魔剣士だぜ、斬られても自分で治癒しながら戦うんだ。厄介な奴らなんだよ」

「分け前は欲しいがよ、てめえの命がヤバそうな事だ。俺は降りるぜ、それに大胆那はもつと捕まえられなきや俺達の誰か数人を売っちまうって言う業突く張りだ、危なくって付いて行けねえや」

「そうだったな、前々回でよ、あいつ等仲間を奴隷に落として売っちまったんだ。やっぱここらでおさらばだな」

「ずらかんのは良いけどよ、追ってはこねえだろうな」

「ふん、あいつ等それどころじゃねえだろ。きつちりとあつちに気が行っている、欲の前には俺達なんぞ見えねえよ」

「よし、今うちづらかるぜ。音を立てるなよ」

手下から大旦那と呼ばれている男は、手下から信頼を失って居たらしくあっさり離反された。特に途中で加わった者達は、元々別の奴隷狩り人だった者達で。先に居た者達から話を聞き愛想を尽かした、売られて堪るかよ、だろう。

「うん・・・カイリス変だぞ、動き出した奴らが居るよ」

「それは早すぎないか、んー・・・方向はどっちへ」

「あー・・・十人ほだけど？、ケイリスこれは仲間割れだな、俺達の居る方向では無くて別の方へ向かっているよ」

「理由を知りようが無いのが痛手だな」

「五十人が四十人になった、ただそれだけだよ。だけど最初の時とは別の作戦で行くしかないな」

「どうする心算だ」

「捕まっている奴らの間に俺達が入る、火魔法は使わないで風魔法で攻撃する」

「バック、起きろ」

「なんですか隊長」

図太くもぐっすり寝ていたパック、目をコシコシ擦りながら起きた。

「アルマ・リカル・イリスの三人を連れて来い、十人ほど離脱した」

「ムロは残りの者達を起こせ、予定が変わった、直ちに襲撃に出る」

「どうしたんじゃ、予定より早くないか」

「ビュージョ顧問、奴らの仲間が十人ほど離脱した、残った奴らが動き出す前襲撃する。離脱した奴らをパックの他三人で追跡させます」

「うん、お前が捕まった奴らと奴隷商人との間に入るのか」

「団長騒がせてすみません、すぐ出ますから又寝て下さい」

「バーカ、お前達が行くのに寝て居られるわけがないだろう、しっかり留守番をしているから行ってきな」

「よし集まったな、今から状況説明をする。ユースケ隊長」

「奴らの仲間が離脱した、よって作戦を替えるぞ。パックはアマル・リカル・イリスを指揮して追跡しろ、相手は十人暗いうちはアマルの風魔法で削れ。パックは探査で常に敵の位置を掴んで接触は回避しろ、直接の戦闘はするな。反撃をして来たら、離脱、逃走するな。魔法と飛び道具で攻撃だ。それから死体だ、死んで居る様に見える。でも迂闊に近寄るな、死んだ振りの時もある。死んだと分かるのは

死んだ奴だけだからな、そばを通らなければならぬ時は飛び道具で止めを刺してからにしろ。いいな」

「はい」

「すぐに出ろ、迂回して行けよ。過っても商人達の傍は通るなよ。よし残った者には別の注意が有る、良く聞けよ。捕まっている者達の傍にはよるな、騒がれると困る。最初に俺が風魔法で奴らを削る、それで倒せなかった者達はお前達が倒せ。まあ一発で済むだろうが用心しろ、パック達にも言った通りだからな。ヤックとクスタは罠が無いから少し先頭に成って調べながら行け、所でヤックとクスタは暗闇でも見えるのか」

「大丈夫です、暗闇でも獣を追って狩りをして暮らして居ましたから」

「よし、ネリアは俺の行動に耳を傾けろ、俺が攻撃したら皆に知らせろ。今夜の司令塔だ、事が終わったら俺はパック達を追う。その後のお前達は副長の指揮下に入れ」

「あー・・・はははっ、やっと俺の出番が来るのかい。此の儘俺は忘れ去られるのかと寂しかったぞ」

「いやいや、メは副長のケイリス頼みですってば」

「そう言う事だそうだが、せめて出る合図は俺にさせてくれよな。よし、出っ発」

「うーん、ユースケの奴め。中々の指揮官ぶりじゃのう」

「ふふっ、ギャリク。いつそ団をユースケに譲ったら、お金も有るし贅沢をしなければ暮らせるわよ」

「おいおい、俺だってユースケの成長は傍で見たいぞ、それにそんなに早く隠居なんか嫌だぜ」

「ああそうじゃな、ネイルは子供が出来たら引退じゃろう。それまでに拠点の一つは欲しい物だの」

幕間・・・なんだか知らない話。

ユースケは「あゝ、面倒臭い」そう思っ居る、自身は有り得ない事を有り得させてしまう力の持ち主だからだが。何を見てそう思っ居るのかと言えば、後ろに従う部下達の事。これから奴隷狩りの団を襲撃するのだが、経験を積ませるのにどの位の人数を残せばいいのかと言う事。ケイリスが居るからと言って、そう沢山は残せない。矢張り一対一の戦いに成るよう残し、後はケイリスに任せてパツク達を追うのが筋だろうか。

「ケイリス、一対一に成るよう残すから後は頼めるか」

「構わないが？、ああパツク達を追うのか」

「ああ、大丈夫だとは思うけど、用心をする事には越した事は無いし」

「ユースケは面倒と思っ居るかもしれないが、人を率いる事で学ぶ事も有る。ただ単に戦うのならお前は武器も部下も必要無いだろう、だが長く生きるのなら。孤独ではいけない、異世界から来た理由も未だ解っ居ないのだからな。まっ、住んで食っ居るだけなら。お前ならなんとも思わないだろうけど、その歳で生きた亡霊などと臭されては生きているは甲斐が無いだろうよ。特に高い能力が有るのだからな」

「はあゝ、利用されるかもっと言う事を含めてかい」

「お前な、利用される玉かって。その気なら他人の心も読めるだろう、今はそうしないだけでな」

この世界に来てしまってから、生き物や人を傷つけたり殺したりする事に。殆ど罪悪感がわからないのは何故だろう、ゲームの世界の様な補正付きなんだろうか。しかしなあ、こんなんじゃない意味将来がやばいぜ。ケイリスの言う様に、他人の心も読めない訳では無い。記憶さえ探り操作し奪う事も出来るが、人外も甚だしい諸々のこの能力は。誰がなんの為に与えたのかと思うと、ぞっとする世界が待つて居るのではないかと。

「なあ、ケイリス。俺、将来この世界で家族を持つてその家族を普通に愛して行けるだろうか。俺は前の世界では殴り合いの喧嘩だつてそう経験はしていないんだぜ、こっちに来て人を殺したり傷付けても心が痛まないってどういうんだろうなつて言う所からなんだけど」

「あくまでも推測だが、この世界の基準に誰かが合わせたのかもな」

俺は生まれてこの方、殺したり殺されたりの無い日は無かったしな。自分は平穏でも、周りの人達の誰かは殺したり殺されたり of 殺伐な日常さ。だが悲しみは有る、そんな感情の他にも諸々とな。生きて行く事の不思議さかな「それと俺は明日も生きている」

「そう縋る様な思いの希望が有るから」連綿と歴史が続いているのだろうか。

そう、ケイリスが薄く笑う気配を見せた。強いだけでは生きて行けない、運も頭脳も力も能力も、超越して何も無くてもただ何となく生きている奴もいる。半端な運・半端な頭脳・半端な力・半端な能力、それが俺の様な奴の事だろうな。

「ただ単純に生きたいと言う意思」 良いも悪いも無い。そんな意思とも言えない物を持った奴にはかなわないのかもな。パンドラの箱の底に残った残りかす、天国から差しのべられた蜘蛛の糸の細さ。それでもそれに縋り、命を繋ごうと言う神の与えた本能を、笑うのは与えた神が見ていた悪魔か。

ユースケは思う、世界は違うけど。星が有り太陽が有り、それは宇宙。一つの宇宙が消えても、まだ沢山の宇宙が有る。星々の漂う宇宙に神が居るならば、宇宙を作った神が居る。宇宙を作った神が居るならば、宇宙を作らせた神が居る。宇宙を作らせた神が居るならば、そう命じた神が居る。そう命じた神が居るならば、そう命じた神が居る。メビウスの輪・・・輪廻の輪・・・。生と死の輪、ふつとユースケが笑った。

そんな気配にケイリスが、「何」と、言う風にユースケに意識をを向けた。

絶対無・絶対有、俺の世界では絶対有が基本の考え方だったよ。卵が先か、親鳥が先か・・・その存在を掛けた論争の結果は親鳥が先ってね。

「ユースケはどっちと思う」

そんな事をケイリスは訊ねた、何を思っただの事は知らないが。ユースケはあっさりと言った。

「卵も親鳥も、同時に居たさ。そうで無ければ親子喧嘩なんてねえし、そっから争いは始まって居るぜ」

そんな答えを返してきたユースケに、頭が良いのか悪いのかと、己

の頭を振るケイリスだった。

幕間・・・なんだか知らない話。(後書き)

あゝ・・・人類は何故宇宙を目指す。

無い事を認めれば有りの事を認める、有無と表裏一体、言葉なんて
どうにでもなるようですが・・・認めてくれる人が居ないのは・・・
ズボンのチャックに挟まった毛の様な・・・あうっち。

冒険者赤い風VSハリアの奴隷商人狩りの団 その四

ユースケは、ゴソゴソと起き出した奴隷狩りの男達を。風魔法、風の刃で三十人を殺し。残りの十一人の内一足で六人を斬り飛ばし、そのままパックの下に走った。ケイリスは、大旦那と呼ばれていた奴隷商人を枷を嵌めて拘束した。

「お、お前達は」

「ああ、お前達が奴隷に仕様とした奴だよ。まっ、お前らが俺達の隊の新人デビュー戦相手さ、金は取らねえーからゆっくり見物してな」

そこへ血にまみれたムロがやってきた、その後ろにはヤック・クスタ・ネリアが続いている。

「ケイリスさん、一寸遅かったですよ。終わっちゃいました、もう少し残して呉れればいいのに」

「あれれっ、もうかよ。でっ、ここに一匹未だ残って居るけど此奴は駄目だぞ。ユースケが色々聞きたい事も有るだろうしな、それから捕まっている奴らの解放も待て、此奴の仲間が混じっているかも知れないからな」

パックとリカル・イリスの三人は、俊足を生かして離脱した十人の前方で待ち伏せをした。エルフのアルマは後方から、動きの遅い男と逸れて行きそうな男を風魔法風の刃で倒してゆく。そして前方に

回り込んだ三人は、通り魔の様に男達を削って行く。

「お、おい。やられたぞ・・・」

警告の声も終わらないうちに、風に乗ったユースケが残りの男達を斬り倒した。

「ご苦労さん、戻るよ」

そうパック達に声を掛けたユースケへ、イリスが声を掛けた。

「隊長ずるいです」

「何が」

そう答えたユースケに、イリスの姉、リカルがつまらなそうに言う。

「メの奴を食っちゃうんだもの」

あー・・・すまん、一寸急ぎの事が有ったからな。

「隊長急ぎって」

「パック、それは後で言う。それより取れる物は取っちゃまえよ、言いたくはないが全て金だからな」

「あゝ・・・？、ははっ、はいです。でもユースケ様、一寸は・・・」

「あれっ、手間を省いただけなんだけど」

「みんな、明るい時の戦闘で良い所を見て貰いましょうね」

「ち、違うつてパック、マジでこれから商人を締め上げる仕事があるんだってば」

「はいはい、使えそうになってか売れそうなのは剥いでゆきますから（あゝもう、剥れられちゃったよ）何か、精神的に削られた様な気持ちになったユースケだった。」

血の匂いが立ち込める、奴隷狩りキャンプ下に戻ったユースケは。

「はあっ・・・」

「なんだユースケ、ため息なんか吐いて」

「べの奴を食ったって叱られました」

「そうか、もう少し任せるって言う事だな」

「でしたね、所でマジにべの奴は」

「ああ、向こうに転がしてある。捕まっている奴らも未だ気付いて居ない、俺らは急ぎ旅って言う事では無いからじっくり絞め様か」

「それは違うな、気付いてはいるが声も上げる気もしないと言う所だろうさ。主人が変わっただけってな、パックが戻ったら捕まって

いる者達に奴らの仲間が混じって居ないか調べさせてくれ」

「奴は俺が締め上げようか」

「いや、いい俺がやる。齒の二三本抜けばなんでも話すだろうさ」

神様、放置ってどうかと思うけど。

ユースケは、ハリアの奴隷商人を前にし、どうした物かと考えて居る。ユースケが知りたい事は、拷問に頼らなくとも商人の頭に手を乗せれば自由に引き出せる。要は、ユースケは自分が何をこの男に何をすべきなのかと言う事。捕まっている七十人の中には、この男の隠し玉は居ないと確認できた。彼らの中に、この男を放り入れるのも一つの手だろう。

そしてこの男が何処へ奴隷を売っているのかと言うと、七つの国に教団の神殿を持つ創始神ファボーナを絶対神とするファボーナ教団へだ。教団は各七つの国の王都と主要都市に神殿が有る、その数は万を超すとも言われ、要するにそこそこの町になら必ず神殿が有り支配している。実質この七つの国は、このファボーナ教が真の支配者で教皇が主と言える。教団からの各国の王は代官との扱いだった、当然不満では有る。

ファボーナ教教義

創始神、ファボーナはただ一つ宇宙世界支配の絶対神である。創始神ファボーナは、託言者の姿を借りて神託を告げる。託言者は神の子である、神の子は教皇となりて地上を支配する。

1 教皇曰く、人は神に奉仕する使命が有る、使命に自覚無き者は家畜である。

2 教皇曰く、人とは神に奉仕する王・王族・貴族・武人・文官・商・工・農・知識人を含む世に使命を持つ者である。

3 教皇曰く、人で有りてもそれぞれに充実した力の無き者は支配され、奴隷として神と力ある人へ奉仕するべし。

4 教皇曰く、世界に責任無き者も、同じく奴隷として神と人に奉仕するべし。

5 教皇曰く、世に有りて、国と教義に対し確固たる奉仕と団結をせざる者は奴隷として償うべし。

6 教皇曰く、神は獣人亜人を人に対する贈り物とした。故に、これらを人は奴隷的家畜として扱うも許される。

「ユースケ、どうする心算だ」

「うゝんケイリス、どうしようと言いたいけど。結局、此奴の拠点に行くべきだろうね。此奴の全財産を裸にむしり取ってさ、山分けするもよし捕まった奴らに渡しても良しだろうしな」

「ひょっとして、可也な財産持ちか」

「それはね、俺的に考えれば人で無しな商売だからな」

失神から、気が付いたらしい奴隷商人の怒声が響く。

「おいお前ら、何者なんだよ。俺達は教団の許可を貰って奴隷を集めているんだぜ、手前ら教団に楯突く気かよ」

「ああそうだった、此奴にも家族が居たな。此奴を家族と一緒に別の奴隷商人に売っちまうか、競争相手が減るから喜ぶかもな」

「何を？、ふざけるな。皆知った奴らばかりだ、んな事をする訳がねえぜ」

「おいおい、お前数が足りなきゃ一緒に狩りに行った奴を奴隷にして売っているだろうが。奴隷の枷を嵌められた奴が知った顔でも、前例が有るんだから関係ないだろう」

「ケイリス、此奴らって自分が売られるかもなんて考えて居ないさ。んゝゝよし、決定だな此奴の家族も一緒に売ってやろうぜ」

「ユースケ、お前奴隷商に知り合いでも居るのか」

「んな訳ないじゃん、探れば簡単に見つかるよ。ついでに買った奴の財産も頂こうよ」

「えゝ、ここまで来たのに又戻るのかユースケ」

「団長、一寸飛べばいいだけだよ」

「何を、飛ぶってどういう事だ」

ユースケはビュージョ、団長・ケイリス・ムロ・パックを馬を外した馬車に乗せ。風魔法で街まで飛んで行った。

「ネイル姉様、ユースケ隊長って飛んでも無い事を思い付くのね、馬車を飛ばすって無いわゝ」

「あら、ホワイトエルフならあんな事は簡単でしょう」

「イエイエ、馬車を飛ばすなんて考えませんよ。乗る物って言う事しか思ってますせんし」

「そうねえ、まああの子は特別だし、神の子ってあの子の様な子を言うのかもねえ。まっ、あんた達もあの子を見て行けばキットそう思うわよ」

「ネイル姐さん、隊長ってそんなに凄いですか」

「ふふっ、クスタ。あの程度はあの子にとって遊びの内にも入らないわよ、まっ、お土産を待ちましよう。臨時のお小遣いを貰えるかもよ」

街に戻ったユースケは、面倒とばかりに奴隷商を襲い。奉納の看板を付けて、奴隷商達を教団の前に置いてきた。流石に家族はそのまに、建物以外で目立つ財産はすべて奪った。

「ユースケ、やっぱり家族までもって言うのは気が引けたか」

「ん、まあね。俺は奴隷商人に成りたい訳じゃないし、資産奪えばそれで良しにただけだよ」

「でっ、この金はどうするんだ」

「捕まって居た奴らに少し渡して、残りは隊員に一寸お小遣い上げて、後は団と隊の資金に回しましょうよ。ビュージョさんが拠点を

「どうのって言ってたし」

「ユースケ、拠点をつてのはもう少し後だな。お前が将来を決めた時に使おう、未だこの世界には人も魔物も獣族も亜人も住まない土地がある。お前が何かを掴んで実行したい時に、この金が生きる様にしないとな」

「俺はこの世界から元の世界に戻れるなら戻りたいと思って居る、だけど帰れないと決まったならきつと居場所が必要となると思う。自覚しているんだよ、自分の出鱈目さをね。この出鱈目な力と能力を付けた相手が居るだろうから、兎に角そいつを探さないとな。それが神様って言う奴だったらぶん殴ってやる、呼んで置いて放置ってどうよ。まっ、何かの偶然でそうなったとしても、それを告げてくる奴は居るはずだし。帰れる帰れないは別にして、暫くは自分のしたい様にするさ。この世界の誰かが気に入らないとか言ってきたも俺の責任じゃないしな、ケイリスは俺がこの世界の在り様をぶっ壊すって言ったら怒るか」

「俺はこの世界の神ではないからな、在り様を壊せるかどうかを判断できないから怒れないぞ。だが他世界から来たお前が壊そうとすれば、幾つか有る教団のその反発は只では済まないだろう。真逆に、神子様〜とか言って迎えに来る教団も有るかも。どちらにしてもこの世界に神が存在し、お前の存在を否とするなら異物としてお前を殺しに来るだろうし。だが存在を是とするならお前のこれからを助けるかだろうな、どうしても良いなら完璧に放置、好きにしろ〜ってな」

「あはははっ、放置は寂しいよ。最低でもさ、せめて帰れるのか帰れないのか教えて欲しいぞ。俺だって生のだけ、放ったらかしじゃ腐っちまうよ。極端な力と能力を持たせたまま、放置ってどうよ」

「じゃからユースケよ、その力と能力をじゃ。誰からかに利用されない様すっかりと考えないとな。どこかの教団を乗っ取るも良し、建国して自分の都合の良い法と秩序で支配するも良しって考えるぞい」

「えー、ビュージョさんそんなの有りー・・・あー？、帰れないなら考えよう」

神様、放置ってどうかと思うけど。（後書き）

宗教教義って何よ、なのでこれも出鱈目です。

んー、神様も何も言っても来ないのは拙いですかね。

気が向いたらお告げでも出しましょうかね。

三神

うーん、小僧も流石に怒って居るな。まさかたまたま異世界に顔を出したら、小僧がワシと重なり。力と能力の一部が移った等と信じられんだろうしの、ましてやわしが驚いて振り飛ばしたらここに届いて居たとはな。しかしこの世界の神とは随分と傲慢で残虐な奴よの、神様裁判でも仕掛けてやろうか。

「いやいや待ってくださいよご同輩、神託を下す人間を選び間違えたですよ」

「だれが？ご同輩？じゃ、こんな出鱈目な世界は久しぶりだぞ」

「いやあゝ、色々と間違いを修正しようとしたらこうなったのですよ」

「折角作ったから壊すに壊せなんだか」

「然様です、なので少し手を貸していただけないですか」

「どうしろと言うのだ、ここまで可笑しくなった世界を治すのはただ事ではないぞ」

「あの少年を神子に仕立て上げて修正をさせ様かと」

「なんと愚かな、わしはわしの失敗を正しに来たのじゃ、小僧を元の世界に戻そうとの」

「そこをなんとかお願いしますよ、あつ、ちなみにあの少年は帰れ

ませんぞ」

「あー…なる程のう、この世界の知的生物と触れ合い過ぎたか」

「なのであの少年を説得してここに留まって貰いたいのです、どちらにしても帰せないのならその存在を消すかこちらに呼ぶしかないでしょうしね」

「ふむ、責任の一端はこちらにあるしの。やむおえん、力と能力は与えたも同然。そなたからは神気と神器に神旗、身を護る防具と悪鬼を打ち払う武器を与えるか」

「それは些か与え過ぎと思いますがね、気は充分でしょうから。防具と武器、神気の魅力と覇王の能力を与えようかと」

「けち臭い奴じゃな。じゃがまあいい、わしが作った世界ではないからの。だが獣人族や他の族の保護は小僧にさせるがよいぞ、その保護下にある者に手を出したら酷い目に遭うようにの」

「ですが、頼られるばかりでは鬱陶しいでしょう。それに人にも弱き者が居ます、なれば平等に愛を持って接する事が出来る能力はどうでしょう。後は少年に付き従う者それぞれの優秀な者達が集まる様にです」

「んっ、さっき言った愛とは違うのか」

「いやいや先に言ったのは、あの少年もお・と・こ・と言う訳で」

「ぶっ、貴公見た目通りの俗物よの、到底神とは思えんわい」

「いやゝ・はははっ、ここまで可笑しな事に成れば仕方なしですな」

「でっ、告げる役目はわしか貴公か」

「面白い、わらわが告げようぞ」

「おうっ、驚いた。これ、わしの心臓を止める気かジャジャ姫神よ」

「このような事で止まるか、神の心臓は。情けないのう、神も老いると只の人並の事を言う」

「何を言う、見た目はそうでもわし等よりは・・・ぶほっ・・・」

「その先を言うてみや、神のそなたとて地獄の釜に放り込むぞえ」

「おおこわ、それではお頼みますかの」

「ふん、最初からそれを言えば良いものをじゃ」

「それでは神子は止め様、現世の神殿に連れて行かねばならなくなるからの。神旗・神器・神気を持った霸王、攻めと守りに与えしは覇・愛・正邪を見分ける目・人を引き付ける魅力。知と愛と力の平等の強き精神をの」

「ですが、直ぐ与えるは如何かと思いますが」

「何、経験を積ませればよいのじゃ。故に知性はあのままに、力と能力は有れどちと頼りなさげが経験を積ませようぞえ」

「ふむ、助けたくなる事も魅力の一つじゃない」

「人徳かな、余りに完璧し過ぎでも寄り付かんでしようしな」

「神も時には嫌われる、貴公の様な神も居るのじゃからな、やむなしじゃない」

「余り人が居てもいかぬの、うゝむ、あの位が良いか、では行つて来るぞよ」

三神（後書き）

ひゃあぁ~~~~、ここまで出鱈目が書けるなんて思って無かった
っすよ。

おらしゝらね、ってか・・・この後どうなるんでしょうか・・・い
やいやどうしたら良いのか分からなくなってきましたよ。

神達との会話 ？！

ユースケの部下と言うか臣下と言うか・・・八人、顧問のビュージョと団長色ボケ夫婦にケイリス。この世界に来てしまった自分、その十三人が夜食を食っている。ユースケには何か耐えられない空気が有る、要はあつけにとられた七十人の視線をじゅっと受けているのだが。

それとは別に白々と明けようかと言う空の下、又なんか騒動が来そうなと言う予感にビュージョは身震いをした。

そして一瞬、真っ白な輝きと共に現れた少女が一人。

「ユースケ、わたくしはこの世界の神の娘じゃ。そなたにこの世界を預けよう・・・

ドガッ、ガシッ・・・の音と共に、百億年死んで来いのユースケの怒鳴り声が響き渡った。そんなすがすがしい朝の、ささやかな一コマを見る事が出来た七十人の朝は奇跡的なひと時だった。

「んな訳のわかんねえ事言ってんじゃねえこの似非少女があゝ」

「なんで似非少女なんじゃ、どう見ても少女じゃろうがあゝ」

殴られ蹴られた筈の少女は、平気な表情で喚き始める。

「馬鹿かお前、誰かが勝手に俺に付けた能力でそんなのは分かるん

だよ」

「ありゃ、忘れとったわい。じゃがこの姿は代えんぞユースケ」

「気安く呼び捨てにすんじゃねえ、このくそつたれ婆」が」

「なんじゃと、我をくそつたれ婆」じゃとお」

ユースケは突然現れた少女に噛みついた、マジにガブリと、その頭にだ。血が出るとかそんな生易しい噛みつき方では無く、食っちゃまうぞの意思が有り有りの噛みつき方だった。結果、ユースケは持つて居なかった能力まで写し持ってしまった。非日常な日々ToStrスが溜まっていたユースケの目の前に、非日常的な似少女が現れた事にパニ食った結果だった。

「いたたたっ、ユースケ我は食い物ではないぞえ」

「いきなり訳の解らない者が出てきたら普通噛みつくだろう」

そう言ったユースケに、じっと見ていた七十人を含めた皆は？ないないと手を振った？。

それを見ていた先程の男神二人、慌てて婆さま大丈夫かと飛び出てきた。しっかり年寄りと認識されてしまった似少女姿の女神、最大級の泣き顔で男神二人に激怒していた。

「なんじゃこのガキは無礼にも程が有るぞ、貴様らの教育はどうなっているんじゃ」

「うるせえ、神滅星団弾一京数喰らいやがれ。足りなきゃ神滅暗黒

ホール東京数喰らえ」

いくらなんでもそんな神術法攻撃を喰らったたらたまらない三神はユースケに謝った。

「謝るから話を聞いてくれ。わしは偶に他所の世界の星を見ようと、ユースケの居た星に行ったらお前と重なってしまったんじゃよ。その時幾つかの力と能力がお前に移ってしまったんじゃ、重なって慌てたわしが振り払ったらユースケはこの星に飛んでいたんじゃよ。神とはいえ無意識で払い飛ばしたのじゃ、探すのに苦労したんじやが」

「見つけた時にはすでに遅く、そなたを元の世界に戻す訳には行かなくなったのだ。余りにも多くの人と出来事に出合い、力と能力を行使していた。今更なしには出来ない程にの、故にこの星をユースケに預け様と話が出たのだよ」

「謝る、謝るからユースケ落ち着くのじゃ」

「ばあゝかそんなの使える訳ないじゃんてか、ふゝん、一番悪いのは誰」

「振り払ったわしじゃな」

「いやいやこんな訳の解らない世界を作った我だな」

「そうとも言えんじやろう、しゃしゃり出た我も悪かった」

「ようは俺を元の世界には戻せないと、そう決定しているんだな」

「そうじゃ、まっことすまん。この世界で好きに生きて欲しい」

「この星を作ったわしからも頼む、好きに作りなおしても構わんぞ」

「どうでも良い様に作った癖に、なんだよその言い方は」

「まあまあユースケ、覇王に成るも良し、新たな国を好きなように作るも良しじゃぞ」

「この星ってどの位の大きさなんだ、それから竜王とか居るのか」

「ユースケの居た星より1・5倍、気付いて居るじゃろうが一日は三十二時間じゃが一時間は何分何十秒とかは同じじゃ。従ってユースケはこの星での歳は・・・」

「黙れ、言うな」

「残念じゃが結婚は未だ出来んのお、酒もじゃ」

「婆、黙れって言っただろ」

「ふ、ふん、さっきの仕返しじゃ」

「馬鹿を言ってんじゃねえ、こんな老けたガキが居るもんか」

「ん、それはどうか。さっき婆の頭に噛みついただろう、だから少し子供に戻ったな」

そう言われてはっとしたユースケ、背負った大剣の剣先が地面に付いて居る事に気が付いた。

「なんだと、背が縮んだとおく、冗談じゃねえ婆く、元に戻しやがれく」

「出来ん相談じゃ、噛みついたユースケが悪い」

「ふむ、ちん毛もやっとパヤパヤの状態になったな」

「うん、あれの皮も未だ剥けとらんぞ」

「なんの話をしてんだボケェ」

ユースケは大剣を振り回し三人の神をぶちのめしたが・・・

「無駄じゃぞ、我らは神じゃ」

「そんな剣位で叩かれようが斬られようが、痛くも無いし死にもせんわ」

面倒になったユースケは、俺はこれからどうすれば良いのかと聞いた。

「ユースケを神子にすれば、何処かの神殿に連れて行かなければならない」

「それでは面白くない、この馬鹿が作った宗教になんぞ利用されてたまるか」

「そう言う訳でこの婆が女神となって新たに宗教を立ち上げる、ユースケは遵って欲しいのじゃ」

「別に熱心な信者になれとかは言わん、無宗教はどちらにしろ拙いからな」

「後は建国するなり乗っ取るなり、霸王を名乗るとかは好きにしてよいぞ」

「そうだ、欲しい能力が有れば付けても良いぞ、但し永遠の命と肉体などは駄目だな」

「うーん、じゃあ物質召喚・異世界物質召喚・地球上に有る物なら生体以外なら呼び寄せたい物あれば呼べる能力が欲しい。もっともそれが何処にあるのか解らないと困るから、見える能力もな。後は物質具現・創造物具現の能力、言わば鍛冶工作能力だ。俺にとって剣なんてなじみが無いからな、刀とか銃が欲しいのさ」

「分かった、召喚物は地球上からなら呼べるように仕様。だが他の世界からは駄目だ、使い方が解らない物と呼ばせても無駄だからな」

「分かった、後は料理とお菓子を作る能力が欲しいな。子供に戻ったのならやっぱこれでしょ」

「ほほっ、良いぞ。可愛い事を言うではないか、わしも食べに来るぞよ」

「元素魔法も精霊魔法も神術法も、星は壊せないが最大級にしておく、魔力量もの。ただし死者は幾らなんでも生き返らせんがな、使い過ぎてお前しか生き残って居なかった等と言う事の無い様にの」

「魔力量はともかく、そんなでかい魔法能力はいらねえよ。まっ、この国を吹っ飛ばす位なら構わないけどな」

「そうじゃのう、程々にかの。有り過ぎて化け物と言われても詰まらないだろう」

「あゝ、今の事は皆に聞こえてはいないよね」

「大丈夫じゃ、今お前は神である我らと神語で話しているから理解は出来ん」

「神語？」

「前に居たお前の星に有る国の言葉、日本語じゃ。彼らには神語と思わせて置けば良いのじゃよ」

青白く輝き宙に浮く神と思しき人物三人と、何か会話をしているユースケに。この場に居た者は皆驚愕の表情、もしかして神子かとも思っ居る様だが。

「だけど一寸まずいよ、神子だなんて思われたらヤバいし、不要な記憶として消して行つてよな」

「うむ、神と会話した位にして措こうか、そうで無いと布教は出来ぬからの。おおそうじゃ初代教皇としておのじいさんを指名し様、あとは我らに任せよ、悪い様にはせぬからの」

「後はあの七十人を布教信徒として少しいじるかの」

「えゝ、ビュージョさんを取り上げるのか、それは嫌だよ」

「何、直ぐではない。色々準備が有るからの、こちらの準備が出来るまでには一緒に居るがよい」

「主は神と会話できるのか」

「何を会話しているのか分からないけど、ビュージョさんを見て居たよね」

「団長、えらい子を団員にしたもんじゃな。この先どうなるか・・・」

「ユースケ様は神子なんですか」

「いや違うみたい、国をどうのと言っていたし」

「えっ、ネイル姐さんは神語が分かるの」

「いや、国って言う単語だけ分かったの。ユースケが未だこの世界の言葉が解らない時、わたし少し会話を教えていたしね」

「「「「「え〜〜〜〜〜?」」」」」」

「隊長は異世界人？」

「ははっ、まあそう言う事ね。多分この世界をなんとかしろと神様に派遣されたのかも」

三人の神は去り、そして捕まっていた七十人は歓喜の声を上げた。

神達との会話 ？！（後書き）

ここまで無茶苦茶だと、後はどうでも良い様に書けるよな。

はちやめちや大魔王の作者だぁぁぁ、ばんざぁぁぁい・・・ふう・
・・アホか。

農場 ユースケ隊とイッガール

神様騒動の後三日経った、結局あの捕まって居た七十人は、神の祝福とやらを受けて布教の為散って行った。又、ビュージョ顧問は女神に説得され、近い将来教皇として立つ約束をさせられていた。团长夫妻には教団警護団の設立を、ケイリスはビュージョ顧問の後の次期教皇となるよう。これまた強固に説得され約束させられている。

「ユースケ、お前は結局俺達には災厄しか運んでこなかったと記録しておこうかの」

「えー、頷いたのビュージョ顧問じゃん。三人とも結構押しに弱いんだから、あんな似非少女姿の婆になんかビビってんじゃねえよ」

「何を言うか、神になんぞ言われて頷かないのはお前位だ。結局俺達はお前に巻き込まれたって言う事さ、カイトが知ったらなんと言うかなあ」

「一週間位固まってんじゃね」

「しかしユースケよ、お前の隊の奴らは何か力を貰った様だが把握しているのか」

「否、それは努力しないと開花しないんだって言うからさ。お楽しみに取っておいたさ」

「隊長、もうすぐ依頼先の農場に着きます」

農場に到着し、イッガールの狩りに出発する前、ユースケは隊員に声を掛けた。

「お前達が、神から祝福と能力を授けられた事は知っている。だが今は関係ない、その能力は努力し研鑽しなければ開花はしない。言わば、神はお前達にその能力と言う力に何もかもが修行と言う枷を嵌めた。楽に開花するものではないと言う事のな、まっ、俺から言える事は、小さな事からこつこつと積み重ねろって言う事さ」

「「「「「「はい」「」「」「」」」」」」

「よし、油断するな。今はお前達はただのひ弱な冒険者だ、隣に立つ仲間とその隣に立つ仲間達と連携し戦え」

「はあゝ、・・・・・・なんか凄いわ」

「ああ、今すぐ何処かの將軍に仕立てても見劣りはせんな」

「姿はおこちゃまに成ったけどね、あれは笑えるわゝ」

「わっはははっ、神も悪戯好きだよな、あれは無いぞ」

「言う事と、あの姿形の差にはずっこけるのう」

「何も身長や顔立ちをいじる事は無いだろうに、あの女神の一寸した嫌がられせだな」

「しかもユースケそれ身長が低くなった位しか知らないしねえ、鏡を見たら激怒するかもよ」

「いやいや、元が良かったからのう。神も少し弄っただけだろうがの、まっ、変態に狙われない様見張ってやろうかの」

「ねえねえ、神の魅力付与ってあれだったの、ユースケ苦労しそうだわ」

ユースケ達が居なくなった野営地に、ビュージョ、団長、ネイル達の笑い声が響く。

神はユースケに能力と力は与えた、そして少しだけの未来を約束した。だが他に何も約束はしなかったし、ユースケも何も言わなかった。異世界人である自分が、この世界の誰かと無事に結婚して。子供が生まれるのか、生まれたとしてその子供に身体的・能力的・精神的になんの障害も無く。人として、生きて行けるのかどうかも。ユースケには確かに魅力等と言う、ふざけた様な能力をも与えはしたが只それだけの事。神達は、ユースケ以後の事にはなんら約束はしなかったのだから。

「ムロ、前線戦闘指揮を執れ。パック、参謀として魔術をどう使うか考えて人員の組み替えをして狩りに当たれ。切り刻まれたり丸焼けにしたら売り物にならないぞ、矢で穴だらけもな」

各個人も命じられた事ばかりをするな、指揮官の意図を素早く理解

し、最上の戦いが出来る様考えて行動しろ。

響くユースケの声、動き廻る訳でも無く、部下の様子を見ている。参謀役を命じられたパックが叫ぶ、「イリス・リカルはムロの両隣に、ヤックはムロ達の前に魔法で穴を。ネリアは雷で穴に追い立てろ、クスタは左に簡易罠で側面防御」

ぱっく、俺にも命令していいんだぞ。ただし、お前達と大して変わらない能力と思って居ればいい。実戦訓練の兵隊だ、どんどん命令しろ。

「では隊長、広範囲の探査を架けてこちらが終わるまで警戒をお願いします。こっちの行動が間に合わない様なら、足止めか狩って下さい」

「了解」

そう答えたユースケだが「んー、パックの奴、俺はお前達と同じ位のレベルの能力しか使わないと言ったのを聞き逃したのかな」ボソッと呟いた。

「リカル、穴の大きさと深さが足りないな。もう少し大きくしてくれ、俺は深くするから」

「分かった、その後はどうする。イリスに飛び込ませるのか」

「いやいやそれは無いって、この後水を張るからな」

「ムロさん、イツガールを水死させるの」

「一番傷が付かなくて良いだろう、こっちは外れて来る奴を相手にするのさ」

「ははあゝ、穴に落とせって言う事ね」

「イリス、正解。鞭でベシベシ頼むぜ」

「じゃあ、あたしは樹魔法で穴に誘導するわね」

「おう頼んだぜ、俺は水を張ったら仕事が無いからな。お前達の護衛だ、っても強そうだから要らないか」

「それでも無いわよ、何処に穴が出来るか用心しないとね」

「そうよ、穴の前はどうでも後ろの警戒を頼むわ」

「よっしゃあゝ」

うゝん、一寸は戦闘させた方が良いかな。イツガールが皆水死なんてな、戦闘力付かねえし。なんか他にいねえかな、・・・・あゝ、こいつなんだろう結構強そうだけど。

ユースケの探査に引っ掛かった相手は、どうやらイツガールを狙って来た魔物の様だ。後から聞いて知ったが、マッドウルフと言う魔物で中級レベルなのだという。

「パック、お前の親戚みたいな魔物が近くに居るぞ。こっちが片付

くまで足止めして置く、全員で倒せよ。穴のイッガールは俺が穴から出しておくからな、心置きなく戦え。ヤバそうになったら駆けつけるからさ」

「えー、俺の親戚見たいな魔物ってオオカミ型って言う事ですよ。中級以上ですよ、頭数は何頭ですか」

「ああ、子連れの五頭だ。親二頭と子が二頭と大人の若いのが一頭だ」

「げっ、最悪雷使いますよ。俺リフレク使えねえし、喰らったらヤバイです」

「誰と誰がリフレク使えないんだ」

「ムロさんと俺とヤックです、クスタは自分の雷で相殺できますからね」

「精霊はやってくれないのか」

「ヤックは人族ですから、精霊の加護は受けられません。俺とムロさんはそれぞれ特化してますから、それ以上は駄目なんですよ」

「ふーん、便利なようでそれ程って言う所なんだな」

「隊長、俺達にリフレクかけて下さいよ」

「うーん、仕方ないな。あれ結構強そうだしなあ、みんなには死な無い様頑張れって言って置けよな」

「やあ、それは無いでしょ。隊長も戦って下さいよ、兵隊の一人でしょ」

「ん、これはパスな。俺がこれ以上強くなっても意味ないし、お前達が強くないでどうするよ。パック、お前の采配期待して居るぜ」

ブンツ、と、言う音共にユースケが居なくなった。敵前逃亡でしょ、そう泣いたパック。

「全員聞いてくれ、オオカミ型の魔物が近づいて居ると隊長から知らせがあった。頭数は五頭、最悪雷魔法を使える魔物だ、リフレク使って防御を。暫くは魔力温存の為遠距離武器で物理攻撃、中接近されたら魔法攻撃で戦うしかない。隊形は魚鱗、最初はムロさんと俺とアルマさんネリアさんで弓と弩で攻撃するから。クスタは出来る限り雷を使う前兆を見届けて相殺してくれ、残った者は俺達の攻撃が止まったら即座に魔法攻撃。先に攻撃した俺達も追撃する、接近されたら当初の組で戦って呉れ。それから隊長と副長は参戦しない、俺達だけで戦う事に成る。各組連携して戦って呉れ、最初の一人は飛び道具で倒すぞ、そうで無いとヤバイからな」

「ユースケ、あいつ等を放って置いて大丈夫なのか」

「団長、ヤバくなったら助けに入るようゴーレム置いて来たから心配ないよ。それにケイリスが見張っているし、ヤバくなったら知らせがあるしね。まんま任せて放置している訳じゃないよ、一回きりの身代わり人形も身に着けている訳だしね」

「ほほ、戦闘力と戦術を身に着けさせる為かの。まっ、見て居たら手を出しそうだから逃げて来たか」

「んー、俺が居る時だけ戦いが有る訳じゃないしね。使命の自覚・個人の充実・責任の追及・規律の厳守・団結の強化って言う所だよ」

「へえー、ユースケそんなのどっから引っ張り出したのよ。どこかの軍隊でも使える訓ね」

「ふふふっ、内緒だよ。あつ、それよかネイルにこれあげる」

ユースケがネイルにさし出した物、お風呂セットと高級化粧品。

「団長・・・気が狂う程又惚れるかもね」

さし出された物を見て、ネイルは驚愕した。きちんと使い方の本も翻訳して付けてある、開けてみれば信じられないほどの高級品と分かる物ばかり。一人の女として、又妻として思えばこれ程嬉しい物は無い。ネイルは泣きそうな自分を叱咤して礼をユースケに言うのだった。

「ありがとうユースケ、大事に使わせてもらうわね」

「無くなったら言って、言い方が悪いかも知れないけど。この世界の化粧品で、毒に成る物も入っている見たいだし。だから安全そうなのをサンプルとして、元の世界から持ってきてその通りに再現したんだ、だから幾らでも作れるからね。そっちのはお風呂用だから、これから風呂を作るから試しに使ってね、きつとそっちも気に入ると思うよ」

「ユースケありがたいな、亭主の俺からも礼を言うよ」

「団長、腎虚に成らない様にセーブしてな」

「わっはっはっはっ、ユースケ、そいつは無理じゃろうよ。回復剤を沢山作らんとのお」

「えー、無駄でしょ。回復したらしたで又っていうこってしょ、馬車の位置をずうっと向こうに離さないと五月蠅いかも」

そんな風に笑っていると、隊の連中が戻ってきた。ボロボロになって、恨めしそうにユースケを見つめるのだった。

農場主の没落

因果応報かな

「よっ、ご苦労さん」クタクタに成って帰って来た隊員達に、そう呑気に声を掛けるユースケ。幸い怪我を負った者は居なかったが、魔力は殆ど切れかけて危ない状態だった。

「隊長、あのゴーレムで助かりました。あれが無かったら危なかったですよ」

「パツク、当然だよ。あのレベルの魔物に、お前達のレベルを知って居ながらぶち当ててはな、流石に放ったらかしでは帰れないさ」

「所で団長、一寸可笑しくないですか。確かにイッガールは四グループ四十三頭いましたけどね、あの距離であの魔物が居るなんてさ可笑しいですよ。それにあの程度のイッガールの数なら、農場の作男連中で充分倒せるはずですよね。なんか農場主側に良い様に使われた、そんな感じもするんだけど」

「ユースケは、農場側の本命はマッドウルフだったと言うのか」

「ああ、あの魔物を倒したいが金を出したくない。丁度良い位の数のイッガールが居るし、俺達が狩りを始めれば魔物だって黙っては居られない。何しろ餌を狩られるんだからな、魔物にしたら狩られて横取りされたら困る。だから狩りに来た俺達を、狩ろうと思うのは当然だしな」

「んー、最悪魔物を殲滅出来なくとも、数を減らしてもらえばいい。もっと良いのは共倒れ、そう成れば金は払わなくてもいい・・・か」

「証拠は無いけどね、パックの探査にも引っ掛からなかったからな。ある意味こちらからねじ込む種が無い事さ、まっ、実戦訓練に成ったと思って黙って居るか。それじゃあ悔しいから、仕返しの工作をするかだね」

「ユースケ、何ができる」

「五年は作物が育たない位の事は出来るけど、後は水脈を止めるかな。でも働いている連中には罪は無いしな、直ぐに働き場所が見つかれば良いけどね。あー・・・農奴の事も考えると、やっぱり出来ないな。」

「うーん、確になあ。魔物の損傷具合を見てから考えようか、状態さえ良ければ結構な金にはなるからな」

「隊長、農奴の解放は可能でしょうか」

「んっ、ヤックか。可能だよ、だけど解放しても行く先が無かったら無意味だぞ」

「農奴から解放して、この農場で働き続けられるようにはできませんか」

「あー・・・ムロ、どうだ、お前も農場で働いていたから俺よりはそこの所詳しいだろう」

「主、それには農奴がどの位居るかですね。王国は農地に対する奴隷数の制限を布いて居ますから、制限を大幅に超えて居たら罰則で即奴隷の解放をさせられます。その上、農奴一人に金貨五枚の罰金

が科せられます」

「どうして、そんな制限が有るんだ」

「農場で普通に働く労働者の仕事が無くなるからですよ、それと他の仕事でも奴隷が欲しい連中は居ますからね。農場は人手が要りますから、そちらにばかり奴隷が行ってこちらには回って来ないと言う不平が出るんですよ」

「ちっ、普通に労働者を雇えって言うんだよ、腹の立つぅ」

「奴隷を買ったら、自分の子供が攫われて奴隷にされたって言う、笑えない話は良く聞きますよ」

「因果応報だな」

「隊長、なんですかそれは」

「クスタ、悪い事をしたら悪い事がやって来るって言う意味だよ」

「なる程のう、わし等は何か悪い事でもしたのかの、んっ、ユースケ」

「ビュージョさん、なんでそうなる訳ですか」

「しかし、こうもあれやこれやと災厄が来るのは誰のせいでしょうかね。こうも細かく何かに気が付くのはどうしてでしょうか、神様に嫌がらせをされて居るみたいです」

「あいあいケイリス、みんな俺が悪いんだよね。でっ、パック、魔

物の損傷はどの程度だ。売り物に成らない様なら、農場主の家の中にでも放り込んでやるぜ」

「隊長、自分らの姿を見れば察しが付くでしょう。アルマの回復魔法で凌いだんですよ。マジ死ぬゝって思いましたもん」

「まあ今回はイッガルだけで我慢するしかないな、報復はさっきの様に、ギルドにはこの事を報告」

「団長、今回は泣くしか居ですか。俺は凄くそれだけでは気が済まないですよ」

「ヤック、冒険者をやっているという事も有る。皆で乗り切るしか無いのだよ、まゝギルドは此処からの依頼は受けないか報奨金が倍以上に成るだろうな」

結局、魔物は農場主の家に放り込まれ。夕食時の事で、揃っていた農場主家族は卒倒し。その間に農奴達が奴隷の首輪を外すことに成功、金品も全て持ち出し逃走した。最後の農奴が屋敷に火を放ち、屋敷は全焼した。幸いにも死者は無く済んだが、この後没落し家族はバラバラになったと言う。ここまで悪い方に事態が動いたのは、普通の農夫より農奴が多かった為誰も止められなかったのが原因だろうと言われている。因果応報といって仕舞えばそれまでだが。

ユースケの出奔

農場の騒ぎから四日、ユースケ達は街道筋の村宿に泊まる事に成った。別に是非とも泊まらなければならぬ訳では無いが、顧問のビュージョさんは歳だからやはり辛いのだろう首や肩を揉んだり捻ったりをしている。回復魔法だけでは根本的な疲れは取れないだろうと、団長が気を聞かせて宿をとった。

「やゝ、宿の風呂は久しぶりだなあゝ。野営地の風呂も趣が有って良いけど、宿の風呂も良いもんだなあゝ」

「おい、パック。宿の風呂から鏡は外しただろうな」

「外したけど無理かもですよ、ユースケ隊長は彼女たちの視線でなんだか変と思って居る様ですし。バレタ後は大変ですよ、能力全開で暴れられたら王国処か世界なんて吹っ飛んでしまいますよね。それでもいいんですか団長、僕は早めにこうだと教えた方が勝手に解決策を見つekerと思います。例えば神様に殴り込みをかけるとかですが」

「うゝん、そは有り得るよなあゝ。星々を神様に向かって叩き付ける事も出来そうだしなあゝ、こええゝ」

「でしょ、これはあの女神様の悪戯か嫌がらせでしょうしね。責任は向こうに有るんですから、きっちり取ってもらうのが筋だと思いますが」

「なんじゃこりゃああ〜」

「あっちゃああ〜、早速ばれた様ですよ団長」

「パツク、お前みんな外したって言ったじゃねえかあ〜」

「あっちは女風呂ですよ〜」

「なんでユースケの奴女風呂に入って居るんだよ〜」

そこに、何やら物凄く可笑しそうに笑いながらネイルがやってきた。

「ああ、それね。むさい野郎どもと一緒になんか嫌だって我が儘言っただのあの子、それで皆後で良いからお先にどうぞって言ったのよね」

「お前達はなんでそんなに彼奴には甘いんだ、他にも男は居るだろうが」

「あら、ユースケ滅茶苦茶可愛いんだもの。女は可愛い者に弱いものねえ〜」

「ネイル、何が弱いものねえ〜だあ〜、この俺達の世界がぶっ壊されても良いのかよ〜」

なんだこの顔は、親から貰った顔じゃない、性別も解らない化け物顔だ。こんな顔に替えたのはあの婆神に決まってる、くそ。

俺は風呂から出て自分の部屋へ行った、手にしたのは大型のナイフ。

「ねえ、音しないけどどうしたのかしら」

「うーん、おいパック見て来い」

「えー、嫌ですよ。妙な言いがかりを付けられて弄られるのは」

「ほほ、そんな訳なからう。わしが見に行って来る、わしにはまさか八つ当たりはせんだろうしの」

「何をしておる、ユースケ止めろ」

「おい、ケイリス。ビュージョ顧問がなんか慌てて居るぞ、見に行つて来る」

「俺もいきます」

「あたしも行く」

「パック来い」

「はい団長」

ビュージョの慌てた声に触発されて部屋を飛び出した四人、ユースケの部屋に飛び込んだ。そして目にしたのは、顔を抑え呻いているユースケと。床に散った血だった。

「ユースケなんて事をするの、ケイリス早く治癒を」

「ケイリス来るな、親から貰った顔を勝手に弄られて。男なのに女のような顔にされて、誰が嬉しいと思うかよ」

そう言ってユースケは顔にナイフの刃を走らせるのだった、まさに顔をナイフでズタズタにしてしまい。床には血がますますこぼれ落ちて行く、ユースケの実力を知る四人は。力に訴えて止める事も出来ず、ただ茫然と見ている事しか出来なかった。漸くユースケはナイフの動きを止め「ちつとは男らしくなったかもな」そう呟くとナイフを降ろした。ネイルは震える声でユースケに声をかけた。

「ユースケ、兎に角血止めをしないと。そのままじゃ化膿するわ」

「ふん、そうなれば一番いいさ。あのくそ婆、今度会ったら只じゃあゝおかねえぞ」

増悪の籠ったその声色に、四人は立ち尽くすのみだった。

「ユースケ、気持ちは分かった。兎に角血止めだけでもさせてくれ」

「出て行ってくれ、血止め位自分で出来る」

そう言い張るユースケに、何もできずに部屋を出て行く四人だった。

「ユースケったらなんて事を」

「男として解らんでもないが、そこまでするかユースケ」

「神も余計な事を、余計なと言うより馬鹿な事をしたものじゃ。ユースケがこの世界を憎悪しないと良いが」

「団長、骨らしいものが見えて居ましたよ、大丈夫でしょうか」

「俺達ではどうにもならんよパック、ユースケの言う事にも一理ある。異世界に来て顔を神から弄られて、親から貰った顔ではなくなった。これが怒らずに居られるものか、色んな意味で恐ろしい事に成らないか心配だよ」

「ぬうゝ、わしは教皇に成れと言われて一度は承諾したが。考えなしの神だった様だな、あの話は無かった事にしようぞ」

「なんなんだこの世界の神は、もうやってられねえ」顔の血止めをし、ユースケは呟いた。

ユースケは自分の荷物を纏めると、部屋の窓を開けた。床にさようならの血文字を残して、窓から飛び発った。ユースケの心には、不信・憎悪・嫌悪の感情が渦巻いている。

恥ずかしくって帰れない……

ビュージョ若いユースケ隊の隊員達を目の前にし、ユースケの事を異世界人と教えた。

「わしから教えなくとも、どうの昔に真偽は別として情報は持つて居ると思う。ユースケは、最初から居た自分の世界の理からも、飛ばされて来たこの世界の理からも外れてしまった子じゃ。元の世界ではとうに成人した男性じゃと言っていたが、わしらが居るこの世界とは時間軸が違う様での、女神がこの世界の時間に合わせたらあの通りになった。そのさい、女神がユースケの顔に悪戯をしてな、あの通りの顔になった。じゃがそれはやり過ぎじゃったようじゃ、少ない縁で自分の元の世界と繋がっている物は、もう両親から受け継いだ身体だけじゃったのだから。それを面影も無い程替えられてはの、心が折れるのは当たり前かもしれない。桁外れの魔法が使えても、桁外れの怪力と言う物が有っても。それは元から有ったのではないからの、魔法もこの世界に来て見た、使ったと言う。元の世界では、魔法等お伽話か夢物語の中の事と言っていた。ユースケは元の世界では少しだけ肉親に縁のない、一寸だけ不幸だけれども平和な国に住み平凡な一人の青年として生きていたと言う。それがなんの運命か見知らぬが、理解しがたい世界に来てしまった。目にする物・触る物・触れられる物・経験する事全て知らない物、言葉も習慣も金の単位も全てじゃ。ケイリスも色々と、今に成ればああそうだなと気が付く事も有るのではないかな」

話を振られたケイリスは。

「そうですね、初めて遭った時は言葉も通じなかったが。それでも悪い感じはしなかったな、なにかこう、頼りなくて放って置けない

感じがしましたね。まあ、あの怪力には衝撃を受けましたが。だからと言って、怪人・魔人とは思いませんでした。ただ、思い返せば少しずつ言葉や態度が荒くなっては来ていたと思いますが」

「ユースケはこの世界に来て初めて人を殺した、この世界では人殺しなど日常茶飯事だが。元居た世界では、ユースケは一番平和な国に生まれて住んでいたと言う。この世界の事は何もかもが衝撃的で、少しずつユースケの心に傷となって深くなっていった。諸々の事を耐えて居たが、あれはギリギリの琴線に触れて切れてしまったと言う事かも知れないな」

「団長、それは望郷の念もって言う事ですか」

「ムロ、当然だ。親しい友人も居ただろう、好きな娘も居たかも知れん。何もかも失った、それに将来と言うか未来と言うか、ずうっと先の事を思い遣れば。過去と未来への絶望と不安、俺達の思い至る事ばかりでは無いだろうからな」

「あたし、何だかわかる気がするわ。この世界に好きな娘が出来て、結婚を申し込んで受けて貰えてもね、子供を作って一緒に暮せるだろうか。子供が出来ないならそれでも良いけど、もし出来た子供に精神的肉体的に重い障害が有ったとか。子に出なくてももつと先に出たらと思えば、好きになっても言えない暮らせないと考えるかもね」

「主は、寄る辺の無い絶望と孤独の世界に住み暮すだけでも」

「三人の神もそれには何も触れなかった、それは保証しないと云ったも同然だからな」

「神は、酷い事を……幾ら女に好かれても、先にそんな不安が有れば近寄らせたくもないだろうさ」

「私達では支えられない事なんでしょうか、私……達、捨てられたのでしょうか」

「アルマ、捨てられたとか、そう言う事では無いと思うがの。じゃがな、お前達がユースケの事を好きだ。だから何時までも一緒に居たいと言う心が有るなら、探せば良いと思うぞ。ただ、生涯を掛ける程の事になるかも知れんがの」

「案外簡単に見せるかもな、あいつは伝説的に成りそうな騒動を起こしそうな子だからなあ」

そんな団長の言葉に、誰からともなく笑い声がでて。そして何かに、皆は誓うように頷くのだった。

ユースケは未だ飛んでいた、目指す所も無く、ただひたすら飛んでいた。切り刻んだ顔は包帯でぐるぐる巻きにし、ミイラ男の様になっている。

「あー……、ぶちぎれて飛び出したけど……行き先がねえや」

ユースケは大剣に乗り、どうしようと思って居る。考えてみれば、馬鹿な癪癪を起したものだと思心後悔もしている。

「あーあ、関係のない皆に八つ当たりしちゃったし……こっばずかしくって帰れないじゃねえかよ」

「適当に何処かに降りて、ほとぼりを覚ますしかないな」そう呟き、大剣の上にコロリと横に成ると寝てしまった。

探査も何もしないで飛んでいる、何処かに激突したりして。

恥ずかしくって帰れない……（後書き）

あゝ……今日も適当に。

お正月、何時もの様に暇でございます。

アルバイトも見つからねえし、ってか……中卒じゃあなあゝ……
・ったりめえだよな。

びたあゝんと、落ちた先は戦闘中。

ただ今ユースケは絶賛落下中、眠りから覚める事無くくると風に乗って寝転がって居た大剣と一緒に落ちて居ます。原因は、飛行中の大剣の上で寝てしまったユースケが、寝返りをしたために起きた事なのだが。まあ、身体強化と物理防御の魔法で、地面に激突しても死にはしないのだが。それでも相当痛いはず、風の精霊が何とかするのか、それとも命じられていないので知らない顔をするのかは分からないが。只問題が有る、ユースケの落下地点では何やら戦闘中。このままだと双方に物凄い損害が出るだろうと言う事と、戦闘中のどちらに正義が有るのかと言う事だろう。

四台の天蓋馬車、騎馬隊と徒歩騎士隊らしい集団が中央二台の天蓋馬車守り戦っているが。襲撃隊らしい方が圧倒的に戦闘員が多く、守る方を圧倒している。

「団長、このままではじり貧です。王子殿下と姫様のどちらかを抱えて逃げて下さい、二人両方を助ける事は無理です」

「くそお、教団の奴らめ。イルランド、俺は王子を取る。姫様には死んで後を追ひ、詫びに行くと言えてくれ」

「そんな暇など有る物か、それでは兎に角王子殿下を連れて逃げて下さい」

「分かった、頼むぞ時間を稼いでくれ」

団長と呼ばれた人物が、一台の馬車に近づいた時「ぬわあゝ」の

声と共に。びっだぁーんと言う間の抜けた音を立てて何かが地面に激突した、そして一拍置いて？バーン？と言う。何か鉄板でも地面に落ちた様な音がして、地面にクレータを作った。それは襲撃者側に落ちたため、落下物の弾いた石くれや土砂が襲撃者側を襲い大損害を出したが。それには関係なく突然の出来事に、何事かと双方が啞然として見ていると。クレータの中から「イテテッ、びっくりしたなもおー」の少年らしい声とともに、土に汚れた包帯だらけの顔をだした人物が立った。

「いやー、取り込み中済まなかったな。まま、続けて続けて、手えくださねえからよ」

「貴様何者だ、我らにこの様な負傷者を出してふざけた事を言う出ない。我々は創始神ガムール教教団の者だ、詫びる気持ちが有るのなら神の戦士である我らに手伝え」

「聖戦士長殿、この様な怪しき者に手伝わせては我らが穢れますぞ。この者諸共王家の者も斬り捨てましょうぞ」

「おいおっさん、俺は謝ったぞ。それを斬り捨てろだと、なんの宗教集団の馬鹿か知らねえが。宗教を盾に人殺しだぁー、ざけてんじやねえよ。坊主は神様に大人しくお祈りでもして居ろ、この腐れ坊主供が。あつたま来た、さっさと引かねえと俺がお前達をぶっ殺すぜ」

「おのれ無礼者めが、神の戦士である我らに悪口雑言をぬかしおつて。皆の者、見せしめじゃ、こやつから斬り捨てい」

その声と共に、火魔法の火炎弾がユースケの正面を襲って来た。そして殺到する剣の群れ、槍の穂先。ユースケは手にした大剣で軽々

と火炎弾を打ち返すとともに、そのまま大剣を振り回し縦横無尽に走り回る。

あつ、という間に宗教集団の戦闘員を叩き伏せたユースケ。転がる遺体や負傷者からを探り金目の物を漁る、坊主にゃお布施と喜捨てが有るんだから金なんか要らないだろうと言いながら。

「おそれながら物申す、何方か存じ上げぬが此度のご助勢に対し感謝する。我らはベリリユー王国王室近衛騎士団の一つ、バイテス騎士団で有ります。そして私が団長の、バイテス・ハース・レイビヨールと申す者です」

「あつそう、まあ気にしないでいいさ。カッとしてやつちやつただけだからな、それに俺は流れの冒険者だし、そんな奴に改まって挨拶するのは近衛騎士団の沽券に係わるんじゃないやねえの」

「なにをおっしゃいますか、どの様な過程で有ろうと。結果は我らに助勢をした事には変わりには有りませぬ、その助勢に礼を申すのは騎士道としてなんの戸惑いも有りませぬぞ」

「バイデス、わたくしからも礼を言いたい。冒険者様、わたくしはベリリユー王国第一王女、セピシル・ファレル・ミューファ・ベリリユーと申します。此度の危ない所へのご助勢、ありがたく感謝をいたします。もしよければお名前をお聞かせ下されませ」

「姉上様、ずるうございます。冒険者殿、我はベリリユー王国第一王子、ジョウイ・ドレイク・フォン・ベリリユーじゃ。危なき処への助勢、ありがたく礼を申すぞ」

「へえ、王子殿下は礼を言うにも上から目線か、成る程ねえ。あ

く、慣れない事を言うところなる典型的な例だな。だけど、受けた事へはしっかり物を言えるんだから羨けはきちんとしているよな。俺の名前はユースケ・タチバナだ、冒険者の端っこにしがみついて飯を食っている」

「うゝ、済まぬ。城では、臣下にしか礼を言う相手が居らぬのじゃ」

「気にすんな、まあ将来は国王陛下だ、勉強しろよな」

「タチバナ殿、素晴らしい大剣ですな。これ程の大剣を片手で振り回す、見た目より筋力が有るのでしょうか」

「ふふん、持ってみるかい騎士団長さん。あつ、その前に……此処にいる者達に治癒を」

ユースケが、右手人差し指で空中に円を描くと。リンと言う小さな音と共に、薄い緑の光が一带を照らした。呻き声を上げていた者達の怪我の傷が、その光に包まれるとスーッと治って行く。

「これは、なんとこれ程の治癒と回復魔法を……無詠唱で」

「凄おゝい」「タチバナ殿、魔道師でも在られましたのですね」

「うゝゝゝ、こそばゆいからそれ止めてくれる。ユースケと呼び捨てで良いし、そんな畏まった話し方をされるとくすぐったいぜ」

「ユースケ殿、我らは恩人と呼び捨てする程愚かでは有りませぬぞ。それから折り入ってお願いがございます、今の戦いで戦死した者も居ります。つきましては城まで護衛を依頼したい、ギルドの方には我らから伝えます。如何でしょうか」

「おおそうです、戦死した者達には済まぬが。わたくし共は急ぎ城に戻らねばなりません、わたくし共を襲った元凶が何時また襲ってくるかも知れません。どうかお聞き届き下されませ」

「ふうん、まあ城門までなら付いて行ってやっても良いけど。その後は遠慮するぜ、家来になれゝなんてのは御免だからな」

「見抜かれてしまいましたか、しかし冒険者なら依頼は受けて頂けますでしような」

「まあなあゝ、どっちにしろ同じく狙われるだろうしな。それだったらしばらくは居ようか、だけど城にはいかねえぞ。面倒くさいのいやだしな、無礼者めってんで手打ちにゝの声に反応して俺の方が斬っちまいそうだしなゝ」

「それならば我が屋敷に参られませぬか、王城のすぐ傍で有りますれば何かと都合が宜しい」

「それも遠慮するぜ、屋敷の侍女さん達が気絶するかもよ、包帯男が来たあゝってよ」

「然様ですか、仕方が有りませぬな。それよりその大剣を持たせて下されませぬか」

「あゝ・・・潰れても知らねえぞ」

「いやいや私もそこそこ力は有りますぞ、そう簡単には潰れませぬが・・・んゝ・・・ここは用心をして副長と一緒に持たせて頂ましようか。イルランダ参れ、ユースケ殿が大剣を持たせて下さるそう

だ」

「団長、イルランダは王国騎士団一の力持ちと心得ております。この少年が片手で振り回す程の大剣など、何程が有りましようか。どうだな少年、もし私がその大剣を片手で振り回す事が出来たなら。我が王の臣下に成れ、もし出来なかったなら私が少年よ、そなたの臣下に成ろうぞ」

「あー、こんな頭も力もよわっちそうな奴なんか臣下にやいらねえや。ほれよ」

そう言っ、ポンとイルランドに大剣を投げてやったユースケ。受け取ったイルランダはそのまま倒れ込み、起き上がれずもがく事し。漸くユースケの大剣の下から這い出したイルランダ、真っ青になり這つくばり謝った。

王子と姫様は目を真ん丸にして絶句、バイテスも驚愕の表情でイルランドとユースケを交互に見ているが。イルランドめ、臣下に成ると言ったがどうする心算だの心が見え見えだ。

「俺みたいこんな怪しい奴が、臣下なんぞ必要な物か。成られても迷惑だからな、国王と王子に忠誠を尽くすんだな」

「忝く思います、数々の無礼をお許し下され」

「おう、くださるぞ。それより腹減ったよ、なんか食い物あるかな」
そう聞いた端から、ユースケの腹がぐうぐうと鳴り響いた。

いったいここは何処なんだろう。

姫様と一緒に馬車の中で短剣を構えていた侍女達も、思わぬ救いの手が現れ安堵し。救いの手を差し出した者が、空腹の虫を鳴らしたのに大笑い、急いで食事の用意をした。急ぎとは言え、流石王女と王子の侍女達、てきぱきとユースケの目の前に食べ物を並べた。

「でっ、なんであいつ等に襲撃されていたんだ」

空腹を満たされてご機嫌なユースケ、ベリリユー王国のお姫様と王子様を目の前にして。騎士団長のバイテスに原因を聞く、教団が何故に武力を使ってでも何かを仕様とするのはただ事ではない。

「姫様を巫女にと陛下に申し入れたのです、巫女とは言え体の良い人質。姫様には申し訳ないのですが、教皇は側室にする心算だったようです」

包帯を巻き、怪しさ満載の男を目の前にして。然程動揺もしていない気丈さと、きちんと救いの手を差し伸べた相手に臆することなく礼を述べる健気さに。ユースケ惚れちゃいそう、と心の中で呟いた。白い肌にさらっと背に流した金髪、そして蜜色の瞳は賢そうに輝いている。歳の頃は十四五歳程か「今の俺と同じ位か一寸だけ上」かな、それぐらいだろうと思った。

「ふーん、姫さん可愛いし綺麗だもんな。瞳が蜜色っていう事は、神術の白系か余計な事をしたかな俺はさ。所でその教皇って歳は幾つくらい、まさか六十過ぎのヒヒ爺って言う奴じゃないよな」

「正にヒヒ爺です、金と権力の有る者には教皇と言う立場をチラッ

かせて娘や息子を差し出させ。拒めば不埒者と武力を振るい攫います、厭きれば下げ渡すと申し奴隷に売り飛ばす極悪非道。なれど一国の軍を蹴散らす程の武力を持つので、易々とはとても太刀打ちできぬのです。国同士が同盟を持って対抗しようとすれば、要人の暗殺を繰り返し同盟をただの飾り事にしてしまいます。その男は現在六十五、強い魔力を持って居ますので後どれ位在位するのも判りませぬ」

「はあ、魔術って教皇だろう。教皇なら神術だろうによ、教皇で魔術ったらそれは魔人だろうが」

「なんと、ユースケ殿はあの者は魔人だと申すのですか」

「直接見た訳じゃないからな、その辺りはそこに居る三人に聞けば分かるんじゃないか」

えっ、とユースケが顎をしゃくり示した方向に。例の三馬鹿神が立っていた、昼なのに淡く光る姿はまさに神。周りの騎士達や侍女達、姫様も王子も跪く。

「ユースケ、わらわは……」

「俺への言い訳は聞かねえぞ、どうしても言うのなら。この話の事の始末は、あんたらでして来るんだな」

「分かった、事が終えたら話を聞いてもらえるのじゃな」

「ああ、聞くだけ聞いてやる。気に入らなかったら世界の二三十ぶっ潰してやる、お前達にも怖い者が居そうだしな」

「か、神を脅すのかユースケ」

「ふん、その原因を作ったのは誰なんだよ」

完全に立場を逆転させたユースケ、どうやら人格・性格が変わった様だ。神をぞんざいに扱うそんなユースケに、その場にいた者は卒倒しそうな表情をしている。

スツと姿を消した三人の神、当たり前前に始末は付けられる様だ。

「か、神様とお知り合いですかユースケ殿は」

「うーん、別に知り合いたくは無かったけど。結果知り合ったって言う事かな」

「その辺りの話はお聞きできますでしょうか」

「姫さんそれを聞いてどうするのかなあ〜？」

「あっ、そ、そんな・・・只聞きたいなと思っただけで。深い意味はありません、ごめんなさい」

「んー、好奇心は猫をも殺すってどっかで聞いたな。余り好奇心が強いので感心しないよ」

「申し訳ありません、姫様は立場を取ればごく普通の女の子でございます、年頃程に好奇心はお持ちなのでございます。侍女長の私もお詫びいたします、なにとぞご堪忍下されまし」

「別に怒った訳じゃあないよ、でっ、それより何時まで此処に居る

訳なんだ」

「あの、神様をお待ちしなくてもよろしいのでしょうか」

「あー・・・よろしいぞ、待ってやる義理は無い。待てば無用にこのまま野営って言う事に成るかもな」

「ユースケ殿がそう申されるならば、ここは発ちましょう。国王陛下も王妃様も、ご心配で有られてお待ちでしょうから」

「ユースケ様も馬車へどうぞ」

「あつ、それ無理」

「えっ」

「ほら、これが有るから馬が嫌がるんだよな。重すぎるゝって」

「それなら教団の兵が乗って来た地竜は如何でしょうか」

「うん、一頭貰おうか。それから普通の馬も一頭な」

「大剣用に地竜と、乗用に馬と言う事ですな」

「うん、そう言う事。まあ別に必要もないのだけどさ、うっかりすると又落ちてもなあゝ」

「ああそうでした、何故に空からなのでしょうか」

「えへへへっ、剣に乗ってその上で寝ていてさ。うっかり寝返りし

たら、そのまま落ちているのに気が付かないで此処に落ちちまったんだよ」

「ええっ、ユースケ様は空を飛べるのですか」

「えゝ・・・？、普通飛べるだろ」

それを聞いて居た者達「いえいえ普通飛べません」そう声を揃えて言った。

「ユースケ殿、我を抱いて空を飛んでほしい」

なんの恐れ気も無く強請るのは王子ただ一人、だが姫様も騎士団長も御付き達も必死に止める。

「しかしこの辺りって何処なんだ、随分飛んだ様な気もするんだけど」

今頃になって、今自分が何処に居るのかと言う問題に気が付いたユースケ。国の名前は聞いたが、自分の知識の中にはない国名。うーん・・・「ひょっとして大陸違った？」そう思ったユースケだった。

斬る

ユースケは浮遊と風魔法を掛けた、ベリリユー王国王子王女を乗せた馬車と騎士団。尻が痛くなるから大剣に託けて一旦断った馬に乗り、大剣は地竜に乗せそれなりの速度で走っていた。

「ん、なんか前の方に何か大きなものが有るぞ」

そう言ったユースケの声に、バイテス団長が命じた。「斥候隊員前へ」

声と同時に騎兵が二人走って行った。

ユースケは地竜に近付き大剣を取り左脇構えの姿勢を取った。

「なんでしようねユースケ殿」

「なんかとんでもなくてつかいのが・・・」

うわああああ・・・「ドーピス陸ガメですううう」斥候隊員の声と同時に、その叫び声を追いかける様に追って来た物は。ドドドドドドッ、の凄まじい音共に超巨大な亀が一頭現れた。

でかい、どの位でかいかと言うと。ダム工事現場か鉄鉱石の露天掘り場に有る様な、巨大重機程も有ると言ったら分かりやすいかも。

「うあゝ・・・でけゝ、これ食えんのかい」

「なんで其処で食えますかと訊ねるのが解りませんが、食べられ

ますがその前に我々が食われそうです。ユースケ殿逃げられませんか、足が速くてとてもではないが逃げ切れません」

「ふうん、食えんのか。亀って普通鈍足だよなく、世界が変わるそっちも変わるのかい・・・でっ、金にもなるのか」

こちらを餌を見る様な感じで睥睨している巨大亀、地竜を見て涎を流している。

「金にもなりますが・・・ユースケ殿に任せます、よろしく倒してください・・・」

そんな声を聴いたかどうか分からないが、ユースケは超巨大亀に特攻をかけていた。

「んなあゝ?・・・振り回すうゝ」

「団長、流石は神を恫喝するだけありますね」

「イルランダ、何を呑気な事を?」

「いやいや団長、どう見たってあれは遊んでいるとしか思えませんか?」

「姉様、ユースケ殿は怪力超人です。あれっ、姉様・・・気絶してますか」

馬車の中では、気絶した姫様に姫付き侍女達が慌てている。それは当然だろう・・・ってか、気絶しなかった侍女さん達は流石だと思う王子だった。

ユースケは超巨大亀の尻尾を掴んで振り回し、地面にビッタンビッタン叩き付けている。硬い甲羅の超巨大亀、今までこんな目に遭った事が無い。だが、内臓に確かなダメージを受けている。抵抗し様にも振り回されている今、ただジタバタ手足を動かすのみ。良い様に振り回されて段々目が回ってきた、そこでユースケはポイと手を放す。あちらこちらに大穴があいている地面、首を甲羅の中に引っ込める事も出来ずに、超巨大亀は大穴の一つの中でぐったりとへたばっている。

「へへん、どおだ亀。動けないだろう、今首をぶった切ってやるかな」

へろへろになった超巨大亀に向かうユースケは、大剣に風魔法をかけ「大剣風斬」の掛け声とともに超巨大亀の首に叩き付けた。ドスンと落ちた亀の首、流れ出す血の匂いが立ち込める。

「やあ、流石にこの匂いは嫌だな。しばらく休憩な、流れるのが終わったら水で流すから」

「ユースケ殿、これを一体どう言う風に運ぶのですか」

「ん、あつ・・・どうしようか」

「ユースケ殿どうでしょう、ギルドに早馬を出しますからここで解体させたら如何ですか」

「団長、ギルドの連中が信用しますかね？」

「そう言われると・・・それもそうだな」

「信用しますぞバイテス団長、何しろ目の前の出来事ですからな」

「どっから湧いた、メイドンギルド長」

バイテス団長の前に現れた男は、この国の工房ギルドの長でメイドン・ラ・ヤトップ。男爵位を金で買い、この国の貴族になった男でもある。

「いやいやバイテス団長、相変わらず口の悪い。ドーピス陸亀が現れたって言う情報が有りましてな、なんとか倒せないものかと様子を窺っていたのですよ。所あの少年はなんですか、王国の騎士団員には見えませんが」

「見えないのは当たり前だ、神聖勇者様だからな」

「なんと、神聖勇者様とな。して何者ですか？・・・」

ユースケにそっと近づいたイルランダ副団長「あいつは工房ギルドの長ですが、物凄く吝嗇な奴です。滅茶苦茶値切られますからご用心を、それから神聖勇者様と言うのはこの近辺の国々では伝説の人物です。団長に話を合わせて下さい、結構効き目が有りますから」

ユースケは何に効くのか分からないが、取り敢えず合わせた方が良いのだろうと思った。

「メイドン、貴様私の言う事を愚弄しているのか」

「とんでも有りませんバイテス団長、あれは只の伝説の人物。実在する訳が有りませんぞ」

「ほほう、貴様目の前であれを見て伝説と否定するのか。なればあの少年をどう見ると？」

「い、いや・・・ははははっ。あゝ・・・ははははははっ」

「おい、おっさん。おっさんてドけちって本当か、本当なら売らねえぞ」

「ぶっ、ユースケ殿直球過ぎですよ」

「これはこれは勇者様、私は工房ギルドの長でメイドンと申します。ドけち等とは困りましたな、確かに厳しく査定はいたしますが。それとて商人の一人でございますから、交渉術の一つと心得ておりますが？。良い物をより安く手に入れて、手頃な値段で販売致すのが商人と申す者、ケチと言われては立つ瀬が御座いませんな」

「ふゝん、冒険者や傭兵が、命がけで倒した獲物の良い物を。買い叩かれて売ったは良いけど、その金額では良い武器良い防具が買えずに。それでも生きて行かなければならないから、新たな獲物との戦い行き。魔物や害獣に殺された冒険者や傭兵の恨みが、お前にでなくてお前の家族やギルドメンバーに降りかからなければ良いのだけれどな、ましてこの国にな。所で団長、このおっさんて金持ちかい」

「ユースケ殿、金持ちも金持ち。家など城よりも派手で立派です、それに国に金を貸す程ですよ。それも国内の貴族は及ばず、近隣の貴族商人官僚の首根っこまで抑えて居ますな」

「ふゝん、国に仇名す程の金持ちと言う事だよな。過ぎざるは及ばざるが如し、身の程を知らないって言う事だよな。団長、こんな

の生かして置いても国の為にはならないぜ。金に飽かせて国を乗っ取るかもよ」

「ユースケ殿とやら、なんと言う事を言いますか。確かに私には金是有りますが、国に仇名す等とは迷惑な言い様。その発言は取り消しなさい」

「団長、此奴の家の奴なのかあいつ等」

ユースケが指さす方に、武装はしているが何処か無表情で薄汚れた男達が立っている。そして一様に首に黒い輪を嵌めている、ユースケは最初からこれを見て話していた。

「あれは。メイドン、あいつ等はお前の家の奴隷か」

「とんでも有りませんぞ、ただ借金を返せず我が家で働いて返したいと来た者達です。あの首輪も自分達で嵌めた物ですぞ、奴隷は持つて為らないと言う国の方針は心得て居ますからな」

「詭弁だな、あいつらが自分で嵌めたとしても首輪は奴隷の証し。立派に国法に反している、その罰則はなんですか団長」

「その場で斬首ですが」

それを聞いたユースケは、まさにその場でメイドンの首を斬り落とした。

「団長の立場で斬ったら、後後付け狙われそうだからな。城にこの事を報告して、此奴の資産を全て没収した方が良いと思うけど」

「ユースケ殿、それでは貴方が狙われる」

「ふん、知らないのか団長。金の切れ目が縁の切れ目、命まで無くした此奴に何が出来る。あっさり此奴の家は崩壊するさ、それに俺を殺せるのは神しかないぜ。それにな、俺はどんなでも人を奴隷にして、売ったり買ったり使ったりしている奴が許せないんだよ」

「成る程、ユースケ殿の言、実行しましょう」

「イルランダ、お前は城に帰り王にこの事を知らせろ。いいか、必ず宰相と軍務卿の同席で言上しろ。気の弱い陛下の事、ユースケ殿の事信じずに賊として討ちに来かねないからな」

「いや、それは団長が行った方が確かです。この場にはユースケ殿も居ります、姫様と王子様の事は任せて下さい」

「うーん、・・・ユースケ殿、頼めますかな」

「ああ、大丈夫だ。宿泊施設も防護障壁も作って守るから心配するな」

「では頼みます」

「王子殿下、お話の通りでございます。姫様をお頼みしましたぞ」

「うん、姉様の事は我が守るから大丈夫だ。父上には敵を間違えない様にと伝言を頼むぞ」

バイテスはその言葉を聞き、雷に打たれたような感じを受けた。殿下は英邁なる王に成ると確信した。

「王子殿下、私バイテスは殿下の家臣で有る事を誇りに思います。殿下のお言葉必ず陛下にお伝えいたします」

バイテスは、足の速い地竜に乗り城へひた走りに走る。ユースケとの邂逅で、今日一日で百年は生きた感じだと思いつながら。

斬る（後書き）

正月明け・・・飲み過ぎて体調悪く・・・あゝ・・・頭も身の内く・・・元から悪かったけ・・・どっぽおゝんでごじやりますうゝ。

狍犬二頭がやって来た　その一

ギルドの長の首を、一刀のもとに斬り飛ばしたユースケ。暫くしてから自分の行為に愕然とした、自分が短期間のうちに、こうも人を殺す事への戸惑いも罪悪感も湧かない事実いだ。

「神様が俺に何かしたのかな？」

「はい？」

「いや、なんでもないよ」

イルランドに訝られたが、まさか彼にそんな相談を打ち明ける訳も行かず。

ユースケが、心の何処かへ仕舞い込もうとした時。

「なっ？」

そんなユースケの目の前に、一つの映像が映った。二頭の魔獣に蹂躪されボロボロになった、冒険者赤い風団長以下ユースケ隊のメンバー達の姿だ。

一瞬の戸惑いも無くユースケは、心に其処へと願った。

「そくがぁー」

その声と同時に、スパッと消えたユースケの姿に呆然として佇むイルランド、何処へ行ったのか。

「ネイル。すまん覚悟してくれ、相手が悪すぎた」

「仕方ないわ、あれの後ろにこんな化け物の様な魔獣が居るなんて分からなかったんだもの」

「お前と一緒に成れて幸せだったぜ・・・」

くそがぁー・・・

その声と同時に、化け物の様な魔獣の一頭が吹き飛んだ。

ユースケの目に映った化け物の姿は、ライオンの様な、それとも又違う魔獣。ユースケは元居た日本の神社の前に飾られて居た、狛犬の様な魔獣と感じた。

「この野郎、好き勝手に随分俺の仲間を甚振ってくれたな。覚悟しやがれ、ぶっ殺してやる」

「主、お帰りです」

「隊長、遅いです・・・死ぬかと思いましたよ」

「ユースケ、ケイリスは気絶していて使い物にならん。後は死んだ者はいないから安心しろ」

「団長、詫びは後です。此奴を片付けるぜ」そう言いながら駆け出すユースケの姿に。

「俺達が手も足も出なかったあの化け物みたいな魔獣を、隊長一蹴りで吹っ飛ばしたぜ」

「すっげえ、どっちが化け物か分からなくなったぜい」

「クスタ、良い意味で隊長の方が格上だな」

「アルマ、化け物の様な魔獣の格上ってなんだ」

「神獣とか？」

「ネリア、ユースケ隊長は神獣なのか。人じゃないのかい」

「隊長は異世界人だからな、この際なんだっていいんじゃない？」

「あつ、それ言える。敵じゃなくて良かったねパツクさんムロさん」

「確かに。俺はな、内心敵になって戻って来るんじゃないかと危惧してたんだよ」

「ああ、この世界の神様無茶したもんなあ。ユースケ隊長、話じや随分と激怒して飛び出していったって言うからな・・・痛たた」

「ムロさん大丈夫、ごめんね治癒の魔法使えなくなってる」

「アルマ、大丈夫だ。後で主がやってくれるだろうから」

「ひえ、あれって魔法障壁でしょ。魔法障壁を鎖状に出来るなんて知らなかったわ」

「いや、あれはどう見ても鞭だよ。鞭にして巻きつけて振り回しているんじゃない」

「いやはやユースケは一段と無茶をするのう、団長」

「うーん、あそこまで甚振らなくとは思いますが。顧問、ユースケ少し精神的に荒れているようですなあー、なんとかならないものでしょうか」

「おう、ケイリス復活したか」

「団長、申し訳ないです」

「ユースケの作った魔具が役だったな、そうで無ければ全員即死だったろう」

「そうねえ、ってか・・・あたしの居た方にあの化け物魔獣が近寄らなかったのは何故かしら」

「うむ、わしはあれのせいだと思ったのだが」

そう言いながらビュージョが指さした方向に、団長とアルマ達の新婚馬車がある。

「ほんの少し前に気が付いたのだが、馬車の上に載っているあの二対の像、あの化け物魔獣に似て居ないかの」

「痛い痛い、ご主人様あゝ止めて下さい」

練り込むように作った鞭、本来なら壁かドームの様に張る魔法障壁を。ユースケは使いやすい様に鞭状に練り込んで作った、これで団を襲っていた化け物の様な魔獣を散々甚振って居たユースケ。ご主人様〜と言う魔獣の声に驚いて手を止めた。

「俺はお前達の主になった覚えは無いぞ」

「それでも僕達から見れば貴方は僕達のご主人様です」

「そうです、あたし達は地球の日本から連れて来られた神獣です」

「あゝ、狛犬か」

「はいそうです、向こうの神様に、ユースケ様をお守りしろと言われて来たのです」

「それじゃあなんで俺の仲間を襲っていたんだ」

「ご主人様の姿が見えなかったので、何処に行ったのか聞きに行っただけです」

「それだのにいきなり攻撃するなんて酷いです」

「酷いのはお前達だろう、俺の仲間の攻撃程度なら軽くないなせたらうが」

「むうゝ、だってだってえゝ、話を聞いてくれないんだもん」

「分かった、一寸誤解があった見たいだな。話を聞いて来るから待

って居な」

どうやら子供の様な感じの狛犬二頭を、そこに待たせて団長以下仲間
間の傍に走って行ったユースケ。何時もと違う感じのユースケが、
走り寄ってくる様子に訝しげな団長以下の仲間達。

「あのさ団長、あの二頭はさ。俺が住んでいた所の、神様を祭った
神域の守護をする神獣なんだよ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「なんでそんなのが此処に居るんだ、それに俺達は殺されそうにな
ったんだぞ」

「あー・・・団長、あいつ等何か話しかけて来なかったかな」

「うっ・・・そう言えば、ご主人様は何処へ行つたのとかどうか・
・聞こえた様なあー」

「ふーん、それを無視して攻撃した訳か。それじゃああいつ等が腹
を立てるのは仕方が無いな」

「ユースケ、そいつは無茶だぞ。ふつうあんな化け物の様な魔獣・
・いや神獣だったか、そいつにドスンドスン近寄られてみるよ。命
あぶねえーって攻撃したくなるだろう」

団長の言う言葉にも一理ある、自分が立ち会って狛犬達と話をさせ
る事にした。

狛犬二頭がやって来た その二

「なあビュージョ顧問、あの馬鹿神達一体何を考えて居るんだろうね。ってか、一体全体俺に何をやらせたいのかね、解ります」

「ユースケ、それはわしが聞きたいぞ。だが、随分と支離滅裂になっでは来ている様だの」

ユースケが、うーんと唸りながら見上げる其処には、巨大な狛犬二頭が不思議そうに見下ろしている。

「この狛犬、向こうの神様が寄越したらしいんだけど。なんかご機嫌を取られて居る様で気味が悪いんだよな、そもそもなんの為にご機嫌取りって言う事なんだけど」

「ユースケの桁外れの能力にさ、神様もビビって居るとか」

「ネイル、鋭いな。流石は俺が女房ぜ」

「団長、変なおのろけは要りません」

「所でユースケ、この二頭は神域を護る聖獣・神獣だっけ。名前は有るのか」

「あー・・・それ知らないな、お前達に名前は有るのか」

「今は有りません、ご主人様、付けてください」

「それってさ、もしかして名前を付けたら主従の契約成立とかって

「言わないよな」

「ここに送られて会話した事自体で契約は成立しています、後は名前を付けてくれれば形や姿は色々ご主人様の都合の良い様に変えられます」

「主、小っちゃくなれるのでしょうか」

「ムロ、お前の中では此奴らは俺の守護獣に成って居る様だな」

「主、それは当然です。今回の様に突然家出されても、この二頭が居れば安心です」

「家出、なんだよそれは」

「ご主人様、ごちゃごちゃ言わないでさっさと名前を下さい」

「何、随分態度がでかいじゃないか」

「だってえ、話が進まないんだもの」

「ああ分かったよ。んじゃさ、ゴールデンレトリバーって知ってるか」

「んっ、知って居るよ。金毛の犬だろ、神社の前を散歩しているのを良く見かけたよ」

「名前を付けてやるからあれに变身しな」

「あいあい、変身する」

「オスはお前か、お前にはウンタル。メスのお前にはアイシスだ、此方風に付けたぞ」

「意味は有るの」

「無い」

「ぶっ、ご主人様酷いです」

「一応阿咩絡みなんだけどな」

「ユースケ、阿咩とはなんだ」

「んー、？阿？と言うのは生まれる時の声、？咩？は死ぬ時の声。そう俺が居た世界の中の国に伝わっている言葉なんだ。阿は口を開けて、咩は口を閉じている状態なんだよな。それと阿咩の呼吸と言ってさ、常に息が合う行動が出来ると言う事をさす言葉なんだ」

「成る程、互いの意を言葉なしでも理解して行動出来ると言う事だな」

そんな話をケイリスと交わしていると、狛犬は二頭のゴールドデンレトリバーに変身していた。

「この世界にも、お前達に良く似た生き物が居るから連れて歩いて不思議がられないから安心だぜ」

狛犬二頭がやって来た その二（後書き）

支離滅裂とはこう言う事、面倒だから書くの止め様か。ってか・・・厭きたし。

あゝ・・・阿吽の事は適当です、無茶苦茶は外れて居ないと思うけど。

殺す事は殺される事・・・いずれ自分もいつか誰かに・・・

「皆、勝手に居なくなつて済まなかつた。言い訳をしたくはないが、一応言う、あの馬鹿神の婆に顔を変えられて頭に來たんだ。別にお前達のせいでもないのにカツとなつてな、顔の包帯はまやかした。もう元道理になつてゐるのだろうけど、見たくも無いのでこのままで行く」

？そう言やあの連中、包帯だらけの顔なのに別になんの反応も無かつたな。王子も姫さんも怖がらなかつたのは何故なんだろう？

「ユースケどうした」

団長にそう声を掛けられて、飛び出した後の事を皆に話した。

「其処には再び戻れるのか」とのケイリスの問いに、おれは戻れると答えた。だってあの亀もつたないし、金は幾ら有つても邪魔にはならない。隊の運営資金には必要だし、国を作る云々は兎も角抛点は欲しい。

それよりも、なんの戸惑いも躊躇もなく人を殺せる。それなのに、人としての心にも痛みが無いのはどうしてだろうと。ビュージョ顧問と団長、ケイリスに聞いてみた。これは相談事ではないし、悩みでも無い。

「ユースケ、殺した相手が極悪人じゃ。これが罪も無く無抵抗な女の子供を斬つても、なんの感情も湧かないのであれば問題だろうが。相手が極悪人、そうお前の中ではもうスッパリ割り切れてゐるのだと思うぞ。だが、そう言う場面ばかりが有る訳では無い。そんな時

は、罪は罪と背負って生きる覚悟は必要じゃな」

「そうね、稀に避けられない時も有るわ。自分が生きる事を諦めない限り、斬り捨てなければ死ぬと言う事もあるわ」

「なんにしても、自分も他人も全てなんて言う事は出来ない、この世界もそれ程優しくは無いのだし」

「変に情けを掛けて、その情けが仇となって生涯命を狙われるなんてのは間抜けのやる事じゃ」

そっか、俺は知らないうちに他人に対し。斬って良い奴と、それは拙いと言う区別が出来ているって事か。・・・殺す事は殺される事、いずれは俺も誰かに・・・なんだろうな。

ご機嫌取りの理由

元の世界から狛犬二頭を贈られたユースケ、是までの事を含めた、この過剰なまでのご機嫌取りは何の為だろうと不信感を募らせている。ビュージョ顧問を含め、団長や隊の皆でその理由を探ろうとしたのだが。

・・・「でっ、俺に何をどうして欲しい訳」

バツの悪そうな顔をした神三人組、例の神官は倒せた様だが信徒までは改宗は出来なかった様だ。まあそれはどうでも良い事、目的は別に有ると思う。

「実は、わしらの上の神から。余りに強い力と能力を授けすぎだ、だから削れと言われて」

「ユースケは、その気になればこの世界を一度の魔法で破壊するくらいの魔力を持って居る」

「だから、それでは拙いと言う事で」

「馬鹿じゃね、この世界を破壊したら俺自身が生きてゆけないだろうが。たった一人生き残ってどうするよ、寂しくて死んじゃうぜ」

「それはそうだろうがの、そこはそれ、案外と疑い深い上位の神なもので」

「分かった、でっ、どれをどの位削れと」

「神術は広範囲の殺菌と除毒に、生き返らす事は無理だが病氣と怪我の完全治癒術と。ユースケが作る道具に、その能力を付与出来る事。後は今まで通り使える、ただし物質召喚は書籍類だけと言う事で」

「ユースケ、書籍の写真を見ながらそっくり同じ物を作れるぞ幾らでもな。じゃが武器は個人携帯用の武器から車載兵器までじゃ、お前が居た世界の兵器は凄すぎる」

「兵器関係で無い物でも大きさに制限が有る、重さは関係なく立て横高さ五十モイル位までの物だ」

「ふーん、要は神様魔術が殆ど使えないって言う事だな」

「まあ、簡単に言えばそう言う事だ。だが、精霊魔術と属性魔法は全て使えるから要らないだろう」

「この怪力はどうなる」

「それは関係ない、それとあの狛犬はわらわの詫びじゃ。それから顔は元の顔には戻せなかったがの、それに近い顔に戻したからの。女顔ではないが、それなりには思うぞよ」

「また弄ったのかよ、いい加減にしなよばあさん。仲間が顔を覚えきれないなんて言うかもよ」

「済まない、じゃが今回で終わりじゃ。わらわ以外は神階で見るだけにする事になった、教皇の件はビュージョにも強く断られたしの。わらわが直接この世界に下る事にした、よしなに頼むぞえ」

「げっ、墮天使じゃなくって墮神かよ」

「仕方が無いのじゃ、わらわははしゃぎ過ぎた。まっ、上位神から下された罰じゃの」

「まあ頑張れば、ここも捨てたもんじゃないぜ」

「ユースケ、そなたが例えわらわに逆らおうとももうどうでも良い。そなたは好きに生きるがよいぞ、じゃが結構長寿じゃからの、余り恨みを買わない様にの」

「あゝ、何歳位までなんて野暮な事は聞かないよ。ピンピンコロリで逝けるならな」

「ほほほっ、わらわ達の様に寿命と言う物が無い訳では無いぞえ。きちんと死ぬるからの、安心して命を楽しめば良いぞよ」

死なない命なら困るが、なんとか死ぬるらしい自分の命。余り無茶はしない様にと強く思うユースケだった「そうだな、命は一つだし、楽しまないと損だし」そう言いながら顔の包帯を取るユースケ。鏡、と言いながら新婚馬車に駆け込んだ。

ご機嫌取りの理由（後書き）

んゝ・・・超ぶっさいくにしたい。・・・あつ、俺の顔って超ぶっ
さいくだから参考に仕様かなって・・・話が終わるな。

惜別の歌と洪水ってどうよ・・・

カガミ〜と叫びながら飛び込んだ新婚馬車「なんじゃこりゃあ〜」
と叫んだのは勘弁してほしい。

内部は全面鏡張り、チロツと持ち主の二人を見やれば。団長は一寸赤い顔をして空を見上げているし、ネイルは真っ赤な顔をしてイヤイヤとプルプル震えている。それを見ている皆は、笑いたいのを我慢しているらしく、腹を抱えて悶えているし。

「スケベ」そう一言二人に投げ付けるユースケ、それを聞いて我慢できなくなった皆は、遠くを目指して走って行った。約一名、余裕でニヤニヤ笑っているビュージョさん、流石は歳の功と言う所だろうかと思う。

兎に角包帯を取り、顔を確かめた。又変に弄られて居たら嫌だし、そう思いながら見た顔は。両親の良い所取りだったか、う〜んでも良く見ればお袋似かな。太くは無いがキリッとした眉毛は親父の、でもなんとなく垂れて居る様な。あ〜そうかあ〜、お袋の目が少し垂れていたからなあ〜、それに合わせたのか。長い睫は邪魔くさい様な感じ、鼻は少し小振りだけど親父の鼻だ。唇は・・・うわあ〜、なんか色っぽくね。これは拙いだろ、少しぼっちゃりした唇、なんか誤解されそうだぜ・・・色々と。それでも全体的に違和感が無いのは何故なんだ、二重のアーモンド形の眼、小顔だし。

「歳相応の顔にしたのじゃ、ユースはこの世界では未だ子供だからの。成長して行けばそれ相応に顔も変わる、男らしくなるから今は不満じゃろうが堪えて欲しいぞよ」

そう後ろから女神が声を掛けてきた、まあこれ以上弄られるのは嫌だし「分かった、そう保障するのならもう何も言わないよ」そう答えて振り返った。

戻って居た隊の連中、なんか微妙な顔をしていたが無視しよう。女共は聞いたらなんかヤバそうな雰囲気だし、野郎どもの顔が赤いのは走って来てたからと言う事に仕様。

この顔でこの世界で生きて行く、そう決めた。元の世界に帰りたいのは当たり前だが、短くともこの世界で暮らしてきたのは事実。如何に理由が有っても奪った命も有る事実、傷付けたのも又事実。人・獣人・亜人・獣・害獣・魔物・・・色々、命に貴賤が有る訳では無い。助けた命も有るけれど、それで相殺出来る事では無いだろう。

向こうの世界に、好きになった人も居る、別れがたい友も居た。望郷の念が無い等とは言わない、ユースケは少しでも泣きたい気持ちになった。思い出したのは、親父が酔うと良く歌っていた歌。お袋も一緒に歌っていた、二人とも肉親の縁が薄かった。だけど二人とも事故で一緒に旅立った「俺の方が肉親に縁が薄いじゃんか」と泣いたっけ、結局は俺も両親も肉親に縁が薄かったな。

・・・涙がこぼれた・・・

遠き別れに たえかねて
この高殿たかどのに 登るかな
悲しむなかれ 我が友よ
旅の衣ころもを ととのえよ

別れといえ 昔より
この人の世の 常なるを
流るる水を 眺^{なが}むれば
夢はずかしき 涙かな

君がさやけき 目のいろも
君くれないの くちびるも
君がみどりの 黒髪も
またいつか見ん この別れ

君が優しき なぐさめも
君が楽しき うた声も
君が心の 琴の音も
またいつか聞かん この別れ

そう言えば、これって誰が作った詩だったのか、誰が歌った歌だろう。

でっ、この雨はなんじゃ．．．。

周りが凄い事に成っている、まるで湖だ．．．俺のせいだよ。

慌てて俺は皆を連れて飛んだ、超巨大亀を倒した場所へ。

うっかり泣けねえって言うのも辛くねえか、こんなのも削って欲しかった。

惜別の歌と洪水ってどうよ・・・（後書き）

島崎藤村 若菜集よりお借りしました。これって姉と妹の別れの歌の样ですね。嫁に行く姉、それを送る妹と言う事の样です・・・良くわからないけど。

姫様が恋をする

「あれは絶ってえ俺のせいじゃ無いぞ、幾ら俺が化け物じみた人外だからってアソコマデハ無理だって」

そう皆に言い訳をしながら現れたユースケに、ベリリユウ王国の姫様に王子様と騎士団があっけにとられた顔をして見ている。

「なんと、これだけの人数と馬車に竜車まで移転させて来るとは」

「いやいや突然消えちゃって済まなかったな、仲間が一寸トラぶってたんでね」

「後ろの方達は何方達でしょうか」

「姫さん、紹介するよ。俺が所属する冒険者、赤い風の団の仲間と俺の隊の者達だ」

「団長、ビュージョさんと皆。此処に居る可愛い子は、ベリリユウ王国のお姫様でセピシル・ファレル・ミューファ・ベリリユウ。こっちの男の子は未来の王様、現在は只の王子様でジョウイ・ドレイク・フォン・ベリリユウだ。失礼の無い様にな、・・・ってか・・・俺ってすっげえ失礼な奴」

「ユースケよ、今頃気が付いたのか馬鹿者め」

「だってよくビュージョさん、紹介なんてした事ねえもん」

「ネイル、色ボケを引っ込めてこの馬鹿者をもう一度教育し直せ」

「あーん、ビュージョさんでは色ボケなんて酷いです」

「黙れ、今のうちに正さないと今後困る事に成るんじゃないぞ」

「はあーい」

ユースケに、仲間達への紹介で可愛い子と紹介された姫様は。

「か、可愛いだなんて・・・えっと・・・えー・・・」

「姉上様、春が来ましたね」

「えっ、ジョウイってばおませさんな事を言わないの」

スルスルと包帯を取り始めたユースケ、素顔を仲間以外に初めて見せる事にしたが。傍に居たホワイトエルフのアルマに聞いた「なあアルマ、俺の顔、お前達女の子から見て気持ち悪くない」

「気持ち悪いだなんて。綺麗で可愛いですよ、抱きしめて放したくないです」

「えー、俺男だぜ、綺麗と可愛いは要らないし・・・抱きしめて放したくないって言うのは問題ありだな」

「いいからさっさと改めて挨拶をしなさい」

「えーと、姫様改めて挨拶します。ユースケ・タチバナと言います、一介の冒険者風情が挨拶などと不敬では有りましょうがご容赦を」

そう言いながら姫様の右手指先を持ち上げ、手の甲に唇が触れるか触れないかの微妙な感覚でキスをするユースケ。ネイルの教育の賜物だ。

「あ・・うつ、ユースケ様」

そう声を上げて、フラ～と気を失う様にユースケの胸に倒れ込んだ姫。それを見て御付きの侍女達が、漸く姫様に春が来たと喜び頷く。

どうやらユースケは、姫様を一発で誑した様だ。

「はて、父上様はどうするのかなあ。見ものだねえ」

そう呟いたおませな王子様、新たに起こるだろう騒動が楽しみだとかつつつく一人笑っている。

姫様が恋をする（後書き）

あゝ・・・振られまくった記憶しかない俺が、
こう言うのを書くつて不向きだな。

間抜け・・・

未だほわほわしているセピシル姫さんの耳元で「なあ、セピーって呼んでいいかな」そう聞くユースケに、セピシル姫様はユースケの胸元で頷く。

「あゝ・・・姫様完璧に落ちたね」

「誑し系とは思って居たけどな、それよか王様が許さねんじゃね」

「パックにヤック、迂闊な事を言っていると打ち首っ、なんて言われるかもだぞ」

そう声を掛けたイリスに、パックは聞いた。

「イリス、この国の事を知っているのか」

「ああ少しな、あたしらはこの国からも外れた川向こうの出なんだよ。もっとも、こっちに來る時は死ぬかと思っただけだな」

「河に何か居るのか、化け物とか」

「そんな事当たり前じゃないか、淡水系の水龍バグーワと水中のイッガールと言われるバツゴン。水系魔獣のジユカンが居るわ、それともっと恐ろしい電撃魚もね」

「なに、電撃魚って」

「アルマは知らないのか、この電撃魚って言うのは体長四モイル程度なんだけどさ。我が身が危うくなると水中で電撃食らわせるんだわ、魔獣のジュカンに水龍のバッグーワさえ雷一撃で気絶させる位のヤバさなんだよ」

「おまけに周りに居た魚も気絶するか死ぬ、それをちゃっかり餌にする奴も居るけどな」

「イリス、水龍って大きいのか」

「リカル、竜の一種なんだから当然よ、地竜を餌にする位でかいよ」

「へえ、そんな奴を気絶させるなんてある意味最強じゃん」

「それが又良くしたものでな、此奴を食べる奴から居る訳さ、美味い美味いと言ってな」

「あゝ・・・なんかそれ分かったわ、人族でしょ。ある意味悪食だもんねえ」

「アルマにリカル、そこでなんで俺の顔を見る訳」

「隊一番の食いしん坊だもんね、バッグーワでさえ食べかねないしい」

「オイオイ、話が逸れているぞ、俺はこの国の事を聞いたんだけどな」

「いいじゃんパツク、役に立たなかった訳じゃないし」

「それはそうだけどさ、こっちに比重を移してくれよ」

「あゝ、この国は基本的に人族・亜人族・獣人族の奴隷は禁止。奴隷にするのも所持するのもね」

「へえゝ、何故なんだ」

「この国ははっきり言って辺境にある訳、だから経済基盤が脆い事と害獣に魔獣が多い訳なんだよ。それと建国当時から多種族の住む地域だったからね、それぞれ奴隷なんて言って居たら国が成り立たない訳よ」

「そうそう、奴隷なんかにしたり持ったりしたら。戦闘力の有る連中から川向こうに逃げられちゃう訳よ、逃げられたら人族だけでは国を維持できないのよね。魔獣ばかりじゃないし、水龍なんかも偶に襲って来るからさ、あれらは半端ない強さだから」

「ユースケ隊長の倒した陸亀、あれだってとてもじゃないけどさ、一つの騎士団で倒せる相手じゃないのよ。全騎士団と魔術師団が共同で当たらないと倒せるもんじゃないわ、いやいや倒すって言うより追い出すって言った方がいいかもね」

「まあそのお蔭で庸兵団や冒険者の団が沢山来るんだよ、彼らが来るって言う事はギルド関係の連中も来るし。人が来れば物も金も動くって言う事、まっ、帰りの駄賃にこっちの連中を攫ってゆく奴らも居るけどさ」

「あたし達二人はそんな奴らに攫われたのよ、ユースケ隊長に助けられなかったらどんな扱いをされたか分からないわ」

「恩義があるんだよ、あの絶望感は皆共通のもんでしょ」

「俺は親の代から奴隷だったからな、別な意味で辛かったよ。子供の頃に二親が売られてしまったてな、俺も売られそうになった時屋敷事買い取られたのさ。屋敷を買った人が良い人でな、それで奴隷から解放されたんだよ」

パックの過去を聞いたヤック・クスタン・アルマ・リカルとイリスの双子の姉妹達、親子二代の奴隷だったとは知らなかった。少しだが、両者間に有った壁が解けた様な事柄だった。

あゝ、俺って間抜けだ。俺なら全員浮かして運べるじゃん、うわあゝゝゝ・超間抜けだあゝ。

そんなユースケの叫び声が木霊し、ご機嫌な姫様の笑い声が野営地に響いた。

「ユースケ隊長って、時々可笑しいよね。今は姫様とイチヤイチヤする事を考えれば良いのにさ、あっちに行ったら鬼の様な顔をして王様が待っているかも知れないのにね」

「いやいや、大歓迎かも。その日に婚礼まで持っていかれちゃったりしてな、それに姫様は王様に褒められるかもよ。得難い人材を掴んだってさ、下手したらどっかの国の糞みたいな王子とかに興入れなければならなかっただろうしな」

「えー、パックさん。それが決まったらあたし等はどのような訳、この国の騎士団か兵団に入る訳なのか」

「そんな心配はいらんど、ユースケがこの国に留まる器ではない。川向こうに拠点を作り、いずれは建国と言う事に成るだろうの。じゃからお前達は強くなる事だけを考えろ、上手く行けばお前達も名を国の歴史に刻めるじやろうて。それにの、ユースケは異世界人じゃから見た目は若いがの。とうの昔に成人した大人だ、見た目はどうでも色々と考えて居るじやろうよ」

「ふふっ、一寸御間抜けさんだけど、面白い事に出会えそうよね」

幕間 バイデイス近衛騎士団長・・・欲しい その一

空から降ってきたユースケに、驚愕ばかりさせられているバイデイス近衛騎士団長。

欲しい、この様な辺境の地の王国には勿体ないが。何としても我が王国の為にユースケが欲しい、でなければせめて武力侵攻の際には助力を頂けるような位置に居て欲しい。

なんと、治癒と回復の魔法の素晴らしい事。うーむ・・・剣は素人に毛が生えた程度だが、魔法が本分なのか。

姫様の後に、私は戦力の落ちた護衛の為に頼んだ。有る意図を持って、城まで連れて行き陛下との謁見の後臣下と成る様に。

「ユースケ殿、我らは恩人と呼び捨てにする程愚かでは有りませぬ。それから折り入ってお願いがございます、今の戦いで戦死した者もいます。警護の人員に支障が御座いますので護衛を依頼したい、ギルドの方には我らから伝えます。如何でしょうか」

あえて城中までとは言わなかったが。

「ふーん、まあ城門までなら付いて行っても良いけど。その後は遠慮するぜ、家来になれ～なんてのは御免だからな」

むむむつ、あっさりと私の意図を感じかれました。

その後も色々と誘っては見たが、悉く撥ねつけられてしまった。

その上「突っ込みどころ満載の俺が城の辺りをウロウロしていたら、余計な騒ぎに成るからな。姫さんと王子様を城の前まで届けたらギルドの宿にでも泊まる」と言う。

惜しい、欲しい……。仕方が無いのでユースケ殿の大剣に話を持って行った、彼は軽々と振っているが、足元を見ればかなりめり込んだ感じがする。大剣はかなりの重量があると見たが……。

「然様ですか、仕方が有りませぬな。それよりその大剣を持たせて下されませぬか」

「あー、……潰れても知らねえぞ」

「いやいや私もそこそこ力は有りますぞ、そう簡単には潰れませぬが……。ん……。ここは用心をして副長と一緒に持たせていただきましようか。イルランダ参れ、ユースケ殿が大剣を持たせて下さるそうだ」

「団長、イルランダは王国一の力持ちと心得ております。この少年が片手で振り回す程の大剣等、何程が有りましようか。どうだな少年、もし私とその大剣を片手で振り回す事が出来たなら。我が王の臣下に成れ、もし出来なかったら私が少年よ、そなたの臣下になろうぞ」

イルランダめ馬鹿な事を、だから何時までも副長なのだ、何処を見てその様な大口を叩くのか。

「あー、こんな頭も力もよわっちそうな奴なんて臣下にゃいらねえや。ほれよ」

そう言って、ポンとユースケ殿は大剣をイルランダの方に投げた。受け取ったイルランダはそのまま倒れ込み、起き上がれずもがくことしばし。漸く大剣の下から這い出たイルランダ、真っ青になり這い蹲って謝った。

なんと言う事だ、ユースケ殿の大剣はそれ程の物だったのか。

「俺みたいにこんな怪しい奴が、臣下など必要な物か。成られても迷惑だからな、国王と王子に忠義を尽くすんだな」

「忝く思います、数々の無礼をお許し下され」

「おう、下さるぞ。それより腹が減ったよ、なんか食い物あるかな」その言葉の後にユースケ殿の腹からぐうぐうと鳴り響いた。

姫様の侍女達が笑顔で馬車から降りてくる、助かった安堵の色とユースケ殿の腹の虫のなり具合に笑いながら。如何に護衛を兼ねた侍女とは云え、本当の騎士や剣士に敵う訳もなく。死を覚悟しただろう彼女達は、健気にも結果的に救いの手を差し伸べた事になったユースケ殿の為に。食事の支度を嬉々としてするのだった。

幕間 バイデイス近衛騎士団長 欲しい その二

ユースケ殿には驚かされる事ばかり、今度は三柱の神が現れた。ユースケ殿と神達とは何か因縁が有るらしい、だが立場を見やれば何かユースケ殿の方が立ち位置が上の様。一体全体どう言う事なんだろうか、しかもユースケ殿は姫様を所望した神殿の神官長を退治しろと言っている。それを受けて神は姿を消した、姫様はユースケ殿に経緯を尋ねて良いかと話しかけると。

「それを聞いてどうするのかなあ？」と、その上「好奇心は猫をも殺すってどっかで聞いたな」と言われて姫様は震えあがって居た。まあ、好奇心を掻き立てる要素満載のユースケ殿。それは誰しも聞きたいと思うはず、だが触れて構わない程親しくなった訳では無い。故にユースケ殿からの言葉だったのだろう、侍女長が進み出て詫びを言っている。幸いそれ程の事でも無かったらしく、あっさりと許していただけた様だった。

馬車に同乗して欲しいとの侍女長がユースケ殿に声を掛けたが。

「あっ、それ無理。これが有るから馬が嫌がるんだよな。重すぎるゝって」

どうやらユースケ殿は馬とも会話できる様だ、後にそれを言ったら「んな訳ないだろうと一笑に付された」・・・恥ずかしかった。そんな風に普通思っても仕方が無いだろう、何でも有りなそうなユースケ殿なのだから。

ユースケ殿と邂逅してから、何か物凄く飛んでも無いものと遭遇する様な感じがする。今度は超巨大な陸ガメ、ドーピスだった。所が目の前で展開する光景は余りにもシュール過ぎる、超巨大大陸ガメの尻尾を抱えて振り回すユースケ殿、有り得ない。隣に立つ副長のイ

ルランダ、呑気に「流石は神を恫喝するだけは有る」とほざいている。ユースケ殿はまるで重さなど関係ないと言うばかりにドーピスを地面に叩き付け大穴を開けている「遊んでいますな」等とイルランダが笑う。多分馬車の中では姫様は気を失っている事だろう。

ユースケ殿を王国に士官させようなどとは片腹痛い事だった様だ、余りにも人外規格外の人物。お伽話に出てくる神聖勇者の様な、神に対する態度を見れば、そう思ったのは間違いではないだろうと。

しかし、姫様・・・ユースケ殿をなんとか捕まえて欲しい。そう祈ったのは間違いだろうか。

王国の思惑

バイテス・ハース・レイビョールは、報告の後少しの休憩を取り、今、国王陛下の面前に居た。

「バイテス、その方の報告により宰相が各方面に指示した。主を無くした商家等、大した騒ぎにはならないだろう。其れよりも、貴様の報告の一部、我が姫の事だ。ユースケ・タチバナと言うその者がガムール教団からの拉致を防いでくれたのは分かった、その上神からの祝福の有るのも分かった、人外の力と能力を持って居る事も分かった。そなたが其の者を臣下へと誘った気持ちも分かった」

王は呻いた、確かに欲しい。辺境の王国成れど敵は多い、人外なる力と能力を持つ者は喉から手が出る程に欲しいが。

「のう、パーク宰相。それ程の者をそう易々と懐に入れて良い物か、貴族共が納得するかの」

「陛下、国を立てれば貴族が生まれます。貴族が生まれれば途端に腐臭が漂う物、聞けば彼の者は未だ年若き者と聞きます。その腐臭に耐えかねて、若さゆえの暴走も危惧されますな」

「国家騒乱の種に成ると言う事も有るな、故に易々と入れる訳にも行くまい。まして姫が絡めば尚更かのう、うゝ・む」

「陛下、これが他国の何番目かの王子ならば、姫の婿に据えて臣下するのも良いのですが。今の儘では彼の者を、貴族共は一介の冒険者と罵り要らぬ騒乱に」

「宰相閣下、ユースケ殿は臣下に成る等とは言って居ません。川向こうに渡り、建国したいと申ししていました、彼ならばやり遂げるでしょう。僭越ながら陛下に申し上げます、期限を切ってユースケ殿に建国をいたさせ、我が王国の友好国とすべきかと。期限の内に、姫様とユースケ殿のお心が変わらなければそのまま王妃として輿入れさせるのも良いかと」

「馬鹿者、我が王国が建設されるまで五十年かかったのだぞ。如何に人外的能力を持って居ても、三年や四年で建国など出来る物か。例え出来たとしても、国家の安定は難しいだろう。その様な不安定な王国ないし王の元に、我が姫を差し出せるものか」

「陛下、わたくしはそれは良い事と思いますが。川向こうは魔獣魔物が跋扈する地、それ程の力と能力が有るならば、少なくともこちらに流れるのを防ぐ防波堤にはなりましょう。期限などどうでも宜しかろうと思います、ただ建国のちに安定した国家を建国できたならば姫を王妃として嫁がせると言えば宜しいのですよ。背後から魔物魔獣が来ないのであれば、王国も安心して足下を固める事が出来ます。さらに言えば、期限が無いなりに無茶をして、魔獣魔物と共倒れに成れば尚よろしいかと」

「宰相閣下、それは余りにもな発言かと」

「黙れ。わたくしは安定した王国が建国できるなら良し、よしんば最悪の場合でも、不都合が我らに来ないと言う事。さらに、諸共に倒れて捨てられた蛮地を手に入れる事が出来れば尚良しとしただけの事です」

「バーク宰相、そのユースケ・タチバナとやらに。余からの、バイテスに非公式の書を持たせるがいいぞ。最低でも二年のうちに、三

百万以上の住民を抱える国家を建設せよとな。それが出来れば姫の事をも考えると伝えよ、ま、考えるだけだがな」

「国を建てる事が出来ればよし、出来なくとも我らには何の痛痒は無い。蛮地に先兵が入っただけ、そう考えれば良いだけの事よ」ふふ「楽しみよの」

「陛下、三百万は厳しかろうと思われますが」

「ふあっははははっ、精々魔物魔獣も住民等とほざかれん様にの」

全う過ぎる書状とユースケ達の悪巧み

気まずしそうにバイテスが差し出した王国からの書状、態度から見てどうやら中に書いてある事を知っている様子。

今、俺は何中華・・・本中華。

うゝん・・・全う過ぎて二の句も告げられないって言う状態に居る。

王様の非公式の書状、宰相からの非公式の書状。

まあ、一介の冒険者でしかない俺と団に対する物だからこんな物でしょう。

噛み砕いて読めば。

王様・・・「姫と王子を助けた事に対しては感謝し対価を支払う、だが城に来て姫を呉れ等と言ったら殺すぞ。何処の馬の骨か魔物の糞か知らないが、一介の冒険者が姫に手を出そうとはいいい根性だ。もし来たら国を挙げて全力で行くからな、その覚悟が有るなら来い。だが絶対殺してやる」あゝ、姫可愛さの直球ですか・・・面白れえゝ。泣かせてやろうかな。

宰相・・・「我が国の王子殿下と姫殿下と護衛する騎士団に対する救護には感謝する、しかし王都に来ることは必要ない。対価は騎士団長バイテスに持たせたので受け取れ、一介の冒険者が必要以上に姫殿下と王子殿下へ近づく等無礼である。直ちに当王国外へ退去せよ、近付きたければそれ相応の土産を差し出せ」・・・あうゝ、

すつげえ無礼だぜ・・・姫さんと王子に。田舎者の宰相って言う感じかな。

ってな事が書いてある、それに対する俺の感想も付けた。

「団長どうする、王様苛めてセピーちゃん泣かせるのも本意じゃないしなあ。腹黒くも無く直球の悪意なんだけど、怒る気にもならない文面なんだよねえ・・・当たり前すぎで」

「この国の近い未来が危ないかもな、もう一寸捻った黒さを見せてくれたらいいのだから。しかし、俺達のような冒険者の団に非公式とは言え書状を寄越すなんて言うのは異例だろう」

「まあ団長そうじゃろうな、宰相なんて気持ち正直だぞ。何処かを平定して寄越したら姫の事は一寸くらいは目を瞑るかもなって言う気満々だし」

「ビュージョ顧問殿、我が主殿が王国を作り接触したらどう言う態度を取るでしょうね」

「ほっほっほ、それは其れで国と認めれば国同士の事。物心両面どの様な利益が有るかを図り、交易と外交、政治的軍事的に脅威の度合いを見て。態度を決めるのは其れからじゃろうな、婚姻を結んだ姻戚同盟か、領土保全の純軍事的外交上の同盟か・・・まっ、これには無いと思うがの」

「でっ、ユースケはどうする心算なの」

「決まっていらいあーね、王国ぶっ立ててセピーは俺の嫁、王妃にす

るさ」

「よし、方針が決まったら即実行だ。川向こうに先遣隊としてユースケ隊は出発、俺達はギルドに用が有るからな」

「団長、亀の甲羅を売りに行くんですか」

「俺達だけなら文句は言わんだろう、それに王国も潤う訳だしな」

「じゃあついでに輜重輸送の団員を募集して連れてきてほしい、俺達も新しい団員を道々加えるから。とりあえず一個中隊程度までは集めるからさ、将来的には最低地上兵力五十万の軍にしたいね」

「ほう、軍の規模を決めたのか。国の大きさはどの位と」

「んふふふつ、敵が攻め込んでも国の端が判らない程さ」

「はははっ、ユースケ大きく出たの」

「まっ、それも川向こうに行ってから的事さ。基本、誰も彼も自由で安心して暮せる、そんな国が目標さ、そうでなければ意味が無い」

「隊長、姫様はどうするの」

「ふっふっふパツク、俺って何時でも会いに行けるんだぜ、知らないのは父ちゃんだけってね」

「バイテス団長、そう言う事だそうじゃ。知らぬ振りをして置いてくだされんかな」

「ビュージョ顧問殿、私を輜重隊の隊長にさせていただきませんか。私もこの様な子供の使いにされては納得できません、武人として面目を潰されてはもう仕える事等無理ですからな」

「うゝむ、王子殿が泣きませぬかな。随分と貴殿に懷いて居る様だな、わしは子供の涙には滅法弱いのが」

「王子殿下には申し訳ないが、私は陛下にのみ忠誠を誓い申した。だが、陛下は既に私の忠誠に砂をかけましてございます。その上世継ぎの王子殿下がこの地に居る事を知りながら、手ずから迎えに来ようともせず。あの馬鹿半端腹黒宰相と図り、この様な書状を寄越す等。無念にございます」

「国王陛下には、お二人しか御子は居ないのですかな」

「いや、去年側室から正妃に成られた方に二人の男の子が居ります。先の妃殿下は二年前に病で他界しておりますが、何かと噂は有ります」

「成る程、怪しい噂と言う事じゃな」

「なくんだ、だったら二人が望んだら俺達と一緒に旅立っても無問題って言う事だな」

「何を言う、迎えに騎士団を相手に一戦する心算か」

「まっさかあゝ、一度帰して攫えばいいのさ。まっ、バイデス団長が退団して川向こうに行ってからだけどね。無用な嫌疑は避けた方が良いと思うよ、一応当分は補給はこの国からって事に成るだろうし。もっとも王様喧嘩は買うぞって言っているからさ、一度泣かせ

でも良いかなって思ってるよ」

「それよかさギャリク、王様どん位お金寄越したのよ。補給物資は食料と医薬品が殆どに成りそうだけど、結構高値の薬も必要だろうしね」

「ネイル、金貨五百枚だ」

「へっ、冗談でしょ。こんな辺境の国だってさ、一国の王子様とお姫様を助けたんだよ。どうみたってそれは二人の二月分の小遣い位でしょ、それが事実なら死んだ騎士団の団員たちの弔意金なんて出ないか出ても金貨一枚くらいにしかないんじゃないの」

「ネイル殿、確かにその通りだ。そう言う事を繰り返されて居てな、腕の立つ者が騎士団や衛士に成ろうと言う者が激減しているのだ。徴兵すれば家族ごと逃げるし、現場の我々は困って居たのだ。だがお二人には分かって貰えぬ、責めてその金が民草の為になる様に使われるのであれば私もここまでは言わぬが」

「使いたく経ても使えないんじゃないの、途中でどっかに行き先かわっちちゃて居るとかさ」

「それはどう言う意味ですかユースケ殿」

「まんまじゃん、貴族とか王妃一族とか・・・宰相さんの腹の中とか」

「宰相はそれ程悪辣では有りませんが、貴族とか現王妃の一族なら有り得ます」

「なあ団長、それって俺達が王子の為に頂いても良いよな。王国がぶっ倒れそうになったら、その金を持たせて王子を王様にしちゃえばいいのだし」

「ユースケ殿、そんな機会が有りますでしょうか」

「あー・・・、金の切れ目が縁の切れ目。最悪そうになったら敵が誰かはつきりするじゃん、そこ一気に叩けば万事解決。騎士団にも本当の意味での愛国者と精鋭が残るさ、貴族が減ったら国も万歳だし民も万歳さ。王子は俺達が色々鍛える、利発な子だからな、現陛下よりは使えるってもんさ」

「ユースケ殿、使えるって・・・一寸」

「良い、我もユースケ殿に付いて行く。騎士団は我に付いて来る者がいるならば連れて行こう、国王に等は成りたくもないが、あえて王国を動乱に放り込むつもりは無い。危機に陥って、我が必要と望む者が居るならば、王として立とう。幾年のちに成るかは分からないが」

「ユースケ様、私も今更命に危険が有る城に戻りたいとは思いますが。母上様との思い出深い物も有りますが、私は王子が居ればよいのです。母上様の残された大事な宝物は王子だけですから」

「我にとっての宝物は姉上様だけ、ユースケ殿には申し訳ないが。今しばらくは我の姉上様だけで居させてほしい、我も姉上様も未だ成人前で有りますから」

「んー・・・あー・・・王子ってさ、結構おませさんなのかなあーってか・・・違うよな」

「ぶっ、ユースケ。王子に釘を刺されちゃったね。あゝんな事や、こゝんな事が出来なくなったね」

「ネイルさん、色ボケはそれ位にしたら。王子は単純におねえちゃんと一緒に居たいって言うだけだよ、あゝやだやだ大人って汚いね」

「何を言っているの、ユースケだって元の世界なら大人じゃない」

「ほおゝん、生憎だけどこの世界じゃセピーと同じ年くらいだぜ、ネイルおぼさん」

「くうあゝ・・・くやしゝい、口じゃ絶対勝てないってあたしってどうよ」

「えっ、ユースケ殿。この世界じゃって」

「姫様、ユースケは異世界人じゃ。神の不手際でこちらに飛ばされた異世界人、その弱みを握って神をも従え兼ねん飛んでもない奴じやよ、じゃからなんの心配もないぞ」

「ああ、それで神様も真っ青になりそうな事を言えるのですね」

「迂闊にユースケの前に姿を曝した神の不覚、当分はユースケの言いなりだの。ユースケはあれで結構腹黒いからの、状況で使える物なら何でも使う、退屈は絶対に有り得ん。最近が悪巧みが大好きって言う方向に行き始めているぞ、まっ、そればかりではないがの。はっはっはははは」

幕間 狒犬の見た目を替えよう

ユースケは、ゴールデンレトリバーに変身している二頭の狒犬を前にしている。

「なあお前達、その姿ってガチで納得しているのかな。命じて置いてんだけど、物凄く違和感有りまくりなんだけど」

「そりゃあー納得しなくても主の命令だからな、聞くのが当たり前だよ」

「あたしは嫌かも、だってこの姿って異国の犬の姿でしょ。大和撫子としては情けない姿よ」

「そっか、北海道犬に秋田犬。紀州犬とか四国犬、柴犬に土佐犬なんて居るけどどう。俺的に言えば秋田犬が好きだな」

「歴史的に言えば秋田犬は浅いけどあたしも好きだよ、土佐犬は嫌よ・・・ぶっさいくだし」

「きゃははっ、それ言える。それに洋犬って言うか色々入って強いけど、心情的に言えば紀州犬か秋田犬が好きだな」

「うーん、体躯を考えれば秋田犬かな。じゃあ替える？」

「そうだな、替えるのなら早目がいいかも。変になじまないうちにさ」

「よし、ちゃっちゃんと変身」

「おっ、ユースケ。別の姿に変えさせたのか、なんかなじんでいるな」

「団長も分かる、やっぱこっちに替えて良かったよな。美的センスゼロの団長が認めるんだから」

「ほほう、今度は何処かの武人の様な犬だな。どっしりとしていて安心感が有るぞ」

「だってよ、良かったな。古武士のようなビュージョさんに褒められたんだ、活躍しないとなあ」

「あゝ・・・軽々しく弄られた感じがするんだけど、あたしの気のせいかな」

「んゝ、なんで今に成ってって言うのが気に成るよな」

「うん、単に暇だったからさ。これからも色々変身よろしくな、暇つぶしに成るし」

「俺は今一瞬神を呪ったぜ」

「あたしもすっごく神様をのしりたくなったわ」

一步踏み出す

無茶苦茶好き勝手な事を言っているが、事はそう簡単な事では無い事を皆も知っているし解って居る。現状、将来隣国となるかもしれない国と事を構えるなど馬鹿げている。確かに世継ぎの筆頭王子と、姫も掌握している様な物だが。替えはきちんと居る訳だから、あえて敵を作るのは論外だし味方は多い方が良いのは当たり前。それに迎える騎士団も居るし、数が減ったとは言え、バイテスが率いている騎士団も居る。騎士団長のバイデスは既に退団すると決めて居る様だが、ここで騎士達と対峙する事は将来的に拙い事だ。それよりも、ユースケの本音は城に送り返した王子と姫の為に味方として残って欲しいと思っ居る。

「団長、まあ好き勝手に色々と言ったけど、現実的で無い事は明らかなんだよね。補給物資はこの国からとなる訳だし、手に入れた売り物もこの国に有るギルドにと言う事に成る訳だから。それでは当然ながら、俺達はこの国に敵対行動を取るの出来ないのがらな」

「確かに、何でも出来るユースケの負担が増すばかりだし。本当の危機がやって来たときに、ユースケが居なくて全滅なんて笑えないしな」

「要はきっちりとした建国の手順を踏んで国を作り、そして国としての力を認めさせて同盟。しかる後にユースケの姫を嫁取りと言うことじゃな」

「ビュージョさん、もうおじいちゃん顔に成っているわよ。一寸早くない？」

「はっはっは、良いではないか、それしか楽しみがないからの」

「それはそれとして、ユースケ、城に返す王子様と姫様になんぞしてやらなくて良いのかの」

「ビュージョさん、俺が作った魔具を身に付けさせて返すよ。それに、会いたい時は何時でも俺は会いに行けるからな。御付きの侍女さん達にもきっちり対策してあるし、まあいざとなったら身体強化で戦える侍女さんに変身さ。彼女達は元々護衛も兼ねているからな、素養として武芸を身に付けている訳だし。魔法強化と魔法反射、物理攻撃防御の魔具を渡しているから恐らく最強侍女さん達になっている」

「対毒対策はどう」

「バッチ来いですよネイルさん」

「主、流石手ぬかりないですね」

「んふふふふっ、なんでもするさ」

「それよりバイデス団長はどうするかだな、退く意思が強い様だから引き止めるのは無理が有るだろう」

「うっ、無視された」

「それは仕方が無いと諦めるしかないね、ただ城との繋がりは切つて欲しくないから手は打たないとね」

「こっちもかい、・・・はあ」

「ユースケ、色ボケ絡ませるのは後にしろ。・・・それなら俺達の為の駐在員として此処に残って貰えないだろうか。人手はどうしても欲しい訳だし、情報も欲しいし。欲しいものだらけなんだからな」

「ケイリスそれいい、元騎士団長の信用も有るだろうし。城関係の情報を集めるのにも持って来いだ」

「バイテス団長、そういう訳で頼めるかな。団員の中で戦えなくなった人とか、一緒に退団したい人を雇って動いたらどうだろう。表向きに商売人になって貰うけどな」

「商売人か、私に出来るだろうか。雑多な情報を手に入れるのには確かに商売人が良いのは分かるが」

「なあゝに、潰した奴が居るじゃないですか。そこで働いて居た奴を雇えばいいのさ、奴は悪だったけど、働いて居た奴が悪とは限らないのだからね」

「パック、それ採用」

「ユースケ、だったらこの金は開店資金にまわそうよ。当面はギルドを使うけど、商人ギルドに加盟してからならあたし達の手に入れた物は此処に卸せばいい訳だし」

「カイトさんの所とも繋いだらどうですか、そうすれば人集めも物資を集めるのにも楽だし。ユースケさんも負担は減るのではないですか」

「よし、兎に角姫さん達を帰そう。細かい事は川向こうに着くまで

検討し様、パックとムロは騎士団とは別に王都に走れ。もちろんバイテス団長と繋ぎが取れる様にしてからな、バイテスさんが準備出来たら知らせに戻ってくれ。その間に川向こうに橋頭保を作る、ユースケは当面姫さんと逢引きしている暇は無いぞ」

「ウム、ユースケには気の毒だが其れ所じゃないのう」

「やっぱりそうなるのか、覚悟はしてたんだけど、ガックリ来たのも事実だよ」

一歩踏み出す建国の為の行動、遣るべき事は山積している。

兄二人 その一

ユースケは姫さんに色々と言い含め、取り敢えず父王の待つ王都に騎士団と共に向かわせた。わしらは未開の地と言われている川向こうに行くため、馬車と馬と竜車を走らせている。

「ビュージョさん、この国の国境は川岸までなのかな」

「いや、騎士団の話ではそれより手前にある支流までとの事だったかな」

「ふーん、兎に角行ってみなければ現場の状況は分かりませんと言う事だよな」

「まあそう言う事だな、何か懸念でも有るのかの」

「うん、懸念と言うより。一応こちら側にも砦とか城塞とか作れたらと思ってね。ただそのせいでこちら側といさかいが発生するのは拙いし・・・とか？」

「んー・・・正式に国境線を何処に布くか、正式に交渉するには我々は未だ力が無い。如何にユースケが能力者と言ってもだな、居ない時に大侵攻でもされたら困った事に成る」

「団長、この国の隣国から圧力をもって言うのは望めないかな」

「あゝ、それは難しいかもな。騎士団の連中から情報として拾ったが、別に侵略とかの話は無いそうだったか、例の教団の財政介入が酷くてそれ所の騒ぎではないとか言っていたな。もっとも潰れてし

まっただけだな」

「けどそう言う枷が無くなったんだから、どっちかを食ってなんとかし様って言う発想は出てこないかな」

「うむ、無いとは言わんが。取り敢えず今は国内のそう言った立て直しに狂奔しないと成らないだろうな。教団の配下にあった国は八か国、大なり小なり経済破綻寸前らしいからの」

「ふうん、じゃあその金は何処に行ったのかな。教団の地下貯金に成っているのなら未だ有るかな」

「ほほほっ、あの女神様がどの位まで破壊したかだろうの。ユースケ、ひとつ走り行ってきていただいて来るのも良いかもの」

「あー・・・流石に八か国回るのは大変かも知けど、やる意義は有るね。これからの事を考えるとお金は幾らあってもいいしな」

「あっはははっ、ユースケの奴すっ飛んで行ったぞ」

「団長、ユースケ隊長地竜に大剣を引き摺らせて行ったけどどうして」

川向こう出身の虎族の隊員リカルが聞く。

「お宝を手居れたら移転させるための目印に決まって居るさ、まあ僧侶や個人の持ち金までは手に入れないだろうが。教団にも金庫は有るだろうしな、ざっくざくかちよろゝかは分らんけどよ。」

引きずらせたのは直撃しないようにの気配りさ、地竜や俺達に当たったらあぶないだろう」

「それよりリカルにイリス、お前達は其々の族長に渡りを付けないと成らないからな。其処には命の危険が有るんだから、お前達を裏切り者とか仲間を売る心算かとか身体的精神的な責め苦も有るんだぞ。生半可な覚悟では駄目だ、抜けるのなら今の内だ、途中で駄目だからと言って逃げ出すのは許さないからな」

「ユースケ隊長はあたし達の主、絶対に裏切ったり逃げ出したりなどしない。世間知らずで騙されて奴隷に落とされたけど、助けられた恩義は死んでも忘れません。それに国を作ると言う夢と希望をくれた人、亜人だの蛮族だのと区別や差別のない国を作りたいと言う言葉を信じられる人ですから」

イリスの言葉を聞き頷く隊員達、ビュージョはうんうんと頷きながら「若さはたからじゃの」そう呟いた。

ユースケは、ベリリユーユの王都上空から全壊したガムール教団本殿を眺めている。破壊された神殿周辺には、今だ茫然自失の神官達がたむろしている。

「けっ、おまんまの食い扶持を破壊されてどうしていいか分からないっての図だな」

「ユースケどうしたのじゃ」

「ああ、女神。教団のお宝をいただくかしら思ってたな」

「少しは残し置いてくれると嬉しい、わらはには要らないものだがな。人はそうも行かぬ、傷や病ならわらわも治せるが。衣食は無理じゃ」

「分かった、程々に頂いて行くよ。しかし下に居る神官はどうするんだ、どう見ても神より金って言う感じだぜ」

「あれらには何もせぬ、きゃつらは神殿跡にも入れぬ様にしてある。もちろんその腰ぎんちゃく共ものう」

「神殿はどうするんだ、まさかあのままって言う訳にも行かないだろう」

「ふん、更地じゃ。あの様な穢れた土地にわらわは住まぬ、浄化して池に仕様と思って居るのじゃ」

「ふん」

「所でユースケ、そなたに頼みたい事が有る。神殿に居た奴隷達じや、古い者では数世代神殿の奴隷家族で居た者達も居る。建国の緒に就いても居ないだろうがの、人手は必要じゃろう。もちろん奴隷の縛は解いてある、ただ行き先が無いのと仕事がないのでな」

「分かった、それなら輜重隊の隊員を募集しているぞ。ふふふつ、種族年齢性別の制限は無い。その後はむしろ開拓団として受け入れよう、妊婦や子供は特に大歓迎さ」

「そうか、ならばこの世界の孤児院の子供達もたのめるかの。孤児

院とはいっても奴隷を作り出す施設じゃがの」

「あゝ、そうか・・・忘れて居たよ。孤児院があるんだよな、だが今しばらくは女神のお前とあの二柱の神に頼めないか。いま俺達には人手が無さすぎる、一度には手が回らないよ」

そんな風に女神と話している所を、下で見ていた者達が居た。

「アルファール殿下、シッタール殿下。上空に居るのは女神様、その傍で話しているあの少年は何者でしょうか」

「エイコフ、良くぞ見つけた。きっとあの少年は我らの妹の恋人やも知れぬ」

「兄上、どうして・・・あゝ・・・はははっ、そうでした。情報が命と言う兄上、色々と掴んでおられるようですね」

「何を言う、突然現れた女神様とあの少年。それほど知る由もないではないか、ただ話はしたい。なんとかならないものか」

「この二人との邂逅、ユースケにとっては何か温かいものじゃったそうじゃ。あゝ・・・疲れたからわしは寝るぞい、この後の話は後日の」

兄二人 その二

シッタール、こうやって只したから見上げているだけではどうにもならぬ。何かお会いし話が出来る手だては無い物かな。

シッタールは兄アルアルに応えるべく周りを見渡せば、如何にもお腹を空かせたような子供達が自分達を取り囲んでいる事に気付いた。

「子供達、金を遣るから大声を出せ、あそこにおわす女神様と神子様に聞こえるようにな」

急に言われてキョトンとしていた子供達だが、確かに上を見れば女神様と何やら話し込んでいる少年の姿が見えた。つられ見上げた大人達も、おくと声を上げ子供達と一緒に大声で呼びかけた。

「「「「「「「「「「女神様あゝ、神子様あゝ」「」「」「」「」「」」」」」」」」」」

下からの大騒ぎな大声を聞いた女神とユースケ、何事かと下に降りた。もちろん宙に浮いている状態ではあつたが。シッタール王子は錢袋から小金を遠くにばら撒き、自分達から子供達を離れた。

「女神様に神子様、初めてご尊顔を拝し奉ります。我ら二人はベリリユー王国第二王子アルアルと第三王子シッタールに御座います」

「ほう、その第二王子と第三王子がわらわに何用かの」

「私が第二王子アリアルにございます」

「私が第三王子のシッタールにございます」

「用と申しますのはこれからの事にございます、このまま神殿を放置すれば悪しき者達が集います」

「然様にございます、何かご意志が御座りまするのならは早急にお示しいただかねば人心が落ち着きませぬ。我が父王は奴隸を持つ事を禁じて居ましたが、神殿にはその権限は及ばず奴隸達が居ります」

「何か手を打たぬと悪しき心にて傷付け傷つきましよう、不幸せであつた者達、我ら二人はこれまで以上酷い事に合わせるは人として耐えられませぬ」

「その事をこの者、ユースケと話しておったのじゃ。その者達はユースケが引き受けてくれるそうじゃから安心せい、早急にその者達を集めるが良い」

「ふゝん、聞いた話しとは随分と違うなあゝ」

「神子様、どの様な話を聞かれたかは存じませぬが、我ら二人は王の座等は狙って等居りませぬぞ」

「そうそう、第一余喜に計らえだのそうせいだの馬鹿らしい」

「国王に成るより、王を支えて謀をする方が面白い」

「俺の事はユースケと呼び捨てで良いぞ、第一神子じゃねえし」

「ぶっ、流石に呼び捨ては無理でございますよ。女神様と対等に話す方、例え義弟に成るお方でも。所で其れの何処が面白いのですか、目の前に面白そうな方が居られるのにです」

「それに我らは年上の第二王子と第三王子、将来国王に成るジョウイにとって何かと将来遣りにくい者二人。我らの母は私を王にしたいらしいがな、されどユースケ殿、我らは何時までも母上の手駒で居られる歳では有りませぬぞ」

「そうそう、目の前に冒険心をそそるるお方が居ては国に居るなど勿体ない。付いて行きますよ」

「あゝ・・なんか話が届き過ぎの様なんだけど、やっぱその手の者が居たとかどうかの事かな」

「戦力には成らなかったようですが、影供を付けさせていましたので」

「成る程、だけどそれなら尚更付いて来られるのは困るな。俺として信用出来る者をあの二人の傍に出来るだけ付けて置きたい、人手が足りぬのは確かだが、其処は手を抜けないのさ」

「うゝん、矢張り我らの母上の事が心配ですか」

「兄上、それならいっそ母上を城から攫ってしまいませんか」

「な、なんだと、母上を攫うだと」

「多分憂いの半分は母上がしでかそうとする事、ならばそうさせぬ様に母上を連れだして我らの監視下に置けばよい。どうせ父上には

傍妾は他にもいる、どうと言う事も無いだろう」

「あははははっ、滅茶苦茶な事を考えるな。シッタール王子、あんな面白い男だよな。話は面白いけどさ、王妃誘拐で俺達お尋ね者になるのかよ、笑えねえ」

「わはははっ、ユースケ達にこの国の騎士団を敵に回して戦えと言っている様なもじゃしの。国王も宰相も国の面子を掛けて襲って来るだろうよ、幾ら実子のそなた達のでかした事でもの」

「嫁返せ」ってね」

「やっぱりそうなるかな」

「其れならば姫と第一王子を攫った方が理に合うぞよ、王子を鍛えられるし姫も建国の妃として鍛えられるし」

「あゝ・・へへっ、俺はそっちが良いな」

「これ、ユースケ鼻の下を伸ばすんじゃないぞよ」

「面倒だ、三人とも攫えば良いじゃないか、うんそうし様」

「はあゝゝゝ・・・無茶苦茶、馬鹿なのか、それともアホなのか」

「ユースケ、事の良し悪しはどうでも、案外良いかも知れんぞ。まあ好きにせよ」

「あっ、女神、投げたな」

「女神様のお許しだ、兄上、三人を攫いましょうぞ」

そう言いながら馬を走らせる第三王子、馬鹿者くと後を追いかける第二王子。その後ろ姿をあんぐりと大口を開けて見ているユースケ、ヒーヒー笑う女神。

相変わらず無責任な奴だと、改めて女神を睨むユースケだった。

兄二人 その二（後書き）

あゝ・・・死にたい。

兄二人 その三

類友

「女神、あの二人ってそう悪い奴ではないのは分かったけど、絶対馬鹿だって言う事もはっきりしたよな」

「ウム、なんであの二人が王候補にできなかったのか分かったな」

「どうしようか、止めた方が良いのかな？」

「止めない方が面白いと思うぞ、しかし側室の子の方が年上とはの」

「やっぱり母親の実家が上とか？、血筋が良いとか」

「んゝ・・・馬鹿だから、親子ともにの」

「あゝやっぱり止めてこよう、四五日動けない様にしてくるぜ」

「ウム、まあ・・・仕方が無いだろう」

「さっきの事だけど、俺の団の方に向かわせてくれ。なんとかするだろうからさ」

「その後は」

「もう一度来るよ、お宝かつさらにさ。後、目ぼしい所を回るから」

「そうか、空間使えるだろう、其処に仕舞えば苦にならんぞよ」

「知ってるし使っているよ。まっ、仕事してますって知らせる為に幾つかは向こうに送って居るけどねぇ？」

おバカ兄二人を退治して、八か国何十か所かの神殿を回ってお宝を回収し。疲れ果てて団の元へ帰って来たユースケ「体力よりも精神的に疲れたよ、まあおバカだけどお人好しな兄弟二人、押しかけて来るんだろうなぁ・・・憎めない奴ってああ言うのなんだろうな」ぼそぼそ独り言を言いながら馬車の中にもぐりこみ、寝付くユースケだった。

「ビュージョさん、あの二人の何処が心温まるなんすか？、只の考えなしの馬鹿じゃん」

「いや・・・ははっ、妹と弟思いの良い兄ちゃんじゃろうが」

「ユースケ、あんた人の事言えないでしょ。考えなしの馬鹿ってあんたもだからね？」

「ネイルには言われたくなかった、色ボケ女の亭主で団長、連帯責任で一緒に死にやがれ」

「なんでそうなる？」

「ダーリン何よ、あたしと一緒に死ぬの嫌なの？」

「そういう問題じゃねぇよ、ぎゃあああ~~~~」

「類友じゃのゝ・・？」

何気に卑怯かも

八か国の主だった神殿からお宝を手に入れたユースケ、女神から頼まれた元奴隷達の事をケイリスに話した。実質的な団の参謀でもあるケイリスに話さない訳にも行かないからだが。

「ユースケ、それじゃあその元奴隷だった連中が俺達の後を追って来ていると言うんですね」

「ケイリス、何をそんなに焦っているんだ」

「ユースケ、俺は焦って居ないお前の方が不思議だぞ。着る物は兎も角、食料やテントはどうする心算だ」

「あゝ、そんなの女神に丸投げして来たぞ。頼んで来たのはあいつだし」

「ぶっ、酷い???。ユースケにとってはぞんざいに扱っても良い存在だろうけど、この世界では絶対神の女神だぞ。場合によっては民衆から敵意を向けられるぞ、信仰を侮るな。ユースケ、下手をすれば俺達は孤立して迫害を受けるのかもなのだからな」

「大丈夫???多分、物資の購入はこの国の第二王子と第三王子に頼んである。神殿からのお宝を渡して来たし、女神の監視下に置いてあるから誤魔化せないからね」

「ああ、そう言う丸投げか。それと何時の間にこの国の王子二人と知り合ったんだ。まあそれは良いが、問題は何時までも金やお宝が

有る訳じゃないだろう、長期に渡って養うなんて出来ないぞ。其れに人数だって多いだろうし、八か国だと一万人以下って言うことは無いだろう。その辺はどうなんだ」

「八か国全部からは来ないだろう、其々の国で規制されるだろうし。食べ物も無いのに追いかけてくるのは無理さ、それらの人は追々保護するしかないよ。だからこの国の神殿に居た連中が中心で、三千人位だと思うよ」

「うーん、簡単に言って良い人数ではないぞ」

「分かっているよ、それよりビュージョさんにこの国の王様と宰相に会って国境を定める様に交渉してほしい。もっと後でも良いかと思っただけ、事態が事態だし、暫定でも良いから線引きしたいんだよ。農地や放牧地を作らないといけないからさ」

「ユースケはこれからどうするんだ、休養なんてしている暇は無いぞ」

「俺はとりあえず、大河と支流の中州に宿泊施設を作って来るよ。中州位になら建物を作っても文句は来ないだろうし」

「狛犬を連れて行くなら大丈夫か、支流まで俺達だけでも一週間は掛かるぞ。追いかけてくる連中を待ってから移動となると倍以上掛かるが。一人で全部やる心算か」

「うん、大丈夫。皆で手分けして食糧なんかを手当てしてくれ、時々見に来るからさ。資金が切れそうになったら早めに言って、大丈夫とは思うけどね。ああそうだ、穀類や野菜の種を出来るだけ集めておいてほしい。祝福使えるから一日で実らせられるからな」

「あゝそうだったな、本当に何でも有りなんだから」

「まあね、理に外れた存在だし、使えるのなら何で使うし何でも来いさ」

「お前の隊の人数も増やさないと、今の儘では付いてくる人数の護衛も儘ならないしな」

「元奴隷だった連中の中で使えそうなのを集めてさ、全員に部下として配置して置いてくれ。若い奴らなら、奴隷だった悪癖も取れやすいだろうからな」

「それより王子二人はどうするんだ、まさかお前の家臣には出来ないだろう」

「普通に考えたって無理が有るだろう、マジでそんな事を言ったら尻を蹴飛ばしてでも追い返して」

「分かった、ふん縛って向こうの騎士団に渡すさ。まっ、図抜けた馬鹿でもない限り言わないだろうけどな」

「いや、それが図抜けた馬鹿見たいだぞ。自分達の母親の王妃を攫って付いてきたいと言ってたし、仕様としていたからな。まあ止めたけど」

「うわっ、マジで馬鹿なんだ」

「まあなく、妹と弟可愛いのが先に立っているから許せるけどな」

「ユースケ、ひょっとしてそれが嫌で……?とか」

「一寸だけな」

「それを俺に押し付けるんだ」

「ケイリス、ごめん??? 借りにさせてくれ」

「この貸しはでかいぞユースケ」

「うん、王様にしてあげるよ」

「馬鹿を言え、王様はお前だ」

「ゲッ、冗談でしょ」

「冗談な物か、その運からは逃げられないからな」

「あゝやだやだやだ、団長にでも押し付けよう」

「エロ団長になんか勤まるものか」

「エロ団長って俺の事か」

「あんたしか居ない」

雲行きが危ない方に向かって居のを感じたユースケは、二人を置き去りにして逃げた。何気に卑怯かなと思ったのは、誰にも言わないでおこうと思った。

建国への道 岩（前書き）

岩に一室借りる。

建国への道 砦

ユースケは、ベリリユー王国側の上空から大河の支流である川を見て驚いた、かなり上空に居るにも関わらず中州が見えない。

「此処に橋を架けろって、無理／＼無理無理／＼、なんぼチートでも無理したら無理」

ユースケは、大雨で氾濫した時の増水量を想像？？？無理、支流とは言えこれだけの川に橋を架けるのは無理と判断した。ってか、出来ない事は無いが、正直面倒と思っただけ。細工が細くなり過ぎだろうと

、フツと下を見ると、ベリリユー王国の砦の様な物が見えたので降りてみた。十モイル程の空堀に囲まれて、橋は跳ね橋。荒削りの岩を六モイル程の高さに組みあげた塀をめぐらし、塀の中に塀の高さと同じくらいの建物がコの形で建っている。

「ふーん、なんでこんな所に砦が有るんだろ。川から魔獣でも入り込むのかな」

ユースケは浮いたまま門の前に居る衛兵に近付いた、ギョツつとした表情の衛兵は誰何する。

「き、貴様何者だ。魔人か」

「ちげーよ、聞きたいんだけど。なんでこんな辺鄙な所に砦が有るんだ、でっ、ここは国境か」

「うゝ、何者か知らんが教えてやる。川から水棲魔獣や水棲亜人が

やって来るからだ、ここ以外は断崖絶壁みたいなものだがここはなだらかに傾斜している場所だ、だから此処に砦が有るのだ。国境、はっ、此処から川向こうは我らの王国の実効支配下にならないからな。実質ここが国境と言えるだろうさ。まっ、お偉い方達はどう思っ居るか。下っ端の兵士の俺が知る所じゃないけどな」

「水棲魔獣、もしかして亀が通って行かなかったか？」

「通ったさ、けどな、あんなのと戦う訳が無いだろう。知らせるにもあれは見た目より早いからな、警報を出したって間に合う物か」

「はあ、放ったらかしなんだ」

「当たり前だよ、奴は今どこに居るか知らないが。飽きたら又戻って来るさ」

「それは無いな、俺が退治したから」

「ぶっ、嘘を吐くな、あんな化け物には魔法だって効き目が無いんだぞ」

「いや、普通にビッンビッタン振り回して叩き付けて退治したぞ」

「へっ、：あれっ、ひょっとして貴方は神子様」

「ん、誰かがそんな風に呼んで居たのを聞いて居るな」

「ひえ、ひえ、しばしお待ちを。砦の司令官に取り次ぎますう」

門前を空にしてドタバタと走って行く衛兵、一体何を考えて居るの

やらとため息を吐いたユースケ。俺はお前の代わりかと心の中で突っ込みを入れた、今一緊張感が無いのはどう言う事だろう。そう思っ
て居たら、ひょこ、と門ペイの陰からもう一人の衛兵が顔を出した。

「おっ、あんた出来るな。俺に気配を感じさせないなんてすごいなあ。名前はなんて言うの」

「パロ・ヤーシって言うだよ、えへへっ、俺に出来るただ一つの特技なんだよ。余り衛兵には必要ない特技だけどさ、ちなみに階級は歩兵上等衛士な」

「うーん、それは勿体ない。どうだろ、俺にその身体を預けないか」

「……あゝ？…：俺にはそっちの趣味は無いんだよな…？…」

「なにいゝゝ、…おま…何を想像した？」

「…いやあゝ、…男同士でちよめちよめとか？」

「ぼけえゝ、気持ち悪い事を言うなあゝ。お前妄想馬鹿だろ」

そんな馬鹿できもいやり取りをしていると、先程の衛兵と、縦にも横にもでかい四十前位の筋肉だるまが遣って来た。その筋肉だるまは「貴殿はユースケ殿でありますか、貴殿に助けられた姫殿下と王子殿下の護衛騎士から話は聞き及んでおります」

「あれっ、何故こっちにこんな短期間で俺の事が？」

「治癒と癒しを掛けてはいただけた様ですが、血が足りずに動けなかった者が数名こちらに送られまして。今は帰還しましたが、その者達が暫くここで休養を取って居たのです」

「ああそれですか、分かりました」

「兎に角取散らかって居ますが、私の部屋へどうぞおいでいただきたい」

「それは気を使わせました、それでは折角ですからお邪魔しますありがとうございます」

「そうそう、あの巨大亀を退治したそうで、助かりました」

歩きながらそんな話をしながら司令官の部屋に入った、殆ど何もないと言った感じの部屋。寝室は右隣の部屋らしく見えない、左の部屋は副官室らしく三十代前半らしい男性と、同じく三十代に見える若干やせすぎの男性がくつつくようにして出て来た。

「先に、姫様と王子様の両殿下危難の助力に感謝します。さて自己紹介をさせていただきます、私はこの砦を預かって居ますルポノ・ウトカと申します。身分的には平民出身で歩兵衛士隊中佐の階級です、副官も同じく平民出身で歩兵衛士隊の大尉です」

「ユースケ殿、お初にお目にかかります。同じく両殿下への助力に感謝します。この砦の副官を務めさせていますラムワカ・シカロと申します。よろしくお願いいたします」

「砦部隊付き参謀を務めさせていただけますセロム・ナーナシカと申します、軍事男爵家出身で大尉です。両殿下危難への助力に

感謝します」

「此方こそご丁寧な挨拶を頂きいたみいます、ユースケ・タチバナと申します。よろしく願います、ユースケと呼び捨てでお願いします」

「流石に両殿下の恩人に呼び捨ては勘弁願います、ユースケ殿で妥協してくだされば幸いです。所でユースケ殿、早速ですがこちらにお出での理由はなんでございましょうか」

「大河の支流と大河との間に中州が有るとか、まあ・・・当たり前なんですが。我々は大河の向こうの地に国を作りたいと思ひまして、その前に中州をベリリユーユ国からの物資搬入基地にしたいと思つて来たのです。中州の大きさは確認していませんのでこれからの話ですがね、まあ出来れば街も置きたいのですよ」

「うーん、中州にですか。正直な事を申し上げますが、我々も中州を含めて向こうの事は何も分からないのですよ」

「ラムワカの申す通り、支流とは言え向こう岸も肉眼で見えない状況。我が王国でも部隊を何度か派遣した事も有りますが、水棲魔獣や水棲亜人の襲撃で辿り着いた部隊は無いのです」

「成る程、それで宰相閣下がやれるもんならやって見ろ的な書状をよこしたんだな」

「えー…宰相閣下らしくもない、まあ…兄弟二人を支流の魔獣に殺されていますから分からんでもないのですが」

「ユースケ殿、セロムの言う通りなんです。宰相の書状にはご気分

を悪くされたでありましょうが、なにとぞご容赦を」

「直接の部下でも無い方に弁護される宰相、良い人なんでしょうね」

「宰相閣下は人物本位で接する方ですから、認めればもう家族同然に扱われます。少々子供っぽくて鬱陶しいと言うか」

「弄り倒しに來ますからね、私なんか逃げ回って居ますよ」

「セロムは宰相閣下の縁戚の末席に位置しますから、歳の離れた弟の様な扱いです」

「へーえ、いやね、もし会ったらいびり倒そうと思って居たんだよね」

「あっ、それ見たいですな…はははっ」

「あー、それですすね。国境の件で宰相閣下の所に人を派遣しているのですが、回答を知らせる者が来るまで申し訳ないのですが一室かして欲しいのですよ。まあ、作れない訳ではありませんが、人恋しいかなあーと…」

「構いませんよ、ケチな宰相閣下もその位は文句は言わないでしょう」

「あー…、やっぱりケチなんだ。謝礼金が金貨500枚だったからな、まあギルドからも少し貰ったけどね」

「はあー、両殿下の…500ですか」

「困った方だ」

「これが無ければ完璧なんだが」

渋い顔で俯く三人、余計な事を言っちゃったよと後悔するユースケ。
言ってしまったからなあ」と天井を見上げた。

建国への道 国籍と忠誠

ユースケは、砦に来る前にビュージョ、団長、ケイリス、ネイルの四人に集まって貰った。ビュージョさんを中心に国境確定交渉へ行く前、はつきりして置くことが有った。それは四人の国籍と忠誠をどこに置くかと言う事だ、ユースケは四人に改めて自分に忠誠を求める気は無い。それは新たに建国する国にすれば良い事、故に母国とその国王に対する忠誠心を捨てられるか言う事だ。それを引きずったままに建国に携わられては後に禍根を残すことに成る、四人にとっても建国なった新たな国にとってもだ。

「忙しい所を集まって貰ったのは、単刀直入に言って四人が母国とその国王と民に対する忠誠心を捨てられるのかと言う事です。母国に国籍法と言う法が有って、その法に従って作られた書類に載っている記録が有れば、それも捨ててもらわなければ成らないと言う事。何故なら全力を持って新国家建設に携わって貰うには、そう言う事に対し個人のけじめをも付ける必要があります。同じ意味を重ねて言いますが、母国を捨てて新たな国に忠誠は誓えますか」

「ユースケ、それはお前に忠誠を誓えと言う事か」

「団長、俺だって何時かは死んで居なくなる。そんな不確かな者に忠誠を誓った所で意味は無いよ、それよりも、連綿と続いて欲しい新たに国民となる者達へと、新たに作られる国に忠誠を誓ってもらいたい。例え一握りの民でも、暴力と搾取と言われのない事で虐げられる事の無い、権力者が民を虐げる事の無い。そんな国を作りたいと思って居るから」

「ユースケ、お前は国王と名乗る心算は無いと言う事か」

「建国の序に必要なならば成ってもいい、でもそれはビュージョさんでも誰でも構わない。新国家の形が有る程度定まれば、国としての憲法を作らなければならないしね」

「ユースケ、憲法とはなんだ」

「ケイリス、例えどんな物にも形は有る。要するに、物の形を決める骨だよ。まあ、直ぐに色々言っても。国の建設のめどが立っていない今、性急に話しても意味は無い・・・と思う？」

「そこで疑問形が入るのは何故じゃ、と、突っ込みたい所じゃが。わしも此処まで付いて来たのじゃからな、ユースケがどんな国を作るか見てみたいぞ。どうせ独り者の年寄りじゃ、国には友人も数多いがな、冥途の土産に見届けて逝くのも良いじゃろう」

「ビュージョさん、俺が国を作るのではなくて。国づくりに参加する者達全員で国を作るです、国が個人の物で良い訳が無いでしょう」

「それはそうなんだけど、大抵はそう思って居るわよ。そうで無ければ、王も貴族もあんな好き勝手に出来ないわよ」

「ネイル、そんな馬鹿が国主では堪りませんので。法を整備しましょう。で、どうですか。時間が無いので無理やりになりそうなのが嫌なんだけど？」

「うむ、新国家に忠誠を誓うのに問題は無いぞ。むしろユースケを主として忠誠を誓うぞ」

「ユースケを主とする事に、わたしも問題は無いです」

「俺もユースケを主として忠誠を誓う事に問題はない」

「ふふっ、あたしもよ」

「あゝ、なんでそうなる。言っけど貴族制度なんて作らないからな」

「はっ、ユースケ。国が腐る原因は貴族制度が有るからと言っても過言ではない、それにユースケは国王に成っても長くは在位する心算は無いだろう。俺達の知らない制度の事を知って居そうだしな」

「それはまあね。兎も角母国からは確実に離れ、新しく作る国家に忠誠を誓うと言う事で良いですね」

「ユースケよ、わしらのお前に対する忠誠を受ける心算は無いと言うのかの」

「んゝ、考えて置きます。実際の話、この世界にとっては俺は理から外れた生き物だし。この星の現世の神が俺と言う存在が有る事を許しても、この世界と言う理での意味で、この世界の主神がやっぱり駄目だと拒めば何時俺と言う存在が消えるかも知れないからね。だから、国と民への忠誠と言う事なんだよ。まあ、俺個人になんか忠誠を誓ってなんとする、って言う気持ちも有るよ、そこの所をよく考えて欲しい」

其処へ至る考えでの話とは思わなかった四人、だがユースケへの忠誠を捨てる気にはならなかった。

「なんと、其処まで考えて言うのか。この歳に成って、こんなにも切ない感情を知るとはのう」

建国への道 支流の川岸

「ユースケ殿、朝から何処へ」そう聞いたのは弓部隊の隊長でブラックエルフのゾイドだ、ゾイドから聞いた話だが、エルフには三種族に亜種として二種族居るのだとか。ゾイドは骨格たくましく肌の色も漆黒だ、但し目の色はグリーンで髪はこげ茶なのだ。顔つきは地球でいうアラブ系の感じ、歳は二十台後半か三十代前半か、中々渋い男前だ。

「調査を兼ねて川岸へ散歩に行こうと思ってな」

そう俺が言うと、ゾイドは顔色・・・良くわからないが何となく変えて引き止めてきた。

「ユースケ殿、幾らご自身が強いと言っても無茶です。淡水に住む魔物と言っても恐ろしく強靱な物も居ます、単身で川岸へ近づくなど危険です」

「あー、それを見に行くんだけどね。橋を架ける架けないは別にして、実際見ないと何ともならないからさ」

「そんな無茶な、集団で襲って来る水棲亜人も居ますよ」

「へー、どんな姿をしているのかなその水棲亜人てさ」

「陸でも活動できるカエルの様な肌色で、頭のとっぺんは剥げていて剥げた部分の周りには毛が生えているし亀の甲羅を背負った水陸活動出来る奴です。ガウロと言う種族の亜人ですが、人語も話せますすし人間とでも繁殖できます。あっ、他種族では人間以外とでしか

繁殖し出来ませんし雌は人間と同じような乳房があります」

それを聞いて連想したのは「はあ、????河童????嘘？」なのだ
「河童か????それは是非見たいね」

「えゝあんな気持ちの悪い連中を見たいですってゝ、海岸に住む魚
の方がましですよ、見てて面白いし食べれるし」。

「うあ、何それ。俺的にはそっちだって気持ち悪いじゃん、それも
食べるってどうよ」

「まあ、それは置いといて。どうしてもって言うなら人員出します
よ、ユースケ殿は警護対象の方ですからね」

「それ要らないよ、ってか、俺に全員で戦って勝てるのならあれだ
けど」

「んゝ、????正直言って勝てないと思う。でもなあゝ」

「じゃあさ、遠くから見ているってどお。危ないようなら逃走の牽
制に駆けつけるからさ」

「へっ????????我々が駆けつけるのではなくてですか？」

「俺は空へ逃げれるけど、あんたら飛べないでしょ」

「あゝ、それ抜けて居ました。どうぞ行ってください」

「気を悪くしないでよね、俺って人外だから」

「でしたねぇ、それじゃあこう奴のお土産待ってます」

そう言ってゾイドは地面に絵を描いた「ナマズじゃん」そう言ったら「これはヌーと言う奴です」だと、ちなみに体長六モイルも有るとか。好物はガウロだってよ。

「うーん、捕まえたら転移させればいいか」そう呟いて俺は川岸に向かって歩き出した。

川岸には着くまで別段何事も無く辿り着いた、水面近くから見ると支流とはとても思えない。どうやってこれが支流と分かったのかなと思ったのは無理は無いと思う「やっぱり魔法で空を飛んで知ったんだろうな」。

俺は地面に手を付けて、川底へ向かって意識を伸ばした。案外簡単に川底を探りながら意識を対岸に伸ばすことが出来たけど。案外と川は深くない、深い所でも六モイル。決定、川底にトンネルを掘ろう。俺なら無理なく川底にトンネルを掘れる、掘り出した土は魔物や水棲亜人避けの堤防やらなんやら作る材料にもなるし。強い固定化とか掛けたら水棲魔獣だって破れないだろうし、そうしたら安全に向こう岸へ渡れる。

「よし、方針は決まった。お土産送って帰ろう、朝ごはんには間に合うだろう」

ユースケは、川に向かって幅二キロ四方の網状の結界を打ち込む、

絞り上げて空に浮かせると色んな生き物が入って居るし、選別が面倒なんで電撃を打ち込んでそのまま移転させた。ヌー、入って居ればいいな。

砦では。

突然現れた水棲魔獣や亜人、巨大魚に大亀。どうやら気絶しているらしく、抵抗や戦いに向かって来る物は居なかったので一方的な殺戮となった。

「ユースケ殿、手抜きは困ります」のゾイドが発した声はユースケに届かなかった。

真面に歩いて帰って来たユースケに向けられた砦の衛士達の眼は、何処か渋い目であったのは仕方が無いだろう。朝から疲れ切った彼ら、任務に就かない者達は休養となったが「あんまりありがたないよなと」誰かがボソッと呟いた。

建国への道 支流の川岸（後書き）

エルフについては適当に作ったと言う事で。

建国への道 幕間 ユースケの砦へのお土産騒動

コの字型の建物の中に、突然淡水棲魚類や動物に魔物が降ってきた。当然、超下級の騒ぎになったのは仕方が無い事だろう。なんでこんな事が？の追及があつて当たり前。ゾイードは漆黒の顔から血の気が引き卒倒しそうになった、この仕業はユースケに決まって居る。自分確かにお土産をとほ言つたが、こんな要らないものまで、なんてこつた。ユースケ殿に口止めをしないと、厭々、これは朝の散歩ついでにと頼んだ。俺への嫌がらせか当て付けか、はたまた人外のユースケ殿だからなんでも無い事で気が回らなかったのか。

そんなこんなで挙動不審のゾイード、目ざとい人間は何処にでもいる。砦の厨房を預かる、料理長のビローがゾイードに声を掛けた。

「ゾイード隊長、朝もやの上がつた後、お客様のユースケ殿と何か話をしていましたよね」

「あつ、ああ。散歩に行くとかつて言っていたのでな、魔物の事とかをご注意申し上げて居たのさ」

「ふーん、それだけか？、なんか挙動不審なんだが」

「なんで挙動不審なんだよ、そんなはずは無いだろう、何にもやましい事とかは無いぞ」

「馬鹿だねお前さん、その科白でやましい事ありありって白状しているもんだろが。キリキリ吐け、指令には内緒にするからよ。あゝ？？？今度の休みに火酒の差し入れな」

「なっ、何を???ふっ???分かったよ。実はな、ユースケ殿に帰りに土産って言ったらこの騒ぎに」

「成る程、でもまあ全部気絶していたからな。俺としては貴重な食材が手に入ったから幸いだったし、指令も貴重な換金部位や加工すれば防具や武器に成る物が入ったからホクホクなんじゃねえの。衛兵達にしたら朝から迷惑だっただろうがな」

「そ、そうかな・・・はははっ」

そんな話をしていると、この騒動の張本人のユースケが帰って来た。

「ゾイドさん、好物の魚は入って居た？」

建物の形のせいなのか、かなりその声は響いて聞こえた。その場に居た者達からのゾイドに向かう視線、いたたまれない程の威力で突き刺さって来た。

「ほほう、この騒動の根源は貴様だったのか。多寡が弓部隊の隊長が、個人的な嗜好の物を欲しいと客人に強請ったか。ユースケ殿、我々の躰けと教育が行き届かずに申し訳ない」

「えっ、別に気にしていないよ。其れより儲からなかったかな、手ぶらで来たからなんか居ごち悪かったからさ」

「いやいやお気を使わせて申し訳ない、中々いいお土産でした。僻地の砦故、予算も潤沢にある訳ではありませんから助かりました」

「それじゃあゾイドさんへの懲罰は有りませんよね」

「まあ、我々からしてみれば損は有りませんでしたからね。只暫くは同僚達には恨まれるかも、気絶していたとはいえ、あれらを処置をするのに朝からそれなりに激しい運動でしたからね」

ジロリとゾイドを睨んで「それでは仕事がありますので失礼します」と指令は去って行った。

「河童は居なかったのかな」とユースケは呟きながらゾイドを見ると。半泣きの様子にユースケは吹いてしまった。

建国への道 幕間 河童を見た

砦の司令官、ルポノのザイードに対する芝居がかった態度。それにあつさり引つ掛かり、マジ涙目のザイードに内心爆笑のユースケ。指令も儲かったんだから素直に喜べば良いのに、去って行く後姿にそう苦笑するユースケだった。その場に残って居たザイードが、ユースケに何か言いたそうに視線を超越す。

「ん、どうしたんですかザイードさん」

「ユースケ殿、ガウロを見た位とか言っていましたよね」

「うん、????あれっ、あれに入ってた」

「はい、五体ですけどね。気絶したのが良かったらしく怪我も無く生きて居ましたよ、今は檻に入れてありますから」

「あゝ、ヤバかった」

「まあ、運の良い奴らって言う事で気にしないでください」

「亜人だからですか」

「それ程深く考えなくても良いですよ、俺達に間違つて殺されなかつただけめつけどもんですから。言葉を話すし、会話のやり取りが出る程の知能も有るもんで奴隷にしようかって言う話も有ったんです、けど乾くと死んでしまうんですよ。それでは川を渡る際の護衛戦奴隷にと言う案も有ったのですがね、所が此奴らって戦闘力もそれ程無いのですよ。ヌーには食われてしまうし」

そんな話をしながら檻が有る場所に着いたユースケとザイド。

「此奴らです」

「へえ、マジ河童じゃんってか、なんか気持ち悪いなあ」

「亜人と言うより魔物と言いたいですよ、俺個人ではですが」

生まれ故郷の伝説上と言うかお伽話の中の生き物、姿形そのままでこちらを見ている。

「もう少し我慢してくれよな、片付いたら解放するからさ」

そう語りかけるザイドに、河童の一体が増悪の眼を向けてくる。

「「「「やろ、早くここから出せ、食うぞ」」」」

「ヌーの餌が偉そうにいきがってんじゃねえよ」

「え、マジ言葉を話すんだ。へえ？？？ヌーが天敵なんですか」

「大好物らしいですよ、ヌーの腹を割くと出て来る確率が高いのが此奴らなんでね」

見れば見る程生まれ故郷、日本の河童伝説に出て来る姿形そのまんま。ひよつとして、先祖に異世界渡りをした奴が居るのではないかと思ってしまったユースケだった。

「もうじき解放されるから暴れるなよ、って、俺が悪いんだけどね」

「はははっ、元をただせば俺が悪いんですよ。あんな事を言っただから、とばっちりが此奴らに行っただけですよ」

恨めしそうな十個の眼に見送られて、部屋へと引き上げるユースケだった。

建国への道 幕間 河童を見た（後書き）

うーん、もうちょっとひねって掛けたら良かったんだけど。まあ、
こんなもんでしょ。

建国への道 国境交渉 その一 使える者なら

一介の冒険者の団が、国を作るから国境を決めてくれと言っても相手にされる訳も無く。ユースケから使える者なら誰でも良いから使え、第一王子と姫には会えないだろうが、あの二人の王子と近衛騎士団長になら会えるだろう。そんなこんなでビュージョの目の前にはバイデス近衛騎士団長と王子二人、ビュージョは二人の王子には驚いた、国を捨ててユースケの家臣に成りたいとのたまうのだから。

商人として再出発を決めたバイデス近衛騎士団長、王城からの除籍の承認は未だないが。鎧兜は脱ぎ捨てて、ユースケへの支援をする為店を手に入れていた。店と言っても、倉庫の様な所に小さな店舗くつつけただけだが。そんな店舗の中で。

「両殿下、それは無理と言う物ですよ。仮にも隣国に成ろう王国の王子殿下を二人、家臣に等出来る訳が無い。そんな事をして、将来獅子身中の虫にでもなられたら国家の存亡の関わりに成りますからな」

ビュージョのそんな発言に反応したバイデスが言った。

「それは私も同じ事なのでしょうか」

「バイデス殿、貴殿はベリリユー国王に対しての忠誠心は無くなつたと言うのですか？」

「私は近衛の長としては歳を取り過ぎた、なので退団の機会を探って居ましたからな。私にとって団を退くと言う事は、陛下に対する忠誠は捨てる事です。他国生まれの私を、近衛の団長にまで引き上

げていただいた御恩は有りますが。私はその御恩に充分報いたと自負しております」

「ウム、立ち位置が微妙な状況ではありますのう。我らの主ユースケは、それらの事等些細な事と笑うでしょうがのお。だが、国が形として出来上がって行けば。其れなりに、微妙な立ち位置に成る事は避けられぬとワシは思うのじゃがの。ワシの場合はこの国とも新たに建国仕様と言う地とは、元仕えた国とは遠く離れていて利害が重なる恐れは無いので良いのじゃがの」

「多分我が主のユースケは、其れを見越して輜重に係わる部門に商人と言う身分で接しようとしているのではないでしようか」

ケイリスは、これまでの経緯からみてその方が最善とユースケが判断したのだらうと思った。国家が形成されてゆけば、それなりに輜轡は出て来る。

「仕方が無い事ですな、私は両殿下とは又立場が違いますから。頑張っしてしがらみを振り払いましょうかな」

「兎も角、ワシは主にベリリユー王国から国境に関する文言、出来れば確かな線引きをと言われている。じゃが、王国から見ればワシらは一介の冒険者の団に過ぎぬ。じゃによって真面に相手にされるとは思ってはいないが、じゃがそれではワシは子供の使いに成り下がる。まあ、主に対するワシの面目も有るでな、はあそうですかとは引き下がれぬのじゃよ」

「ビュージョ殿、それではどうしますか」

「ウム、向こうにはベリリユー王国の砦がありましたな。川岸か

ら三千モイル程離れて居るとか、文書で砦から千モイル離れた地から我らの領土と宣言する心算じゃ。それにどう反応するかを見てみようと思うのじゃ、何も言っただけ来なければその地に我らの前進基地を作る事に成るだろうの」

「まっ、何も反応をしない等とは思って居ないが、武力衝突は避けない。主はベリリユー王国とは衝突したくないと言う事情もありますから」

「あゝ、将来の義父と喧嘩はしたくない。それをしたら妹が泣くだろうしな」

「なので、両殿下の力添えを願いたいです。両殿下にとっては、虫が良すぎる事とは重々承知の上で申し上げて居ます。最善の結果に成る様にです」

「まあなあゝ、神子とも言えるユースケ殿と喧嘩を仕様などと親父も宰相も思わないだろうさ。そうだな、女神様のご不興を買うかもと言ってやりましょうか。その方が頷きやすいだろうし」

二人の王子は、ビュージョから書を受け取り城に帰った。

王子二人に面会を求められ、書を突き付けられたベリリユー国王は吠えた。

「何処まで貴様ら二人は馬鹿なのだ、所詮彼の者達は冒険者の一団、

国が真面に相手をする輩ではないのだぞ」

「父上、彼らの主であるユースケ殿の事はどの位存じているのですか。女神様と対等に会話する彼を、無視して良い訳が無いでしょう」

「そうそう、只の冒険者の一団ではないんですよ父上。それに上手く配置させれば支流からの魔物の防波堤には成るでしょう、何も意味も無く土地を削る訳では無いし。国にとっても商売の相手となる訳だし、貴重な魔獣の部位も手に入れられるかも」

「そうなれば、あっちの国への牽制にもなるし。もっと言えば、我々にとっての厄介者達を押し付ける事だって可能でしょう」

「そつ、私腹を肥やすだけで糞の役にも立たない貴族共や破落戸に奴隸の身分から離れた者達を追放者として押し付けるのさ。其れなりに人手は彼らも居るでしょうし、特に奴隸だった者達って犯罪者に転がり落ちやすいしね」

「治安や犯罪抑止にも成るな、商売相手にも成るし。半端ない彼らの力をこちらに向かないようにするのにも、さっさと行ってもらった方が為になると思うよ父上」

ガサガサと受け取って来た書類を開き「砦から二千モイルはやり過ぎ、まあ千モイル位が妥当だな」。

「えー、ケチいくない兄上。彼らはしばらく奴隸達をも引き受けると言っているし、女神様からの覚えを良くするにはもう一寸はと思うけど」

勝手にワイワイ話す二人の王子に、頭が痛くなったベリリユーク国王は、宰相とそれぞれの担当卿を呼ぶ様に秘書官に言い付けた。

呼ばれて来た宰相閣下は激怒した、何故に王子二人がそれを持ってきたのかと。

「両殿下、いったい全体どの様な頭の構造をしているのですか。我々の答えは向こう岸のからがと言って有ります、そんな物は返して来て下さい」

その声に、外務卿が言った。

「宰相殿、先程各国に放っている諜者からの報告で。全神殿から解放された奴隷と、各貴族や商家農場主から放たれた奴隷達が我が国に向かって来ていると報告が有りました。それは女神様のご意向とも報告が続いてありました、その人数は我が国の全国軍の兵員に匹敵するとの事。とても入国を拒む手段は我らには有りません、止めれば暴徒と化するでしょう」

「うゝむ」

「私も外務卿からの報告で検討したのですが、彼らを收容するにはそれ相当の広さの土地が必要です。ですが、土地それだけではどうにもなりません。国内の食料品の高騰、人が入ればそれに寄る治安悪化、各国の諜報員の潜入。その他諸々の事が起きるでしょう、なのでこちら側の川岸をある程度彼らの領地と認めて彼らに管理させた方が我々にとって最善と思われます。何しろ彼らは彼の者を神子と呼んで居るようです、対応を間違えれば我が国は大変な災厄を受けるでしょうな」

そんな内務卿の発言で、米神をピクピクさせている宰相と頭を抱えている国王。追い打ちをかける様に軍務卿から報告が入った。

「国王陛下、宰相閣下に報告します。彼らの中に、武装した部隊を作り解放奴隷達を護衛する者達が発生しました。もはや武力でどうのこうのは出来ませんし、最終的には砦など所ではありません」

「分かった、交渉のテーブルに着くしかない。所で、解放奴隷達の総数はどの位に達すると」

国王の問いに、外務卿と軍務卿は止めの言葉を発した。

「推定、六万から十万近いと思われます」

「武装している者はその半数かと」

「何故それ程の数の者達が武装出来た」驚愕の表情で宰相は怒鳴った。

その問いに軍務卿と外務卿は、苦虫を噛んだ表情で内務卿を促した。

「私からお答え申し上げます、全ては各神殿に有った武器防具と思われまます。神殿兵から女神様が接収したか、武装解除された神殿兵、戦死した神殿兵から手に入れたと思われまます」

「神殿側に、其々の国に対して反乱の意思が有ったとでも」

ベリリユー国王は信じられないとでも言う様な表情だ、だが姫セピシルと王子ジョウイを襲った神殿側の騎士団の事に気が付き唸るしかなかった。

「その反乱の意思を挫いた形のユースケと女神に、ある意味感謝しなければならぬのもの」

誰にと言う訳では無かったが、国王はそう呟いた。

そして二人の王子に「使者を連れてまいれ」と言った。

建國への道 国境交渉 その一 使える者なら（後書き）

段々厭きて来たな、どっかで強引にメっちゃおうかな。

話がトンデモナク繋がっていないけど、ある程度出来上がったらしいろいろ手直しする心算です。なにしろこんなの書いたの初めてだし、構成何も何もあったもんじゃないねって言うのは解って居るし。誤字脱字意味不明って沢山てんこ盛りで突っ込みどころ満載、変な意味で笑えるかもね。まあ、優越感に浸って下さい、俺の方がましな物を書けるとかな。

建国への道 交渉 その二 国境は

二人の王子の案内で、ベリリユー王国王城に入ったビュージョ一行、だからと言って国王と謁見などかなう訳がない。一行が連れて来られた一室は、宰相室の隣にある小会議室だった。そして宰相秘書官から渡された一枚の書類、それは砦より二千モイル向こう、そして上と下の崖を境を国境すると言う書類。これ以上の事は話し合うつもりは無いと、秘書官から告げられた。

「結構、足場が無ければ困った事に成る所でした。国王陛下には感謝していたとお伝えください」

ビュージョは、ユースケからは出来れば砦と同程度のと言われているが。本心は今程の広さが欲しいのだろうとは思って居た、これを見て何と言うかも解って居る。

「おゝ太っ腹だね、って言うよりどこか抜けて居るよな」と言うだろうと。ユースケの能力を持てれば、ベリリユー王城など只の小屋程度でしかないのだから。

秘書官は足早に去って行く一行を見送って、何か途轍もない不安感が湧いてくるのを覚えた。

上下の崖を国境とする、そんな曖昧な指定は甘すぎる。誰かが立ち会う等とも決めずにだ、国としてこれはどうかと思うのだが、冒険

者の団程度と侮りの結果だ。ビュージョ一行は、其々仕事を与えられていた者達を集めユースケが居る砦へとひた走る。侮り書付の様な一枚の書類で追い返したベリリユー王国、数日後、砦から驚愕する報告が飛び込んでくる事を知り様も無かった。

そして。

「兄上、親父たち彼を甘く見過ぎじゃねえかと思うんだけど」

「まあな、ってか俺達も本当の能力知らないし。でも感じるよなあ、底の知れない能力って言う奴をさ」

「ん、直に会わなきゃ分からない。そんな所ってかな」

「まあ、俺達が国を継ぐわけじゃないし、対して責任はねえよな」

「はあ、家臣には出来ない???か、何処かへ旅立とうかな」

「あちこち国を抜けるのは難しいよ、それに兄上の行きたい所って言うのはビュージョ殿から聞いた国々の事だろう、どうやって出るよ砂漠と大森林」

ぼそぼそと話す王子二人、弟の下に下るのは嫌だし。だからと言って、母親である王妃のあからさまな策略に乗り、どちらも王に成ろう等と毛程も思っ居ない。王子としての誇りも覚悟も何処かへ置き忘れた様な二人、家臣にしたい等とは思わないだろう。我が儘な、

只の小僧が話しているのと代わりが無い。

ユースケは中州の河岸に居た、中州と言うよりも此処はこれだけの国を作れるだけの広さが有る。本流を見てユースケは「海じゃねって思っても不思議じゃないよな」と、呟いた。この世界の国の広さは小さくても一つの県程度の広さ、大国と威張っても北海道程度かなとユースケは感じている。大陸の広さまでは確認して居ないユースケ、それなりには広さが有るのだろうとは思って居るが。地球の全大陸を集めたよりも広大だとは知らない、そしてあちらこちらに国が有り、そしてそれぞれあちらこちらに国が有る等とはお互いに気付いて居ないのだ。何故そんな風なのかは今のユースケには必要のない情報で有る事は確かだ。

「さて作ろうか」そう呟いて手を地に着けたユースケ。

轟音と共に立ち上がる台地、見る見ると形作る建造物。奥行千モイル、幅三千モイル、高さ八百モイルは有るだろうかの驚愕物の建物が立ち上がっている。

「んー、周りにはやっぱ防壁だよなあー」

立ち上げた建物の周りから其々千モイル程離し、五重の防護壁を張り巡らせた。幅百モイル、高さ六十モイル、空を飛ぶ魔獣でもない限り入れない高さだ。流石に今中州を取り囲む程の防護壁を作る事は、今はする心算は無い。取り敢えず作ったのは余裕を持って雨風

を防ぎ、受け入れる人数分の広さを持たせた建物と違って居る。無骨と言うか大雑把と言うか、そんな建物がユースケの目の前に建っている。

「まっ、細部はそれぞれで作って貰うしかないな」

「さて、交渉はどうなったかな」そう呟き砦の方向へと向かうユースケ、望む結果が待っている。

建國への道 幕間 パロ・ヤーシと言う男

ユースケは砦で一人の男を臣下に加える事に成功していた、砦の門で気配を消していたもう一人の衛兵だった男だ。名はパロ・ヤーシと言う、俺に気配を感じさせなかったのだから使える。様子を見ていると陽気な男で、暗殺とかには向かないだろうが、其れは其れで別にいろんな意味で使えるだろう。

「ユースケ殿、勧誘は困りますね」と、一応文句は来たが、本人の意思も有るので許可された。

「パロ、お前国籍は直ぐに離脱できたのか」

「あゝ、別に問題ないですよ主。有って無い様なものなんでね、それに俺には家族なんていないし」

「そうか、じゃあ金を遣るからお前は自分の装備を買ってこい。流石に砦の装備品では拙いしな」

「主、承知しました」

出て行こうとしたパロに、ユースケは呼び止め自分の装備品のロングソードを手にし。

「オイオイ、丸腰で行くつもりか。とりあえずこれを装備して行け」

「いや主、心配ないですよ。一応砦でも武器も装備品も売って居ますから」

「そうなのか、知らなかったな。俺にも売ってくれるのかな」

「当然ですよ、その為の武器防具の「店」をやっているんですから」

「砦直営なのか、店長が指令だったりして」

「そうですよ。指令の実家が武器屋で副指令の実家が防具屋です」

「へえ、そうなんだ、実家に貢献しているんだね」

「あ、多少趣味も入って居ますね。あつ、ちなみに参謀の実家は内職で道具屋をやってます」

「マジかよ、じゃあここで手に入れた素材なんかはそれぞれの実家に？」

「言わば特権事項ですね」

ユースケはそれを聞いて、なんかなあとは思ったが。他所の事で、それが別段規律違反でないのなら関係ない事だしと聞き流す事にした。

「さて、パロには訓練の為、単独で狩りをしてもらう。未だ来て居ない仲間と合流する前に、自己鍛錬と言う事で拒否権は無い。自分より一寸上の魔物や魔獣を探して狩って来る事、以上よろしく」

「え、主、無茶ですよ。自分、戦闘はからっきしと言ったじゃないですか」

「俺は真正面から戦えって言うって居ない、俺が認めたお前の特技はなんだ」

「はい、気配を消すことですが？」

「その気配を消す特技で獲物に近付き、ブスッてやれば良いだけじゃん」

「主、マジっすか？」

「おう、大マジだ。お前ならやれる、いやお前しか出来ん」

そんなやり取りの後、パロ・ヤーシは顔も知らない仲間と合流するまで十日間、死ぬ程の思いを経験させられる事に成った。最後には砦の最高幹部の顔に、落書きをして来ることを命ぜられた。

結果は成功したが、それを遣れる人物を知る三人に追いかけて回されると言う。何とも中途半端な事になったのも事実だ。

後のユースケ達の国で、初代戦略戦術諜報謀略局長に就任。神影のパロの二つ名を付けられたが、就任以来姿を見た者は誰も居なかった。

「給料日にしか姿を見せないってどうなんだパロ」

「主、やる事はやっているんですし、主の前には姿を見せているんですから問題ないでしょ」

「お前の妻がこの間嘆いて居たぞ、いつの間にか妊娠しているって

よ。まるで透明人間を夫にしたみたいで気味が悪いつてな、せめて妻や子供には気配は消すなよ」

「善処します」

「そういう問題かよ？」

建國への道 幕間 パロ・ヤーシの妻マイニー その1

「私、人族でマイニー・スーライ二十歳。もうじき行き遅れと、陰口を言われそうなそんな微妙な年頃。うゝん、特段美人とは思って居ないけど、一寸可愛い系かなとは思って居るのよ。頭髮は薄い緑色で瞳も薄い緑色。母さんからは農家に嫁いだらって言われた事がある、周りの人からもね。何故かと言うと、魔力の特性が樹だからかな。でもね、虫が嫌いだから農家は駄目。あゝスタイルは???そこそこかな?と思う。自慢は色白と胸の形が良い事かな、えゝ??男の人に見せた事なんてないわよ。失礼ね。」

マイニーはお城で働いている知人から、お城の食堂で働く人手を探しているって言うので面接に来た。国が出来て五年、城が出来て三年と言う、未だ出来立てのホヤホヤと言う国で有り城でも有る。

城内で働く人員の採用不採用を決める担当人事面接官、ライク・オットモーが言う。

「それではマイニーさん、明日からお願ひします。住み込みにしますか、それとも通いにしますか」

「えっと、住み込みが出来るなら住み込みで。少しお城に通うのは家は一寸遠いもので、お願ひします」

「分かりました、それでは明日八の鐘まで城の人事課、つまり此処にお出でください。部屋に案内しますし仕事場の上司を紹介しますから」

「はい、解りました。よろしく願います」

マイニーは、母にお城の食堂に住み込みで働く事になったと告げた。

「あらー、マイニー貴女大丈夫。貴女って一寸ポヤーンとしているから心配だわ」

何気に娘に失礼な事を言う母と思ったが、心当たりが有るマイニーは言い返せない。

「んー、お婿さんを探すにはちようどいいと思うのよねー」

「あら、其れなりに気にしていたのね、御免なさいね。私無神経だったかしら」

「大丈夫よ、他の人達も同じ事を言われていたから、だったから気にしていないわよ？」

「あらあらあら、嫌味、皮肉。ポヤーンとしている割には言うのね？」

「んふう、行き遅れに成りそうなお年頃ですもの、これくらいは言いますって?!」

一寸だけ仕返しできたと明るく母に笑いかけ、持って行く荷を纏めるマイニーだった。そんなマイニーに苦笑して、大人な娘を止める訳にも行かず。こっそり少し肩を落とす母だった。

何時もより早くに起きだして、両親に別れを言って城に来た。面接官のオットモーを待っている。

「お待たせしましたマイニーさん、早速ですが部屋に案内します。それから荷物を部屋に置いたら仕事場へ行きます、せっつく様で申し訳ないです」

そう言いながら現れた昨日のオットモーは、マイニーの手荷物の一つを持ち上げて付いて来る様促す。

「基本的に城に住み込む方の部屋は個室です、陛下が個人の私生活や情報は守られて当たり前。もしそれで防諜に支障が有るならば、それは上に立つ者に人を見る目と管理能力が無いだけだと申されましてねえ、もう毎日緊張しますよ。そう言う事で、貴女も城で知った事や諸々の事は城外では余り話さない様にね。あつ、それから言って置きますが、当分貴女には防諜上監視の目が光って居ますからね。有らぬ疑いが掛からない様に行動や言動には気を付けて下さい、まっ、私は貴女にそんな監視は必要無いとは自信を持って言えますが」

「いえ、それが決まりなら嫌やは申しませんわ。しっかりお仕事を頑張るだけです」

「はい、頑張ってください。話は変わりますが、この城は陛下が御一人で建てた城です。知って居ましたか？」

「はい、遠目でしたが私も見て居ましたの。こんな事を申したらお

叱りを頂くかも知れませんが、陛下がお城より城下街を先にお作りになさったと聞きました時。え、逆ではないかしらと思いましたわ」

「そうでしたか、私も正直に言えば同感でしたね。まあ、民在っての国、そう常日頃陛下は申されていますからね」

長い城の廊下は歩く必要が無く、人が歩く速度の倍程度の速さで床が動くのだ。二人は話しをしながら運ばれてゆく、きちんと手すりも有る。陛下と呼ばれるようになったユースケが、城内で何かあれば衛兵を高速で運ぶ為に作ったのだ。ちなみに今の速度は低速、高速だと時速60キロは出る。

「居住区は男女の区別は有りませんから、ある意味注意が必要です。部屋に入ったらカギをかけて下さいね、一応防犯装置は有りますが、本人の警戒心が一番のカギですから」

案内された部屋は、ワンルームマンションと言う様な感じで。一人で過ごすには十分な広さだ、備え付けのベッドとクローゼット、机に椅子とソファがある。そして一枚のカードを渡された。

「これは部屋のカギでもあり城内で買い物をする時の財布でもあります、無くしたり盗まれたかなと思ったら直ちに城内の憲兵隊に届けて下さい。あっ、憲兵と言うのは街でいう警邏隊、軍人の犯罪を専門に取り締まる警邏隊の様な物です。昨日説明したとおり、城内に居住する者は軍人と文官の区別しかありません。覚えていただけますよね」

「だ、大丈夫です。私は軍属で輜重兵待遇、三か月は階級は無しの訓練兵としてしっかり覚えています」

「まあ部隊毎の様な軍事訓練は有りませんが、それでも個人の格闘戦戦闘訓練は有ります。何かあっても戦って生き残れるようにとの陛下の判断です、まっ、陛下が御られればそんな心配は有りませんか。物凄いお方ですから。さて、それでは職場へ行きましょうか」

「はい、お願いします」

「迷子には気を付けてください、行き先はは表示してありますが、それでも迷う困った方も居ますからね」

「流石にこれだけ表示してありますから大丈夫と思います」

そう返事をしたマイニーだったが、この後しっかりと迷子になった。そしてその場で気配も無く、マイニーの後ろに立っていた男が居た、パロ・ヤーシである。何気に振り向いて驚いたマイニーに、強烈なビンタと脛への蹴りを貰ったのは当然だろう。

「貴方態とよね、いい大人が迷子に成っているのを面白くてからかう心算だったのよね、だから私は悪くは無いわ」

そうマイニーは自分の行為の正当性を主張するのだった。

ビンタも強烈だったが、弁慶の泣き所の脛を思いっきり蹴られたパロは。悶絶して返事もできないと言う、なんとも馬鹿な男と通りがかった者達に笑われている。それが二人の出会いだった。

建國への道 幕間 パロ・ヤーシの妻マイニー その1 (後書き)

その二へどう話を持って行こうか、んゝ・・・泣くぞ。

建国への道 幕間 パロ・ヤーシの妻マイニー その2

俺はパロ・ヤーシ。この日俺は一人城内の居住区を歩いていると、色白で可愛い感じの女の子が歩いていて。ウロウロウトキョト素行不審者発見？てな感じでその子に近づいた、突然クルッと振り返った彼女。「嫌あー」の悲鳴と共に、頬と脛に強烈な衝撃が来た。一言で言えば悶絶だった、そんな俺の傍で彼女はブツブツ独り言「うん、私は悪くない」等と?????。どんだけ凶暴なんだと思ったよ??。マジで。

「君、幾らなんでも振り返り様ひっぱたくは蹴りを入れるとか酷くないか」

幾分か痛みの引いてきたころ、引っ叩きと蹴りを呉れた彼女に俺はそう言ったが。

「私は悪くないわ、真後ろに気配も立てずに居た貴方が悪いのよ？」

色白な可愛い顔を真っ赤にして反論して来る彼女、それも両腕の手を握り締めてだ。そんな表情を見て俺は、マジど真ん中じゃん、一言で言えば惚れたね。言って置くけど俺はMじゃねえぞ。

「えっ、そんなに俺近かった？」一寸だけ惚けた。逃して成る物かと?????グフグフツ。

蹲った姿勢で抗議して来る彼、だってねえ?????。気配を消して乙女の背後に立つなんて。

「ひょっとして迷子とか？」そう言われちゃたわ、当たり前ってちっちゃく呟いた。聞こえなかったみたい。

「ひょっとして迷子とか？」

そう訊ねれば、彼女は真っ赤になって目を彷徨わせている。

「俺は陛下付きの武官の一人でパロ・ヤーシと言う」

まさか出会ったばかりで諜報部大佐とか言えんし、私服で居たのを良い事に階級は言わなかったが。ん、無駄な配慮だったかな、迷子に成る位なんだから。

「私はマイニー、今日から士官食堂で働いているの。夕方のお世話まで時間が有るから休憩を許可されて戻って来たの、でも今日来たばかりなので迷ってしまったのよ。方向感覚には自信が有ったのに困ったわ」

不思議な事を言う、かなり大きく行き先案内が有るのに？。

「え、字が読めないとか？」

「違います、単に階を間違えただけの様なの」

「ここは単身の軍幹部居住区だ、君は士官食堂で世話係をしているのならもう二階下だよ」

「あつ、そうなの。階数が多くて大変だわ」

なんかおっとりポヤンな娘だな、うーんマジ良いわ。ツバ付けとこつと。

「だったら俺がこの辺り案内するよ、又迷子はいやだろう」

「あら、貴方が私の監視員なのかしら？」

「えー、だったら君の近くになんて近寄らないよ？」

「あー、それもそうよねー」

「まあ、君が大物の何かだったら別だけどね。どう見ても可愛い娘ってしか見えないし」

「えっ、あら？？？お口がお上手なんですわね」

「いやいや本気で言ってますから」

「嫌だわ、私はもう二十歳で行き遅れって言われそうな歳が近付いているの」

そんな話をしながら階近辺を案内する俺、当然彼女、マイニーの部屋を確認した。

うっかり初対面の彼に部屋を教えてしまったわ、部屋替えは頼めないし。んー、悪い人では無い様なんだけど、油断がならないって言

う感じかしら。でも見た目も良いし、士官らしいから大丈夫よね。

彼とはそれから時々士官食堂や通路で出会う様になり、そのたびちよくちよく遊びに誘われてお付き合いするようになったの。

そんなある日??????

「やあマイニー、一寸良いかな？」

部屋の前な立っている彼がそう言うの、これが夫婦に成る切っ掛け。

「あら何かしら」

「入っても良いかな？」

私は単に彼が私の部屋に入っても良いかって思ったのよね、だから私はお茶ぐらいならって思ってた。

「どおぞっ」て言っ、彼を部屋に居れたのよ。そしたら彼は、私の部屋に入りながら更にこう言ったのよ。

「えっと、俺は君が好きだ。だから君の中に入りたい」

えっ、私の中に入りたいってどう言う事ってボーンとしていたら。キスをしながら私をベッドに運んであれよあれよと言う間に、キスをされて混乱している私の衣服を脱がせてしまったの。そして私のあそこをくちゅくちゅと????????きやあー????。

「大事にするからね」って、抵抗する間も無い手際の良さで。

文字道理、彼のジュニアが・・・馬鹿あゝ???鬼畜ゝ。初めてなのゝ???三度もなんて信じられない。

それは幾ら魔法で痛みやなんかを治癒出来るけど、気持ちの問題よね。基本彼を嫌いじゃないし、なんとなく言う事に成るって思っ
て居たわよ・・・でもね、こうなったら。逃げられて成る物か、
女の怖さを思い知れえー???。

「婚姻届すぐに出して、貴方避妊しなかったでしょ。ズルズル引き
伸ばされて、マタニティドレスで結婚式なんて嫌よ」

私はそう言いながら五発くらい彼に往復びんた、婚姻届で窓口まで
引きずって行ったの。鼻血を垂らして両頬を腫らした彼、行き逢う
人や窓口の係りの人にドン引きされたけど知った事では無いわ。窓
口の前に立った私に、彼は一枚の書類を渡して来たのよ。見ると、
彼と陛下のサインが入って居る婚姻届書だったのよ。

何処がポヤアゝンだ黙っているから良いのかって思ったんだけど。
違ったのかよ、こえゝってか、わあゝ俺ってば監獄行きかなあゝ。

「俺、一応陛下付きの武官なんで陛下の了解が要るんだよ」

「順序が逆じゃない、馬鹿あゝ」

「いや、近日中に国外に仕事で出るからさ。その間に君を誰かに取
られたら嫌だったから」

「パロ、なんの騒ぎだ」

「げっ、陛下」

「確か俺は、お前が結婚するので婚姻届出書にサインを頼まれたよ

な。順序が逆だって言うのはどういう事だ」

女をなめるなこの野郎の本能で???

「陛下、彼ったらいきなり私の中に入って、それから結婚しようって言ったの」

「なんだそれは、パロ、説明しろ」

事情を聴いた陛下は激怒、即刻式を挙げろ。それから「貴様は任務から帰って来たら覚悟しろ」鬼の様な・きれいな顔で怒鳴って。王妃様とそろって結婚の証人に成ってくれました。

「パロ、俺と王妃の顔に泥を塗る真似をしたらどうなるか。良く考えてこれから行動しろ」

ある意味苛烈な所が大いにある陛下、そう言われたパロったら真っ青になって硬直していたわ。一寸だけ言い気味よね、しかも大佐だと言う彼のお給料は結構良い見たい。ふふっ、お小遣いは一寸づつあげるの。その位良いわよねえ?、あ?とつても痛かったし忙しかった日だったわあ。

あれから七年経ったわ、子供は三人、今お腹の中に一人いるのよ。悩みはね、彼の性癖。最近では姿消しの魔法まで習得していて、私ったら知らない間に彼に抱かれていたりするの。もう、陛下に言いつけてあげるんだから。

建国への道 幕間 パロ・ヤーン始末

彼女にも若干の落ち度はあったとしても、レイプ紛いなパロの行動。結婚はさせたがそれでは示しがつかない。法治国家を目指し法を作り、民に公の正義を知らしめようと頑張っている者達も居る。俺の側近の者と言えど、情実を掛けたら全てが台無し。公の者も民の者も脱力し、士気が落ちる、やはり其れかと。

パロには任務から帰ったら覚悟しろとは言ったが、考えてみれば任務に出す訳には行かないな。

「パロ、俺はお前の任務を優先して。お前の仕置きは帰って来てから考えたが、其れでは多くの者達の為にはならない。法を踏みこむ行為を王がして良いかと言う事だ、分かるな」

「はっ、どのような仕置きでも受ける覚悟で有ります」

「ふん、一応軍人だ軍法廷の中で裁きを受ける事に成る。弁護人は自分で探せ、それと今回は軍法廷での裁判だが公開とする。お前の身分は極力秘匿するが、まっ、後継も育ててきている構わんだろう」

「えっ、それは知って居ますが???てか、矢張り実刑でしょうか」

「当然だろうな、遣った事になったのだからな。いかに彼女が望まなくとも、もうお前達の事は国内外に噂として流れて行くだろう。俺がここでお前を法を無視して下手に庇ったら。實際の話、建国年数の少ない我らの国だ。どの様に捻じ曲がって伝わるか分かった物ではない、結果、民からの信頼は消し飛ぶ」

彼女が誰かのものにと考えたなら我慢できなくて、その結果が是か。目の前が真っ暗になるとはこの事か。

「陛下、出獄したらすぐに失業でしょうか」

「普通はそうだな、だが罪を償い出て来たお前を放り出すのは人材不足のこの国に出来る事では無い。つまり、それは其れ 是はこれ っていう事だよ。けじめを付けて出て来たお前を何時までも責めはしないさ。それに長い刑期には成らんだろう、彼女の弁護と刑期短縮の嘆願を出すだろうしな」

「あの、陛下に弁護をお願いすることは」

「馬鹿かお前は、俺がお前の弁護なんぞと言いついたらそもそも裁判など始まらないぞ。其れに、其程お前を最賈にしなければならぬ理由が無い。お前達の中では階級や立場もあるだろうが、俺にしてみれば大臣だろうが乞食だろうがこの国に籍があれば全員家臣だ、身分等関係なくな。それにな、お前はこの一件で俺からの信用も信頼も無くなったのだぞ」

此奴はまったく、言わなければ分からないのか???。む、未だ頭に血が上っていると言うか、俺が知る以上に馬鹿なのか此奴。

「さて、そろそろ憲兵達が来るころだ。暴れるなよ」

「陛下あゝ、新婚なのにお勤めってえ」

「お前が望んだ事だ、俺が知るかよ」

やって来た憲兵にしょっ引かれて行くパロ「新婚なのに」と、トボトボと連れられて行った。

結局裁判では軍刑務所に禁錮一か月のお勤めと、出獄時五十回の鞭打ちの刑になった。体罰は有りなのかと言われそうだが、受刑者に依っては長期刑を科すには都合の悪い事も有るのだ。特にパロの仕事は特殊なのだから。

当然鞭打ちは公開刑。パロの新妻がそれを見て、恍惚の表情をしていたのには見て居た者達は思いつきり引いて居たのパロには内緒だ。

二人の夜の生活に幸あらん事を。

建国への道 新たな仲間達と国境線の砦 その一

ベリリユー国側の支流砦前に整列した仲間達、いつの間にか人数が増えて居た。おおよそ一人に対し二人ほど、今までは一個分隊程度の人員だったが、それでもやっと一個小隊の人員に成っただけだ。是からの事を考えると、もっと大幅な人員増をしなければならないだろう。当然人員補充先は、此方に向かっている元教団の奴隷とか、商家や農場から解放された奴隷達が主に成るだろう。

だが、命じられることに慣れ過ぎた彼らや彼女達に、未だ小規模な部隊での自己判断で戦えるのだろうか。大規模な集団戦ならば、ただ号令のもとに目先の戦闘は出来るだろうが。小規模な部隊では、戦闘状況を只の兵であろうとも其れなりに把握し、己をも生かし味方をも生かす戦い方をしなければならないし。その戦い方が臆病であっては成らないという難しい事を、しっかりと出来るのだろうかと言う事だ。

「ユースケ、お前に無断でなんだが、其々の者達に部下を探させて置いた。八か国から流れてくる人々の数を考えると、其れなりに武力が必要と思ってな。言わば将来の軍幹部だな」

「ケイリス、それは構わないけど。こんな場所に全員無警戒で整列させるのはどうかと思うぞ」

そう言っただけは、整列している者達の周りに魔獣たちを転移展開させた。是位の事に対処できなければ使い物にはならないだろう。

突然現れた魔獣達、その数三十程、中程度の強さの水棲と陸生魔獣達だ。お互いギョっとした様だが、たちまち戦闘になった。見てい

ると、中には魔獣同士で戦っているのも居る。戦闘は地球時間で三十分ほど続いたが、なんとか狩倒し重度の負傷者や死者は出なかったが。

「ユースケ、突然何をするのじゃ。確かに警戒員を置かなかったのは確かだが、それはお前との顔合わせの為じゃぞ」

「そうよ、お茶目も大概にしてよね」

ビュージョさんとネイルさんに叱られてしまった、当然初顔合わせの者達からも白い目で睨まれた。

「まあ、ユースケとしては対処力と戦闘能力とかを見たかっただけだろうけどな。どうだ、当然合格だろうな、あっ???? ユースケ」

ケイリスはご立腹の様、それはユースケが居ない間。狒犬達を使つての戦闘訓練や、実戦訓練として魔獣狩りを積極的に行い鍛え上げたの自分なのだから。

「御免ケイリス、それからありがとう。これなら大隊規模の団は立ち上げられるな、他に人員の補充に当てが有るなら実行して欲しい。俺はこれからビュージョさんからの報告を聞いて、此方側に砦を作るから」

「分かった、大隊規模で良いんだな」

「ああ、取り敢えず戦闘部隊を大隊規模で。それと後方の支援部隊と輜重部隊をもな。それからムロ、指揮官以外の土系魔法を使える者を集めておいてくれ。パック、残りは警備だ、隊長を任命する」

「ユースケ、俺とネイルは何をするんだ」

「俺に付いて来てくれればいいよ、ギャリクさんはこれから大きくなっていく部隊の最高指揮官だし。ネイルさんはこっちに向かっている人達の、受け入れ準備を担当してもらうから。ビュージョさんには宰相を頼みます、あゝ？？？必要な人員は各自集めて欲しい。副官と秘書や書類仕事の官僚をね、でも戦える人物と言う事で」

「なんで俺が部隊の最高指揮官なんだ、それはユースケの仕事だろうが」

「あー、それは戦術面での事だよ。俺は全体を見なければならぬからね、部隊の戦闘事にはそんなに手を出している手暇暇はないんだよ」

「で、ビュージョさん。国境の方はどうなったのかな」

「ああ、このベリリユーの砦から二千モイル先から川岸までだ。上下の崖までと言う事に成った」

「ふうん、たったそれだけ」

「ああ、それ以外条件は無いな」

ユースケは「この辺では地震なんてあるのかな」と、傍に居たパロに訊ねた。

「うお、そいつは誰だ」

ギャリクが驚いたようにユースケに尋ねる。

「ああ、此奴はパロ・ヤーシ、あの砦から引き抜いたんだ。情報収集担当だよ。ああパロ、お前さ、こっちに向かっている人達の状態を調べる事。それから中には八か国の諜報の連中も混じって居るだろうし、入って来られると都合の悪い馬鹿も居るだろうしな。お前にも人選は任せるから部下を集めて、そんな連中を排除しろ」

「分かりました主、復唱します。部下を作り集めて、こちらに向かっている集団の状態を調べます。かつ対諜報活動と合わせて悪意ある者達の排除を実行します」

「ああ頼んだよ、けれどやり過ぎてお前と部下達が狩られない様にな。何しろお前の後ろに居るのは俺達しかいないんだから、で、地震は」

「はい、小規模な物なら四五年に何度か、大規模な物は聞いた事はありません」

「分かった、それでは頼んだよ」

「はい」

返事と共にパロの気配は消えた、ギャリクとビュージョ、ネイルは口をへの字にしている。

「なんか不気味っちゃあ不気味よね」ネイルがぼつりと一言零した。

「うーん、結構面白い人だよ。まっ、特技が気配を消すことなんだけどね。本気に成られたら俺も危ないかも、今みたいに姿も時々見えない事も有るしね」

「ユースケも知らないうちに後ろに立たれてブスリッ????か、味方でいてくれる事を願うだけだな」

「その一点の飛び抜けた才能を持って居るのにさ、良くもまあベリリユーユ王国が放って置いたわよね?」

「あゝ、単なるいたずら好きとしか思われていなかった見たいだったよ、だから引き抜けたんだけど」

「何にしろ、ユースケの眼に叶った人物じゃ。一角の人物になるじやろうの」

「えゝゝ、ビュージョさん。俺そんなに人をみる目って無いよ、暫くは彼の監視をよろしく」

「気配を絶つのが得意な人物で、姿をも時々しか見ない者を、監視するって難しいわよ」の、ネイルの言葉に全員頷いた。

ベリリユーユの砦から二千モイルに立った一同、ベリリユーユ側の立会人も居ない状況で砦建設はどうした物かと思ったが。

「立会人が来ないのは向こうの不手際、ワシらの責任ではない」とのビュージョの一言で。

「じゃあ、国境全面に高さ五十モイル、奥行五十モイルの壁を崖から崖まで建てるよ。大体の形で俺が建てるからさ、細かい所は皆で改造を頼むよ。んー、ベリリユー側に百モイルの水堀、入り口には浮遊式の橋と入り口は一か所で三十モイルの高さと五十モイル幅で。浮遊式の橋は建てる砦の方に引き込められるように、入り口の扉は十モイル厚さの物を三枚左右スライド式に」

「ユースケ、幅が崖から崖までって。幾らなんでも人外なお前だからと言っても一寸無茶じゃないか」

ギャリクがそう失礼な事をユースケに言えば。

「ふふん、出来ない事を俺は言わないぜ」そう胸を張ったユースケに。ネイルは夫であるギャリクに、遣るのは人外のユースケなんだから、あんたの無駄な心配は要らないと思うと更に酷い突っ込みを入れた。

同行している土系魔法の使える者達は「んな無茶なと内心突っ込んでいるが」ユースケが人外な事を知らない。そして結局、一同驚愕の余り、中には失禁する者も出る始末だったのは後の話。

ユースケは大剣に乗りながら空中に浮かんで「対岸に建てた砦は未完成だからこっちは完成させておかないとなと」そう呟き。

んー、あのやり方だと建物も雑だし、内部に手を入れられなかったんだよなあ？？。「やっぱ設計図は必要だし、見えないと内部は展開してもマジ雑になるな。うーんどうしようか。地球から設計用コンピューターでも呼び出すか、あーその前に地面を整地しないと。

そんな事を呟き「重力百倍」と防護壁を建てる地面に手を振り「状態固定」と魔力をつぎ込んだ。

「ありゃ、一寸沈み過ぎたかな」

ユースケが思ったより地面の状態が悪く、思いつきり地面は沈み込んでいた。見ていた全員、堀を先に作ったのかなと思ったのは仕方が無いだろう。

「あっちゃあ、思ったより地面柔らかかったよ」ユースケはそう言いながら地面に降りてきた。

「ユースケ、先に調べなかったのか」

目の前で起きた事の派手さに驚いたが、何をしたかったのかユースケに聞いたギャリクは。遣りたかった事の規模の事もしたかった事の規模も、余りの人外な事に厭された。ギャリクの後ろに居た者達は、ユースケの事は話半分以下にしか信じて居なかった。だが今彼らは顎が外れるかと言う様な顔をしている、そんな者達にギャリクは「お前ら、この程度で驚いて居たら心臓止まるぞ」と追い打ちをかける。

「じゃがユースケよ、位置が少し内側にずれて居ないかの」

確かに、ビュージョが指摘した様に百モイル程国境線と定めた印から内側にずれている。

なんか面倒臭くなったユースケは。

「幅七千モイル、高さ七十モイル、幅百モイル浮き上がれ」と呟けば、ズルズルと地面が浮き上がり。「移動、幅五十モイルまで圧縮

固定」と言いながら手で押す様な素振り。別段なんの音がするでもなく移動し圧縮して行く土壁に呆然とする皆の前には、底が見えない空間が地面に有る、そして眼前には巨大な壁が立ち上がって居た。

「うん、後は面倒臭いの嫌いだし。皆に丸投げしようかなとね」

「かなとねってお前、お前の何万分のなんぼしか無い魔力の此奴らにだな、仕上げは任せたって言うのは酷だろうが」

「うーん、上を平らにして余った土で見張所を作るだけだよ。最初から出来ないなんて思ったら出来ないと思うよ、訓練にも成るんだから頑張れ」

頑張れと言われた土系魔法を得意とする者達は「非常識人外がそれを言うか」と、思いながら俯いたが命令は命令だ。

「ユースケ、それは良いとしてこの空堀はこのままなの。浮き橋って言っていたけどどうするの、このままで空中に浮く橋でも架けるつもりかしら。あたし怖くてそんなの嫌よ」

「支流から水を引けば魔物が入ってきて危ないな、どうする心算だ」

そう言われたユースケ、ニヤツと笑い。

「網を仕掛けて、入って来た魔物や生き物を捕まえるさ。魔物からは色んな素材取れるし、食料となる生き物も手に入る。まっ、そう言った細かい事は任せろって」

「あんたね、細かい事は嫌いだからって仕上げを丸投げした癖に、それって変よ」

「ネイル、ユースケは戦いたいんだよ。根は乱暴者なんだから」

「其処、ギャリクのおっさん酷くないその言い方は」

「おっさんとはなんだ、俺は三十路前だぞ」

「ふん、俺から見れば物凄なおっさんじゃなか、加齢臭プンプンのおっさん」

「ぐおー、ネイルからも言われた事が無いのにお前が言うか」

面白くも無い言い合いの二人、ベリリユー側砦では大騒ぎな事態に成っているとは知らない。

「大変です指令」

そう叫びながら指令室に飛び込んできた参謀のセロム・ナーナツカだった。

「なんだ騒々しい、お前らしくないぞ」

「俺らしくないとか等どうでも良いのです、砦の展望台に上がって下さい」

そう急かされた指令のルポノ・ウトカは展望台に立ち驚愕した、先程まで無かった川岸の二千モイル程の先に。突然巨大な壁が建ちあがって居たのだから無理は無い、良く見れば空堀らしきものまで見

えるのだから。

「あれはユースケ殿の仕業なのだろうか、だとしたら我々は余りにも彼の力を見誤って居たとしか言い様がないな」

「指令、追い打ちをかける様な事を言いますが。支流の向こうにはもっと大きな建築物が有るようだと言報告が有りまして」

「そんな話は上がって居ないが、誰がその話を止めたんだ」

「俺だ、天気が悪くて確認できなかったのな」

後ろに居た副官のラムワカ・シカロがそう答えた。

「あれを見ると確かに建っていたんだな、ユースケ殿があれ程人外とは思わなかったのだよ」

「王城に知らせたらどういう事に成るだろうな」

そう言う参謀の声を聴きながら、副官を怒鳴り付けたくなったルポノだが、自身もそこまでユースケが人外とは思わなかったのだから怒鳴る資格は無いと呟いた。

「兎に角王城に報告だが、その前にラムワカ、その眼で見えて来て報告書を上げろ。あれの他に何か建てる心算なのかも聞いてこい」

「分かりました、素直に話すかどうかは分かりませんが」

「あれが国境用の防護壁としたなら、これから作るのだろう彼らの砦は。この砦等、箱庭の作り物の様な物でしょうよ」

呆然としたような三人の口からは、何かを諦めた様なため息が聞こえた。そして後ろでは、非番の兵達だろうが発する、驚愕の悲鳴が幾十も聞こえる。

建国への道 破魔石なのか魔吸石なのか????どっちでも良いや。

ユースケは、新たな臣下となった土系魔術師の仕事ぶりを見ていた。城塞壁の細部の仕上げを丸投げをしたが、どんな風に出来上がるのかと大剣に載って浮き上で見ている。そんな時、ネイルが風に声を乗せて話しかけてきた。

「ユースケ、お茶が入ったわよ。一度降りてきなさいよ」

その声を聴いたユースケは、狛犬達に警戒を任せ下に降りた。

「ユースケ、この城塞壁って色気ないわね。でっかいだけで品位が無いわよ、もう少し何とかならないの。一応最初の物だし、見栄を張ってドカンとインパクトの有るものに出来ないのかしら」

其れを聞いて居たビュージョは、うんうんと頷き。

「ユースケよ、ネイルの言う通りじゃよ。言わば国の入り口じゃ、こけ脅しても良いから見栄えの有る物が良いぞ・ふふふっ」

「あー、二人して何を言うんですか。こんだけの物なんて、多分探したって無いと思うけどな」

「いやいや、お前の人外ぶりを知らしめて。八か国の者達に余計な手出しをさせないと言う意味では効果は有るぞい」

「例えばどんな風に改造しろと」

ネイルは、うーんと唸りながら考えて居る。そんなネイルの隣に居

る夫のギャリクは、何も考えて居ないようだったが。

「なあユースケ、あれだ???全部黄金にするとか出来ないか」

突拍子もない言葉に、流石のユースケも驚いた。

「おっさん、俺が幾ら人外でもそれは無理だろう! ってか、態々攻めて来いって言っているようなもんだぞ其れは?」

「そうじゃの、それは出来る出来ないは別としてじゃ。八か国が連合して、黄金城塞壁目指して攻めてくるじゃろうのう?、遣り過ぎはいかんぞ」

「ビュージョさん、是だけでもやり過ぎだと思っけどな俺は」

ギャリクはそう言いながらユースケの方を見て、むううっと睨んだ。

そんなギャリクの睨む視線を無視してユースケは考える、出来る出来ないは兎も角、遣って見ようと。ただ金属にするにしても、どの金属にするか???なのだが。

何気にその気に成って居る、そんなユースケの表情にネイルは唇の端を引き攣らせていた。

「うーん、出来そうだからやって見様かな。どちらにしてもさ、中は兵員の移動用に空洞化しないと成らないからね、その序でにやってみます」

「やるのね、でもまさか黄金とかにはしないでしょねえ」

「そりゃそうだよ、態々攻めて来てくださいな物には換えません」
そう言いながら立ち上がったユースケ。

「その前に一寸出かけるよ、向こうの土地で面白い物を見つけているからそれを持ってくる」

「ユースケが面白いと言うのじゃから、唯物と言う事は無いじゃろうの。余り厄介な物は持ってくるなよ」

「んゝ???ふっふっふっ」

そんなユースケの邪な様子に、三人は其々ため息を吐いて諦めた。

支流の対岸に建物を作った時、それに厭きたユースケは作業を半端にして、巨大な面積の中州から本流を飛び越えて目的の土地に偵察に一人で行った。幾時間か費やし、飛び続けた大地には魔力の有る生物の影が少ない、だが普通に魔力を持たない獣類は沢山いた。魔獣の類が少ないのは廣大過ぎるからなのだろうか、恰好の餌場のはずなのにと訝しく思いながら真っ直ぐ飛んでいると。かなりの速度で上空から初めての土地を見ていたユースケは、遙か向こうに、緑の色が消え赤茶けた大地を目にする。

「おゝすっげえ」

思わずユースケは歓声を上げた、目の前に広がる巨大な石柱群、そして巨大な岩群。まるでランドキャニオンにでも来た様な感じだ、だがユースケはここで自分に何かの異変が起きている事に気が付い

た。巨大な岩に近付くと、まるで何かが吸い取られるような感じ「あっ、魔力が吸い取られている」そう気が付いたユースケは慌ててその上空から離れた。

「あれって、魔力を吸い取るか喰う何かなんだろうか」そう一人呟く。

ユースケは確かめるため、もう一度巨大な岩に近付き。些か遠いとは思ったが火魔法の一つ、業火を放ってみた。ユースケの放った業火は平均的な魔術師の千倍は威力が有る、流石のユースケもこれ程の魔術は放った事は無い。

放ってはみたが、飛んで行った業火は途中で消えた。

「んー、これは魔力は吸い取るし、魔術も打ち消す破魔石か魔吸石かって言う奴なんだろうな」

何かに使えないかとユースケは思った、だが体内から魔力を吸い取られるのでは近づけないし。

「うーん、使えそうで使えない。ある意味ヤバイ奴って言う事だな」

石柱の一つに降りてしばし考えて居たユースケ、自身の中にある魔力を神力で遮断し、神力で浮遊し巨大な岩の一つに近付いてみた。

「ふーん、影響が有るのは魔力だけか。戦闘に成ったら、敵の魔術師の居る所にばら撒いたら有利だよな??? つか。俺にしか運べないじゃん」

ぼそぼそと独り言「あーそうか、この辺りに魔力の有る生き物が少

ないのは魔力を吸い取られるから」

どうやら魔獣に襲われたら、魔力を持たない獣たちは。集団でここに逃げ込めば良いと、獣なりに本能で解って居るらしい。

まっ、破魔石か魔吸石か知らないけど。何時かは使い道は有るだろうな。

「あれがこんなに早く使い道が出来るなんて思わなかったぜ」一人ニタニタと笑いながら飛ぶユースケだった。

後に、この岩を弄りまくったユースケの手によって。嵌めた城塞壁は魔術師殺しと言われ、難攻不落の国境城塞壁となった。

建国への道 ユースケよ、言った事は嘘なのか。

元の世界でいうなら百トン程の謎の石を運んできたユースケ、だからと言ってそれに何時までもかわって居る程暇ではない。取り敢えず、大河の本流に沈めた。結果がどうなるのか等は考えもしないで、後に思いもかけない良い方向に行くのだが、今は知らないと言う事。

其れよりも目の前の事、全てのメンバーが頬を引き攣らせユースケを睨んでいる。

「ユースケよ、お前はやり過ぎないと言ったはずじゃったな」

「確かにゴールドなんてトンデモナイト言ったわよね」

「攻めて来られたら、どうのこうのと言ったよな」

ビュージョ・ネイル・ギャリクが怒気を含んだ言葉を発している、残りのメンバーは今にも卒倒しそうな表情だ。

ムロが叫んだ。

「主、如何に何でも壁をオリハルコンにする必然性が何処に有ったのですか」

そう叫んで口から泡を吹いている。

「壁だけならって言うのは間違っているな、後ろのあの建物はなんだ。あれもオリハルコンだと」

ケイリスは人外にも程が有るユースケに、厭きれたと言うより此奴から逃げたいと心底思った。壁の背後に建つ建物、高さ四百モイル、奥行百モイル、幅七千モイルは有ろうかと言う巨大な建物なのだからだが、止めにあれもオリハルコン製だとのたまいやがったユースケから逃げたい。

「あー・・・だって何万人も押し寄せて来るって言うからさ、目勘定で作ったんだよな」

「なって、なってなんだよ馬鹿じゃねえかユースケ。確かに受け入れる為の方策を考えて居たのは確かだ、衣・食・住は最重要だからな」

「住は解決したからいいじゃん、一つ心労の種が減ったんだから」

「じゃんじゃねえ、良いか、攻め落とそうと考えたら其れなりに攻め方は有る。このオリハルコンだけで作られた此処を、何かの方策で攻め落とされたら俺達を作ろうとしている国はそこでお終いだ、そう言う事を含めて作り方が有ったろうと言うんだよ」

「えー、攻められても居ないうちからその心配かよ。俺がそんな事等させないさ」

「あゝ駄目だ此奴。いいかユースケ、確かにお前が居るうちは大丈夫だろうさ。だがな、例えば人外の寿命が有ってもいずれば尽きるだろう。お前はお前が居る時に何事も起きなければ困らないだろうさ、起きてても対処できるだろうが。そうだよ、お前がこの世から去った後の世代までの事は考えて居ないだろう」

「ケイリス、言って置くけどさ。永遠なんて言う言葉は有り得ないとね、俺達の立っている大地も、いずれ朽ち果てて星屑に成るんだよ。そんな事は皆本能で知っていると思ったけどね、違った？」

「成る程の、ユースケは其れを知っていて尚これだけの物を作ったと言うのじゃな。ケイリスよ、我らの主は人外じゃ、諦めて従おうぞい。はっはっはっは」

言い知れぬ苛立ちを募らせるケイリスは、それが何処から来るのかは分からなかった。だが、ビュージョが言う「我らの主は人外じゃ」の言葉に、今更に納得し気が静まって行くのを覚えた。そうか、俺はある意味ユースケの、人外な能力に嫉妬してしまっていたのかと気付かされればそうだったと、だが気付かされて尚腹が立つのはなんだ。

間の抜けた様にギャリクが言う「ビュージョ宰相の跡継ぎなケイリスに取っては、今から胃の痛い事だよな」。

「なんで俺がビュージョさんの跡継ぎなんだ、パックが居るだろう」

「パックはお前の後だろうな、第一未だ子供だし」

「なんでムロさんの名前が此処に出て来ない、人外主の宰相なんて御免だし」

「パックよ、俺は主の永遠な執事だ。宰相など有り得んな」

そんな騒ぎを無視するように、ユースケは言った。

「所で、アルマとネリアにリカル話が有る、此の儘でいいから最上

階の俺の仕事場に来てくれ。ビュージョさんとギャリクのおっさんにケイリスもね」

最上階のユースケの仕事場、大きな机がドンと置いてあるだけ。カーテンも無い殺風景さだ、後は何か分からないユースケが作った物らしいのが転がって居る。

「済まないね、ソファアも無いんだよ。作れるけど作らない、座れば一つ動作が無駄だから」

「それは構わないのですが、私達三人に話ってなんでしょうか」

そうエルフのアルマが聞く、それに今更と言う様にユースケは聞く。

「うん、簡単に言えばね。君達がどうやって大河を含めて此方側に来られたのかと言う事なんだよ、半端ない大河を、それに住む凶悪な魔獣に襲われずにとって言う意味で」

「そうじゃったの、ワシもそれには不思議に思ってたのじゃよ。精霊魔法が使えると言うだけでは説明がつかないの」

時々ユースケは、偵察を兼ねて向こうの大陸には行っていたが。どいう訳か、渡った先で誰とも出会わないと言う問題があった、その謎の其れが分からなければ向こうの大陸には渡られない。渡るだけならば、ユースケ自身は飛べると言う事も有って問題は無いが。半端ない人数を率いて渡る等、如何に人外でも、率いられて渡る者達は只の人なので犠牲は出るだろう。渡らせる事自体には、ユースケ自身が考えて居る事を実行すれば問題は無い。切迫するのは食料

問題、事は急を要するのだから。中州を中継基地として開拓し、等と呑気な事は考えられない。

「女神も忙しそうだしなあゝ、中州に畑を作ってなんて今更言えないだろうなあゝ」

「成る程、そう言う遠慮をしての事なのか」

「ケイリス、幾ら俺でも其処まで図々しくはないよ。作れって言われれば作れるけど、時間がなあゝ、もう無いんだよ。だから向こうの事を知っている三人に来てもらったのさ、そういう訳で情報を吐き出せゝ」

建国への道 情報を吐き出せ、部隊編成と奴隷の事

ユースケの、情報吐き出せの言葉に、三人娘はある意味戸惑っている。何せ、こちらから渡ろうなんて言う訳が無いと高をくくって嘘を言っていたのだから。ビュージョが指摘するように、余りにも荒唐無稽な事実が大河として目の前に横たわっている。それに、獣族とエルフなら精霊魔法しか使えないと言う事実も発覚しているのだ。何故に二種類の魔法を使えると申告したのかと言う事と、何故に嘘をと言う事。

「まっ、嘘を言わなければならなかった事の言い訳を聞こうか」

「ユースケ、その前にお前が向こうに渡って見て。人影が見えなかった事の確認が先じゃ、エルフや獣族しか居ない土地ならわしらは人族として侵略すると言う事に成るぞ」

「んー???、それと国として確たる形ある組織が有るのかと言う事もだな。すでに国家として形あるのなら、我々は侵略者でしかないからな」

エルフのアルマが言う。

「あたしは仲間のネリアと砂漠を渡ったの、その後直ぐにネリアとは別れて動いていたの。偶然奴隷馬車で再会したけどね。精霊魔法以外に魔法を使えるって言ったのは、人間の中で生きる方便よ、獣族もそうよ」

「お前達二人も砂漠を渡ったのかの」

ビュージョの質問にイリスとリカルは答える。

「私達二人は大森林の中を通ったわ、大森林を抜けるのに三か月ほどかかったけどね。あー、国と言う形態は無いわ。人族は当然居るけど、部族的な感じかな」

「そうそう、矢鱈部族同士で争っているわ。馬鹿ばかりとしか言えないわね、あたし達から見れば何処が違うのよって言う事ね。それと一つの獲物であたし達獣族は争わないけど、人族は何故か争うのよね。そんなの他を探せばいいだけじゃない、獣は沢山いるんだからって思ってたわ」

「私達エルフも国なんて作らないわ、まあ面倒臭がりが多いからかしらって思うわ。それから兎に角広いのよ、砂漠に大森林、岩だらけの地帯に大平原と大山脈。それに巨大な湖も、人族や獣族の人数なんて誰も分からないわよ」

「そんな所からなんでお前達は渡ったのかと言う謎が発覚したな」

「まあ待って、話を整理しましょうよ」

1 人族も獣族も混在して住んでいる、但し国は存在しない。2 人族はよく争う（好戦的）。

3 広大な何でも有りの大地である。

「基本はこれね、家とか建築物はあるのかしら。文字とか文化はどうなのかしらね」

「あはははっ、家と言うか建築物なんてないわ。獲物を求めて放浪が基本ね、畑なんて見たことが無かったわ」

「そう言うのを見たくて渡ったって言う事よ、文字なんてないわ、でも言葉に困らなかったのは不思議ね。きっと根っこの部分は同じだからかしら」

ネイルの質問にケロッと文化の低さを曝す三人には畏れ入る、どうやら本当に好奇心だけで渡ったらしいが。結果奴隷狩りにあい、ユースケに助けられた。

「まっ、獲物を探して放浪生活が基本は分かった。獣族と人族との争いは無いのかな」

ユースケは其れが一番気に成る、文化として文字が有るかどうかは問題ではない。

「人族と獣族とは混住する時も有るけど、集団で争う事はないわ。人族は基本雑食だし、獣族は獣の肉が主食だからね。人族の獲った魚とか果物、獣族の獲った獣の肉と交換も有るわ」

「着る物とか生活道具はどうしているんだ」

「ゆういつ定住している妖精族のドワーフ達から物々交換で手に入れているわ」

「オイオイ、妖精族なんて居るのかよ、初めて聞いたぞ。その伝で聞けば巨人族とかも居るのか」

「あー、亜人としてならいるわね。人族と獣族とかの共通の敵ね、あいつ等とは言葉も通じないし」

「そうそう、基本素っ裸できもいったらないわ。オスなんかに出会ったら最悪よ、あれがブラブラよ」

「時と場所を選ばずに盛っているし、もー最悪な連中よ。メスだって好戦的だし、その上集団で居るから厄介なのよ」

ギヤイギヤイと好き勝手に話し始める彼女達、話から亜人も結構居る様だ。ユースケは思った、これは迂闊に渡れないぞと。部隊として渡り、調査してからでないと危なそうだ。見た事も無い魔物に獣に亜人、妖精族だと・・・なんじゃそれはと言いたい。RPGの世界かよと、まあ今更なのだが。

「分かった、今の所当面中州を定住地とするしかないな。向こうに渡るのは部隊を渡し調査の上決定しよう、三人から聞いただけでは分からないからな。事を急いでも良い事ばかりではないし。それにどうやら人族や獣族も定住をして居ない様だから接触も難しいだろう」

「そうじゃな、ケイリスに言っていた部隊の規模は大隊程度と聞いたが、それだけの規模では無理は無いかの」

「うーん、俺は部隊を指揮した事が無いからな。ケイリスはどの位までの部隊指揮経験が有るのかな」

「俺だって100人程度までしか経験は無いな、ギャリク団長なら連隊位までなら指揮をしたんじゃないか」

「いやいや、ビュージョ顧問にはかなわないぞ。軍団指揮官だからな」

「これギャリク、ここで其れをばらすのか」

「えー、ビュージョさんてそんなに凄かったの。あつ、どっかの国の貴族だったりして？」

「むー、内緒じゃ。それにもう国は捨てたも同然じゃし、今はユースケが我が主じゃよ。部隊指揮についてはワシが教えよう、時間も有ると言うのだから可能じゃろうしの」

「ならばさ、メンバー一人に付き一個大隊編成しよう。鍊度を見て規模を大きくしようか」

「いやいきなりそれは無理だろう、今は分隊程度の部下しか指揮経験が無いからな。取り敢えず一つの大隊の中で指揮経験をさせてやらだな。小隊中隊と指揮経験を重ねて行くしかない、部下となる者達も鍛えなければならぬし」

「そうね、良さげな人材が居れば。一つの部隊の隊長として迎えても良いでしょうし」

ネイルの話を聞きながら、ユースケは一つの事に気が付いた。

「ネイル、よさげな人材って簡単に見つかるのか」

「えーと、国や神殿には奴隷戦士部隊が有るのよ。ってか、有ったのよね。解隊されたからさ、此方に向かっている人達の中にも沢山居ると思うわ」

「神殿の騎士団は宗教に毒されているから要らないが、奴隷戦士となれば問題は無い。その宗教下で虐待されていたのだから、自ら

此方に来るのだから誘えば入隊の可能性もある。戦力としては問題ないだろうし、無理強いが無いのだから意識も高いだろう」

「なんて言うこったよ、奴隷戦士部隊だと、聞いてないぞ。何処まで人が人を虐げているんだ、そんな文化なんて認めないぞ。皆それが当たり前と思って居たのか、ふざけるな」

激怒し始めたユースケに、この場に居た皆は沈黙した。何時自分がその立場になりかねない恐怖を持って居たのに、何時の間にか其れが当たり前と言う事に慣れ過ぎた。そうだ、そんな恐怖を受け入れたのは何時からだろうと、自らに問う。

「ビュージョさん、最低限の自由と平等を基本にした国是と法の案を立ててくれ。自由と平等には、法を尊守する責任と義務が有る。ギャリク団長には軍法の確立を。ビュージョさんが建てた案に従い、ムロには住民を無法から守る警務隊を作らせる、この事は後でムロに伝えて置く。あー、所で読み書き計算は誰でも出来るのかな。読めなければ是からの事が理解できないだろう、法を守らせることにも支障があるし、どうなんだ」

「基本奴隷だった者達が多い訳だからな。識字率はかなり低いと思うが」

「いえ、多分商家の奴隷だった者達なら読み書き計算は出来ると思うわ。そうでなければ商品の受けだしも出来ないだろうし、主人だって力仕事ばかりしてさせていた訳じゃないしね」

「軍でもそうだろう、幾ら奴隷戦士だからと言っても下士官将校も居るんだし」

「奴隷なのに将校って」

「ふっ、好戦的な主人ばかりじゃないからの。臆病な主人は後ろで見ているだけじゃ、じゃから指揮をするのも奴隷と言う事じゃの。其れなりに教育をしないとそれは無理、まっ、ユースケが又激怒するかもしれないが。教育の有る奴隷は高値で売れる、頭のよさげな子供の奴隷はきちんと教育されるのじゃよ」

「おそらく半数近くは読み書き計算は出来ると思うわ、程度に差は有るでしょうけどね」

「主人を凌ぐ高度な知識を持った者もいるかもな、時々主人を馬鹿にした目で見える奴隷も居たからな」

「ケイリス、それってマジかよ。そんなんじゃ気取られて虐待されない」

「だから高く売れるのさ」

「あー????、目障りに成ったら売っちゃうって言う事か」

「そうじゃよ、立場が立場だからの」

こんな世界を何時に成ったら壊せるのだろう、人が人として人から虐げられない様な世界を何時に成ったら作られるのだろう。俺一人では無理、仲間を信じて時を重ねてなすしかない。

「教育だな、単に読み書きが出来るだけでは文字馬鹿でしかない。人としての有り方も教えないと」

「人としての有り方」か、言ってはみたものの。ユースケ自身、其れほど高い人格を構成する教育を受けて居た訳では無い。暗中模索の日々が続くだろうと思う。

建国への道 魔吸石コンピューター

「うーん、これをこうやって此処をこうやって」

この世界の生き物には、人間にばかりでなく全ての生き物に。容量的にばらつきはあるが、魔力が有ると言う。ならばと考えたユースケは、魔吸石を利用した巨大魔吸石コンピューターを作った。要するに、個人情報記録する為にだ。

当然ユースケの居た世界の知識と知恵を利用したのだが、作れるのはユースケのみ。商家出身の者達、ギルド関係出身者を優先的に国境に作った城塞砦に受け入れ準備を進めた。勿論生活の上便利と違って居た銀行に、それに付随するATMや、お買いものシステムカード機能も。

カード、これを作るのにはユースケも苦労した。個人の魔力を利用し個人の情報を引出し記録する。そして読み込ませ確認させ利用出来る様にするのに三日間寝ずに弄りまくった、生涯で一番頭を使ったと思った三日間だった。カードのひな形を作り量産、試験的に城塞砦にいる者に三日間使用させた。利用のための説明に一日、ぐったりしたユースケだった。

「魔吸石の切り出しに手間取ったよなあ、細かい作業って俺には向かないよなあ、マジで疲れたぜい」

一人ベッドの中でぶちぶち零す。

「魔吸石板に手を乗せて情報引出して記録してカードを発行、うー????一度に千人、大丈夫だろうか」

さらに明日から受け入れる住民になる者達への事に気懸りな事が湧きだす、その為に眠いのに眠れないと言う拷問、その上に八か国からの使節団への対応と言う問題を持ち込まれ頭がパンクしそうなそんな状態。

「はぁ、嫁っこ欲しい」

疲れに興奮している身体、オスの機能も昂っている。

「仕方ねえなぁ、酒でも飲むか。一人シコシコってむなしいし」

ゴソゴソと起き出して飲み始めた、摘みも無く一人直接瓶から飲む。地球に居た頃は余り酒に強い体質では無かったが、異世界で付いた能力で然程酔わない、この世界のワインを大量に飲みそれでなんとか眠りに付くことが出来た。

「ビュージョさん、今日の受け入れ人員は何名だったっけ」

「ユースケ、酒臭いぞ。あー一万人じゃよ」

「あれ、無事に機能すると良いんだけどなぁ。心配だよ」

何とか眠ったユースケだが、飲み過ぎて酒臭い。ネイルは手で扇ぎながら逃げて行った。

「どう言う風な物かはワシらは理解したが、今来る者達には直ぐには無理じゃろうの。じゃがその為に時間を配分して説明会をするの

だ、それにしばらくは人員も配置する事に成って居る。起きない出来事に、今から気をもむとは、案外ユースケも人間らしい部分が残って居た様じゃな」

「へえゝい、人外ですみませんですうゝ」

「はっはっはっはっ、解って居るのならドンと構えておれ。ほれ、もう入り口に並び始めたぞ。使節団も来ている事じゃ、そろそろ広間に行こうかの、初めての謁見じゃから頑張ってもらわねば」

「その後合同会議と個別会議、???あゝ、文官居ないすぎじゃん。皆倒れないと良いけど、手順がまったく出鱈目だもんなあゝ」

「何を今更じゃ、ユースケのせっかちな我が儘からの事じゃからの。あの女神と他の二柱の神が手伝ってくれた、食料の心配も要らぬ、悪い事ばかりではないぞ」

「しかし、国名で仲間内であれだけ揉めるとは思わなかったよ」

「それはユースケがごねたからじゃろうが」

「えゝ、だってユースケ王国とかたちばな帝国とかゴロ悪いしゝ、なんとなく何処の悪者ってな感じじゃんか」

「じゃからと言ってのう、未だ嫁にもしていない隣国の姫の名前は拙いじゃろうよ。惚れた弱みとは言え、それは無理と言うものじゃよ」

「でもまあ、仮とは言えトルーズ国と決まって良かったよ。国名が無いと色々と面倒だし、国とは認めないって使節団にごねられるか

もしないしね」

「ユースケは王とは名乗らない心算かの」

「まあ、それに付いてはこれから色々皆で考えて貰いたいのだ。ビュージョさんには言うけど、俺は国王って要らないと思って居るよ。国王が居るなら王族に貴族、特権階級が出来るじゃない。人種や種族に平等であれって言うならさ、そんなの不要だよ。俺は国が安定したら、民となった者達に国政を譲る心算だ。勿論俺自身一般国民に言う意味でね、国は全て民の物、誰か一人の物や特権階級のも物で有ってはならないし。貧富のさは有っても、少しでも民の皆が平和で幸せに思うから？。恰好付け過ぎかな」

「ふふっ、建国を言い出したのはユースケじゃ、思い道理に我が儘を通すのも良いじゃろう。じゃが、そう簡単には行かないじゃろうな、国民意識を根付かせるには時間が掛かる。一から事を進めるのじゃからして、紆余曲折、艱難辛苦が待ち受けているぞ」

「もう一つばらすかな、俺ってどうやら寿命が長いらしいよ、長すぎる寿命って迷惑な感じ」

「そうじゃのう、どの位生きれば満足するか等は人其々かも知れんが、生きたくても生きれ無い者の心を考えれば寿命の事を気にしてはな。ユースケの口ぶりではユースケは随分と長いじゃろうが、先に逝く者への土産話を、とんでもない位持つて逝けると考えるしかないの。一度死んだら二度とは死なんし、死後の世界で出会えたならユースケよ、たつぷりと聞こうかの。死後の世界には時間など無いじゃろうし、眠りも空腹も無からう故の」

「ふふっ、そうだね。その心算で惚け無い様にしないと？？？はは

は
っ
」

建国への道 魔吸石コンピューター（後書き）

今回も突っ込みどころ満載です、魔吸石コンピューターっていうのも出鱈目だし。

なので何処かに突っ込みを書こうなんて思わないでください、迷惑だから。

建国への道 八か国の謀略会議 その一

第一陣の元奴隷達の受け入れと同時に、八か国の使節団との謁見に向かうユースケ達。

「ベリリユーユの方は穩便に出来そうかな」

そうパロに聞くユースケ。

「姫を娶ると言う条件で国王も納得しています、まっ、姫がユースケ様と恋仲って言うのは最初激高して居ましたが。まっ、身分はどうでもユースケ様の事を理解し始めて胸をなでおろしていました」

「それにこの建物の事をいち早く知る事が出来たからじゃろう、その前に王子と姫君を助けられたと言う王妃の後押しも有ればこそですがの。恐れと安堵が一緒に来たと言う所じゃったろうのう」

そうビュージョが言う。その隣に居るギャリクが重ねて言う。

「実子の王子二人が王座に興味ないとの説得、納得しなければ国を捨てるととの脅しには逆らえなかったようですし、それにまんざら継子二人を心底憎いと言う訳でも無かったようですしな」

「単にどちらかを国王にしたいと言うだけで、その思いを周りの馬鹿どもが煽って居た、それが真相でしたから。籬が外れれば、義理とは言え叔母と姪に甥同士、それに二人は可愛いですからね」

ニヤニヤとユースケを見るパロ。

「ボケ、俺が可愛いのはセピーだけだって」

「あうっち、ここで惚気るかユースケ。随分と余裕だな」

そう言うギャリクに。

「ふん、潜り込んでいる馬鹿どもの戦力などどうに押さえているしな」

ユースケと女神と二柱の神とで、八か国に有るガムール教団の神殿を潰し、同時に財貨を没収。そして奴隷解放と収容への道筋で知る事の出来た各国の貴族たちの悪度さに、ユースケはベリリユーユ以外の国を平定し様かと思ったが。貴族全てがそう言う訳でも無いと知れば、奴隷の所持と人と亜人獣人を奴隷にする事を禁じればよいだけの事で。平定をする事での煩雑を避けるために、暫くは放置する事にした。

ケイリス、ムロとパックは、元奴隷達の安全を教団の元奴隷戦士たちに任せて使えそうな人員の確保に奔走していた。

パックは官僚として使えそうな人物を探し。ムロは、ユースケの親衛隊は自分達と心得ているが。今は近衛隊にと使えそうな者達を探している。

「ムロ、解って居るだろうが。見た目だけ強そうなのは駄目だぞ、少しぐらいよわっちくても目端が利き真面目な者を入れる。強くて目端が利いて真面目な者なら尚いいけどね」

「主、人員はどの位揃えば宜しいのですか」

「まあ、今は一個中隊程度でいいだろう。ただし下っ端でも将来幹部に登用出来そうな者をね、最低旅団規模まで部隊を大きくしたいから」

「それは将来の家族を思つての事でしようか」

「ムロ、お前の護衛もそこから出す予定だよ。新国家の重要人物に成るんだからな、当たり前前に必要だろう。俺との関係で途中で殺されでもしたら俺は泣くぞ、そう言う訳で拒否は認めない。あゝ、それ全員だから」

数日前の話。

「パロ、お前の部下は何人に成った」

「今の所三十人ほどです」

「ふーん、一旦お前の部下は其れで止めて。後、別に使える者が欲しい、建物内部の警戒警備の部隊を作れ。それと部隊の指揮と運用はヤックとクスタに任せると伝えてくれ、後で任命書は出しておくからね」

「彼らに任せないのは何故ですか」

「あの二人は今頃ガウロの親玉と接触するのに必死だ」

「ガウロの親玉、又なन्दですか」

「中州に進駐するのに水軍が必要かと思つてな、あれたちは亜人だし人語を解する、要は使えそうなのなら何でも使う。使えないものなら其れなりに使いたいと言うのが本音さ」

「又厳しい要求を、今頃死んで居ませんかね」

「そんな玉じゃないぞ、罌の仕掛けなんか絶品だよ、試しに死合うか。獵師で罌師、氣配消しもかなりなもんだって、お前だって無事には済まないだろうな。若干お人好しが玉に傷なんだけどね」

「うーん、止めときます。あはははっ、そのお人好しが原因で奴隷にされちゃったと」

「そゆ事ゝ。まっ、二人で一人見たいな奴らだし」

「!えっ、?????????そう言う関係ですか?」

「見てて分からんお前も怪しいのかね?????まっ、知らないふりをするのが仲間って言うもんさ、ってか鈍いのか鋭いのかどっちなんだお前ってば」

「寛大ですね」

「んゝ、生来の物だろうし。それをどうとか言うのも野暮だろう、顔の数だけ人それぞれだしね。俺にも他の仲間にも実害は無いし、二人が有能なのには間違いは無いしね」

「合えて広める程見境なしではないとでも言つて置きます」

「それより、ケイリス達の人集めは進んでいるのかな」

「戦闘に関するのは当初より人員は増えそうですね、ケイリスさんは泣いて喜んで居るでしょう」

「ふーん、でっ、どの位に成りそうかな」

「一個大隊規模とは言われていたようですが、どうやら一個師団以上に成りそうです。此方で改めて教育訓練等必要無いようですし、彼らはユースケ様に心酔していますよ、神子様〜とか言って」

「ぶっ、何それ。神様を結構苛めているんだけどね〜、見えて居ないのかな彼らは。まあ、財政的に無理が無いのならそれで良いさ、ケイリスが見境なしの事をするはずもないしね」

ユースケから、ケイリスの行動は容認するとパロから伝えられた。結果、戦闘部隊として一個師団一万三千人、後方支援部隊として一個旅団七千二百人の部隊をユースケ達は得る事が出来た。各神殿に居た元奴隷戦士ばかりの部隊だ、人族・獣族・亜人との混成部隊だ。七年後、彼の神殿との地上での戦いで核となる人員を輩出し、戦術・戦略・軍政に置いても完全勝利の礎となり得た。

ケイリス自身は戦闘に出る事無く、占領地での軍政を担当し、民政移管を推し進め、道化軍神と二つ名を付けられた。

「道化軍神???なんじゃそりゃ」そう呟いて永遠の眠りに付いたとか。

建国への道 八か国の謀略会議 その二 パロは見て居た

謁見の間として作られたと言うより、ビュージョの進言で仕方なくユースケが作ったと言う其れ風の大広間は、普通に見れば殺風景だが、見る目が有る者が見れば有り得ないほどの超豪華な大広間だ。城塞そのものも有り得ないのだが、広間はユースケが作った超巨大ダイヤモンドをくり貫いた物で出来上がっている。見た目ガラスの様に見えるが「見抜けない者は大した奴じゃねえし」と、笑って皆を納得させた。

謁見者が立つその場には、魔吸石で作られた一枚の大岩板が敷いてある。立つ者の真実を知る為の物、謁見の玉座にはブルーダイヤモンドの椅子。その前には情報を浮かび上がらせる魔晶石で作られたモニター、嘘発見器の機能も当然付いて居る。両サイドに立つ仲間を護る為に強力な物理防御・対魔法防御結界筒、勿論その場に立てば自動的に筒は建ちあがる、当然同じ仕様のモニターが有る。対象者は自由に出入り出来るが、それ以外の者達はいれない。無理に入ろうとしたりすれば弾き返され、攻撃をするものなら三倍返しは確実に受ける仕様だ。ユースケが頭を掻きながら作った魔道器、頭の中身は一寸だけ地球に居た時より良くなった程度の事だから苦労はした、まあその程度のなのだが。当然こちらの世界に同じ様な魔道器は無い。

今まさに八か国の使節団がユースケ達の前に立っている、彼らの情報映し出されている。

ガムール教団が消滅した数日後、八か国一番の大国のベイリツサ帝

国の離宮で会議が行われていた。

「この様に八か国の宰相が一堂に集まったのは初めての事だが、議題が議題で各国の宰相閣下も納得してお集まりいただけたと思って居る」

そう話し始めたのは八か国の中で最大の国、ベイリツサ帝国帝王のゴージユス・ベイリツサだ。長ったらしくないだけの名前で気さくに聞こえるが、暴虐の帝王と呼ばれる男だ。ユースケと姫神達が大暴れをして各国の神殿を破壊し、ガムール教団を潰されて損得両面で見れば得をしたとほくそ笑む。神殿に行く金貨が今度は自分達に入る、単にけち臭い事を考えて居るだけだ。

女神から「わらわは金貨の数を数える神ではない」とのご託宣に深く頭を垂れた。

「先日の、ユースケとやらと女神の御かげで損も得もそれぞれ受けた訳だが。ユースケとやらは本当に神子なのかが問題である、其々のお国に情報が有れば開示してほしい」

実の所、一番多くの情報を持って居るベリリユー王国はこの会議には参加をしていない。それは単に王国とか、国とかには八か国が認めて居ないからだ。ベリリユー王国は小国で、伝統らしいものはほとんどない事と。八か国はベリリユーは蛮地、支流から上がってくる水棲魔獣や獣の防波堤位にしか思っ居ない。今までは、ガムール教団に寄進していた水棲魔獣の貴重な部位のおかげで教団の保護も有り、独立国として暗黙の裡で了解の立場を得ていたが。

ガムール教団が消滅し、その保護から外れた蛮地の者共、王国等と片腹痛いとの判断だった。一国を凌ぐ軍事力を持って居た教団で有

ったのに、その事実を易々と見逃し侮った八か国。ユースケ達が教団の神殿から持ち出された財貨に目が眩み、一介の冒険者の団達が持って良い訳が無いと欲望をたぎらせている。

八か国の目撃情報と、元教団の奴隷戦士たちに守られて移動する元奴隷達。食料等の物資を調達して回るユースケの仲間らしい冒険者達の動きと、稀に見られるユースケらしい姿の事。芳しくない情報に苛立つ八か国の宰相。

「我々もそうそう会議を持つ訳には行かぬ、この際神子云々は無視しても良いと思う。様は我々八か国でベリリユユ諸共刈り取れば良いだけの事、刈り取った後に女神が騒ごうが手遅れと言うもの。どうにも出来んだろう、死体に成るのだからな」

「陛下、彼らは支流の向こうに渡り、建国するとの情報が有ります。陛下は其れをどの様にお考えでしょうか、我が国イアルーイは女神が其れに手を貸すのであれば可能かと先程も進言しましたが。陛下はお答えになりませんでした、これでは私は子供の使いに成ります。是では私は我が国の王の前に立つ事は出ません、しかとお答えを願います」

「イアルーイ王国宰相閣下、我らが陛下はもう答えて居るではないか。刈り取れば良いと」

「ベイリツサ帝国宰相閣下、其れは答えでは無く陛下が決めた、それだけの事です」

「ふむ、結構な強者が集まった冒険者の団としか思って居ないぞ。まあ、建国の意思が有るならば建国宣言をするのだろう。ではその場に我々八か国の暗殺団を使節として派遣し、彼と彼の仲間諸共殺

せばよい、冒険者の団など大した人員も居ないだろう、一気に殲滅する。なんなら貴国は傍観する立場でも良いぞ」

「くっ、私は一旦陛下の言を持ち帰り、我が主に報告後、返答する
としか言えませぬ」

女神が居て他に二柱の神が居て、ユースケとやらの本当の力の情報も定かではない。こんな情報不足の会議に参加するなど無意味だった、ベリリユーユよりは大きいが八か国の内で最少の王国、ズルズルと引きずられてゆきそうな気配に。イアルーイ王国の宰相、ダイジラは顔色を蒼くしている。結果がどうであれ引けばこの後に侵略が有るだろう、押せば女神達からの仕置きが有るだろう。

「構わぬ、良い返答を待っているぞ」

帝王と名乗る男の侮りと蔑みの声色に、唇に血がにじむ程噛みしめるダイジラだった。見渡せば嘲りの表情の各国宰相達の顔、其れを見てダイジラは決断した。彼ら冒険者の誰か一人と接触し様、そうで無ければ我が王国は動けぬし、王国の安寧等無きに等しいのだから。

気配を消し、会議室の大テーブルに張り付き、会議の一部始終を聞いて居たパロは。

「ふーん、この男とは接触しても良いかもな」

そう呟いて、パロは会議の終わりと同時に立ちあがったダイジラと一緒に会議室から脱出した。ざわめきの後に余りに堂々と彼の背後に張り付き歩いて行くパロの姿に、誰も不信を持つ者は居なかった。秘書官の一人なのだろうと。

建国への道 八か国の謀略会議 その後 陰謀崩壊

当初、パロはイアルーイ王国の宰相ダイジラに直接接触しようと思ったが。少しだけ現実を知らせる為に、イアルーイの情報員と接触して城塞砦を見させた方が良い結果が出るだろうと思った。当然その許可は必要なため、部下をユースケとビュージョの元へ走らせた。

パロが今いる場所は、ベリリユー王国の王都から支流との中間地点にある地方都市でバンロと言う町だ。人口は市内一万人を数える町、魔物除けの石堀が高さ四モイル、一周五千モイルと広めに張り巡らされた町。出入り口は東西南北と、緊急部隊を展開するための地下道で繋がった離門が有る。当然離門は通常塞がれている。

市内下町の繁華街の内にある中規模の飲み屋、鈍亀の口亭と言う不思議なネーミングの店が有る。ここは何故か自然と各国の情報員との、ベリリユーに関する情報交換の場となっている。もっとも今は情報員は街の中からは出られない、ユースケ達が情報統制の為に態と殺しの意志を持ち睨みを利かせたと言っているだろう。為に苛烈な事をもしているので脱出は出来ない。

返事が来た翌日。

パロは部下の一人に、イアルーイ王国の情報員と接触させ、城塞砦に辿り着けるルートが有る。行ってみないかと誘わせた、当然身分は明かしての事だが。

「あんたが彼の人達の仲間である事は確かのようにだ、だが何故俺なんだ」

イアルーイの情報員がそう尋ねる。

「あんたがイアルーイ王国の情報員と知っているからさ、それにこの事は上司から許可と言うか命令されて誘って居るのさ。言わば、あんたの国の宰相ダイジラ閣下に少しだけ我々の事実を知ってほしいからだ。言っている意味は分かるね、もつと言え、残念な事に先日の会議の事は既に我々は知っていると言う事だよ。それとルートが有ると言ったのは、無用に多国に知られたくないと言う事さ」

イアルーイ王国の情報員は驚愕した、あの厳重な警戒網を突破して情報員が入り込んで居たと言う事実と、その情報員の質の高さにだ。入る事は出来ても出られない事の自分、どれだけ厳重な警戒網で有ったかは、入って来た仲間から聞いて知ってはいたが。彼らがそれをすでに知りその情報は知っているこの事実だけを見ても、到底かなわれない。むしろこの町から出られない自分達の事の実事実をも突き合わせれば、あの帝国をも遙かに凌駕する。神子の率いると言うのは事実かもと。

「分かった、どの程度まで知る事が出来るのかはそちら次第。俺も今の儘では飼い殺しも良い所だ、俺は我らが陛下の元に正しい情報を運ぶのが仕事、喜んで誘いに乗りましょう」

ベイリッサ帝国の首都、高級ホテルの一室に六か国の宰相が集まっている。当然音声遮断と不視の結果が張ってある、天井にはそれぞれの国の影達が潜んでいる。

「はてさて疲れましたな皆さん、帝国の傲慢さには参りますな」

そう言ったのは、イアルーイ王国に隣接するブルメイラ王国宰相

デストレイジだった。

「ハッキリ言って、イアルーイは小国とは言え嘗めてかかれれば痛い目に遭う程、兵も騎士団も良く錬成した国だ。元々彼の国は奴隷が少なく、奴隷も働けば自分を解放出来る仕組みに成って居る」

デストレイジはそう重ねて言った、更に。

「賃金もしっかり主人に支払い義務を負わせているし、何処が奴隷だと言う様なものだが。その上に王国民に、皆兵制度まで敷いている。神殿との戦闘もしばしば起きてはいたが、これを良く退けて悔しがらせていたな」

「其れでも帝国の十分の一、我が国を突っ切って帝国がなだれ込めば一瞬で蹂躪されるだろう」

そう発したのは帝国に隣接し、苦難に苛まれている王国のひとつ、メーゼイシの宰相キツラリーハだ。

「貴国ばかりではない、我が国も蹂躪して行くだろうの」

ブルーメイラの宰相、デストレイジの宰相は苦虫を千匹は噛み潰す様な表情で言う。

「その軍費を我々に請求する傲慢さ、どちらにしても良いことは無い。七ヶ国の連合で立ち向かってでも対等の軍事力に成れるかどうか、ベリリューユが加わっても対等かどうか。指揮の一本化を図るには各国の貴族共の反発で受けて無理だろうし」

メーゼイシ王国の隣、矢張り帝国の傲慢さにキリキリ舞いをさせら

れている、モンドール王国の宰相サンナールイヒが言う。

「彼の者が神子なら、我々は帝国と神子に挟まれ苦難の中に居ると言う事だな。我が王室には帝国の姫が嫁している、反旗を翻すは無理が有る。暗殺すれば帝国はなだれ込んで来るだろうな。否、暗殺を仕掛けない帝国の意図が分からないと言って良いかと」

「子が生まれればその子を傀儡の王にして、帝国の属国にしてしまえばよいとも思っているでしょう。要らぬ血は流れないし」

そう言ったのはベリリユーの北に接する王国、リチューリード王国宰相コンモドール。重ねて。

「蹂躪に巻き込まれるか微妙な立場の我が王国だが、ハッキリ言えるが、ベリリユーとて甘く見れば痛い目を見るだろうな。それから二つ情報が有る、ベリリユーの姫と王子が神殿の聖騎士団の襲撃を受けて居る所へ、神子らしい人物が乱入して聖騎士団を壊滅したとの事です。何やらそれが切っ掛けで姫と恋仲になったとかどうか。この情報は一度しか流れて来なくて、その上情報統制が厳しく確認の仕様が無い」

「！何故それをあの場で????？」

と、言ったのは。帝国との間に、森林と沼地が有り比較的帝国の脅威が少ないスキサーバ王国宰相、カンダマリル。ゆういつ唯一人の女性宰相だ。

「ふっ、態々それを話す意味が無い。帝国は知っているのが当たり前、知らなければ我々に恥を搔く。言えばご機嫌を損なう事に成りますな、まあ帝国の情報員が何人処刑されようが痛くも無いが」

そう苦笑したのは帝国に次ぐ王国、スレドアバの宰相グリニーモだ。

「さて、皆さんも明日は帰国の途に就きますればそろそろ休みましようかな。貴重な情報をコンモドル閣下から頂いた、後は各国がどうするか。其々の判断でしょう、帝国側に咄くも良し、黙しても良しですな??? ホッホッホッホッ?」

唯一人発言しなかったイアルーイ王国の宰相、ダイジラから後日驚愕する情報が提供された帝国以外の王国は。帝国から命じられた暗殺団ではなく、恭順の使節団を派遣した。皮肉な事に、帝国の暗殺団は城塞砦を見て、到底暗殺は無理と判断し、ユースケ達の前で何もせずに降伏した。

イアルーイ王国宰相ダイジラが感じた蔑みの印象は、小国ゆえの僻みだった様だ。後日これにはさすがに赤面したが「それは仕方の無い事」と、主から慰められた。

降伏した帝国の暗殺団団長、ジルハート・セイスは牢の中で咄いた。

「帝国の崩壊を見られなくて良かった、流石に祖国の崩壊を見るのは辛いからな。元ベイリツサ帝国暗殺団団長、夜霧もお終いか、是も人生」

「無謀な行動をしなかったから死刑は無いよ、俺は使える物なら何でも使う主義だ、とは言っても臭いものに蓋を仕様なんていう事もないぜ」

「タチバナ陛下、何故ここに」

「だから言っただろう、使えるものなら何でも使うって。あれだ、俺の直轄に特殊部隊を作ろうと思ってる。言ってるのが殺しの部隊じゃないぞ、蛇の道は蛇、此方に侵入してくるその道の者達を炙り出す仕事だ。捕縛部隊だな、捕まえてどうするかはお前が判断する事では無いと言う事さ。お前、もう殺しは厭きているだろう。もう一週間ほど仲間と共に此処に居ろ、仲間と良く考えて返事をしろ、断っても死罪は無いが。まっ、紐もなしに放ったら碌でも無い事をしそうだからな、生涯労働刑位は覚悟しろ。酒も飲めないし、女と良い事も出来ないだろうな」

じゃあな「あつ、タチバナは良いけど、陛下は止めてくれ。虫唾が走る」。

「では何と呼べば」

「ユースケで良いよ」

「無理でしょう、助かる命も無くしそうですが」

「そうなんだよなあ、なんで陛下なんて」

しゃがみこんでぶちぶちと言い始めたユースケの姿に、ジルハートは、この方に仕えるのも良いかと思った。

建国への道　　八か国の謀略会議　その後　　陰謀崩壊（後書き）

あうー・・・間違って別の方（古井戸）に投稿していたよ。

作者血迷ったとか、やっぱ馬鹿なんだとか思われたろうな。泣き。

建国への道 使節団驚愕す

八か国は、あらかじめ建国の意志を表明したユースケからの親書を派遣されてきた代表から受け取った。使節団派遣を決定されたのは直ぐだった、が、当初の決定とは違い。暗殺目的の使節を派遣したのは帝国だけだった、しかし帝国の派遣したユースケ殺害目的の者達は、謁見の場でそのまま降伏した。

「この様な見た事も無い巨大な建造物を見て、又この謁見場をも見では、とても我々が陛下に対し害する事等出来るはずありません。又その対策は出来上がっているでしょう、全ての我らの意図は無駄で有る事は明白。死を恐れる訳ではありませんが、無駄死にはしたくありません」

「ムロ、一先ず帝国の彼らを牢に」

「はい、主様」

「その二日前」

遠くからも異様な程に巨大な建造物が見える、八か国の使節団は驚愕の表情で見つめて居た。さらに近づけば、その異様さは「有り得ない」と、しか表現出来ないのが全員の言葉。

「小石一つ位でも希少で高価値の鉱石を、無駄にこれだけ?????
???本当に有り得ない」

そう呟いたのはスキサーバ王国の使節団代表の一人、次席宰相メイヤード・セルギンだった。それに同意と言うばかりに、各国の使節団の者達が無言で頷く。全員卒倒しそうだ。

「ようこそ我らが砦へ」

「！砦」と絶句する。

「城ではないのか？」

そう言ったのはモンドール王国使節団の代表、公爵ニユーズ・イア・モンドールだった。

「いえ、これは国境警備隊と難民受け入れ施設の一つです。我々は単に第一砦と呼んで居ます」

そう答えたのはネイルだった。

ネイルは中へどうぞと使節団を促し、先頭になり歩いて行く。ネイルは「中を見たら心臓止まるかもね」と、呟く。正門の前に整列したギャリク率いる騎士団が、ガン付して使節団に殺気を飛ばしているのにはネイルは厭きれた表情。

「やめろよく、二千人からにらまれたら使節団の皆さん気絶しちゃうよ」と、思ったのは当たり前かも。

建物正面には、メイド服の美少女達が八人並び。

「ようこそ我らが砦へ」そう声を揃えて挨拶をする。

「彼女たちは其々のお国の使節団をお世話させて頂きますメイド長でございます、其々の下に十五人程居りますが、未だ未熟者達で至らぬ所もございます、初仕事の様なものですのでどうぞ寛容下さいませ。」

使節団全員が目を剥いて突っ込んだ「膝より上の？？？扇情的過ぎるだろう」と。

建物の中に入ったら入ったで、使節団は又も驚愕する。明るいのだ、廊下の天井で光る筒の様なものから降り注ぐ光に。

「あれはなんですか」と、聞いたのはブルメイラ王国の使節団護衛騎士。

「あれはガラス管に光属性の鉱石を粉末にして塗りつけた照明器具でございます」

そう答えたのはメイド長の一人、カレン・イギスター。普段彼女はユースケ付のメイドではあるが、今日から数日メイド長のリーダーを命ぜられて此処に居る。

「そんな高価な鉱石を粉末にする、有り得ん」と皆が絶句。

「皆様のお部屋は最上階より一つ下に成ります」

そう言ってカレンはエレベーターのボタンを押した、シュンと言う音共に扉が開く。

「これはなんですか」そう聞いたのは先程の騎士だった。

「これはエレベーターと言う物です、各階とはこれで行き来します。なので建物に階段は御座いませんでご承知くだされませ」

開いた扉の前に、奥行・幅が十五モイル程の空間が広がっている。全員が入ると、先程の様にシュンと音を立てて扉が閉まり。同時に上昇の重力を覚えた、数を二十ほど数えられる程の時間だろうか。皆無言で居る、無言で居たのはどの国にもこの様な設備は無いからだが。

メーゼイシ王国使節団の一人、使節団長の秘書官は思った。

「領地が無くて、この建物だけでも一つの完全な国だな。我々の知らない仕掛けがまだまだありそうだ、滞在期間全力でここの情報を自分なりに集めよう」と。

辿り着いた階のエレベーターの前で、ネイルが説明する。

「この階は迎賓館となります、中央にあります其々の青い部屋は我々の護衛騎士団の隊用の部屋で御座いますからお間違えの無い様に。陸側の中央は御付きの文官の方々様の部屋でございますが、今回は使節団の皆様方には川側の中央の王族賓客室をお使いいただきます。各部屋に小部屋が御座います、充分人数分はございますのでそこをお使い下されませ。尚、扉前に近衛騎士が警備の為二名立ちます。ベランダには五名がやはり警護の為立ちますことをご了承願います。細かい事はメイドにお声を掛けて下されば宜しいかと」

ゾロゾロとメイド達に各部屋へと案内される使節団、何かおのぼりさんに成った感是否めなかった。それよりも、廊下の向うが見えな

い、どれだけの長さの廊下なのだと使節団の皆は思った。

部屋に入って又驚愕、広さもそうだが何処の成金だと言わんばかりの調度品と、その設備にだが。

「メイド君、これはなんですか」

そう聞いたのはリチューリード王国の使節団長付きの秘書官、カント・セルゾンだった。彼の目の前にあるテーブルには、見た事のない物が鎮座している。見た目真珠色の四角いもの、中央に数字が一個ずつ並び、片隅に紐のようなものが付いた細長い同じ色の物が乗っている。

「お部屋付きのメイド長、チコル・ダートと申します、ご説明させていただきます。これは各部屋と繋ぐ通信器具でテレホンと申します、一番から六番までは小部屋にも同様にございますのでその番号でございます。他の使節団のお方とお話が有れば、傍に有るカードに番号が書いてあります、その数字をこれを持ちながら押していたければ繋がります」

「なんと便利な、簡単な用件ならこれで間に合いますね」

「はい、お飲み物が必要でしたら八番へおかけください、係りのメイドが直ぐにお持ちいたします」

「なんじゃこれわあ」

突然の大声に、声のした方へと駆けて行くチコル。チコルの後追う様にカントも走り出した。

大声は使節団長、王弟殿下デリカ・リチューリードの声だった。彼は小さな何かを握り震えている、彼は臆病と誹られる小心者だ。

「殿下、これはテレビと言う物です」

彼の傍に駆け寄ったチコルが説明する。

「小人が中で暴れているのかと思ったよ」

胸を押さえて言う。

「未だ心臓がドキドキしているよ、へえー我も欲しいな、でも無理か」

「これは陛下が御創りになった物、未だ私達も良くこれの理屈を理解しておりません」

「成る程。しかし君達の陛下は凄いですね、これを一人で考えて作ったのでしょうか」

「そう窺っております」

「よし、部屋の中を探検だ。チコル、君付いて歩いて教えて欲しい」

「はい、よろこんで」

何処の居酒屋だと突っ込む者は居なかった。

各部屋では全員驚愕の声が響き、夕食まで騒動が続いて居た。ぐったりしたりはメイド達、この日一番疲れたのは彼女達だったろう。

建國への道 六本の大トンネル その一（前書き）

ベイリツサ帝国以外の国々は、ユースケ達の建國を認め、且ベリリユーユをも正式に国家と認め其々正式に外交関係を結ぶ事に成った。役目を果たした使節団には、ユースケから言うか、なんというか豪華な贈り物を持たせられ帰国した。来るときよりも帰りの時が多い、しかも付けられた増加護衛が元は其々の国の神殿奴隷戦士と言う皮肉付きで。使節たちに付けられた其々の国の護衛達は、彼らのその強さを知っているからだろうからか、国に到着と同時に失神する者まで出る始末だった。

建国への道 六本の大トンネル その一

続々と到着する者達をさばいて行くユースケ達、本人より良く知る事が出来て居るので、使える者はドンドン使うと言う方針で其々の者達に部下として振り分けて行く。だからと言って無理やりと言う事はしなかった、其々抱えている物が有る人物も居るのだから。建物の内部は家族用と単身者用と、孤児や保護が必要な年寄り等、階を定めて世話役を付けた。

神殿職人で、家具や建造物の装飾職人の者達には材料と道具や工具を与えて、殺風景な建物内部を飾らせ家具等を作らせた。屋上には焼き物窯を作り、陶芸職人を配置し食器などを作らせた。あれも無いこれも無いの日々が続き、狂乱の日々だったが、三か月が過ぎ漸く落ち着いてきた。そして改めて周りを見れば疑問が湧いてくるのは当然な事、その疑問は、何故この素材が有るのだろうか。一番最初に気が付いたのは食器や壺等を作って居た職人だ、五種類の焼き物素材、十段階で違う品質の粘土が山の様に何時の間にか其処に存在する。切れ目なく積み上げられてゆく粘土、責任者として配置されている人物に聞いても分からないとしか返事が無いのだから。

「しかし不思議だよな、これだけ毎日使って居るのに減らないとはどういう訳だ」

そう呟くのは焼き物職人見習いのビーネ、イアルーイ王国の王都に有った神殿で、神官から言われのない折檻で右足首に障がいを負った。奴隷身分の者に満足な治癒等する訳も無く、三か月もの間隠れ住んでいた。神官達は死んだものと思って居た様だが、ビーネは奴隷仲間達の助けで生き延びれた。ユースケ達の神殿破壊の際は、地下水路を這って脱出した。奴隷の首輪は、女神の発した解呪の神法

で外すことが出来た。女神から治癒は受けたが、完全には足は戻らなかった。

「それは陛下が何やらやっているせいじゃと思うぞ」

「へっ？」

そんな間の抜けた声で振り向けば、宰相のビュージョが立っていた。

「!???宰相閣下？」

「時々何時間か行方不明になるのじゃよ、困った事にの。其れより仕事には慣れたかの、何か困ったことは無いか？」

「宰相閣下、焼き物職人見習いにそう簡単に声等掛ける等して恐れ多いです」

「むっ、正しい言葉に成っておらぬぞ、はっはっは」

「心臓に悪いです」

「宰相なんぞそなたらの使い走りよ、偉そうでちつとも偉くなぞないのじゃよ。気にせんで答えればよい、敬語も要らぬ、使い慣れない言葉なぞで舌を噛むなどつまらんぞい」

「は???はあ」

二人がそんなやり取りをしていると。

「宰相閣下、陛下の最高幹部全員召集です、転移室に集まる様との

「ご命令です」

宰相付きの秘書官の一人がそう伝えてきた。

「今度は何をしでかしたのやらのう、寿命が縮む思いじゃよ」

「大地を又割ったとは情報が有りませんので別の事でしようか？」

「そう簡単に何度も大地を割られてはかなわんよ」

秘書官と歩きながら顔を顰めるビュージョ、先週ベイリツサ帝国の大地を半分に割くと言う暴挙をなしたユースケには驚いた。其れだけならまだしも、ベリリユーユの王子二人に対し領地としてやると言う無謀な事をした。貴族など置かず、地区を定めてそこから代表者を選出して治めろと。帝王だったゴージウス・ベイリツサを捕らえ家族諸共城塞砦に連れてきて、屋上の半分を箱庭にして生活させている。箱庭には農業が出来る様土を入れ、生活動物を与え、畑を作って暮らせと言う無茶を言っただけで放置してあるが。其れは彼らの首をジワジワと絞める事に成るが丸わかり事、彼らにそんな事等出来る訳が無いのだから。

「元帝王家族は後どの位で逝きそうじゃの」

「いやいや長子がムロ殿に頼んでいましたよ、農業を知らぬから教えてくれる者を付けて欲しい。絶対に酷い事はしないからと」

「ほう、其れで誰かを付けたのかの」

「はい、元ベイリツサの神殿の農奴だった男を三人と生活の仕方を教える女を二人を」

「誰がそれを見ているのかの」

「はい、ムロ殿付き子供衆の一人を監視役として」

「んー、大丈夫なのか」

「服従の首輪を付けて居ますから、一年はそのままが条件でと言っ
て居ました」

「そうか、一年あれば農作業と生活の基礎は付くじやろうが、辛い
事には変わらないじやろうの」

「生活の方はどうにかなるでしょうが、農業は一年でどうにかなる
物では無いと思いますが」

「長子が真面ならなんとかするじやろう、もう一年教えて欲しいと
かの」

「ですね」

「さてユースケ陛下、転移室に我々を集めて何処へ連れて行こう言
うのですかの」

「ビュージョさん、その気の抜ける様な呼びかけ方は止めてくれ」

「ほー、ユースケ陛下と呼ばれるのが嫌なら他に呼び方が有りますかの」

「陛下は嫌だと言っているの、それ以外なら頭でも尻尾でもいいっすから」

「尻尾おー、ぎやははははっ。ユースケ尻尾おーきやははははっ」

「ネイルさん、何か転んでもおかしい歳は過ぎているんですからそんなに笑わないの、顔の皺がえるっすよ」

「なぬ、ユースケ尻尾。あたしが歳だって言うのか、どの口で言うかなあ」

ユースケは自分の口に両手の指を入れて横に広げ。

「このくちじえいってんじゃおんかあー、ふあふあーが」

「二人とも止めんか、時間がもったいない、我々は暇な人間の集まりではないのじゃぞ」

「へいへいー、転移」

シユンと全員の姿が消えた。

そして現れた場所は地下、そしてユースケ以外の者達は驚愕する。そしてユースケ以外錯乱状態になってしまった、目の前には五十メートル程は有るだろう円形の見た事も無い巨大な穴が奥行の見えない程続いて有るのだから、それも六本もだ。

「ユースケ、こんな穴をどうやって掘った。いやいや、何処に繋がっているのだ」

「ケイリス、絞まってる絞まってる、手を離せ」

もう少しでケイリスに落されそうになったユースケ、流石にケイリスだ又強くなった見たいだと感心する。

「こはトンネルで、中州の繋がっている。それから後ろを見て」

そう言われて後ろを見たが、只の壁が有るだけだ。

「オープン」

そうユースケが言うと、ごお〜お〜んと何か気の抜ける様な音がして開いて行く。

「なんだ是は？」

ケイリス達は見たことも無い、巨大な何かが途轍もない重量感で存在している物を見た。生き物では無い事は解るが、それが何であるかは分からない。更に、巨大な魔法陣が見えている。

「トンネル掘削用の魔道車さ」

「トンネル掘削用魔道車、要はこれで掘ったと言うの事か」

「だよ、魔法のウォーターカッターで切って固定化かけて中の土は土魔法で内部の土を崩して、転移魔法で排出してさ。選別魔法陣作って岩や土や粘土、鉱物とか有用な動物の骨とかに選別して其々の

置き場所を決めて其処に飛ばした。陣を作るのに苦労したよ、大規模に仕事をするのにはやはり陣は必要だね、ってか？？？魔法ってマジに便利だよな」

「主殿はこれを御一人で作り動かしておられたのですか」

「ムロ、これの種は俺の居た世界の物を参考にして作ったのさ。一台作って試験運転して問題なかったから複製して同時掘削さ、全自動だから俺なんて見ているだけ。あつ、お宝みたいなものもなんかいっぱい有るぞ、素材のままで売っちゃうのは馬鹿らしいからさ、色々研究して作った物を売るようにな。人はいっぱいいるんだからさ」

「あつ、それから未だ完成と言う訳じゃないからね。当分は俺達の極秘事項だからその心算でな、もっともそんなに長くは無い、色々人の手も必要だからな」

頭上には巨大な魔法ライト、更に工事の必要が有ると言うトンネル。

「本流の下をもこれで掘る、まっ、重力は掛かるから撓むし単に固定化ばかりじゃ安心できないからね、色々と補強は要るし」

その言葉を聞き、その場にいた全員は、人外と言うよりも神の様だとユースケを見るのだった。

建国への道　六本の大トンネル　その二　ユースケの地下大工場

順次大トンネルを基幹の幹部達に見せ、是からの方針を伝えた。中州に渡り開拓をし、基本的な食料を生産が可能に成ったら大陸に足を延ばすと。開拓をするにも食料ばかり取れば良い訳は無く、生活雑貨や輸出する物資も必要で、魔法が有るからと言ってそれは其れで簡単ではない事も事実。最短で二年を予定して事を推し進める事が決まった、俺の内政ライフが狂気の如く始まった訳だ。

其れから二か月後のある日、俺の執務室で。

「でさ、なんで何時の間にか俺を陛下と呼ぶ事になったのかな。ビュージョ宰相閣下」

「閣下言うな主よ。先ず陛下と呼ぶ事に成ったのは自然じゃな、振り返って見れば遣ったこと的事实。主以外出来る事では御座らぬし、以降誰も出来ぬ事実じゃからして、陛下と呼ぶのは当然ですじやろうの」

「穴を掘る位ならモグラだって出来るじゃん、宰相閣下」

「宰相閣下言うな主。掘るだけならそのモグラとやらも出来そうですがじゃ、あんな規模のトンネルと付随工事が出来るのは我が主の陛下でしか出ませんの」

「俺を陛下と呼ぶのをどうしても止められないと言うのだな、宰相閣下」

「宰相閣下と言うな主。多くの者達が自然発生的にそう呼ぶのですから止められませんの」

「我が主のユースケ陛下、ビュージョ閣下とサボリですか、示しか付きませんかあゝ」

突然前触れもアポも無しでギャリクがやってきた、相変わらず雑な奴だ。

「ほっほっ、軍務大臣にして最高軍事指揮官謙開拓地討伐主席指揮官謙軍事物資補給主席責任者兼外交軍事委員会主席陛下補佐官ギャリク閣下もサボりに来ましたかの」

「軍教育指揮官育成最高責任者って言うのが抜けて居ますぞ、ビュージョ宰相閣下謙国家戦略筆頭指揮官謙外交最高顧問謙?????」

「五月蠅い、皮肉合戦は後でしろ。でっ、何しに來た訳ギャリクの旦那、もしかして暇。暇なら手伝って行けば？」

「なっ、暇な訳ないだろう我が主ユースケ陛下」

「うあうざってえゝ、もういいからユースケでいいし、使い分け位できんでしょ」

「る、が抜けて居ますぞ、親しき仲にも礼儀あり。そう言う訳でユースケよ」

「だあゝ、何」

「うむ、馬が足りないのだな、地竜もな。騎兵の戦力が抜きんでたりん、どうにかならないと思ってな、実質的に対騎馬対地竜戦闘訓練が満足に出来ないのだよ。物凄く俺的に困っているな」

「ふーん。だから俺に何か作れって言う事かよ」

「察しが良くて助かる、単騎と複座騎、分隊小隊規模の運搬用にも何か作れたら作って欲しい。もし個人的に作った物が有れば見せてくれ、軍の工廠に運んで作れるか検討させる」

ギャリクは気軽にそんな事を言う、俺には個人的な乗り物として幾つか作ってある物も存在するが。こっちの世界では見る事は出来なかったろう乗り物、バイクモドキにジープモドキ、トラックモドキも作って隠してある。トンネル工事に走り回る足代わり作ったのだが、多分あのトンネル工事用に作った巨大掘削車両を見てのお気楽発言なのだろう。

「んー、無い事も無いが、工廠で作れるかどうかは保証できないな。何しろ部品数も多いし、作るの結構手間暇掛かったぞ」

「あっちに行って作り方を見せてやってくれ、忙しいのは解っているが、俺としては軍事的な事に穴が有るのは我慢出来ん。ユースケの作った物より劣って居ても、馬以上地竜以上に使える物が出来上がれば良い、その後改良されていけば工廠のレベルも上がるしな」

「俺があっちに行く暇なぞ有る物か、今俺は中州に大量に人員や物資を運ぶ列車を作って居るんだ。だから工廠から俺の地下工場に人を寄越せ、この際だから俺の地下工場を見せる」

「ほう、主ユースケ陛下は未だワシらに秘密にしている事が有った

と言う事ですな。うむ、工廠の者達に見せる前にワシらに見せるのが筋じゃろうの」

「うお、居たのビュージョ宰相閣下」

ビュージョはその言葉を聞くなり、ユースケの肩をガシッと掴み。

「頼むからワシを空気にしてくれるな、老い先短いのじゃからして
?????」

「???????分かった、そのゾンビ眼は止めろ、きもいし〜?」

天蓋貨車に無天蓋貨車、基本乗車賃を支払わせて運ぶ客車。貨車は軍事物資民生用物資運搬に、牽引機関車も作った。当然それは動かすために魔法的な物がいる訳で、当然それは魔道機関車となる訳だ。将来は地上でも走らせたいと思うが、産業革命の斜め上を行きそう
で怖い事も有る。要はこの世界でバランス悪くね、が、本心。

一週間後に幹部達に順を追って公開する事に成った俺の地下工場、広さだけなら羽田空港の五倍位はある。全部に何かがあると云う訳では無いが、元の世界から運んだ物や、第二次世界大戦時に使用された武器兵器、地球の現在の戦場から盗んだ武器兵器も当然あちこちに点在している。なので、それは見せられない、仕方なく壁を作り隠ぺいした。この世界を我の物等と、征服したい狂気が有る様な事等ないのだから。住民に成った者達、なんとなく引き籠り状態なので早く中州の開拓に付かせたい。其々仕事は与えているが、世界が狭い状態だからストレスはかなり溜まって来ている見たいだ。

「主はこれを御一人で作ったのですか？」

ムロは呆然としている、それはそうだろう。大トンネルに続いて列車と何台かの車両、改良馬車や荷車ならばいざ知らず。生まれてこの方知らない工業技術を目の前にして、呆然啞然絶句は当然だろう。

「魔法だけが幾らか進んだこの世界、俺の住んでいた世界の工業技術と融合させた。中々の物だろうムロ、その内この世界の者達も、俺がぶっ飛ぶ発想が生まれて実現する事も有るだろうな。むしろそうで無ければ俺がこっちに來た魁と甲斐が無いさ。もっとも是には設計図と言う物がすでにある、だからそれに沿って魔法で作ったから実車として有るんだけどな」

聞いて居るのかどうなのか、ムロとパックが何故か涙を流しながら握手をしている。変な奴らだ。

「さて、これを作った工作機械も全て魔力で動く事は覚えたな。俺には機械など無くとも作れるが、流石に皆は作れないだろう。だから機械を作った、だが使い方を習熟するのに時間は掛かるだろう。教える者が俺一人、簡単な作業はゴーレムに任せて重要な技術を中心に教える。其々の理屈は作って行く中で教えるから先ず慣れろ、当然お前達も魔力を使う訳だから魔力行使技術も上がるし魔力も増える。辛い事も沢山あるが良い事も沢山ある、めげずに頑張っしてほしい」

軍工廠から派遣されて來た者達百二十三人は、程度は有るが高位の魔術師達でもある。その者達を前にして偉そうなことをのたまって

いる俺、公開から十日を待たずしての教育訓練が始まった。他の仕事は其々に押し付けたのは当然で、幹部全員が涙目で睨んでいたが俺は知らん、苦情や文句はギャリクに言え。

「先輩、陛下は魔王より怖かったですね」

軍工廠から派遣された魔術師は、ユースケの魔法で一か月もの間。寝る事も食べる事も飲む事も排泄もしなくて良い状態で教育訓練をされた、実地に製作技術をも叩きこまれた。

「うっし、良く頑張ったな。流石にこれ以上休まないと気が狂うだろうから三日間の休みを遣る、休みが終わったら今度はお前達が後輩に教育指導方法を教育する。気持ちを入れ替えてこい、日程は同じく一か月間だ、可愛がってやるから喜べ」

「後輩、未だ魔王の存在は続くのだ、覚悟は良いな」

「気が狂わない様頑張ります」

かくして軍工廠から派遣された者達の地獄は又始まる、以後伝説として教育訓練大魔神とユースケのこの時を語り継がれた?????。?かもしれない。当時その場にいた者達は、聞かれると蒼白になり卒倒するばかりだったから。

閑話 子供衆とは その一

目の前のモニターを見て居たユースケ、すこぶる機嫌が悪い。

「アルマを呼び出して呉れ」そう隣に居たムロに声を掛けた。

ムロはチラリとモニターに目を遣ると、孤児たちの姿が見える。一見して何処も不審な点は無いが、その所在なさげな感じがユースケにとって気に入らない事なのだろうと推察した。館内通信器を操作してアルマを呼び出し、直ぐ来るように伝える。

「アルマ、俺はお前に孤児の面倒を見ろとは言ったが、この子達のこの所在なさげな様子はなんだ。俺はな、アルマ、着せて飯を食わせて寝せるだけが面倒を見ると言う事では無いと思うのだけど。お前の中ではそうなのか？、三か月も経っているんだぞ。この子達にも色々とする事が有るだろう、無駄飯を食わせてどうするよ？」

「はぁ？、働かせろと言う事ですか」

「アルマ、待て、俺の言い方が悪かった」

ムロの方に顔を遣ったユースケは「緊急会議だ一時間後幹部全員大会議室に集合」

「はい、直ぐに手配します」

そう言ってムロはユースケの傍を離れた、ユースケは目の前のアル

マに言う。

「子供達には隔てなく教育を受けさせる、将来の人材育成の為にね」

「それは分かりますが、此処を離れる者も出ますでしょうから無駄ではないでしょうか」

「確かに教育を受けながら此処を離れる者も出るだろう、だが強ち無駄とは思わないよ。無教育で出て行くより、しっかりとした教育を受けて出て行った方がその者にとって為になるし。出て行った者を受け入れた国の者達が、ああ、あの国は孤児にも分け隔てなくしっかりとした教育を受けさせて役立つ者を育てているんだなと思ってもらえば。何れ廻りまわって俺達への評価となる、良い印象は高い評価と信用に繋がる。それは国力と仕手も見せつける事にも成るんだよ、長期的な思考で子供達を育てないとな、子は国の将来を担う宝と思って育てて欲しい」

何処かで聞いた様な科白をなんだかなくと思ひながら言うユースケ、アルマはアルマでそんな白々しい科白に何やら感動の眼でユースケを見つめている。

「流石我らの主様、言う事が違いますね」

「むっ、それは皮肉か嫌味かどっちだ？。ってか、その主様は止めろ、滅茶苦茶勘違いしそうだから」

「素直じゃないんですね主様、んふっ、勘違い大いにしてくださいませ、夜伽には喜んで参りますわ」

「んぐっ、馬鹿を言うな、疲れてそんな気も起きねえよ」

「あら、そのお歳で不能ですかあ」

「馬鹿、んな訳ねえよ」

「ばれたら怖いんだと言いかけてユースケは止めた、そして取ってつけた様に言う。」

「お前も会議に出るんだからな、馬鹿を言っ居ないで考える事が有るだろう」

「ちっ、逃げられたか？」

「お前なあゝ、どうしても貴族の教育を受けたんだろう。あからさまな舌打ちってどうよと思うけど」

「確かに貴族でしたけど、此処には貴族なんて居ませんからねえ、半分以上要らない教養ですよ」

「それでも無いぞ、子供達に教えたらかの時に役立つだろう、それを考えれば無駄と言う事は無いと思うけど」

「主様は貴族を作るお心算ですか？」

「それは有り得ないな、もし誰かが貴族を言い出したらこの国は潰す？」

「本気ですか？」

「周辺の国の貴族共を見れば無駄な存在だろう、全てのとは言わな

いけど？」

そんな会話をしていると、ムロがやってきて伝える。

「主、会議の準備が出来ました」

「随分と早いじゃないか、皆暇だったのかい？」

「そんな訳は無いでしょう、面倒臭くなると丸投げする誰か様のお蔭で振り回されているのですから」

「むううう、俺のせいだともいうのかよ」

「否定しない所に自覚していると言う意識は有るんですね、流石です主」

「ああうう、ムロに言われたよお」

ドタバタと会議室に向かうユースケ、ムロとアルマはこの後仕返される。

「さて、突然の事で案も期待できないが、問題提起をする。孤児たちを含めた全体の子供達の事だ、今日、子供達の様子を見ていなんだ是はと思った事が幾つかある。大人達の世話が必要な子供ならいざ知らず、ある程度育った子供達の所在気の無さが気になった。確かに元気よく遊んでいる子も居る事は確かだが、そんな風でもない子供達も居る。それを見て居た俺としては、無駄で勿体ない事と思ひ、子供達には無形の財産を持たせたいと思うのだが皆はどう思

う」

シンとした空間、突然の問いに戸惑って居る様だ。

暫くして、前もってユースケが議長に指名しているリカル、虎獣族らしく咆哮する。

「てめえら、主の問いに答えを何時まで待たせるんだ、さっさと誰か答えろ」

「リカル五月蠅い、脅したって直ぐに案は出ないと思うぞ、お前も吠える位ならその白紙に案を書けば？」

「ええー、なんか議長の仕事ではない様な？」

「人の頭数も少ないんだ、お前も考えるのは当然だろう」

はあ、と頭を抱えて頷くリカル。

「デュラント五階管理官です、議長良いですか？」

「どうぞ、デュラント第五階管理官」

「失礼ですが陛下、この場では良い案は直ぐには浮かびません、其れよりもこの議題を持ち帰って。部下の者達や家族、私でいえば管理している五階の住民達にも一緒になって考えて貰ったらと思います。種族や年齢男女の違いで色々な意見が出るかと思いますが、其れに当然ですが子供一人一人個性が有って種族も違いますからね、得手不得手は存在すると思います。其処で確かな案が出で実行できるまでは、基本的な読み書き計算を中心に教える場を作り、其れに伴

う教える人員を集めたらと考えます。幸い各階には余剰の部屋がある事ですから、明日にでもとは言いませんが、早い段階でこの位な実行出来ると私は思います」

「成る程、根回しはしっかりやれよお前ってな訳だな。うん、反省するよデュラント？」

「陛下、畏れながら申し上げます、わたくし決してその様な思いで申し上げた訳では御座いません」

「畏れなくなрутって良いんだよデュラント、思い付いたら直ぐ召集では迷惑な事は確かだしな」

そんな事を言いながら天井を見上げているユースケに。

「主、それではこの事は各自持ち帰って案を上げると言う事で宜しいですか？」

「うん、期日はどの位が良いかな。十日も有れば大丈夫？、纏めるのに二日も有れば良いかな」

一斉にユースケの問いに頷き答える幹部達。

「それでは、十二日後の昼までは案を纏めて陛下の元へ各部署の責任者は提出する様に」

議長のリカルの声が響く、其れと同時に部屋から出て行く幹部達。

「デュラント待て」

「陛下、なんででしょうか？」

「お前に俺からの命令、各階の住民代表を選定しろ。各階の監理と管理の人間はいるが、それは飽く迄俺達側の者だ。伝達事が一方通行では色々問題が出るだろう、それで住民代表と言う訳。住民間の問題が最悪になってから、此方に知らせが有っては遅すぎる事になると言う心配も有る。要は、最悪な暴徒化は困ると言う訳。この通達は今日中に各部署に出す、お前は面接して大丈夫だと思ったら任命すればよい、但しお前の補佐は自分で探せよな」

「何時まで終えれば宜しいのでしょうか、又それは住民利益を基本と考えて宜しいのですか。後は人員は何名とすれば良いのでしょうか？」

「偏った種族利益だけの事で無かったらよい、あくまで住民融和が基本で其れには共通利益が付くかもって言う事。代表者に無報酬な訳では無いからな、多すぎず少なすぎずで適当にな？」

「て、適当にですか？」

「大雑把だけどよろしくな」

「御意に？」

閑話 子供衆とは その一（後書き）

色々と穴が有るので閑話として書き足す事にしました、話は前後しますのでなんじゃこれはと思う事も有るでしょうが。作者の我が儘気まぐれって言う事で宜しく。

閑話 子供衆とは その二

子供に対する親達の希望を纏めた書類がユースケの前に有る、そしてもう一枚、それは孤児達の居る子供館からの極秘書類。ユースケ達一部の幹部しか知らない事だが、住民として受け入れた者達の今までの経歴は全て記録されている。住民カードを作られる際、本人の意思は関係なく今までの経歴は記憶から引き出され記録されている。もう一枚の書類は殺人の経歴の有る子供の記憶の書類、彼らの負の記録でもある。

目の前に立ち肩を竦め、無言で立っているのはムロだ。

「結局あれだ、読み書き計算の教育には全ての住民は基礎として子供達にと言う事でだな」

「ええ、後は本人と親や保護者の意向で。職業教育をと言うのが大半です」

「問題はこの子達の事か？」

「重大です、この年齢で十人以上の殺人に係わって居る子供も数人います。危険と言う事でなく、どう導いて行くかがですね」

九歳から十五歳までの子供達の殺人記録、ユースケの心に重くのしかかってくる。

「俺達がそういう事を知っていると、感ずかせるのも……だな」

「いえ、もう感ずいていると認識しても良いでしょう。自分達とそ

うでない他の子供達とは、自分達は雰囲氣的に違うと？」

「んー、心が壊れて居るか壊れかけていると？」

「表面的には目立っては居ませんが、係りの職員に聞くと夜中に飛び起きてモーフを啜えて震えている子も居ると」

「魔法でなんとかなる問題ではないか??? だよなあー、精神に万能って言う訳じゃないし」

「如何に克服させるか、ですね。何れにしても時は掛かるでしょうね」

「女神の神力でどうにか出来ないかな」

「そうですね、相談してみたら如何ですか。主の能力でもどうにかなるのならば、それも良しと私は思いますが」

「俺にそんな能力有るのかな、あー俺も自分の事ながら全て把握はしていないからなあー」

「そうなんですか」

「最近暴れて居ないし」

「脱走は許しませんよ主？」

「出来ないだろー、色んな物しょっているし。むっ、じゃああれだ、八つ当たりな!？」

「えー、主、それは勘弁です？」

「決定、主要幹部へ均等にこの子供達を付ける、養育は任せた。ムロ、お前も主要幹部だからな」

「そんな主、横暴です」

「ふふん、日頃俺を陛下等と呼ぶからな、あいつ等には調度良い」

「主、私は陛下などと呼んでは居ませんが」

「連帯？？？と、言う事で宜しく」

「主には付けないのですか？」

「んふふつ、俺は陛下で主だ、俺様王様だい？」

「なっ、ずるいです主、納得行きません」

白紙に勅命と書きなぐるユースケ、そして内容を書く。

「ビュージョ宰相に叱られても知りませんよ主、宰相も物凄くお忙しいですからね。それにギャリクさんとネイルご夫婦からも苦情が来るかも。自分達の子供より先に他の子を育てろってどうよってですがね。聞いてます？主」

「聞こえて居るけど聞こえない、えっとこの子とこの子、それからこの子らの他にこの五人は俺が貰うよ。身の回りの事が偉い事に成っているからね、呼び名はそうだな、子供衆でいいや。おし、こき使ってやろうっと？」

「うわっ、下僕的な召使ですか」

「いや、下僕的な使い魔だな」

「へ、この子たちは魔獣ですか？」

「似た様な者じゃん。これ？、ムロだっで見ればそう言いたくなるぜ」

「あゝ、かなりですね」

「だろ、下手をしたらお前達じゃ相手に成らないしな。魔力が異常に高いし、格闘戦闘能力と殺しの経験が凄まじいし。逆に言えば頭が良い、その力だけでは是だけの事をして生き残ってはこれない。その場その時の判断力決断力は異常なんだろう。後この五人は特殊だぜ、他は凡庸だけど一つの能力が突き出ている物を持って居るし地下工場で働いてもらうよ、そして此奴らとは徹底的に遣りあって見ようかなと？」

「格の違いを徹底的に見せつけて服従させるお心算ですか？」

「あゝ、一寸違うな。拳と拳で語り合う、そんな感じ？」

「あゝ、嘘ですね。あゝひょっとして軽くストレス発散用でしょう主？」

「しらん」

閑話 子供衆とは その二（後書き）

未だ続きます。

閑話 子供衆とは その三

「ムロ、貴様は陛下のなんだ」

そう凄んでいるギャリクと、冷たい目で見つめるビュージョ。

ビュージョが口を開く。

「ムロ、この子供達は危険じゃ。如何に主ユースケとは言え、隙を見せないと言う事が常時出来る訳では無いのじゃと知れ。何も武器が無ければ人を殺せない訳では無いと言う事、お前もは知っているはずだな、ムロ。殺気を感じさせず殺すことだってこの子供達ならできるんじゃない、もしお前が何か思う事が有って何も言わなかったのならその訳を言え。で、無ければワシらにも考えが有る」

「私は主ならあの子供達の壊れた心、いや壊れかけている心を癒し普通の子供に近付ける事が出来ると確信しています。何故なら主も十分に子供、壊れかけた心を持つもう一人の子供と思って居ますから。何故なら主は、この地に来てから一睡もしていません。全て是からの国の事を思い、ありとあらゆることに携わって居ます。それは主も最早限界と思って居ます、だからです、この子達と居る為には寝食を共にする事に成ります。主の居た世界では主はもう大人とは言って居ましたが、この世界の私達から見れば実質未だ子供。子供達を癒したいと思う主、癒して遣らなければならない子供達は、逆に主を癒す者達と考えたからです。と、言えばなんです。ぶっちゃけこの子供達に主を殺さなければならぬと言う理由が有りません、すでに帝国は存在せず、それを命ずる者等いません。居たとしたなら記録されているはずで、なので子供には子供をあてがっ

て遊ばせようと言うだけの事です。互いに癒し合えればと、生まれた世界が違うのにこれ程頑張る姿、壊れては欲しくは有りません」

「おいおい、随分としゃべってその本当の中身はそれだけの事か。只傷を癒し合う、それで良いのかって。しかしマジでユースケはそんなに長い事寝て居ないのか、如何に超人外とは言え無茶をするな？」

「確かに思い起こせば、主ユースケはあらゆる事に首を突っ込んでいるのう。うーむ、確かにこの子供達にそんな意志が有るのなら分かるめ事じゃがのう。だが気懸りは一点突き抜けた能力を持つ子供とこの子供達が組んでいるのなら、可能な事もあるのではないか。主ユースケもそんな事を言っていたと思うがな、何にでも穴は有る物だとのう」

「だが主として子供達を一人で面倒を見れる訳では無いな、パロの部下を身辺警護を兼ねて世話係で付けるか。最近警備隊に上げた元帝国の奴らは未だ信用出来ないからな。この子供達に何時接触して命じて居ないとも言えないしな、主ユースケさえ無き者にしたら屋上の客も復権する可能性も無きにも有らずだ」

「はい、主にはこの際きっちり世話係の侍女と従者を付けます。最早嫌等とは言わせません、人選もネイルさんとケイリスさんに頼みました」

「ほう、どの位付ける心算じゃ？」

「はい、主には侍女を三人一組で五組。従者は二人一組でこれも五組。眠っている時間以外は隙間なく付き添う様にと計画しています、子供達には侍女を一人一人に各一名を五人を一班として隙間なく付ける事にしました。従者は元奴隷戦士団から選抜すると言って居ました、侍女はベリリユーユの方へ指導者を頼みました。御一家の公式訪問の際連れて来るとの話です、ベリリユーユの方も快く了承くださいました」

「うーん、俺も親衛隊を編成するか、どのみち近衛の部隊を作る計画が有るんだしな。主ユースケは渋っていたがな、この際だからねじ込むか？」

「そうじゃな、各国の大使も着任しにくる時期じゃ。侍女も従者も居ない、身辺警護の者も居ないのでは恰好が付かんじやろう。んっ、ギャリクよ、この間の儀仗隊は編成したのかの。主からの注意と言うか苦情が有っただろう。人相が悪すぎる奴ばかり並べるなとか？」

話が別の話題に移ったので、ムロは話を戻そうと声を掛けた。

「お二人とも脱線しないでください、親衛隊や警護団、従者や侍女達の役割分担を決めて下さいよ。役割が重複して混乱させては役に立ちません、そっちはお任せしますから」

「おおっとそうだった、侍女の指導者はベリリユーからは構わないか。ネイルも忙しいから頼めないし、あー・・・俺達も子供を引き受けるんだったな。世話係を雇うしかないのかあ、良い人材残って居るか心配だぜ」

「この命令が渡る前に確保しないと、あー俺も寝られないかも。ムロ、お前は何人引き受けたんだ、ってかもう決められているんじゃないだろうな」

「それはもう人数だけとは均等にと言う事です、まあ主の方は少ないと言えますがある意味仕方が無いでしょう？。あつ、誰の子供衆かきっちり分かる様に何か身に付けさせる様にとも言って居ました。ちなみに主は頭の前から足元までご自身で作って着せるそうです、武装は建物内部ではさせる気は無いと言って居ましたが。それでも何か持たせようかなとも？」

「その何かが判ったら知らせて欲しいのう、主が作る物なら期待できる。そうじゃ、着る物の情報も有ったら序でにの、軍の被服処で作らせる？」

「ビュージョさん、それは権力のごり押しですよ。自費でよろしく」

「ギャリクよ、そんなつもりは無かったが。うむ、そうか、では職人の手配じゃの。そう言えば主が言っていたのう、軍隊や学校にいる者は制服と言う物を着るのじゃと」

「成る程、主はその制服とやらを着せるつもりかな？」

ふう、では主の作った制服とやらを見てからで良いかと話は終わった。ムロはホッとした、納得している訳では無いだろうが。彼らも様子を見ようと言う気持ちなのだろう、しかし「パックはどうする心算かな、あいつ自身まっとうに子供だし、向こうの国とは未だ繋がって居ないから困っているんじゃないかな。あー、あの二人も問題か、男同士でなあゝ・・・どうなるんだろう」

その頃ユースケは、子供達に着せる服や帽子、身に付ける小物にマント等をデザインしていた。

「あゝ、制服ってマジ面倒、これっばかりの事が難しいってどうよ。仕方ねえゝパクるか、あっちの奴を参考にすれば超簡単じゃんって・・・。あゝ、あんまりこっちと違い過ぎても拙いかなあゝ？」

ぶちぶちと一人呟く、子供達の心がどうのとなんてちっとも考えて居ない。単に動きしゃべる玩具としてしか思っ居ない様だ。

「ふふふっ、巨大トンネルで遊んでやろう。ぶん投げてやったら何処まで届くかな？、ひひひひっ、面白れえゝ」

子供達、別な意味で壊れそうかも。

閑話 子供衆とは その三（後書き）

未だ続きます。

閑話

子供衆とは

その四

お披露目はあっさりとしたとかしなかつ

全ての建物内広場、其処に有る大画面の地球で言う所のテレビ画面にユースケが映っている。国民となる多くの者達に、正式に王として姿を現したと言う事なのだが。

辿る事一週間前、宰相のビュージョからユースケは言われた。

「ユースケ陛下。ベリリユーの王家御一家と、宰相を始め重臣たちが王城をがら空きにしてお出でに成る事に成ります。つきまして陛下にはその前に、この建物の中に住んでいる者達へ王としてお姿を見せて頂きたい。その時に地下巨大トンネルの中州まで貫通した事、列車と言う乗り物が稼働可能となり中州開拓への一歩が始まると伝えて頂きたい。出来れば子供衆の事もお話いただきたい、彼ら子供衆にとっても晴れ舞台、良き思い出となりましょう」

「分かった、俺もタイミングを計って居たんだが良い機会かもな。魔道力列車も試運転の問題なく動いているし、乗客役も大喜びだしな」

「陛下には驚かされます、この分なら大河の向うにも近々届くのではないのでは？」

「何を言っているの、知らないのか？もう届いていて大陸の地下を潜って居るぜ」

「陛下、言っていただけなければ知る事は出来ませんぞ。わしは陛下の近くに手の者等置いてはおりませんからの、ケイリスとギャリクの手の者は付いて居る様じゃが」

「あはははっ、あいつ等面白いのな。」「陛下、上司から直に付いて居ろと言われましたので攻撃はしないでください」だと」

「それは陛下に玩具にされたくないと言う、彼らの切実な気持ちでしようの」

「ま、ストレス発散には少し役だったけど」

「狎犬を使って追いかけて回し、子供衆の使う魔術の標的等にするとは人が悪いですぞ」

「んふ、で、ビュージョさんの所の子供衆はどうか。アイーヌさん目を回していない？。って、結婚式はしないのかな」

「この歳で結婚をとば気恥ずかしいが、ま、彼女が望んでいるので陛下のお披露目後にとまって居ますよ」

ビュージョは残り少ないかもしれない人生も、一人で過ごす事に成るだろうと思ったが。此処に来てからは、環境が激変し、宰相と言う役職故身の回りの事に手が回らなくなり侍女を雇う事にしたが。

ビュージョ曰く「劇的な出会いだった、面接の心算がプロポーズをするとは思わなんだ」

言わば一目ぼれ、「人生まだまだ枯れとらんかった」だとか。

「良かった、で、子供衆は」

「未だやんちゃが真っ盛りじゃからの、補佐官や秘書官達も協力し

てくれるので助かって居ますな。アイーヌは子供達の後を追いかけるながら世話をしています、楽しそうに忙しく過ごしていますぞ」

「あつ、子供で思い出した、最近パックの姿が見えないけど？」

「転移門を使って育ての親の所に行っていますな、多分此方に連れてくる心算でしょう。幾らなんでも十人の子供を、あの歳では世話を出来んでしょうな。其れゆえ、信頼している人を思うのは当たり前でしょう。我々以外にパックにそんな人が居る、僥倖と言うものですじゃ」

「ビュージョさんも信頼している方の様ですから、皆で相談し、何か役職に就いていただきましょうかね？」

「カイト殿からも一度此方に来ていただいて、此処見て貰おうかの。陛下も向こうとも交易が必要とお考えでしょうか？」

「ああ、此方の国々だけでは何れ遣って行けなくなるだろう。一国の国力規模が小さすぎて行き詰まる事は目に見える、交通手段の高速化が進めば人・物・金はの動きは活発化する。子供衆はそんな時代に間に合う様教育して、国の為だけでなく自分の為にも頑張ってもらわないとね」

「金が無ければ国は動かせないのは当たり前ですから、まあ手を広げれば厄介事も多く押しかけて来るでしょうが」

「仕方が無いとも言えるけど、成るべく避けたいが・・・無理だね」

「まあ・・・のう？」

「しかし、たった数か月であちらの重要人物にのし上がるとは思わなかったよ」

「冒険者の水には合わなかったと言うしかありません」

ビュージョとはそんなこんな雑談の後、細かい事は皆と会議を持つと言う事で終わった。

「此処に宣言をする、新たに国家を、ホールプ・ラーを国名として建国した。私が初代国王として君臨するが、貴族成る者は置かない、国王の直下に国民会議なる議會を置き。国民の皆と共に歩む事を、奴隷の居ない自由と平等を約束し様。だが、自由と平等には皆にも責任を持ってもらう事に成る・・・」

＊

「なあ、ユースケ陛下って何れ国王を辞めるって言ってたけどマジなんだろうか？」

ユースケの子供衆の一人、ターランが隣に居る仲間となったハキスに言う。

「あれを見てみるとマジだと思うぜ、国政の會議になんてろくに顔も出さないしさ。だから、新しく来た奴らなんてビュージョ宰相を国王と勘違いしているし」

「言えてるよなく、それにしてもさ。予備の大トンネルを使って俺達を玩具にするのは勘弁してほしいぜ」

「だよなあ、最初トンネルの中をぶっ飛ばされた時には死ぬかもって思ったもん。真っ暗な中を元の場所に戻るのに、一日掛かりだぜ、それも水も食料も無しでよ」

「馬鹿だなあ、光魔法で照らして見たら落ちた場所にちゃんと置いて有ったぞ？。お菓子も有ったの知らなかったのか、あつ、光使えないのか」

「ちげーよ、俺、真っ暗な所苦手なだけさ。二度目にはちゃんと見つけたし」

そこに手の空いた子供衆仲間が加わった。

「なになに、陛下の事が話題なの」

ジュローと言う名の仲間が口を挟んできた。

「ああ、陛下と言う名の怪人物の事さ」

ターランが答える。

「陛下が作ったバイクって面白いよな、まっ、あれに乗っての戦闘訓練はきついけどさ」

「あれを見た時はビックリしたぜ、風魔法で少しぐらいなら飛んだりできるのは知って居たけど。魔力石を組み込んだ機械で飛べる様になるなんてさ、どっからそんな発想が出て来るんだよって」

ハキスは初めてそれを見た時、驚愕の顔でいる俺達の顔を見て楽しそうな顔をしていたユースケを思い出していた。

「しかしさ、大人達に混じって此処に来たときは驚いたよな。信じられない高さの建物がドッカンって建っていたんだから、中に入ったら入ったですっげえ広さだし。エレベーターにもこれはなんじやーって腰を抜かす程驚いたし、心臓に悪くねえかって思ったもん」

「ハキス、そりゃ皆同じだろ。其れまでは又捕まって奴隷にされるのか、殺して来いとか言われなかつて思ってたし」

「ふん、殺して来いと言った奴も碌な奴じゃ無かつたし、殺した奴も魔物みたいな奴だったからな。殺して心が痛むって言う事は無かつたし、それにそれはもう昔の事だしな」

「だなあ、それに俺たち以上に子供な陛下を見ているとき、なんか気が抜けるんだよなあ」

「無駄に偉そうで凶暴・悪戯大好き・それでいて大飯ぐらいで涙もろい変態野郎だしな」

うんうんと皆頷く。

「そうか、俺の皆の評価はそんなものか。どうやらお前らは、未だ俺と遊び足りない見たいだな」

その声にギョっとして振り返る、其処には悪鬼羅刹も逃げ出すのではないかと思う表情のユースケが立っていた。

一斉に逃げ出すユースケの子供衆、ボロボロになってあちこちに転がるのにはそう時間は掛からなかった。

「悪口や陰口は俺に勝てそうになってから言え!？」

「それは未来永劫無理じゃん」と、言う声が聞こえたとか聞こえなかったとか。

六本の大トンネル その三 中州へ

寝もやらず、ユースケの精神破綻寸前までかかって完成した大トンネルと魔道列車。中州の拠点まで仲間達を運んだ、子供衆も年齢らしくはしゃぎ大歓声を上げて居る。各階の監理・管理官と議会議員も、生まれて来てよかったと大げさな程驚き喜んでいる。四十キロと比較的短い距離、三十分も有れば中州に着いてしまう。トンネルそのものは大陸の方にも届いているが、拠点建築はしていない。住民が列車に乗る事に慣れない事には、と言う声を聴いて作らなかったのだが。

ビュージョはユースケに声を掛けた、どう言う風に運営する心算かと。

「陛下、これの運営方法は確立してありますかの」

「ああ、大丈夫だよ。ほら、改札口って有っただろ。全て乗る時にカードを通して出る時にカードを受け取る。それで料金を自動徴収出来る様にして有るのさ、ただ残預金が無かったら入り口で止められるし、その場合は係員が飛んでくるしね。無賃乗車は出来ないよ、何かで無賃乗車をしたら十倍返しだからね」

「十倍返しか、其れじゃあ怖くて出来んのう」

「所でビュージョさん、ギルド開設の知らせが来ているけど大丈夫なのかな。結構強いのがうじゃうじゃ居るんだけど、俺としては兵達の戦闘訓練で確かめてから解放してもって思っ居ただけだね？」

「その事じゃが、実を言うと金欠に成りそうなのでな。稼げるならば稼いでもらって、ワシらの負担を下げたいと思つての。陛下には言わなかったが、今の状態は異常なので、税を取るどころか無条件でただ金を与えて居る様な物じゃし。少し軌道修正したいと思つただけなのじゃ、無論無い所から取れんしの」

「ああ、其れでパックを向こうに行かせる話が上がったのか。でもネイルさんをもって言うのはどうしてかな？」

「陛下、誰かを忘れて居ませんか？」

「んゝ、?????あゝカイトかゝゝ、ネイルさんを姐さんなんて言っていたからな。色々追いつめるって言う事か」

「ほっほっほ、追い詰める等と口が悪い。短期間でかなり成長し大商人に成ったカイトに頼ろうと言うだけですじゃ、まっ、使える者なら目いっぱい使おうと言う話ですじゃよ。パックはそれだけの事で行かせた訳でも無いし」

「ふふっ、俺が居た向こうで言えば。（ビュージョ、そちも悪よのー）とか言う場面だね」

「成る程、矢張りあれは陛下の元居た所の科白でしたか」

「ビュージョさんも隠居したらあれやって見る、其れまでには子供衆も良い感じで育っていると思うけど」

「ワシの足腰が弱らん内にパックが育ってくれば可能じゃろう、パックだけでなく皆も良い方にそだつ貰いたいもの」

「うわー、でっけえ」中州に建った建物が、向こうのより建物がでかいと騒ぐ子供衆。

「ユースケ陛下、遣り過ぎです。世界を敵に回す心算ですか」

額に脂汗を浮かべたケイリスが、そう言いながら三白眼で睨んでくる。

「ケイリス、敵に回すってかそれは無いよ、敵に回したら死ぬ、そう思わせる心算で立てたんだから」

「そうですか、でっ、あれらはなんですか」

そうケイリスが指さす方には、地球という日本のお伽話の幻獣種の河童そっくりな奴らが隊列を組んで何やら訓練らしい事をしている。傍にはヤックとクスタが立ち号令をかけているし。

「ああ、ガウロ達の事か。知能は人間とたいして変わらないからさ、あの二人に話を付けて来いって言ったのさ。したら見事に成功してあんな感じ、水軍の中の陸戦隊だよ」

「聞いてませんが、又独断専行、見切り発車ですか」

「えー、否定しないけど良いじゃん。奴らもその気になってんだし、使えるんなら何でも使う。その方針なんだから」

「陛下、極端すぎます。この方面では水棲魔人と恐れられている奴らですよ」

「大丈夫さ、あれを見て慣れば他の獣人と変わらないって思う様になるって」

「ふーう、解りましたと言うか、納得して居ませんから何かあったら陛下の責任ですからね」

「其れよりさ、その陛下って言うの何とかならない、爺むさくつてやだよ」

「そうやって話を逸らす、まあ良いでしょ。ガウロの事は言いましたからね、覚えて居て下さいよ、知らない等とは通用しませんからね！。其れからそんなに陛下と言われるのが嫌なら、何か呼び方を考える様にビュージョ閣下へ話しましょう」

「よっしゃあゝ、頼んだよ」

「主、あれはなんですか」

ユースケ達が建物の川上に立った時点で。突然、終始無言でユースケの後ろに居たムロが声を上げた。

「ああ、あれは水軍用の船舶を収容する船着き場さ。船は是から作るんだけど、操作員が必要なんだよね。どうした物かとさあゝ、色々と思ひ悩んでいる所なんだよ。一朝一夕に乗組員は育たないしね」

ユースケにとって、船舶の設計図さえ有れば船等大きさに関係なく即座に作れるが。乗組員までは作れない、教育するにも書籍からしか知識を取り込めないと言う半端な事で。実務となれば厳しい物が有る。

「本当にどうしようか!？」

六本の大トンネル その三 中州へ（後書き）

水軍から海軍へ、なんて行くかどうか分からない。是とは別に、中州の大きさと広さをどの位に設定し様かと悩んでいる。沖縄本島位から、四国位に仕様か・・・等とね。

ユースケの大剣

少女の一言で????

中州へ渡る前に、ベリリユー国王一家が来るはずだったが、鼯肩だと各国大使からの抗議で訪問中止となった。

「鼯肩ってなんだよ、俺は将来の嫁家族にいいかつこしたかっただけだぞ」

そんな事をぐちぐちと零すユースケを前に、ネイルとギャリク夫婦、ケイリスにビュージョ。

「其れは考えて居なかったが、嫁一人と言っても各国とのバランスが取れない」

「ビュージョさん、各国の王家を対象が居なかったら王家に近い家から嫁って言う申し込みが来るわね。是は陛下にも納得していただかないと」

「んー、やむおえんじやろうの。仕方ない、後宮を置くしかないかのう」

「何、後宮って?」

「今頃ベリリユー以外の国で、ユースケ陛下に娶ってもらおうと王女を磨き立てている頃ね。正妃は無理でも、なんとしても側室に入れようとして言う事。簡単に言えば王女を妾にさし出そうって言うのよ」

「いらねえ、俺はセピー一人入れば充分だ、俺の平穏を壊すなら

国を潰しに行くぞ」

「それは姫様も余裕で予測して居られるじゃろう、其々の国へは新しい国とは言え、予測の斜め上に行く国と各国大使から報告が上がって居るじゃろう。ベリリユーユ一国ががちり食い込んで美味い関係に、と、言うのは拙いと慌てているって言う事じゃ。故に側室と言う縁、どうしてもとの」

「手が無い訳では無いわ、一旦受け取って、何かの仕事に付けさせればよいわよ。秘密や機密に近寄れない程度のね、言わば人質みたいな感じで」

「ネイルよ、お姫様が仕事をするかね。蝶よ花よとおだてられて育っているんだ、そう都合よく行くよかな」

「ギャリク、あんたには使いきれないだろうけどさ、ユースケ陛下ならどうにか出来るんじゃないの」

「あつ、ネイルさんってばそれ俺に丸投げする？」

「そうですな、其れも良いじゃろう」等と言いながらさっさとビュージョは立ち上がり、それに攀られる様に皆そそくさと立ち去って行った。

「何だより、其れでセピーにジワジワ責められるのは俺なんだぜ」

ぼやいてももう遅い、ムロに八つ当たり仕様かと見れば、ムロもさっさと隣の執務室に入って行く所だった。

「ちえり、味方は誰も居ないってか」

予定されていた巡視の為廊下に出ると、すでにムロの指示で護衛達が揃っていた。

「主、今日は何階の巡察をしますか」

「うーん、最近入って来た者達は何階にいる」

「二階ですね、未だ監視が必要ですから」

「色々情報は本人も知らないうちに掴めるけど、其れでも監視は必要って言うのは厄介だね」

「孰れにしろ予測のつかない事を仕出かすのが生き物ですから、其れに教育が未だ終わって居ない事ですしね」

「んー、そろそろ打ち止めを考えないと駄目だな。各国の人口が激減したらどうなるかって言う事も含めての事だけど」

「かなり支障は出て居るでしょう、特に税の方ですが」

エレベーターに乗り、二階へと降りる最中の話、護衛の者達は聞こえないふり。

突然二階に響き渡る声。

「陛下の巡察である、無礼の無い様に」

一斉に歩いている者達は壁際に寄り跪く、室内に居た者達も緊張の中に入る。子供達は物珍しげに視線を泳がせ、陛下って誰、の視線だ。別段ユースケの写真、姿絵を飾っている訳では無い。新規の住民には、未だユースケの顔を知られてはいないと言うだけの事。ただ大剣を背にする、少年ながら神子の様な異能者とは知られてはい

ユースケが巡察の為に二階へ降りようとしている最中、ある住民の住む一室では。

「おばちゃん、あたしあんな気味の悪い男の傍になんて近寄りたくない。この前もあたしの女の子に触ろうとしたのよ、そんな奴になんてそうあたしを遣ろうとするのよ」

「あつ、それはね?????」

「すまんピルーリヤ、ワシらにはあの男から借りた借金が残って居てな、色々と断れんのだよ」

「あたしって、おじさんおばさん達の借金のカタなの」

そう叫ぶピルーリヤは九歳、破壊された帝国の神殿から逃げてきた奴隷の子。両親は二年前に神官見習いの八つ当たりで殺された、その見習いはユースケの神殿破壊により建物の瓦礫の下敷きに成って死んだ。と、言うより、ピルーリヤが仇と一途に狙い、相打ち覚悟での体当たりで死に至らしめたと言う事だった。本人は運よく怪我

もせずに生き残る事が出来たが。当然それは記録として吸い上げられている。

其れまで世話になったこのおじさんお婆さんは赤の他人、如何に世話になったからと言って、借金のカタにされるなんて言われは無い。同じ神殿奴隷の仲間とは思って居るが、ピルーリヤは自分の食い扶持は稼いで来たと自負している。子供とは言え、賢い子なのだから。

「陛下の巡察である、無礼の無い様に」と、突然声が響いてきた。

ピルーリヤ達からは未だ遠い距離、だが確実に此方にやって来る陛下と護衛の者の姿。陛下の背には大剣が斜めにある、黒い大剣は陛下のシンボルと知れ渡って居る。

ピルーリヤは思った、あんな変態ど畜生に身体を触られるのなら。陛下に直訴して助けてもらおう、上手く行けば子供衆の一人に成れるかも。じつと陛下が近付いて来るのを待つ。

「ここは何人、皆血の繋がった家族同士かなの」

大剣を背にした少年が、ピルーリヤ達に声を掛けてきた。中肉中背で色白だけど綺麗な顔立ちだ、とても大剣を振り回せる様には見えない。

おじさんが答える。

「私とこの女とは夫婦です、この子は知り合いの子で両親はおりません」

少年の後ろに立っている、獣族の大男が何か書類を差し出した。

「うん、君何か困っている事は有るかい、それとか聞きたい事はないかな？」

「はい陛下、聞きたい事は一つ、お願いしたい事が一つあります」

横に居るおじさんお婆さんは真っ青になって居る事だろう、我慢できない事は我慢しない。ピルーリヤは言った。

「その大剣って、男の人のあれ見た位に伸び縮しないのですか」

んっ、この子随分ませて居るな。

環境のせいなのか？、それとも日常的に性的虐待でもされて居るのか。

「君、九歳だよ。何か男に嫌な事をされたとかされて居るとかって有るのか」

鋭い、陛下って凄い。そうピルーリヤは思った。

「はい、おじさん達の借金のカタに嫌らしい事されそうになって居ます」

「ムロ、その者達から詳しく話を聞いて必要な処置を取る様に」

「はっ、直ちに。二人を警務隊へ」

真っ青になったおじさんとお婆さんは、陛下の護衛の後ろに居た警務隊の隊員に引き摺られる様に行った。そんな最中に、陛下が言った。

「うーん、伸び縮みかぁ、其処へは思い遣った事が無いな。良し、試してみよう、成功したら君を俺の子供衆に入れる。いいかな」

「えっと、それってご褒美の一つでしょうか」

「その心算だけど、嫌かな、お金の方が良い」

「云え、とても嬉しいです」

突然背後から喚く男の声がした、おじさんとおばさんが借金をした男だ。

「ピルリヤ、テメエ恩知らずが。今まで世話になったおじさんとおばさんを売るなんてよ」

「馬鹿、ここでは奴隷なんて誰も成らなくてもいいのだって知って居るでしょ。其れなのに、奴隷に言う様にあたしに嫌らしい事を言ったり体に触ろうとしたじゃない。世話になったって言っても、あたしは自分の食い扶持は稼いで渡していたわよ」

そう叫んだ時、大男が陛下に声を掛ける。

「主、この男はこの子の他にも手を出していたそうです。検察部に送りますか」

「当然だな、処置は法に法って行えばよい」

「はっ、御意に。それと夫婦の方はどういたしましょうか」

「別には罪に成るような事をしていないのなら、一旦検察に送って任せるよ」

「御意に、それでこの子の事は」

「この子の提案でね、「この大剣が伸び縮みするか」でっ。伸び縮みする様なら俺の子供衆の一員にする。んゝ、しなかったらどうしようか、俺個人の養い子に登録して面倒見様か」

「分かりました、ピルーリヤもそれで良いですね」

「はい良いです、ってか???あたし名前乗りましたっけ」

「はははっ、さっきあの男が君の名前を怒鳴って居たでしょ」

「あれっ、そうでした???へへへっ」

「未だ巡察は終わって居ないから、君も一緒に着いて来て。終わったら屋上で試してみよう、此処では危ないからね」

「はい」

似たような事件が幾つかあったが、概ね平穩に巡察は終わり。ユースケとムロ、護衛達とピルーリヤが今屋上にいる。ユースケが護衛の者達に、からかう様な視線で言う。

「これを持てたら金貨十枚上げる、あっ、全員でも良いよ」

ムロが後ろで眉をひそめ、ボソッと「又からかう、人外の主以外持てるものか」。

ピルーリヤはムロに聞いた。

「ムロ様、陛下のあの大剣は特別な物と聞いて居ますが。重いのですか」

「ふふふっ、見て居なさい、彼らは泣く羽目に成るでしょう」

全員でも持てたら一人金貨十枚と聞いては其れなりの力自慢の護衛達、それと軽々と持ち振り回すユースケの姿に惑わされ、挑んだ？
?? 結果見事に泣きを見る羽目になったのはお約束。

両手で剣を水平に持ち、伸びろ伸びろと魔力を大剣に注ぐユースケ。

「おおー、すっげえ」護衛の一人が叫んだ。

見事大剣はぐんぐんと伸びて行く、何処まで伸びるのかは試さない。人目も有るし、大剣の秘密と言う事だ。

「おー、この位に縮むと持ち運びに便利だな」

大剣は一モイル（一メートル）程に縮、大剣の面影は無い。

「しかし不思議だよなこの大剣は、後で色々と弄って見様かな。他にも機能が付いて居るかも知れないしさ」

「主、形の変化する機能が有るかもしれませんね」

「陛下、色々と想像たくましくしたら如何ですか」

「ピールリヤ、その言い方は止めなさい、なんだかいかがわしい雰囲気になります」

「ムロ様、考え過ぎです」

「ぷっ、ムロ、口では勝てそうにないから黙ったら」

「????????????????」

「ピールリヤ、それでは今日から君は俺の子供衆の一員に成る、必要な事は後ほどムロから説明が有るが。後には引けないとだけは言っておくよ、泣いても笑っても普通の子供の君は今でお終い。これからは俺の子供衆として色々と鍛えられることに成る、今から先輩と顔を合わせるが、当分はお日様の光とはお別れだな」

「何故ですか」

「んふふふっ、彼らは地下で俺の玩具に成っているんだよ。女の子も居るから安心しな」

ピールリヤは、女の子も居るから安心しなっとう言う意味だろうと思った。なにか物凄い不安な言葉が陛下から発せられ、選択を間違えたかと思った。???それは当たりで、武では死線を何度も潜り、文では脳は焼けるか融けるかしそうな目に合う事に成った。

ユースケの空対空戦闘?????伸び縮する大剣の威力 その一

「あの新しい市場を開設した男は何者だ、随分と荒稼ぎをしている様じゃが」

「はっ、教皇猊下。あの者は以前、冒険者赤い風の団の元団員でカイトと言う男です。団を抜ける時に団から資金援助を受けてあの市場を開設したとか」

「うーむ、短期間にあれだけの市場に育つとはの」

「しかし猊下、幾ら資金援助を受けてとは言っても、その額は大した物かと、はてさて何処からそれを引き出したのか!？」

「ふんっ、たかが冒険者の団が出せる資金では無いと？」

「幾月か前、盗賊ギルドが何者かの手で殲滅されたと言う事実がありました、ため込まれていたと思われる金貨やお宝は全て行方不明と・・・」

「ほほっ、きゃつらの仕業ではと言う事か? じゃな」

「ははっ。それともう二つ情報が」

「砂漠の向うに有る国にこ奴らが現れたと、そして建国宣言をと言う事かの」

「流石は猊下、とっくの昔に情報を手に入れておりましたか!」

「非常に面白くない情報と一緒にな」

「それはどういう情報で」

「口に出すのも口惜しいが、我が兄弟の神殿が全て破壊されて兄弟も殺された。その際にお宝も奴隷も奪われた、仇をと思うが此方もイロイロ事情が有って手が出せぬ」

「それではあれらに命じては如何でしょうか？、如何になんでもあれらには齒が立たぬと思います」

「うーん、あの教団を潰し建国へまで持って行った彼奴等だ、あれらとて無傷では済まぬと思うがの」

「ある程度痛め付けたら引く様に指示をいたしましょう。高が人間、上空からの攻撃には対処は出来ないでしょう。例え魔法で有ろうとも、猊下、あれらに齒はたちませぬ」

「ふむ、まあ良いだろう、隸下にある飛竜どもに戦闘命令を出せ」

「ははっ、御意のままに」

此方は対空防衛警戒部隊、緊急警戒警報発令、北部上空飛竜種多数飛来中。対空戦闘部隊は直ちに持ち場に付き対空戦闘用意、地上戦闘員は建物の各階を防衛手順に従い防衛戦闘待機。住民は直ちに避難誘導員の指示に従い地下トンネルへ退避せよ、トンネル管理部署

は環境保全ファンを回せ。陛下に要請いたします、陛下は対空迎撃戦闘準備をお願いいたします。陛下付き映像報道官は屋上にて我らが陛下の勇姿を、命捨てても撮影せよ、以上。

命捨てろと言われた報道官四名。ビーガ・リッチ・デーバウ・メールの四名が喚く。

リッチ「うおっ、ひでえ。俺らに死ねって言う指示だぜ」

ビーガ「竜かあ、屋上で撮れって言うんならマジ死ね。だな？」

デーバウ「あ、俺遺言書いてないぜ、お宝どうなるう！」

メール「何を馬鹿な事を言ってるの、建物全体に陛下が防衛結果を張ったじゃないか」

ビーガ「ありや、何時の間に？」

「おい、お前達は陛下付きの映像報道官達だよな？」

メール「そうだけど、あんた誰よ？」

「自分は陛下の子供衆の一人、レッケルだ。陛下が空から撮れって言う命令だ、そしてここにその命令書だ。上空戦闘空域には自分が連れて行く、付いてこい」

リッチ「ぎゃあ、陛下直々の死ねの命令かよお！」

「ぐだくだ言ってんじゃねえ、さっさと来い」

ビーガ「どうやって空中に行けって言うんすか？」

「あれに乗って行くのさ」

レッケルが指さす方向に、今まで見た事のない物体が鎮座していた。

ビーガ「あれはなんですか？」

「見て分からないか、空飛ぶ魔道機だ、俺達陛下の子供衆以外で乗るのはお前達が初めてだ。喜んで空で死ね、んふふふっ」

ユースケの空対空戦闘????? 伸び縮する大剣の威力 その二

「見て分らないか、空飛ぶ魔道機だ、俺達陛下の子供衆以外で乗るのはお前達が初めてだ。喜んで空で死ね、んふふふっ」

ブン、と何かが飛んできてレッケの尻にぶち当たった。

「ごわあゝ?? 誰だいてえじゃねえか・？」

「てめえレッケ、その飛翔魔同道機は一人乗りだ、五人も乗ってどうやって飛ぶ気だよ」

「ゲッ、フルト。そんなの簡単ジャン、落下防止の魔法で縛つときゃ良いジャンか」

「だからお前は馬鹿と言われんだよ、映像報道官を縛り付けてどうやって映像を撮るんだよ」

「フルトの言う通り、馬鹿のレッケは後で陛下直々のシバキだな」

「ハイロイ、馬鹿に構っている時間はねえぞ、報道官四人は俺達と一人ずつ乗れ」

「さっさと行くぞ、馬鹿に巻き込まれて俺達もシバかれんのは嫌だぜ」

ぎゃんぎゃん喚きたてる陛下の子供衆四人に、急かされて飛翔魔道機と言う物に乗った報道官四人。飛翔魔道機の形状は、車輪の無い軽のワゴンと言った所。撮影機材は外部に有り、機内からコントロ

ール出来る様になっているが。

ビーガはレッケと言われていた男の子に、何かをぶつけたフルトに聞かれた。

「なあ、其処にレバーが有るだろ。それで機外のカメラを操作するんだけど扱える？」

「ああ大丈夫、？、と、思う」

「何それ？」

「いや、地べたを走る奴なら訓練受けているし。只空を飛ぶって事が無かっただけ」

「ふーん、まあ？？？車載用を流用しているからな？？？大丈夫か？」

上空には、飛んで来ている飛竜達に向かって、情報収集用の魔法陣が飛ばされてゆく。

「こちらは対空情報収集区隊。陛下、情報解析結果は二十秒後に成ります。結果後の指示を願います」

「分かった」

飛竜達の姿が見えて来た頃、その情報がユースケの所に届いた。

「陛下、飛竜達は従属の魔法具を額に取り付けられています。それと子供と卵が質に成っているようです」

「そうか、額の魔法具が何かは解って居るのか」

「高純度の宝石と言った所の様です」

「ぶっ壊せば正気に戻るのかな？」

「絶対とは言えませんが、確率が高いでしょう。只質に取られている子供と卵の事が有りますから」

「戦闘回避は難しい？」

「その前に魔法具を陛下が壊さないとですね？」

「分かった、迎撃に向かう。対空砲撃弾を近接爆発させて中州の方に誘導する様連絡してくれ」

「了解、対空砲撃弾を近接爆破で飛竜を中州方面に誘導」

「対空砲隊に陛下からの命令。飛竜に対し、飛竜を中州に誘導する為近接爆破砲撃を開始せよ」

「うわぁ、陛下無茶言うしーい」

「無茶でも無いだろう、片面だけに対空弾幕張ればいいんだし」

「ほれ、さっさと遣らんと陛下に怒鳴られるぞ」

ユースケは、ダイヤモンドを加工した直径5モイル（メートル）円形の飛空盤に乗り、飛竜達より上空に向かって飛んで行った。対空砲撃も始まり、子供衆の操縦する飛翔魔道機もユースケを追跡するように付いてくる。

「情報区隊、飛竜の頭は分かるか？」

「ハイ、一番飛び抜けて大きいのがその様です？」

「分かった、是から戦闘に入る。中州の者達の退避は完了したか知らせろ」

「陛下、すでにガウロ達を含め避難は完了しています、戦闘開始宜しいです」

「残っているのは魔物と獣だけだな」

「そうです、建造物は建築途中の物を含め対物理？対魔法結界の展開は終わって居ます。それから陛下、新しい情報解析結果をお知らせします。飛竜達の額に付いて居る魔法具ですが、破壊されたら質の子供と卵が死ぬ様に設定されています。親の飛竜が殺された場合はそう成らないとの結果です」

「えぐいな、殺すか捕獲かどっちかと言う事だな」

「殺せば子と卵は残るでしょうが、捕獲したら子と卵が向こうで殺される可能性が高いです」

「ムロは向こうに向かったか」

「ハイ、カイト様の所からムロ部隊とケイリス閣下直轄の破壊工作部隊が閣下直々に率いて向かいました」

「規模は？」

「ムロ部隊は一個中隊百三十五人、ケイリス閣下の一個戦闘部隊三百五十人程です」

「足りるのかな？」

「連隊規模の転移陣魔具を持って行きましたから」

「了解した」

イッラーヒイ皇国の東部に有るボルーズ山脈の中央、ボルーズ山にムロの部隊は、子竜と竜の卵が質として有る山の神殿に居た。座標指定が出来る偵察陣を飛ばし、一気に移転潜入。ケイリス指揮下の部隊は神殿近くに待機、ムロ部隊からの突撃指示を待っていた。

「ケイリス閣下、ムロ部隊からの連絡です。敵通信魔具の破壊に成功、戦闘突撃せよです」

「よし、全部処突撃」

自国奥地の山脈に位置する神殿、故に皇国は防衛部隊は二個中隊に満たない部隊しか置いて居なかった事と。それと竜には従属の魔法具を取り付けてある事で、完全に油断をした。神殿防衛とは云え、僻地の部隊、所詮左遷人事。簡単にムロの部隊を潜入を許し、且、ケイリスの部隊突入で簡単に占拠されたが。定時連絡はしているので、怪しまれてはと子竜と卵の保護を急いだ。

ケイリスの隣に立つ参謀の一人、元ベイリツサ帝国に有った神殿の奴隷戦士団に居たボイルス・ダッコーラ。今はケイリスの直轄部隊参謀、中佐としてケイリスに従っている。その中佐が通信用魔具を片手にケイリスに話しかける。

「申し上げますケイリス閣下、戦闘連隊より輜重部隊が必要です」

「そうだな、これ程簡単に占拠出来るとは思わなかったからな。檻と何か大きい箱を持ってこさせようか」

「閣下、卵だけなら人二人程で大丈夫です。流石に子共とは云え竜の子、眠らせてはいますが持ち運びは無理ですから車輪付きの檻か移転魔法陣付きの檻が必要かと」

「其れなら魔道師に言っつてその場で移転させろ、一頭に一人の魔道師は居るだろう。移転先は中央大トンネルだ、陛下が竜を飼いたいとか言っつて細工をしていたはずだぞ？」

「それは聞いて居ましたが、図らずとも陛下のご希望が叶いましたね閣下」

「俺は反対したんだけどな。まっ、陛下も若いからそう言う夢見がちな所も有るって言う事だ」

「餌には事欠かないでしょうからね、飼育には困らないでしょう」

「飛竜に魚の餌か、何か違和感は無いかボイルス？」

「そう言われればそうですね、でも陛下に従う様に成れば外に出て狩りも出来ますでしょうから」

「しかし、全部飼うとか言わないだろうな。うーん？？？なんかヤバくは無いか」

「大トンネルの中なら全部を飼うっていつでも大丈夫でしょう」

「オイオイ、お前もう一步踏み込んで考えろよ。排泄とかも有るんだぞ、短期間なら飼育部隊を立ち上げても良いだろうがな、長期間あそこに居させる事に成ったら大変だぞ、匂いとかで！」

「ゲッ、其れが有りましたね」

二人はその事態を想像してげっそりした、同時に絶対一頭だけ、そして外飼いをと願った。

その頃ユースケは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2262p/>

理外れの流され者

2011年6月25日04時38分発行